

博士論文

論文題目 現代韓国語の母音
—発音の変化と地域差—

氏名 岩井 亮雄

目次

| | |
|--|----|
| 1. 序章 | |
| 1.1. はじめに..... | 1 |
| 1.2. 本論文で使用する用語..... | 5 |
| 1.2.1. 言語名 1.2.2. 専門用語と記号 1.2.3. その他 | |
| 2. 現代語の母音史 | |
| — 『朝鮮語方言の研究』にもとづいて— | |
| 2.1. 序論..... | 7 |
| 2.1.1. 先行研究 | |
| 2.2. 方法..... | 8 |
| 2.2.1. 分析資料と分析項目 2.2.2. 転写方法 2.2.3. 分析対象 2.2.4. 分析方法 2.2.5. 図表の作成 | |
| 2.3. 結果..... | 15 |
| 2.3.1. [ʌ]と[œ] 2.3.1.1. [ʌ] 2.3.1.2. [œ] 2.3.2. [jɔ]と[e] 2.3.3. [ø]の発音の地域差と [wi]の発音の地域差 2.3.3.1. [ø]の発音の地域差 2.3.3.2. [wi]の発音の地域差 2.3.4. [ɔ]と[i] 2.3.5. [e]と[ɛ]の対立と[o]と[u]の対立 2.3.5.1. [e]と[ɛ]の対立 2.3.5.2. [o]と[u]の対立 | |
| 2.4. 考察..... | 53 |
| 2.4.1. [ʌ]と[œ] 2.4.1.1. [ʌ] 2.4.1.2. [œ] 2.4.2. [jɔ]と[e] 2.4.3. [ø]の発音の地域差と [wi]の発音の地域差 2.4.3.1. [ø]の発音の地域差 2.4.3.2. [wi]の発音の地域差 2.4.4. [ɔ]と[i] 2.4.5. [e]と[ɛ]の対立と[o]と[u]の対立 2.4.5.1. [e]と[ɛ]の対立 2.4.5.2. [o]と[u]の対立 | |
| 2.5. 結論..... | 66 |

| | |
|------------------------------|-----|
| 3. ‘ㄱ’と‘ㅋ’の発音の変化 | |
| —調査年代の異なる方言資料にもとづいて— | |
| 3.1. 序論 | 69 |
| 3.1.1. 先行研究 | |
| 3.1.1.1. ‘ㄱ’の発音の変化 | |
| 3.1.1.2. ‘ㅋ’の発音の変化 | |
| 3.2. 方法 | 73 |
| 3.3. 結果 | 75 |
| 3.3.1. ‘ㄱ’の発音の変化 | |
| 3.3.2. ‘ㅋ’の発音の変化 | |
| 3.4. 考察 | 88 |
| 3.4.1. ‘ㄱ’の発音の変化 | |
| 3.4.2. ‘ㅋ’の発音の変化 | |
| 3.5. 結論 | 97 |
| 4. ‘ㅁ’と‘ㅂ’の合流と‘ㅅ’と‘ㅆ’の接近の方向性 | |
| —ソウル方言での音声実験にもとづいて— | |
| 4.1. 序論 | 99 |
| 4.1.1. ‘ㅁ’と‘ㅂ’の合流とその方向性 | |
| 4.1.2. ‘ㅅ’と‘ㅆ’の接近とその方向性 | |
| 4.2. 方法 | 101 |
| 4.2.1. 録音 | |
| 4.2.2. 音響分析 | |
| 4.2.2.1. 先行研究の結果との比較 | |
| 4.2.2.2. CPP | |
| 4.2.2.3. H1-H2 | |
| 4.2.3. 聴取実験 | |
| 4.2.3.1. 音響分析の結果との比較 | |
| 4.3. 結果 | 105 |
| 4.3.1. 録音 | |
| 4.3.2. 音響分析 | |
| 4.3.2.1. 先行研究の結果との比較 | |
| 4.3.3. 聴取実験 | |
| 4.3.3.1. 音響分析の結果との比較 | |
| 4.4. 考察 | 123 |
| 4.4.1. ‘ㅁ’と‘ㅂ’の合流とその方向性 | |
| 4.4.2. ‘ㅅ’と‘ㅆ’の接近とその方向性 | |
| 4.5. 結論 | 127 |
| 4.6. 特論 | 128 |
| 4.6.1. ソウル方言の母音体系の変遷について | |
| 5. 終章 | |
| 5.1. まとめ | 133 |

1. 序章

1.1. はじめに

韓国語音声研究においてはここ 100 年の間にも母音体系の変遷やいわゆる平音・濃音・激音と呼ばれる無声子音の三項対立の発音の変化などの興味深い変化が観察されている¹。そうした変化のうち、本論文は現代韓国語の母音体系に関わる諸問題を考察するものである。

さて、現代韓国語の母音体系に関する争点の一つに、ソウル方言には単母音がいくつ存在するのかという問題がある。この問題に対する現在の学説は、母音の長短の区別については考えないことにして共時的に捉えるならば、最大で 10 母音体系、最小で 7 母音体系となるが、通時的には 10 母音体系から 7 母音体系へと変化してきているとみることができる²。まず、10 母音体系の立場からは非円唇前舌狭母音‘ㅣ’[i], 非円唇前舌半狭母音‘ㅓ’[e], 非円唇前舌半広母音‘ㅕ’[ɛ], 円唇前舌狭母音‘ㅛ’[y], 円唇前舌半狭母音‘ㅜ’[ø], 非円唇中舌広母音‘ㅏ’[a], 非円唇後舌狭母音‘ㅑ’[ɯ], 非円唇後舌半広母音‘ㅓ’[ʌ], 円唇後舌狭母音‘ㅜ’[u], 円唇後舌半狭母音‘ㅝ’[o]という 10 個の単母音、すなわち、

‘ㅣ’[i], ‘ㅓ’[e], ‘ㅕ’[ɛ], ‘ㅛ’[y], ‘ㅜ’[ø], ‘ㅏ’[a], ‘ㅑ’[ɯ], ‘ㅓ’[ʌ], ‘ㅜ’[u], ‘ㅝ’[o]

から母音体系が構成されていると捉えることになる³。これを図示したものが図 1.1 であり、表にしたものが表 1.1 である。表 1.1 のように整理すると、第 2 章や第 3 章で示すような‘ㅑ’[ɯ] > ‘ㅣ’[i], ‘ㅓ’[ʌ] > ‘ㅓ’[e], ‘ㅏ’[a] > ‘ㅕ’[ɛ], ‘ㅜ’[u] > ‘ㅛ’[y], ‘ㅝ’[o] > ‘ㅜ’[ø]といった前舌母音化(ウムラウト)が説明しやすいなどの利点がある。

¹ 無声子音の三項対立の発音の変化に関しては本論文では議論しないが、これに関する最近の研究としては D. Silva(2006), K. Kang and S. G. Guion(2008), C. Ito(2017)などを参照されたい。

² こうした現代韓国語の母音体系に関する見解の違いや研究史については、梅田博之(1994)や H. Umeda(1995), 신지영(2014: 198–202)などを参照されたい。

³ 音声表記は이호영(1996: 106–115)に従った。

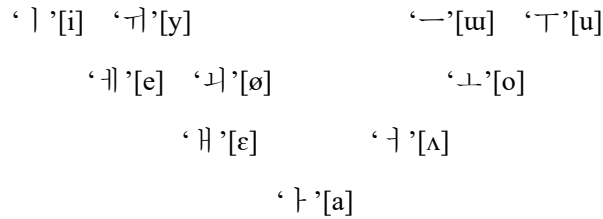


図 1.1. 韓国語の 10 母音体系

表 1.1. 韓国語の 10 母音体系

| 前舌母音 | | 中舌母音・後舌母音 | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 非円唇 | 円唇 | 非円唇 | 円唇 |
| 狭母音 ‘ㅣ’[i] | 狭母音 ‘ㅑ’[y] | 狭母音 ‘ㅡ’[ɯ] | 狭母音 ‘ㅓ’[u] |
| 半狭母音 ‘ㅕ’[e] | 半狭母音 ‘ㅗ’[ø] | 半広母音 ‘ㅛ’[ʌ] | 半狭母音 ‘ㅜ’[o] |
| 半広母音 ‘ㅛ’[ɛ] | | 広母音 ‘ㅓ’[a] | |

ただし、これら 10 母音のうち‘ㅑ’および‘ㅗ’の発音が単母音かどうか、‘ㅕ’と‘ㅛ’の発音が同じかどうか、‘ㅡ’の発音、‘ㅛ’の発音については考慮の余地がある。まず、‘ㅑ’、‘ㅗ’、‘ㅕ’と‘ㅛ’についてはこのあとで 7~9 母音体系について紹介するところで説明する。次に、‘ㅡ’の発音にはひとまず[ɯ]を当てたが、非円唇中舌狭母音[i]で表記することもある。これは、第 4 章で言及するが、‘ㅡ’の発音が後舌から中舌へと前舌化したことによるものと考えられている。なお、第 2 章と第 3 章においてはこの文字の転写に i を用いた。最後に、‘ㅓ’の発音には[ʌ]を当てたが、円唇後舌半広母音[o]で表記することもある。これはもともと円唇性を持っていたものが非円唇化したことによるものと考えられている(梅田博之 1994)。なお、第 2 章と第 3 章ではこの文字の転写に o を用い、古語などを表記する場合を除いて現代語では使われなくなった‘ㅓ’の転写に ʌ を用いた。

ところで、最後の‘ㅓ’の発音とも関連してソウル方言の母音体系について「母音の長短の区別については考えないことにして」議論していることについて説明しておく。‘ㅓ’の発音は中世語の上声に由来する長母音(非円唇中舌中央母音[ɔ:])と非上声に由来する短母音(非円唇後舌半広母音[ʌ])が現代語において観察されている⁴。これらを同一音素とみなせば 10 母音体系、異なる音素とみなせば 11 母音体系ということになる。また、現代語においては‘ㅓ’以外の単母音では長母音と短母音とで‘ㅓ’のように音色が異なるということは知られていない。なお、上記 10 母音のうち‘ㅣ’、‘ㅓ’、‘ㅡ’、‘ㅑ’、‘ㅓ’、‘ㅜ’は中世語から単母音であり、

⁴ 発音表記は이호영(1996: 112-113)に従った。

‘ㄱ’, ‘ㄴ’, ‘ㄷ’, ‘ㄹ’は中世語の二重母音に由来するが, ‘ㅏ’以外の母音でも上声に由来する長母音と非上声に由来する短母音とではどこかの段階で音色が異なっていた可能性を否定する根拠も肯定する根拠も見つけがたいものと思われる。こうした問題について本論文の中で章立てて論ずることはできなかったが, それでも第2章の中で20世紀前半の方言資料からうかがえる‘ㅏ’と‘ㅑ’の発音などについては少しばかり論じた。

母音体系の説明に戻る。9母音体系の立場からは, ‘ㄱ’は単母音[y]ではなく二重母音[ɥi]であるとみなす⁵。つまり,

‘ㅣ’[i], ‘ㅑ’[e], ‘ㅓ’[ɛ], ‘ㅕ’[ø], ‘ㅗ’[a], ‘ㅛ’[ɯ], ‘ㅜ’[ʌ], ‘ㅜ’[u], ‘ㅛ’[o]

から母音体系が構成されていると捉えることになる。8母音体系の立場では9母音体系からさらに‘ㅕ’も単母音[ø]ではなく二重母音[we]であるとみなす⁶。つまり,

‘ㅣ’[i], ‘ㅑ’[e], ‘ㅓ’[ɛ], ‘ㅗ’[a], ‘ㅛ’[ɯ], ‘ㅜ’[ʌ], ‘ㅜ’[u], ‘ㅛ’[o]

から母音体系が構成されていると捉えることになる。

このように, ‘ㄱ’および‘ㅕ’を単母音とみなすか二重母音とみなすかによって母音体系が10母音体系か9母音体系か8母音体系と捉えられるということが問題となる。あるいは, 母音体系が10母音体系から9母音体系, 8母音体系へと変化したとみると, これらの母音の発音がどのように変化したのかということが問題となる。実際, ‘ㄱ’および‘ㅕ’の発音と音変化に関する先行研究は少なくない。しかし, 音変化の方向性などに関する見解は一致していない。そこで, 第3章では20世紀前半と20世紀後半に調査された方言資料を比較し, ‘ㄱ’や‘ㅕ’の発音の変化の方向性や先行研究でこれらの発音とその変化に関する見解が必ずしも一致していない理由などについて議論した。

再び母音体系の説明に戻る。7母音体系の立場では8母音体系からさらに‘ㅑ’と‘ㅓ’が合流して同一の音価を持つとみなす。つまり, 仮にこの合流に対して[e]を当てることにする

⁵ 発音表記は이호영(1996: 122)に従ったが, [ɥi]は[wi]で表記することもある。なお, 第2章と第3章では‘ㄱ’の転写にwiを用いた。

⁶ 発音表記は이호영(1996: 121)に従った。

と、

‘ㅣ’[i], ‘ㅍ’/‘ㅂ’[e], ‘ㅡ’[u], ‘ㅓ’[u], ‘ㅑ’[ʌ], ‘ㅜ’[o], ‘ㅗ’[a]

から母音体系が構成されていると捉えることになる。

さらに、第4章で論じることになるが、近年においては‘ㅓ’と‘ㅜ’が接近しているという報告が見られるようになった。もし‘ㅓ’と‘ㅜ’が接近して同一の音化を持つとみなせるようになると6母音体系ということになるだろう。

このように、‘ㅍ’と‘ㅂ’および‘ㅓ’と‘ㅜ’についても母音体系を考えるうえで問題となる。まず、‘ㅍ’と‘ㅂ’が合流して同一の音価を持っているか否かという問題である。また、もし合流したとするならば、‘ㅍ’の発音と‘ㅂ’の発音がどのような経路で合流したのか—‘ㅍ’[e]が‘ㅂ’[e]に向かって合流したのか、‘ㅂ’[e]が‘ㅍ’[e]に向かって合流したのか、‘ㅍ’[e]と‘ㅂ’[e]の中間で合流したのか—ということも問題である。次に、‘ㅓ’と‘ㅜ’の場合と同様に考えると、‘ㅓ’と‘ㅜ’が接近して同一の音価を持っているか否かという問題も考えられる。また、これらが接近しているとしたら、どのような経路で接近しているのか—‘ㅓ’[u]が‘ㅜ’[o]に向かって接近しているのか、‘ㅜ’[o]が‘ㅓ’[u]に向かって接近しているのか、‘ㅓ’[u]と‘ㅜ’[o]の中間で接近しているのか—ということも問題である。以上のような‘ㅍ’と‘ㅂ’の合流と‘ㅓ’と‘ㅜ’の接近に関する問題については先行研究も少なくないが、第4章でソウル方言を対象にした実験音声学的方法—音響分析の経年比較および聴取実験の結果—から議論した。

以上、現代韓国語ソウル方言の母音体系とその論点に関して説明してきた。言い換えると、本論文の主要なテーマは現代韓国語の母音体系に関する諸問題のうち、‘ㅓ’や‘ㅑ’、‘ㅍ’と‘ㅂ’、‘ㅓ’と‘ㅜ’の発音の変化を考察することであるといえる。ただし、これらの母音の発音は現代語の間でのみ変化が起きているものでは決してなく、それ以前における発音も現在とは異なったものもあった⁷。本論文では現代語の母音について議論することになるが、その出発点として19世紀末から20世紀初における母音、特に‘ㅓ’や‘ㅑ’、‘ㅍ’と‘ㅂ’、‘ㅓ’と‘ㅜ’についても考察してみたい。そこで、第2章では20世紀前半の方言資料から特に音変化に関する諸問題について検討するのだが、その前に次節では本論文で用いる用語につい

⁷ 李基文(1972), 李基文(村山七郎監修・藤本幸夫訳)(1975), 李基文(1998), K. Lee and S. R. Ramsey(2011), 福井玲(2013)などを参照されたい。

て簡単に説明しておく。

1.2. 本論文で使用する用語

1.2.1. 言語名

これまでの本文においてもすでに用いているが、本論文では言語名 Korean に対して韓国語という名称を用いる⁸。ただし、Yanbian Korean に対しては延辺朝鮮語という名称を用いる。また、参考文献で用いられている言語名については原文の表記に従っている。

過去の韓国語に対しては次の用語を用いる⁹。すなわち、10 世紀から 16 世紀までの韓国語に対しては中世語という名称を用い、特に 10 世紀からハングル創制までの韓国語を前期中世語、ハングル創制から 16 世紀までの韓国語を後期中世語と呼ぶ。17 世紀から 19 世紀までの韓国語には近代語という名称を、20 世紀以降の韓国語には現代語という名称を用いる。また、標準語という用語を用いるときは韓国の現代語を対象とすることを原則とした。

1.2.2. 専門用語と記号

本論文で用いる用語や記号は基本的には韓国語学や音声学の慣例に従っている。すでに本文中で用いているが、「A>B」または「B<A」は A が B に変化したことをいうときに用いる。研究者によって使う用語や記号が異なる場合は、そのことについて断るようにした。特に、第 2 章と第 3 章で用いる転写の記号については 2.2 節で、第 4 章で用いる音響音声学

⁸ 朝鮮半島で母語として用いる言語を方言(標準語を含む)や過去の言語を包括する意味で韓国語という名称を用いる(송철의 2014)。ただし、言うまでもないことではあるが、韓国語以外の名称—朝鮮語や韓語など—を排除したりするものではない。

⁹ 李基文(1998), K. Lee and S. R. Ramsey(2011), 福井玲(2013)を参考にした。K. Lee and S. R. Ramsey(2011)では中世語を Middle Korean, 前期中世語を Early Middle Korean, 後期中世語を Late Middle Korean, 近代語を Early Modern Korean, 現代語を Contemporary Korean と呼んでいる。なお, I. Lee and S. R. Ramsey(2000)では中世語や現代語の名称は K. Lee and S. R. Ramsey(2011)と同じであるが, 近代語を Modern Korean (Pre-Contemporary Korean)と呼んでいる。

また、本論は韓国語史の時代区分を議論するものではないので以上の先行研究の時代区分に従うことを断っておく。このほかの時代区分には次のような考えもある。河野六郎(1955, 1969)は訓民正音創制以前を古代朝鮮語, 15 世紀中葉から 16 世紀末までを中期朝鮮語, それ以降を近世朝鮮語と呼んでいる。古代語に関する研究書である南豊鉉(2009)は 13 世紀後半から訓民正音創制までを前期中世韓国語とし, それ以前を上古韓国語, 中古韓国語, 近古韓国語としている。

の用語のうち韓国語学や音声学を勉強している者にとってもなじみのないと思われる用語については 4.2 節で説明を加える。

1.2.3. その他

人名の表記については基本的に原文に従っている。文献名、機関名、文献からの引用などでは旧字体や旧仮名遣いなどを改めたりハングル表記を漢字表記に改めたりしていることがあることも断っておく。

2. 現代語の母音史

— 『朝鮮語方言の研究』にもとづいて—

2.1. 序論

本章では 20 世紀前半における現代語の母音史に関する諸問題を当時の方言資料『朝鮮語方言の研究』(以下, 小倉進平(1944)と記す)から考察する¹。このような問題を考察するのは, 第一に, 本論で現代語の母音を考察するにあたり 20 世紀前半の母音について通時的な視点から整理する作業が必要だと考えるからである。第二に, 20 世紀前半の段階でどのような母音の変化がすでに起きているか, まさに起きつつあるか, まだ起きていないかということを確認するためである。第三に, 後学の研究者が十分に利用していないと評価されることがある小倉進平(1944)所載資料を活用するためである。

本章の構成は次のとおりである。2.1 節の後半では小倉進平(1944)から言語地図を作成して議論している先行研究を示す。なお, 個々の母音史に関する先行研究は 2.4 節の考察において言及することにする。2.2 節では方法を述べ, 2.3 節では結果を表と地図に示す。2.4 節は考察, 2.5 節は結論である。

2.1.1. 先行研究

小倉進平(1944)所載資料をもとに言語地図を作成している先行研究は次のとおりである。

(1) 中井精一(2007)

約 230 項目を言語地図に描いており, 資料を視覚的に把握するには便利である。しかし, 言語地図に対する考察などはない。

(2) 朱林彬(2016)

漢語借用と関連のある 7 項目(蚯蚓, 茄子, 豹, 蜀黍, 玉蜀黍, 粟, 李の実)について

¹ 韓国語の母音史については, 李基文(1972), 福井玲(2013), K. Lee and S. R. Ramsey(2011)などを参照されたい。また, 小倉進平(1944)については 2.2.1 節を参照されたい。

中国語語彙史などを調べながら各項目の単語史を考察している。

(3) 福井玲編(2017, 2018, forthcoming)

それぞれの集で約 30 項目を選び、各項目の言語地図を作成し、その解釈を行なっている²。

以上は朝鮮半島全体を考察対象としたものである。このほか、韓国の諸方言を対象にしたものとして김경숙(2015)は小倉進平(1944)と韓国精神文化研究院編(1987-1995)所載資料からそれぞれ 80 余項目を言語地図に描いて各資料の調査年代の違いに注目し、‘ㅇ’の分化、‘ㄷ’の分化、前舌母音化、有気摩擦音などについて論じている³。

2.2. 方法

2.2.1. 分析資料と分析項目

分析資料は小倉進平(1944)所載資料である⁴。これは 1911 年から約 20 年間に渡って各調査地点で普通学校の男女生徒約 10 名を対象に調査されたものである。ただし、必ずしも全調査地点で資料にある語彙項目のすべてを調査しているというわけではない。つまり、ある項目は全調査地点で調査されているが、ある項目は一部の地域でしか調査されていないなどといった場合が見られる。したがって、分析対象とする語彙項目を朝鮮半島において全道的に調査されているものにする必要があると考える。本章で分析対象とする語彙項目は福井玲(2016)が選定する項目、すなわち、全羅道(済州島を含む)、慶尚道、忠清道、京畿道、江原道、黄海道、咸鏡道、平安道の全道(8 道)または全道(8 道)より 1 道少ない 7 道で調査された項目とした。具体的には、次のとおりである⁵。

² 福井玲編(2017, 2018, forthcoming)に先立ち、小倉進平(1944)所載資料を言語地図化するための注意事項などを整理した論考(福井玲 2016)があるが、この論考も有益である。

³ 小倉進平(1944)は 20 世紀前半に朝鮮半島全域を対象に調査されたものであるのに対し、韓国精神文化研究院編(1987-1995)は 20 世紀後半に韓国地域を対象に調査されたものである。これらの方言資料については第 3 章 3.2 節を参照されたい。

⁴ 以下、小倉進平(1944)について本論の分析に必要と思われる部分にのみ言及してこの資料について説明した。方言資料としての小倉進平(1944)の長所や短所などについては、李崇寧(1976: 209-217)、李秉根(2005)、鄭承喆(2010: 26-27)、정승철(2010: 177-179)、福井玲(2016: 42)、福井玲編(2017: iii, 2018: iii)などを参照されたい。

⁵ ただし、7 道に渡り調査されている「繩」「牛蒡」「食ふ」が福井玲(2016)の選定では抜けているので本

| | | | |
|---------------|------------------|-----------|------------|
| (1) 暁 | (25) 渡船場 | (49) 腎臓 | (73) 髭 |
| (2) 星 | (26) 浅瀬 | (50) 肝 | (74) 周衣 |
| (3) 夕焼 | (27) 井戸 | (51) 臂 | (75) 足紐 |
| (4) 陽炎 | (28) 泉 | (52) 膝 | (76) 木綿 |
| (5) 細雨 | (29) 側 | (53) 病 | (77) 麻製の鞋 |
| (6) 雹 | (30) 角 | (54) 唾者 | (78) 石鮓 |
| (7) 垂氷 | (31) 外 | (55) 痣 | (79) 麻布 |
| (8) 正月 | (32) 弟 | (56) 麻疹 | (80) 簪 |
| (9) 夏 | (33) 姉妹 | (57) 力 | (81) 木靴 |
| (10) 秋 | (34) 子の妻 | (58) 柱 | (82) 周衣 |
| (11) 冬 | (35) 男子・男児 | (59) 瓦 | (83) 裳 |
| (12) 夕 | (36) 女(pp.65-67) | (60) 煙出し | (84) 漬物 |
| (13) 村落 | (37) 子女・女児 | (61) 釘 | (85) 粉 |
| (14) 野原 | (38) 売卜者 | (62) 台所 | (86) 肉魚 |
| (15) 丘 | (39) 巫女 | (63) 棚 | (87) 饅頭 |
| (16) 崖路 | (40) 臉 | (64) 柴扉 | (88) 炒麺 |
| (17) 樵路 | (41) 頬 | (65) 学校 | (89) 焼酎 |
| (18) 路 | (42) 唇 | (66) 耳輪 | (90) 雑草を除く |
| (19) 山・墓 | (43) 兎唇の人 | (67) 下駄 | (91) 鍬 |
| (20) 穴 | (44) 舌 | (68) 靴 | (92) 蓑 |
| (21) 小川(p.39) | (45) 牙 | (69) 笠子 | (93) 縄 |
| (22) 溝(p.40) | (46) 頤 | (70) ポケット | (94) 篩 |
| (23) 海 | (47) 臍 | (71) 木履 | (95) 箕 |
| (24) 波 | (48) 肺臓 | (72) 靴下 | (96) 石臼 |

章では以上3項目も分析対象にした。

全道(8道)より1道少ない7道で調査されている項目は次のとおりである：垂氷、正月、冬、崖路、泉、弟、子女・女児、柴扉、下駄、靴、笠子、靴下、足紐、麻製の鞋、石鮓、周衣、漬物、炒麺、榛の実、蕎麦、牛蒡、油、岩、鏡、熨斗、蓑藪、斧、水汲み杓、隣寸、綿繰車、氷滑り、雉、胡燕、嘴、雲雀、蝙蝠、鯛、魚を釣る餌、蛭、枝、寒く、食ふ、誦んずる、有り、僅かに、却って。

具体的な地域・地点名のほかに「一般、各地、多くの地方」などを含む項目は次のとおりである：粟、鞆、鞆、釜、匙、尾、善い(以上、全道(8道)に渡り調査されている項目)、学校、焼酎、縄(以上、7道に渡り調査されている項目)。

| | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|
| (97) 糠 | (126) 鉄・金 | (155) 胡燕 | (184) 木 |
| (98) 蕾 | (127) 土 | (156) 啄木鳥 | (185) 枝 |
| (99) 榛の実 | (128) 鋏 | (157) 鷺 | (186) 楓 |
| (100) 百合の花 | (129) 馬槽 | (158) 鳥の餌 | (187) 軽い |
| (101) 棗の実 | (130) 糊刷毛 | (159) 嘴 | (188) 近い |
| (102) 山葡萄 | (131) 鞦韆 | (160) 籬 | (189) 酸い |
| (103) 菱の実 | (132) 釜 | (161) 雲雀 | (190) 眠い |
| (104) 桃 | (133) 鏡 | (162) 猫 | (191) 善い |
| (105) 杏子の実 | (134) 熨斗 | (163) 鬣 | (192) 鹹い |
| (106) 李の実 | (135) 窠簞 | (164) 亀 | (193) 辛く |
| (107) 唐辛 | (136) 俎 | (165) 尾 | (194) 羨ましく |
| (108) 甘藷 | (137) 斧 | (166) 獐 | (195) 寒く |
| (109) 馬鈴薯 | (138) 盥 | (167) 馬 | (196) 食ふ |
| (110) 薺 | (139) 木枕 | (168) 狐 | (197) 痩せる |
| (111) 蕎麦 | (140) 独楽 | (169) 蝙蝠 | (198) 誦んずる |
| (112) 大根 | (141) 硯 | (170) 蟹 | (199) 炙り |
| (113) 黄瓜 | (142) 水汲み杓 | (171) 蛭 | (200) 啄み |
| (114) 稻 | (143) 燐寸 | (172) 鰕 | (201) 有り |
| (115) 莧 | (144) 綿線車 | (173) 鰯 | (202) 僅かに |
| (116) 蜀黍 | (145) 抽斗 | (174) 鮎 | (203) 却って |
| (117) 露葵 | (146) 匙 | (175) 魚を釣る餌 | (204) 尖れるさま |
| (118) 牛蒡 | (147) 箸 | (176) 虫 | (205) 速かに |
| (119) 玉蜀黍 | (148) 柄 | (177) 螢 | (206) 別に |
| (120) 栗 | (149) 票 | (178) 蠅 | (207) 年長の |
| (121) 小豆 | (150) 火爐 | (179) 蟻螯 | (208) 経営 |
| (122) 葱 | (151) 氷滑り | (180) 蚕 | (209) 煙 |
| (123) 油 | (152) 鵲 | (181) 蚤 | (210) 塵 |
| (124) 砂 | (153) 鵝鳥 | (182) 蝸牛 | (211) 炭 |
| (125) 岩 | (154) 雉 | (183) 蚯蚓 | (212) 回答 |

2.2.2. 転写方法

本論では小倉進平(1944)に記された語形をそのままに転写することを原則とした。しかし、

小倉進平(1944)の転写は必ずしも現在一般的に用いている記号とは限らず、小倉進平自身が書中で述べた転写の原則(小倉進平 1944 下: 13-14)と実際の語形の表記が一致しない場合もあるので、本論では小倉進平(1944)とは異なる転写方法を用いた部分もある。小倉進平(1944)と本論の転写方法を整理したものを以下に記し、注意点などを補足する⁶。

| 小倉進平(1944) | 本論 | 小倉進平(1944) | 本論 |
|--------------------|------|------------------------|--------------------|
| (1) ㅏ = a [a] | [a] | (24) ㅋ = k [k, g] | [k, g] |
| (2) ㅑ = ia [ja] | [ja] | (25) ㄴ = n [n] | [n] |
| (3) ㅓ = o [ɔ] | [ɔ] | (26) ㅌ = t [t, d] | [t, d] |
| (4) ㅕ = io [jɔ] | [jɔ] | (27) ㄹ = r [r, l] | [r, l] |
| (5) ㅗ = o [o] | [o] | (28) ㅁ = m [m] | [m] |
| (6) ㅛ = io [jo] | [jo] | (29) ㅂ = p [p, b] | [p, b] |
| (7) ㅜ = u [u] | [u] | (30) ㅅ = s [s, t] | [s, t] |
| (8) ㅠ = iu [ju] | [ju] | (31) ㅇ = ŋ [ŋ] | [ŋ] |
| (9) ㅡ = ü [ü] | [i] | (32) ㅈ = č [tʃ, dʒ] | [tʃ, dʒ] |
| (10) ㅣ = i [i] | [i] | (33) ㅊ = č' [tʃ', dʒ'] | [tʃ ^h] |
| (11) ㅜ̇ = e [ɔ] | [ʌ] | (34) ㅋ' = k' [k'] | [k ^h] |
| (12) ㅞ = ai [ɛ] | [ɛ] | (35) ㅌ' = t' [t'] | [t ^h] |
| (13) ㅟ̇ = ei [ø] | [œ] | (36) ㅍ' = p' [p'] | [p ^h] |
| (14) ㅟ̈ = iai [jɛ] | [jɛ] | (37) ㅎ = h [h] | [h] |
| (15) ㅟ̉ = oi [e] | [e] | (38) (ㄱㄱ = kk [ʔk]) | [ʔk] |
| (16) ㅟ̊ = ioi [je] | [je] | (39) (ㄷㄷ = tt [ʔt]) | [ʔt] |
| (17) ㅟ̋ = oi [ø] | [ø] | (40) (ㅍㅍ = pp [ʔp]) | [ʔp] |
| (18) ㅟ̌ = ui [wi] | [wi] | (41) (ㅅㅅ = ss [ʔs]) | [ʔs] |
| (19) ㅟ̍ = üi [üi] | [ii] | (42) (ㅈㅈ = čč [ʔtʃ]) | [ʔtʃ] |
| (20) ㅟ̎ = oa [wa] | [wa] | | |
| (21) ㅟ̏ = uo [wɔ] | [wɔ] | | |
| (22) ㅟ̐ = oai [we] | [we] | | |
| (23) ㅟ̑ = uoi [we] | [we] | | |

上に示した転写法のうち、(11), (13), (38)~(40), (42)の小倉進平(1944)の表記は小倉進平(1944 下: 13-14)とは書き方が異なっている。(11)と(13)については小倉進平(1944)所載資料中で‘ㅜ̇’に対して[ɔ]を, ‘ㅟ̇’に対して[ø]を用いているのでこのように記した。(38)~(40), (42)

⁶ 本論での転写の方法は福井玲(2016: 46-51)および福井玲編(2017: v, 2018:v)に基本的に従っている。

のハングルについては小倉進平(1944 下: 13-14)ではそれぞれ‘ㄷ’, ‘ㄷ’, ‘ㄷ’, ‘ㄷ’のように書いているが、ここでは現在の現代語において一般的に用いられている文字で記した。

また、(9), (11), (13), (19), (33)~(36)は小倉進平(1944)の表記と本論の表記とで転写方法が異なっている。(9), (19), (33)~(36)は小倉進平(1944)での転写を現行の国際音声記号(IPA)に対応させた記号を本論では用いた。(11)と(13)は特定の方言(濟州方言)でのみ現れるものであり、先行研究の知見をもとに現行の IPA で対応すると考えられるもので転写した⁷。

それから、(17)と(18)については単母音か二重母音かが問題となるところであるが、こうした問題については 2.4.3 節で考察することとし、転写法に関しては小倉進平(1944)に従うこととした。子音の発音についても、たとえば、(30)と関連して‘ㅅ’が[j]のように発音されていたと思われることなどが指摘できるが、本論ではこのような場合であっても[s]で記していることを断っておく。

なお、分析資料の小倉進平(1944)では語中で濃音が予想されるにもかかわらず声門閉鎖音の記号が欠落していると思われる、いわゆる「無表記の濃音」(福井玲 2016: 50)が見られる。このような場合であっても語形を記すときは小倉進平(1944)の表記にそのまま従うようにし、発音表記するときは声門閉鎖音の記号[ʔ]を補うようにした。これは「無表記の濃音」が見られるような語形をハングルで書いたとき、そのような部分には平音にあたるハングルが当てられる場合が多いと思われるからである。

音節境界の表記にも注意が必要である。現在の慣習では音節境界を表す記号は[.]を用いるのが一般的であると思われるが、小倉進平(1944)では音節境界を表す記号として[-]を用いている。本章では小倉進平(1944)のまま音節境界を[-](ハイフン)で示した。

ところで、小倉進平(1944)の転写は音声記号を用いているが、語ごとの、地域ごとの発音の詳細な違いまでは反映していない(福井玲 2016: 51)。しかし、朝鮮半島の全道的な特徴や綴字で発音の違いを説明できる程度の発音の違いは明示しているということを仮定して、分析を進めた。

2.2.3. 分析対象

本章では小倉進平(1944)所載資料から次のような母音について考察した。

⁷ 先行研究については 2.4.1 節を参照されたい。

- (I) [ʌ]と[œ]
- (II) [jɔ]と[e]
- (III) [ø]の発音の地域差と[wi]の発音の地域差
- (IV) [ɔ]と[i]
- (V) [e]と[ɛ]の対立と[o]と[u]の対立

こうした母音を考察した理由は 2.1 節で述べたとおりであるが⁸、特に(I)～(V)のような母音を対象としたのはこれらが現代語母音史に関して先行研究で議論になっており、かつ、小倉進平(1944)所載資料から分析することが可能だったからである。たとえば、母音の長短の消長やアクセントについては先行研究で議論になっているが、小倉進平(1944)所載資料から分析することが困難なので本章では分析していない。なお、上記(III)は第 3 章の議論と、(V)は第 4 章の議論と関連があるので、本章でも分析することにした。

(I)～(V)のような順番をつけたのは時代性を考慮した結果である。(I)と(II)は本論文で対象にした現代語より以前の音韻史と関わりがあるものである。すなわち、‘・’の発音や‘・’および‘・’などの単母音化に関し、小倉進平(1944)所載資料でどのように現れるのかということ进行分析した。(III)～(V)も現代語以前の音韻史においても議論されるテーマであるが(たとえば、二重母音の単母音化や‘・’>‘・’の変化など)、ここでは現代語の発音に関して議論する。すなわち、‘・’や‘・’の発音の地域差や変化、‘・’の発音、‘・’と‘・’の発音の合流、‘・’と‘・’の発音の合流について分析した。

2.2.4. 分析方法

2.2.1 節で挙げた項目から、2.2.3 節で述べた(I)～(V)について分析した方法を説明する。

まず、2.2.1 節で挙げた項目の語形データから 2.2.3 節の(I)～(V)で挙げた母音を含む語形を取り出した。(I)の[ʌ]の場合で例示すると、「細雨」という項目から *ka-raŋ-bi* という語形を

⁸ 2.1 節で述べた理由を再度示すと、「第一に、本論で現代語の母音を考察するにあたり 20 世紀前半の母音について通時的な視点から整理する作業が必要だと考えるからである。第二に、20 世紀前半の段階でどのような母音の変化がすでに起きているか、まさに起きつつあるか、まだ起きていないかということを確認するためである。第三に、後学の研究者が十分に利用していないと評価されることがある小倉進平(1944)所載資料を活用するためである」(p. 7)ということである。

取り出すというようにして、「秋」の $k\Lambda$ -sil, 「村落」の $m\Lambda$ -il, $m\Lambda$ -sil, $m\Lambda$ -sil, 「渡船場」の $n\Lambda$ -ri など, $[\Lambda]$ が見られる項目とその語形を取り出した⁹。

このようにして 2.2.1 節で挙げた項目の語形データから 2.2.3 節の(I)~(V)で挙げた母音を含む語形を取り出し, 2.2.3 節の(I)と(III)については選び出した語形と当該母音の部分のみが異なる語形を選び出した。たとえば, (I)の $[\Lambda]$ の場合では「細雨」という項目から取り出した $k\Lambda$ -raŋ-bi という語形に対し, $[\Lambda]$ に対応する母音が異なり, それ以外については同じである ka -raŋ-bi, ko -raŋ-bi という語形を選び出した。同様にして, 「秋」の $k\Lambda$ -sil に対して ka -sil を, 「村落」の場合は $m\Lambda$ -il に対して ma -il を, $m\Lambda$ -sil に対して mo -sil を, $m\Lambda$ -sil に対して ma -sil, mo -sil をといった具合で語形を選び出した。

また, (II)では選び出した語形から $[j\sigma]$ と $[e]$ (または $[e]$)の部分だけが異なるような語形の組み合わせを選び出した。たとえば, 「曉」という項目からは se -bjok と se -bek という語形の組み合わせを, 「星」からは $pj\sigma$, pe , $pe:l$ を, 「夕」からは tje -njak, tje -njok, tje -nek を選び出した¹⁰。(II)の場合と同様にして, (IV)では選び出した語形から $[o]$ と $[i]$ の部分だけが異なるような語形の組み合わせを選び出し, (V)では選び出した語形から $[e]$ と $[e]$ の部分だけが異なるような語形の組み合わせおよび $[o]$ と $[u]$ の部分だけが異なるような語形の組み合わせを選び出した。

このようにして分析する語形を選び出し, それらの語形が分布する地域を調べた。ただし, 2.1 節で挙げた項目は, 全羅道(濟州島を含む), 慶尚道, 忠清道, 京畿道, 江原道, 黄海道, 咸鏡道, 平安道の全道(8道)または全道(8道)より 1道少ない 7道で調査された項目である。つまり, ここまでは全羅道に濟州島を含めて考えてきた。しかし, 小倉進平(1944)では濟州島方言は全羅道方言とは異なる特徴的な母音体系を持っているので, 以降の分析においては濟州島を全羅道に含まずに分析した。

⁹ $m\Lambda$ -il, $m\Lambda$ -sil は小倉進平(1944)ではそれぞれ $m\Lambda$ -ul, $m\Lambda$ -sul と記録されているが, これらはそれぞれ $m\Lambda$ -il, $m\Lambda$ -sil の誤植であると思われるので, 以下, 本論では $m\Lambda$ -il や $m\Lambda$ -sil のように記した。言い換えると, 小倉進平(1944)に記された $m\Lambda$ -ul や $m\Lambda$ -sul という語形が誤植である可能性が高いことを分かりやすくするために小倉進平(1944)の表記に従って書くとそれぞれ $m\Lambda$ -ül や $m\Lambda$ -sül の誤植であると考えられるということである。

¹⁰ $pj\sigma$ は小倉進平(1944)では $pi\sigma$ と記録されているが, この $pi\sigma$ は小倉進平(1944)の他の語形の記録や小倉進平自身の転写の原則に従うならば $pj\sigma$ とみるべきであると判断した。よって, 本論では $pj\sigma$ のように記した。

そして、語形の組み合わせが分布する地域が、済州島(済州), 全羅道(全羅), 慶尚道(慶尚), 忠清道(忠清), 京畿道(京畿), 江原道(江原), 黄海道(黄海), 咸鏡道(咸鏡), 平安道(平安)の 9 地域またはそれより 1 地域少ない 8 地域であるようなものを基本的に考察の対象とした¹¹。ただし、語形の組み合わせが分布する地域が 9 地域またはそれより 1 地域少ない 8 地域に満たない場合でも、2.4 節の考察で言及する必要がある項目は考察の対象にした。

2.2.5. 図表の作成

2.3 節(結果)では、まず、2.2.4 節で説明したような方法により本論で分析する対象となった項目、語形の組み合わせ、その分布地域を箇条書きで示した。次に、語形の組み合わせが 9 地域または 8 地域に分布し、かつ、複数項目で共通した特徴を示すものを中心に、語形の分布状況を表と言語地図にまとめた。表については項目ごとに、行に語形、列に地域名(済州, 全南, 全北, 慶南, 慶北, 忠南, 忠北, 京畿, 江原, 黄海, 咸南, 咸北, 平南, 平北)を置き、該当する語形が分布する地域に「○」を入れた。また、該当する語形が存在しない地域の列を灰色で塗りつぶした。言語地図は表を作成した各項目について作成した。言語地図を作成して本論で示したのは、各地点の語形の分布を視覚的に確認できるようにするためである。その作成には Seal8.0 を利用した¹²。

2.3. 結果

本節では、2.3 節で述べた(I)~(V)のそれぞれの課題について、2.2.4 節で述べた方法で分析対象とした項目、その語形の組み合わせ、その分布地域を箇条書きで示し、2.2.5 節で述べた方法で語形の分布を図表に示す。このほか、2.4 節(考察)で言及するデータについても本節で示した。

¹¹ これ以降、本文で地域名を述べるときは(括弧)中の略称を用いる。また、全羅南道, 全羅北道, 慶尚南道, 慶尚北道, 忠清南道, 忠清北道, 咸鏡南道, 咸鏡北道, 平安南道, 平安北道はそれぞれ全南, 全北, 慶南, 慶北, 忠南, 忠北, 咸南, 咸北, 平南, 平北といった略称を用いる。

¹² Seal8.0 は福嶋秩子・福嶋祐介両先生開発の Seal7.0J をもとに福井玲先生が開発した言語地図作成プログラムである。開発者のウェブページ(<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/OguraProject.html>)から入手できるようになるはずである(2020 年 3 月 31 日現在)。勉強のためにこのプログラムを使わせてくださった福井玲先生に感謝申し上げます。

2.3.1. [ʌ]と[œ]

2.3.1.1. [ʌ]

分析対象とした項目，語形の組み合わせ，その分布地域は，次のとおりである。

- (1) 細雨 kʌ-raŋ-bi / ka-raŋ-bi / ko-raŋ-bi (済全慶忠京江)
- (2) 秋 kʌ-sil / ka-sil (済全慶江)
- (3) 村落¹³ mʌ-il / ma-il, mʌ-sil / mo-sil, mʌ-sil / ma-sil / mo-sil (済全慶忠京江咸平)
- (4) 渡船場 nʌ-ri / na-ri (済全慶)
- (5) 男子・男児 sʌ-na-i / sa-na-i / sɔ-na-i / si-na-i (済京黄平)
- (6) 頤 tʰʌk / tʰak / tʰɛk / tʰɔk, tʰʌ-ga-ri / tʰɛ-ga-ri (済全慶忠京黄江咸)
- (7) 腎臟 kʰoŋ-pʰʌt / kʰoŋ-pʰat / kʰoŋ-pʰot (済全慶忠京江黄咸)
- (8) 臂 pʰʌl / pʰal / pʰol (済全慶忠京江黄咸平)
- (9) 粉 kʌ-ru / ka-ru (済全慶忠京江黄平)
- (10) 菱の実 mʌl-mœŋ-i / mal-mœŋ-i (済江)
- (11) 小豆 pʰʌt / pʰat / pʰot (済全慶忠京江黄咸)
- (12) 土 hʌk / hak / hɔk / hik (済全慶忠京江黄咸平)
- (13) 鋏 kʌ-sɛ / ka-sɛ (済全慶忠京江咸平)
- (14) 馬 mʌl / mal / mol (済全慶忠京江黄咸平)
- (15) 蠅 pʰʌ-ri / pʰa-ri / pʰɔ-ri / pʰo-ri (済全慶忠京江黄咸平)
- (16) 蝸牛 tʌl-bœŋ-i / tal-bœŋ-i (済咸)
- (17) 速かに ʔpʌl-li / ʔpal-li / ʔpol-li (済全慶忠京江黄咸平)
- (18) 年長の mat- / mat- / mot- (済全慶忠京江黄咸平)

以上のうち，「村落」，「臂」，「小豆」，「馬」，「蠅」，「年長の」，「速やかに」，「腎臟」，「粉」，「鋏」に関する語形の分布状況を図表に示すと，次のとおりである。

¹³ 語形の表記については脚注9を参照されたい。以降の議論では，ここに挙げた語形を用いる。

表 2.1. 村落 (小倉進平 1944 上: 27-28)¹⁴

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|--------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| mΛ-(s)il mΛ-sil | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| ma-il ma-sil | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | ○ | ○ | △ | ○ |
| mo-sil mo-sil | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | |

表 2.2. 臂 (小倉進平 1944 上: 102-103)¹⁵

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| p ^h al | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| p ^h al | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| p ^h ol | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | ○ | ○ | | |

表 2.3. 小豆 (小倉進平 1944 上: 213-214)¹⁶

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| p ^h at | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| p ^h at | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | △ |
| p ^h ot | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | |

図 2.4. 馬 (小倉進平 1944 上: 292-293)¹⁷

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| mal | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| mal | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| mol | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | ○ | ○ | | |

表 2.5. 蠅 (小倉進平 1944 上: 320-321)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|---------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| p ^h Λ-ri | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| p ^h a-ri | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| p ^h o-ri | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | ○ | ○ | | |
| p ^h ɔ-ri | | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | | | |

表 2.6. 年長の (小倉進平 1944 上: 498)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| mat- | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| mat- | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ |
| mot- | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | ○ | | | |

¹⁴ 黄海と平南には ma-il の変種(縮約形)の ma:l が見られるので「△」を記した。

¹⁵ 咸北の鍾城には p^hol で「婦女子に多い」(小倉進平 1944 上: 103)とある。

¹⁶ 平南と平北には p^hat の変種の p^hak が見られるので「△」を記した。

¹⁷ 慶南には「巨済・統営・南海・河東では邑内にてても無学者や女は[mol], 田舎に行くとき一般に[mol]といふ」(小倉進平 1944 上: 293)とある。

表 2.7. 速かに (小倉進平 1944 上: 487-488)

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ʔpɛ-li | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| ʔpal-li | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ʔpol-li | | | | | | | | | | | | ○ | | |

表 2.8. 腎臓 (小倉進平 1944 上: 99-100)¹⁸

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| kʰoŋ-pʰat | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| kʰoŋ-pʰat | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | △ | △ |
| kʰoŋ-pʰot | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | |

表 2.9. 粉 (小倉進平 1944 上: 162)¹⁹

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| kɛ-ru | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| ka-ru | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | △ | ○ | ○ |

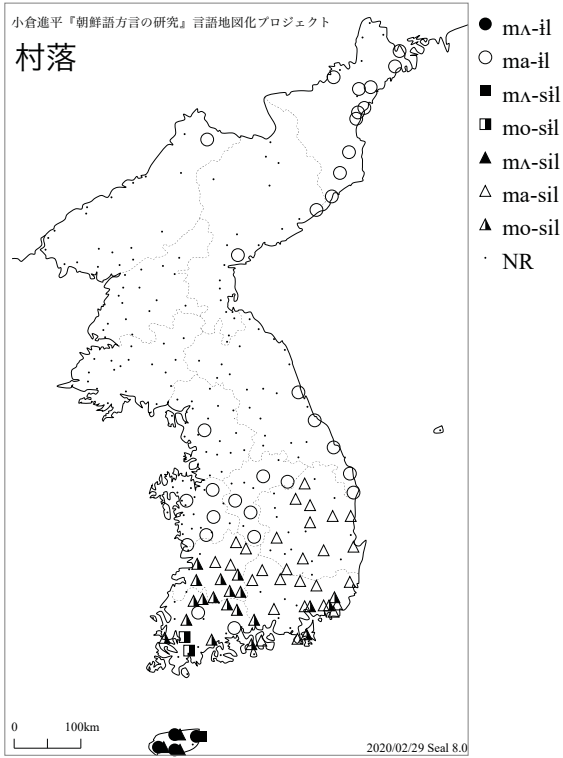
表 2.10. 鉄 (小倉進平 1944 上: 225-226)²⁰

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| kɛ-se | ○ | | | | | | | | | | | | | |
| ka-se | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ |

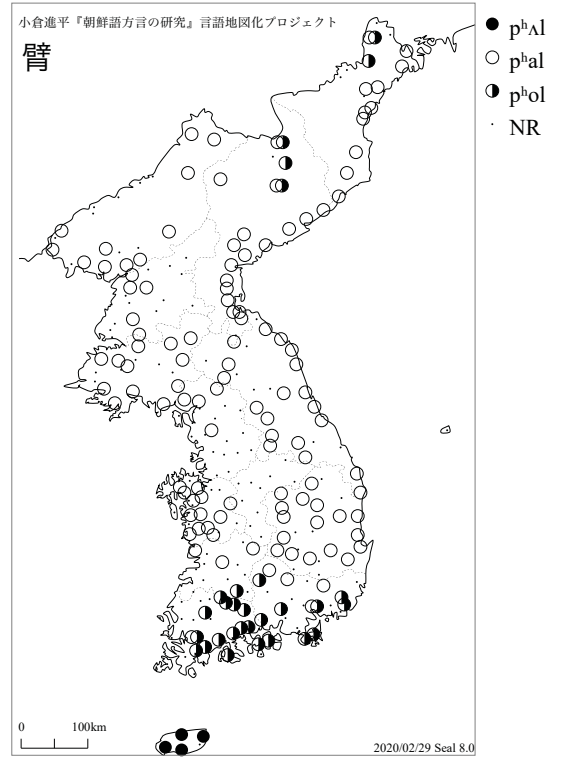
¹⁸ 平南と平北には kʰoŋ-pʰat の変種の kʰoŋ-pʰak が見られるので「△」を記した。

¹⁹ 咸南と咸北には ka-ru の変種(主格形ないし接辞添加形)の kal-gi が見られるので「△」を記した。

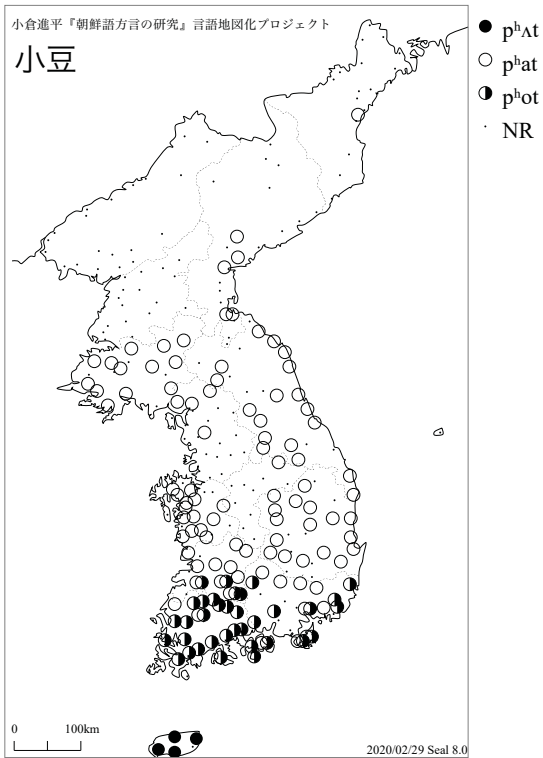
²⁰ 黄海には ka-u, ka-wi, ka-we が, 平南には ka-u, ka-we, kaŋ-e, kaŋ-u が見られる。



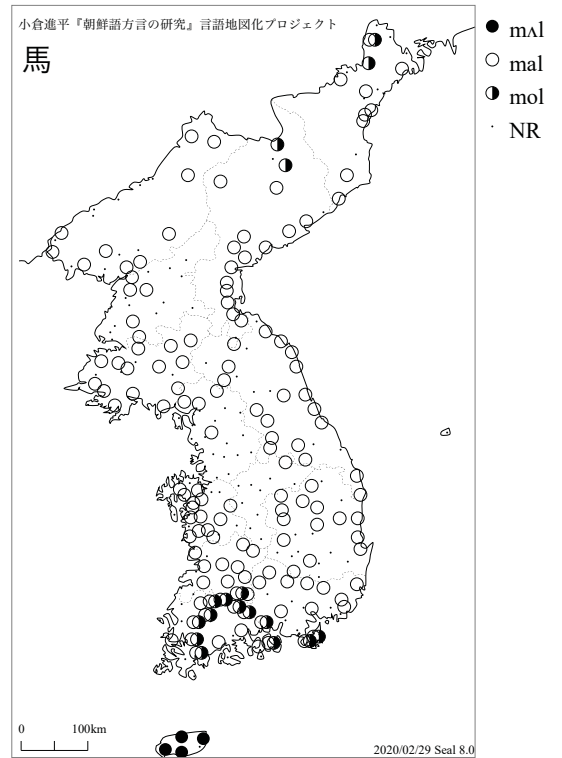
地図 2.1. 村落



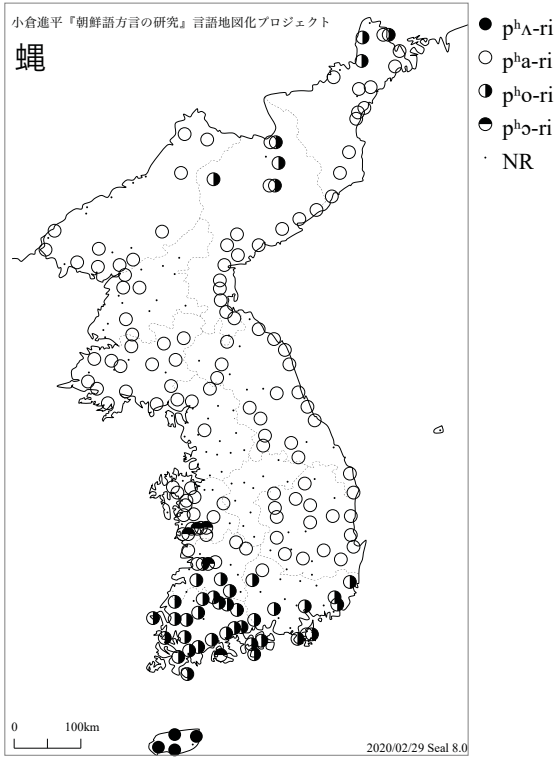
地図 2.2. 臂



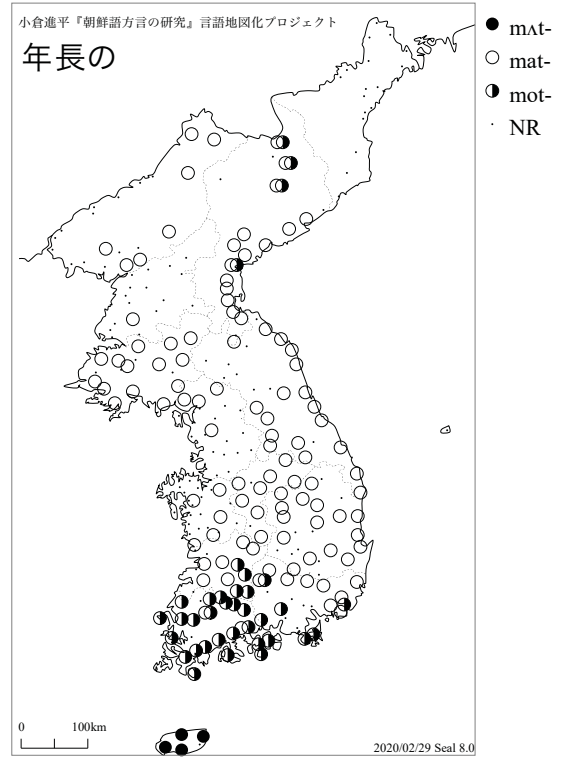
地図 2.3. 小豆



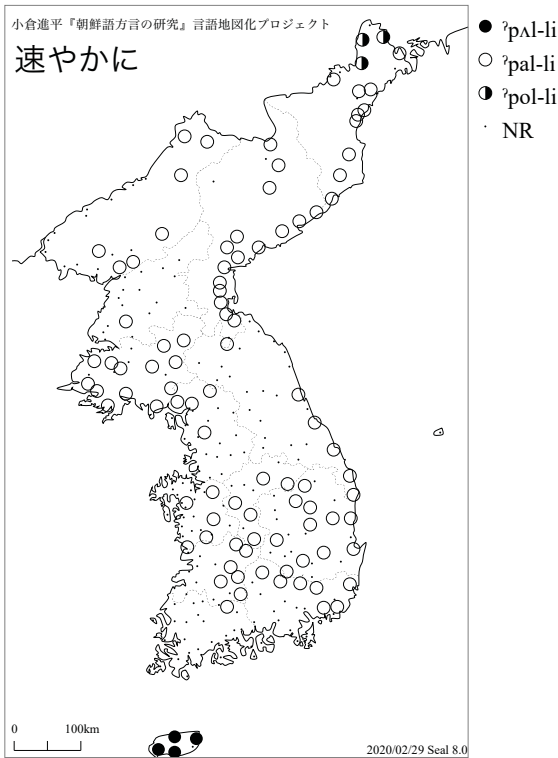
地図 2.4. 馬



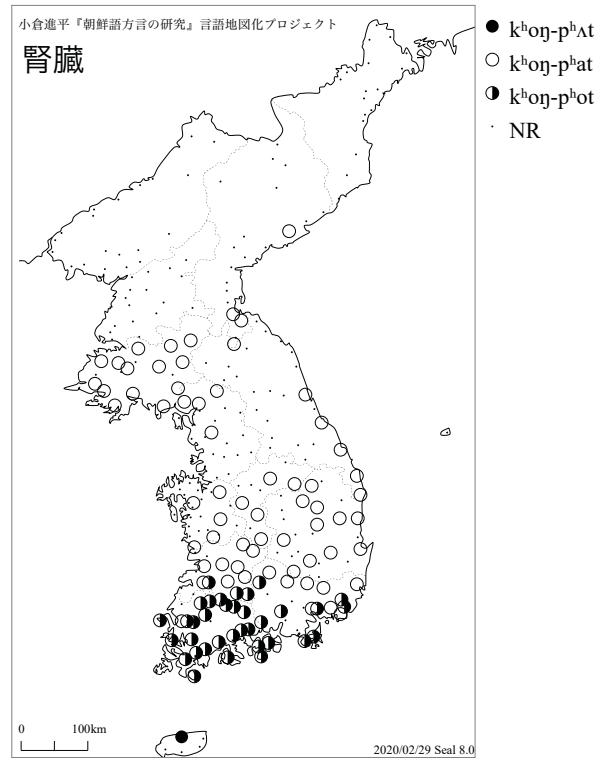
地図 2.5. 蠅



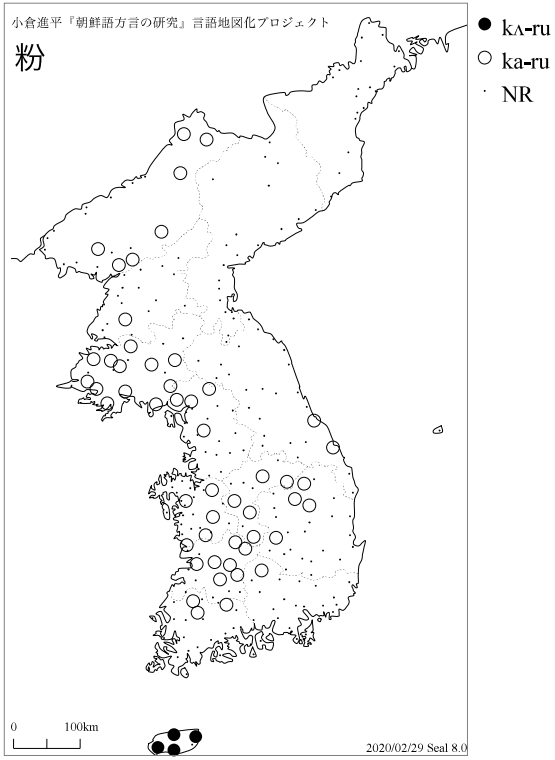
地図 2.6. 年長の



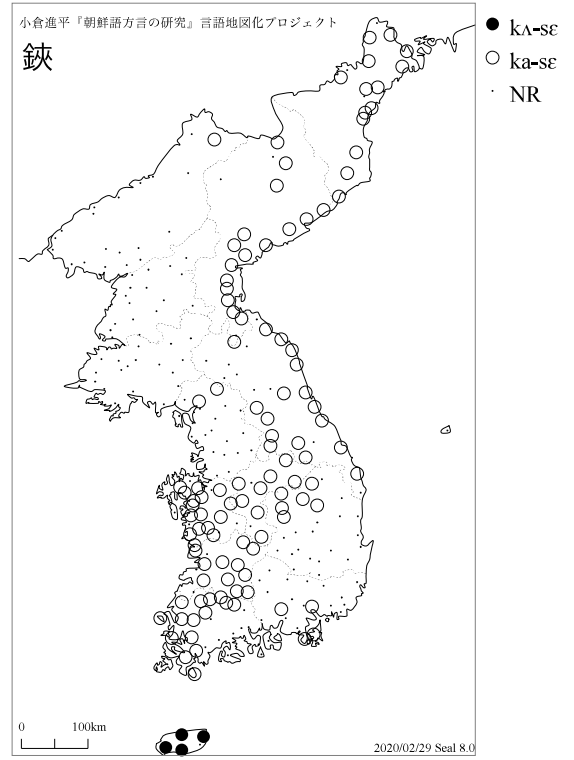
地図 2.7. 速やかに



地図 2.8. 腎臓



地図 2.9. 粉



地図 2.10. 鋏

2.3.1.2. [œ]

分析対象とした項目，語形の組み合わせ，その分布地域は，次のとおりである。

- (1) 肝 ?sil-gœ / ?sil-gɛ (済全慶忠京黄)
- (2) 笠子 kan-mœ / kan-me / kan-mo (済全慶忠京江黄咸)
- (3) ポケット kœ-wa / kɛ-wa (済全慶)
- (4) 菱の実 maɭ-mœŋ-i / mal-meŋ-i (済江)
- (5) 蝸牛 taɭ-bœŋ-i / tal-beŋ-i (済咸)
- (6) 煙 nœ / nɛ, nœŋ-gi / neŋ-gi (済全慶忠京黄平)

2.3.2. [jɔ]と[e]

分析対象とした項目，語形の組み合わせ，その分布地域は，次のとおりである。ただし，[jɔ]と[e]のほかに，[jɔ]と[e]のような対立を示すような語形の組み合わせも併せて記した。

- (1) 暁 se-bjɔk / se-bek (全慶忠京江黄)
- (2) 星²¹ pjɔl / pel / pɛ:l (済全慶忠京江黄咸平)
- (3) 夕 tʃe-njɔk / tʃe-nek (/ tʃe-njak) (忠京江黄)
- (4) 崖路 pjɔ-raŋ / pe-raŋ (京黄江咸平)
- (5) 波 mul-kjɔl / mul-kel (全慶忠京黄平)
- (6) 浅瀬 jɔ-ul / e-ul (慶忠京江黄平)
- (7) 子の妻 mjɔ-nu-ri / me-nu-ri (全慶忠京江黄咸平)
- (8) 舌 hɔ / he / hɛ (慶忠京江黄平)
- (9) 病 pjɔŋ / peŋ / peŋ (済全慶忠京江黄咸平)
- (10) 台所 pjɔk / pek (黄平)
- (11) 下駄 kjɔ-dʒa / ke-dʒa / kɛ-dʒa (/ kja-da) (慶京黄咸)
- (12) ポケット kjɔt-tʃip / ket-tʃip (平)
- (13) 木綿 mjɔŋ-be / meŋ-be, me-jɔŋ / me-eŋ (全慶)

²¹ 語形の表記については脚注 10 を参照されたい。以降の議論では，ここに挙げた語形を用いる。

- (14) 簪 pi-njo / pi-ne / pi-ne (済全慶忠江黄咸平)
- (15) 木靴 su-jo-dʒa / su-e-dʒa (江咸)
- (16) 糠 kjo / ke (/kje) (忠京江黄咸平)
- (17) 山葡萄 mjɔl-gu / mel-gu (全)
- (18) 稻 pjo / pe (全忠京江黄咸平)
- (19) 鏡(1) kjo-ul / ke-ul, kjoŋ-ul / keŋ-ul (全咸)
- (20) 鏡(2) men-gjoŋ / men-geŋ, sek-kjoŋ / sek-keŋ (済全慶忠京江黄咸)
- (21) 硯 pjo-ru / pe-ru / pe-ru (全慶忠京江黄咸平)
- (22) 雛 pjoŋ-a-ri / peŋ-a-ri / peŋ-a-ri (全慶忠京江黄咸平)
- (23) 鱒 mjɔl-tʰi / mel-tʰi (全慶忠京黄咸)
- (24) 蚕 nu-jo / nu-e / nu-ε, nwi-jo / nwi-e (済全慶忠京江黄咸平)
- (25) 蚤 pjo-ruk / pe-ruk / pe-ruk, pjo-rok / pe-rok / pe-rok, pjo-ru-gi / pe-ru-gi, pjo-ru-dʒi / pe-ru-dʒi
(済全慶忠京江黄咸)
- (26) 瘦せる jo-bi-da / e-bi-da / ε-bi-da (/je-bi-da / je-bi-da) (慶江咸)
- (27) 僅かに kjo-u / ke-u / ke-u (全慶忠京黄)
- (28) 別に pjɔl-lo / pel-lo / pel-lo (済全慶忠京江黄咸平)
- (29) 経営 kjoŋ-jɔŋ / keŋ-jɔŋ / keŋ-jɔŋ (済全慶忠京江黄咸平)
- (30) 煙 jɔn-gi / en-gi (/jen-gi) (全慶)

[jo]と[e](または[ε])との対立ではないが、その調査過程で気づいたこととして、参考までに、二重母音や母音連続と[e](または[ε])との対立がある項目とその語形の組み合わせを示しておく。まずは[ja]が現れる場合である。

- (31) 夕 tje-njak / tje-njɔk / tje-nek (忠京江黄)
- (32) 頬²² ʔpjam / ʔpem (全慶忠京江黄)
- (33) 瓦 tʃi-ja / tʃi-ε (済全慶忠江咸)
- (34) 下駄 kja-da / ke-da / ke-da / ki-da (済全慶忠京江黄咸)

²² ʔpjam は小倉進平(1944)では pjam と記されているが、福井玲(2017a)が指摘しているように、小倉進平(1944)に記載された pjam はʔpjam の誤植とみなし、本論ではこのように記した。

(35) 榛の実 ke-jam / kɛ:m (京黄)

(36) 燐寸 sɔŋ-nja / sɔŋ-ne (黄)

次に[je](または[jɛ])が現れる場合である。

(37) 女 kje-dʒip / ke-dʒip / kɛ-dʒip (全慶忠京江黄咸平)

(38) 肺臓 pʰje / pʰɛ / pʰɛ, hɔ-pʰje / hɔ-pʰɛ / hɔ-pʰɛ (全慶忠京江黄咸)

(39) 玉蜀黍 kaŋ-nje / kaŋ-ne (咸)

(40) 葱 pʰa-je / pʰa-e (全慶咸)

(41) 独楽 paŋ-je / paŋ-ɛ, peŋ-je / peŋ-ɛ (咸)

(42) 猫 ko-nje / ko-ne, ko-njeŋ-i / ko-neŋ-i, ko-je / ko-ɛ (済忠江咸平)

(43) 瘦せる jɔ-bi-da / je-bi-da / je-bi-da / e-bi-da / ɛ-bi-da (慶江咸)

(44) 煙 jɔn-gi / jen-gi / en-gi (全慶)

[ɔi(ɔj)]が現れる場合は、次のとおりである。

(45) 臉 nun-ʔtu-bɔ-i / nun-ʔtu-be (慶咸)

(46) 蟹 kɔ-i / ke / kɛ, kwɔ-i / kwe / kwɛ (全慶忠京江黄咸平)

[ai(aj)]が現れる場合は、次のとおりである。

(47) 渡船場 pɛt-sa-i / pɛt-se / pɛt-sɛ (咸平)

(48) 男子・男児 sa-na-i / sa-ne (済全忠京黄)

(49) 売卜者 tʃɔm-dʒa-i / tʃɔm-dʒɛ (黄)

(50) 鰱 kwa-i / kwɛ (慶江咸)

(51) 葱 pʰa-i / pʰɛ (全慶咸)

[oi(oj)]が現れる場合は、次のとおりである。

(52) 山・墓 mo-i / mɛ (全慶忠)

(53) 肉魚 ko-i-gi / kɛ-gi / ke-gi (慶忠黃咸)

(54) 黃瓜 o-i / e / ɛ (慶忠京黃咸平)

(55) 粟 tʃo-i / tʃɛ (慶江咸)

以上のうち、「星」、「病」、「別に」、「経営」、「子の妻」、「硯」、「雛」、「蚤」、「鏡」、「簪」に関する語形の分布状況を図表に示すと、次のとおりである。

表 2.11. 星 (小倉進平 1944 上: 6-7)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| pjɔl | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ |
| pel | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| pɛ:l | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 2.12. 病 (小倉進平 1944 上: 105-107)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| pjɔŋ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| peŋ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| pɛŋ | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 2.13. 別に (小倉進平 1944 上: 489-490)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| pjɔl-lo | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| pel-lo | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ |
| pɛl-lo | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 2.14. 経営 (小倉進平 1944 上: 504-505)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| kjɔŋ-jɔŋ | ○ | | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| keŋ-jɔŋ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | ○ |
| keŋ-jɔŋ | | | | | ○ | | | | | | | | | |

表 2.15. 子の妻 (小倉進平 1944 上: 63-64)²³

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| mjɔ-nu-ri | | | | | | ○ | ○ | | | ○ | | | | |
| me-nu-ri | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

²³ 濟州には a-dʒaŋ が見られる。

表 2.16. 硯 (小倉進平 1944 上: 243–244)²⁴

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| pjɔ-ru | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| pe-ru | △ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| pe-ru | | ○ | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 2.17. 雛 (小倉進平 1944 上: 278–279)²⁵

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| pjɔŋ-a-ri | | ○ | △ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | |
| peŋ-a-ri | | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | |
| peŋ-a-ri | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ |

表 2.18. 蚤 (小倉進平 1944 上: 325–327)²⁶

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| pjɔ-ruk 他 ([jɔ]の語形) | | ○ | | | | | ○ | ○ | | ○ | | | | |
| pe-ruk 他 ([e]の語形) | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | △ | △ |
| pe-ruk 他 ([ɛ]の語形) | | ○ | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 2.19. 鏡 (小倉進平 1944 上: 230–231)²⁷

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| men-gjɔŋ sek-kjɔŋ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| men-geŋ sek-keŋ | | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | | | | | |

表 2.20. 簪 (小倉進平 1944 上: 152–153)²⁸

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| pi-njɔ | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| pi-ne | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | ○ |
| pi-ne | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ |

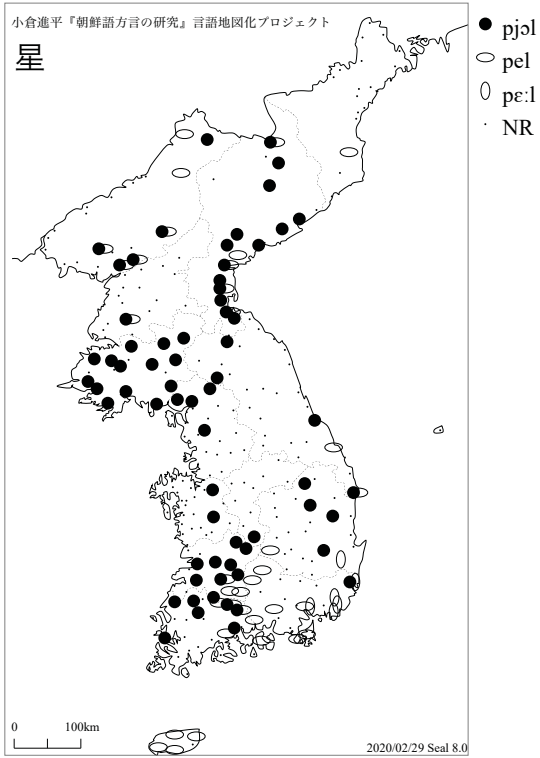
²⁴ 済州には pe-ru の変種の pe-ri が見られるので「△」を記した。

²⁵ 全北には pjɔŋ-a-ri の変種の ?pjɔŋ-a-ri が見られるので「△」を記した。済州には pi-ɛ-gi, piŋ-ɛ-gi が、慶南には pi-ga-ri, ?pi-ga-ri, pi-ge-i, pi-geŋ-i, ?pi-geŋ-i, pil-geŋ-i が見られる。

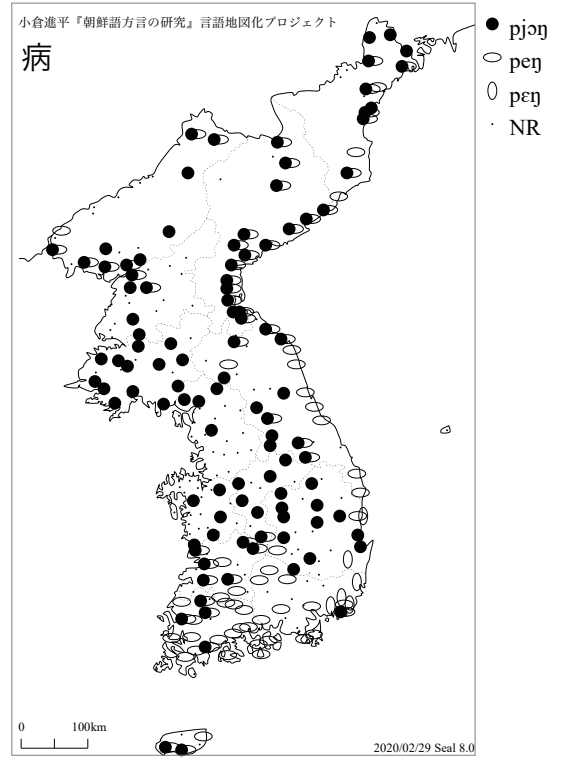
²⁶ 咸北には pe-ru-gi の変種の pe-re-gi, pe-ri-gi が、平南には pe-ru-gi の変種の pe-ru-di が、平北には pe-ru-gi の変種の pe-ri-di, pe-ri-dzi が見られるので「△」を記した。

²⁷ 慶北には kɔ-ul, min-gjɔŋ, sek-koŋ, sik-kjɔŋ が見られる。

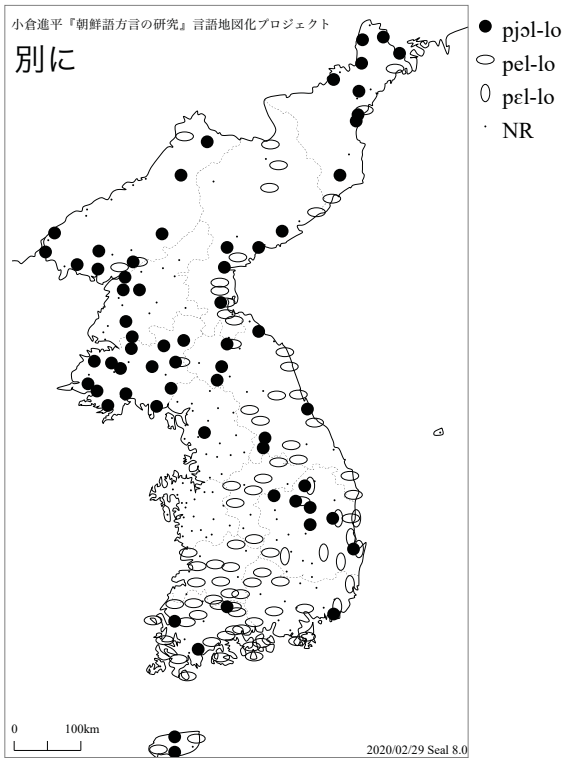
²⁸ 忠南には pi-na, pi-no が、京畿には pi-na が見られる。



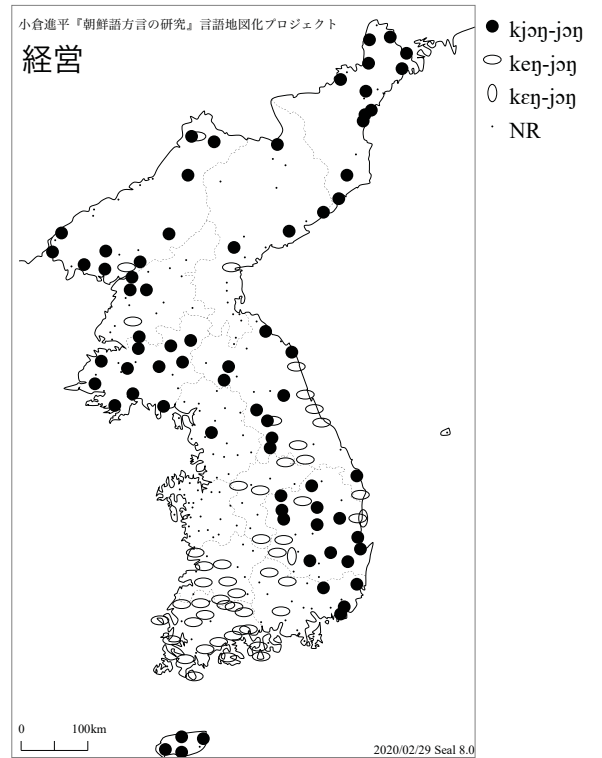
地図 2.11. 星



地図 2.12. 病



地図 2.13. 別に



地図 2.14. 経営

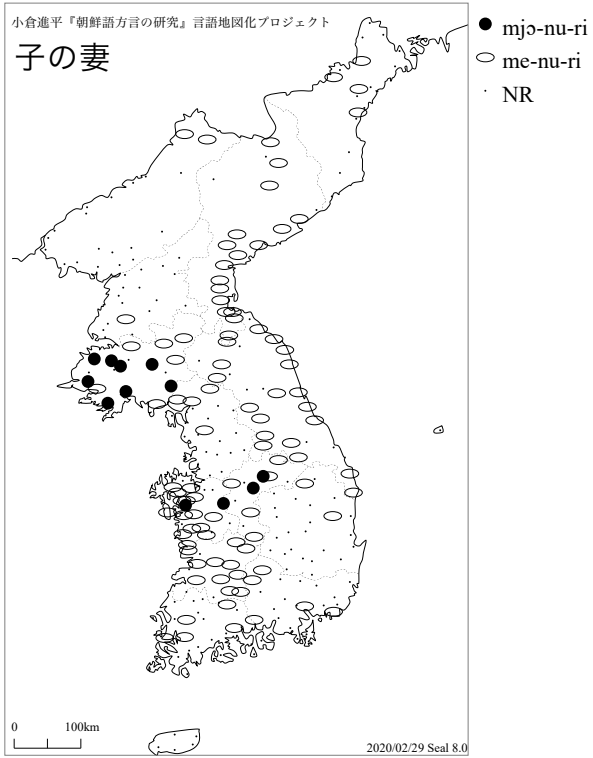


図 2.15. 子の妻

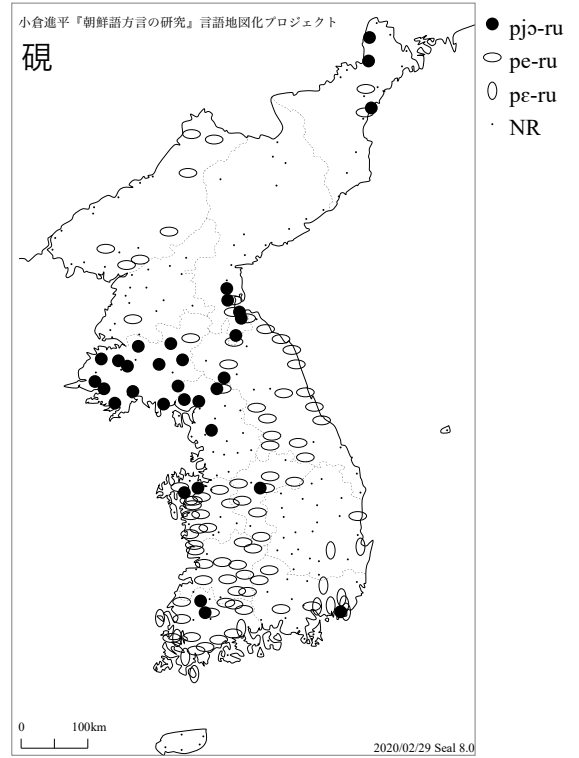


図 2.16. 硯

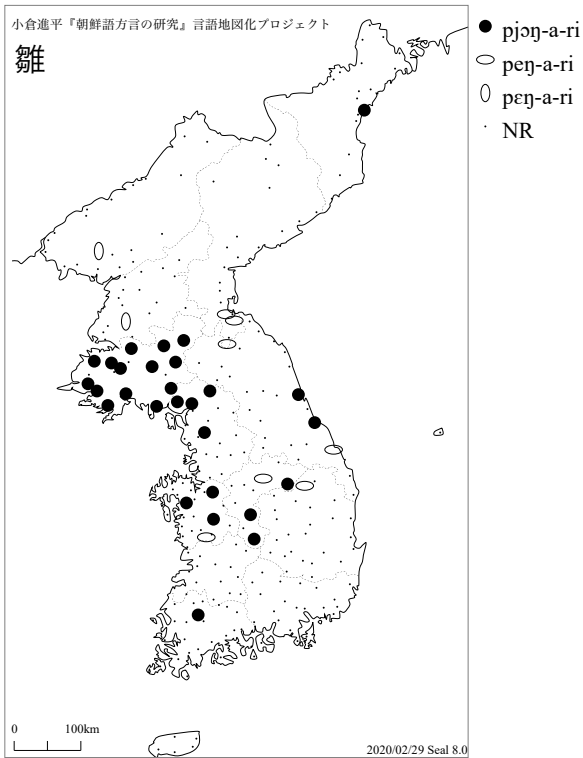


図 2.17. 雛

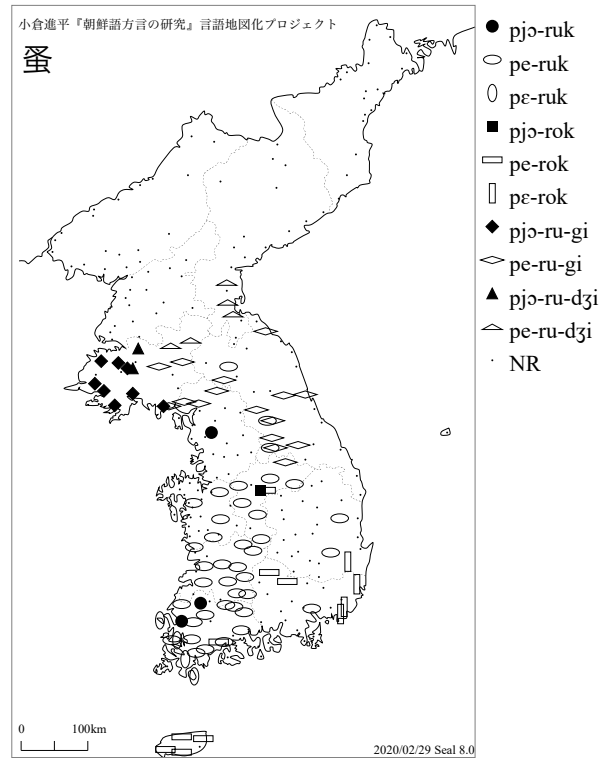


図 2.18. 蚤

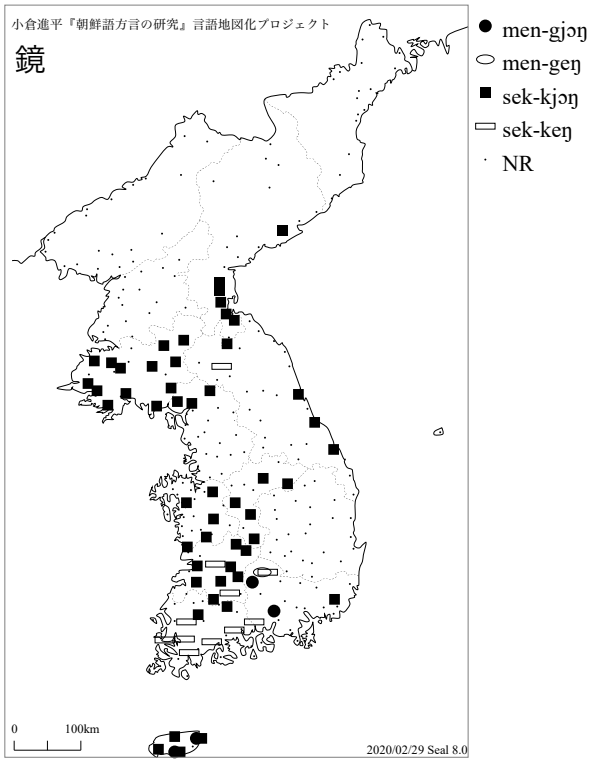


図 2.19. 鏡

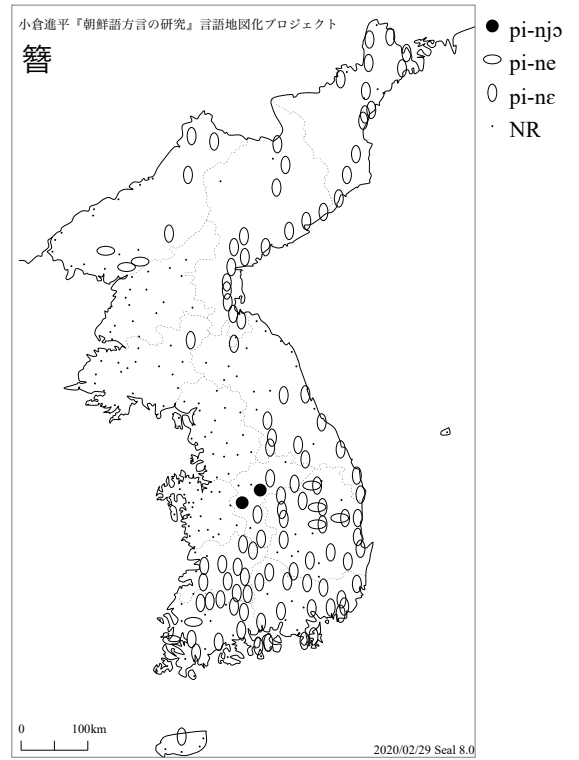


図 2.20. 簪

2.3.3. [ø]の発音の地域差と[wi]の発音の地域差

2.3.3.1. [ø]の発音の地域差

分析対象とした項目，語形の組み合わせ，その分布地域は，次のとおりである。

- (1) 雹 mu-rø / mu-rε / mu-ri (黄咸)
- (2) 山・墓 mø / mo-i / me / mε / mi, mø-ʔtoŋ / me-ʔtoŋ / mε-ʔtoŋ (済全慶忠京江黄咸平)
- (3) 角 mo-tʰøŋ-i / mo-tʰoŋ-i / mo-tʰeŋ-i / mo-tʰeŋ-i / mo-tʰwiŋ-i / mo-tʰuŋ-i / mo-tʰiiŋ-i
(済慶忠京江黄咸平)
- (4) 外 ø / we / e / wε / ε / wi / i (済全慶忠京江黄咸平)
- (5) 兔唇の人 øt-tʰøŋ-i / øt-tʰoŋ-i / øt-tʰeŋ-i (平)
- (6) 舌 sø / swe / se / sε / si / so (済全慶忠京江黄咸)
- (7) 学校 hak-kø / hak-kjo (全忠江黄咸(多くの地方))
- (8) ポケット kø-bi / ke-bi / kε-bi / ki-bi (全慶)
- (9) 麻製の鞋 tʰø-sin / tʰo-sin (咸)
- (10) 麻布 pø / pwe / pe / pε / pi (済全慶忠京江黄咸平)
- (11) 木靴 sø-dʒa / swe-dʒa / sε-dʒa / si-u-dʒa (全慶忠京黄咸平)
- (12) 肉魚 kø-gi / ko-gi / ko-i-gi / kwe-gi / ke-gi / kwe-gi / kε-gi / kwi-gi / ki-gi (済全慶忠京江黄咸平)
- (13) 焼酎 sø-dʒu / so-dʒu / swe-dʒu (全忠京黄(多くの地方))
- (14) 鍬 køŋ-i / kwεŋ-i / kwaŋ-i (済慶忠京江)
- (15) 縄 nøt-kin / nεt-kin, noŋ-ʔki / noŋ-ʔki, noŋ-i / noŋ-i (黄咸平)
- (16) 篩 tʰø / tʰe / tʰε / tʰi (済全慶忠京江黄咸平)
- (17) 蕎麦 mø-mil / me-mil / mε-mil, mø-mul / me-mul / mε-mul / mi-mul, mø:l / mε:l
(全慶忠京江黄咸)
- (18) 黄瓜(1) ø / o-i / u-i / we / e / wε / ε / wi / i (済全慶忠京江黄咸平)
- (19) 黄瓜(2) mu-rø / mu-rwe / mu-re / mu-rε / mu-rwi / mu-ri (済慶忠)
- (20) 稲 pø / pe / pjø (全忠京江黄咸平)
- (21) 鉄・金 sø / swe / se / swe / sε / si, sø-ʔkop / swe-ʔkop (全慶忠京江黄咸平)
- (22) 馬槽 sø-tʰoŋ / swe-tʰoŋ (江)
- (23) 糊刷毛 kø-al / kwe-al / kwε-al / kwi-al (全慶京平)

- (24) 木枕 t^hø-t^hi-mi / t^he-t^hi-mi / t^he-t^hi-mi (全慶)
- (25) 抽斗 ʔpø-bi / ʔpo-bi / ʔpwe-bi / ʔpe-bi / ʔpɛ-bi / ʔpi-bi / ʔpɔ-bi (全慶咸平)
- (26) 票 p^hø / p^hjo / p^ho / p^he / p^hɛ (濟全慶忠京江黃咸平)
- (27) 鳥の餌 mø / mo-i, møy-i / moŋ-i / meŋ-i / møy-i (慶京江黃平咸)
- (28) 猫 kø / ko-i / kwɛ / kwi, kø-de-gi / kwe-de-gi, køy-i / kwøy-i / kwɛŋ-i / kwəŋ-i (全慶忠京黃平)
- (29) 瘦せる ø-da / we-da (忠)
- (30) 誦んずる ø-un-da / o-un-da / we-un-da / e-un-da / ɛ-un-da / i-un-da, øn-da / wen-da / win-da
(濟全慶忠京江黃咸)
- (31) 却って ø-rjɔ / o-i-rjɔ, tø-ro / to-ro / twe-ro, tøy-rjɔ / te-rjɔ, tøy-te / tep-te (全慶忠京江黃)
- (32) 尖れるさま ʔpø-dʒok / ʔpjo-dʒok / ʔpo-dʒok / ʔpe-dʒok / ʔpɛ-dʒok, ʔpø-dʒuk / ʔpjo-dʒuk / ʔpo-dʒuk
/ ʔpe-dʒuk, pø-ʔʃok / po-ʔʃok (濟全忠京江黃咸平)
- (33) 回答 hø-dap / hjo-dap / hwe-dap / he-dap / hwɛ-dap / hɛ-dap / hwi-dap / hi-dap
(濟全慶忠京江黃咸平)

以上のうち、「外」、「鉄・金」、「誦んずる」、「回答」、「麻布」、「山・墓」、「黄瓜」に関する語形の分布状況を図表に示すと、次のとおりである。

表 2.21. 外 (小倉進平 1944 上: 54-55)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ø | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| we | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | |
| e | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | |
| wɛ | | | | ○ | ○ | | | | | | | ○ | | ○ |
| ɛ | | | | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | |
| wi | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| i | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 2.22. 鉄・金 (小倉進平 1944 上: 221-222)²⁹

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| so(-ʔkop) | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | |
| swe(-ʔkop) | △ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | | |
| se | | ○ | | ○ | | | | | | ○ | | | | |
| swe | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| se | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| si | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 2.23. 誦んずる (小倉進平 1944 上: 377)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ø(-u)n-da | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| o-un-da | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| we(-u)n-da | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | |
| e-un-da | ○ | | | ○ | | | | | ○ | | | | | |
| ε-un-da | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| win-da | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| i-un-da | | | | | ○ | | | | | | | | | |

表 2.24. 回答 (小倉進平 1944 上: 513-514)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| hø-dap | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| hjo-dap | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | |
| hwe-dap | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | |
| he-dap | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | | |
| hwe-dap | | | | ○ | ○ | | | | | | | ○ | ○ | ○ |
| he-dap | | ○ | | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| hwi-dap | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| hi-dap | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 2.25. 麻布 (小倉進平 1944 上: 151-152)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| pø | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| pwe | | | | | | | | | | | | ○ | | |
| pe | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| pe | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| pi | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

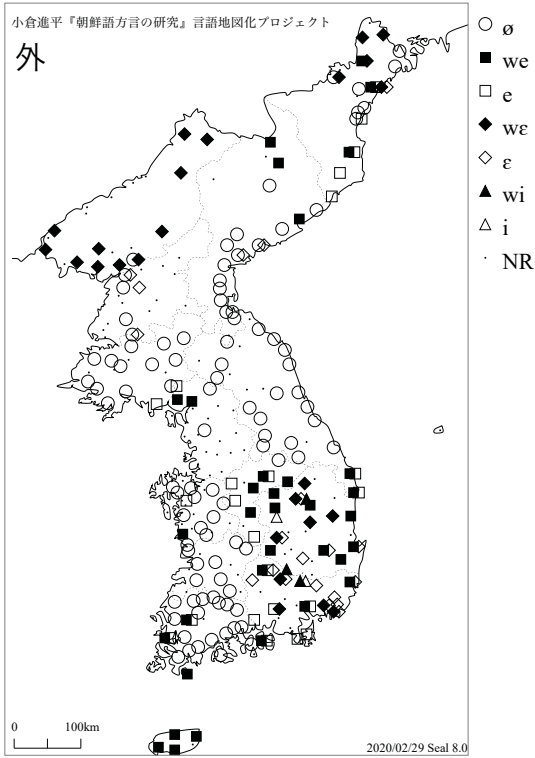
²⁹ 濟州には swe の変種の³swe が見られるので「△」を記した。

表 2.26. 山・墓 (小倉進平 1944 上: 35-36)

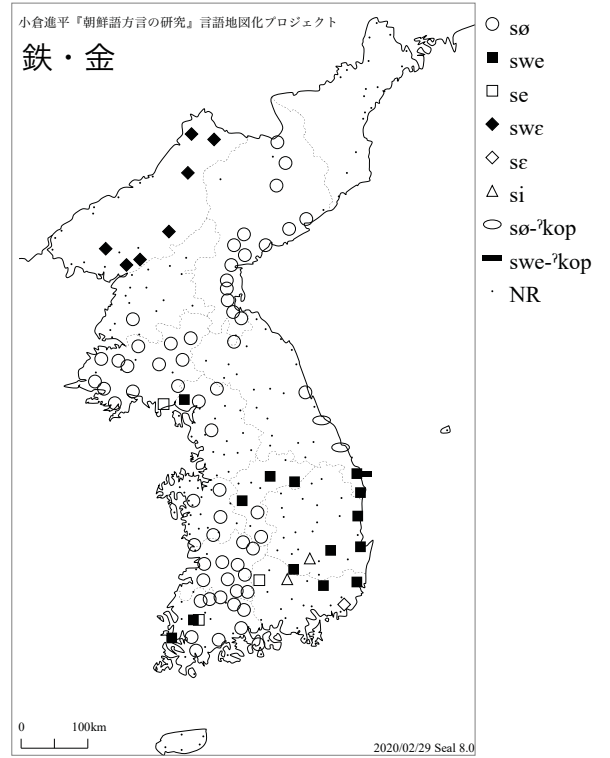
| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| mø(-ʔtoŋ) | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | |
| mo-i | | | | | | ○ | ○ | | | | | | | |
| me(-ʔtoŋ) | ○ | ○ | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | | | | ○ |
| me(-ʔtoŋ) | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | |
| mi | | | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | | | |

表 2.27. 黃瓜 (小倉進平 1944 上: 203-204)

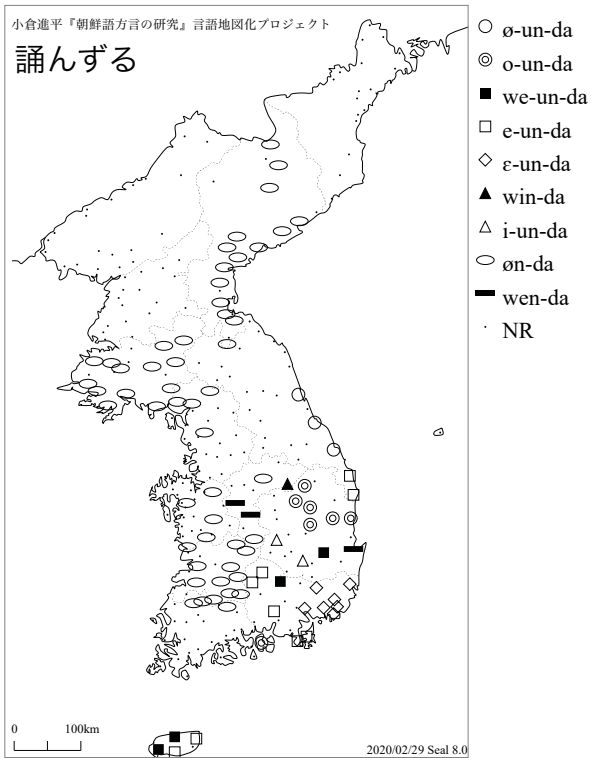
| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ø | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | |
| o-i | | | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ |
| u-i | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| we | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | |
| e | | | | ○ | | | | | | | | ○ | | |
| wε | | | | ○ | ○ | | | | | | | ○ | | ○ |
| ε | | | | ○ | | | | | | | ○ | ○ | | |
| wi | | | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | |
| i | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |



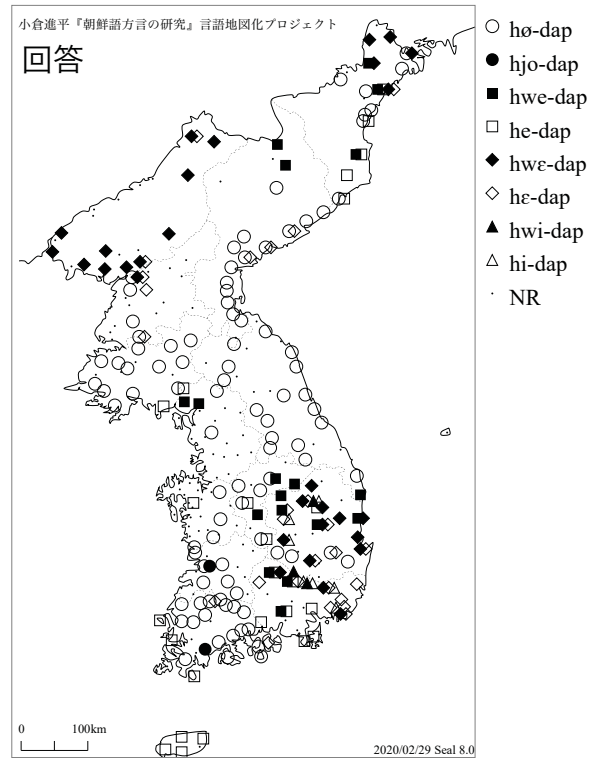
地図 2.21. 外



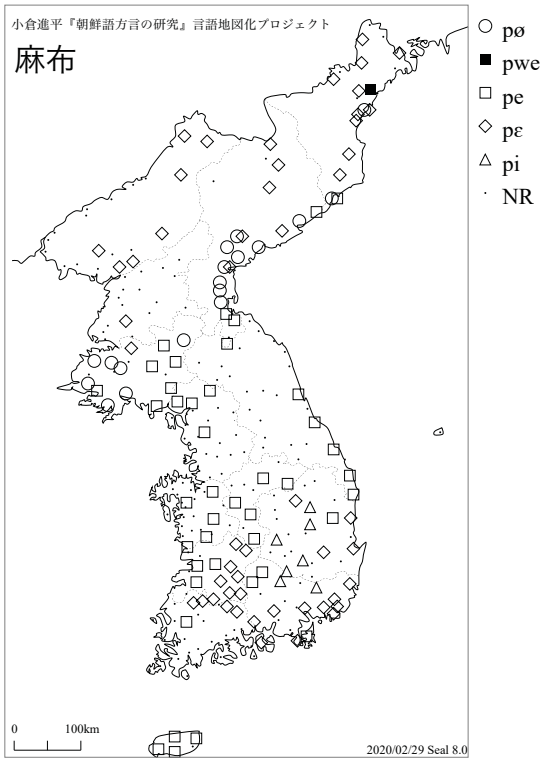
地図 2.22. 鉄・金



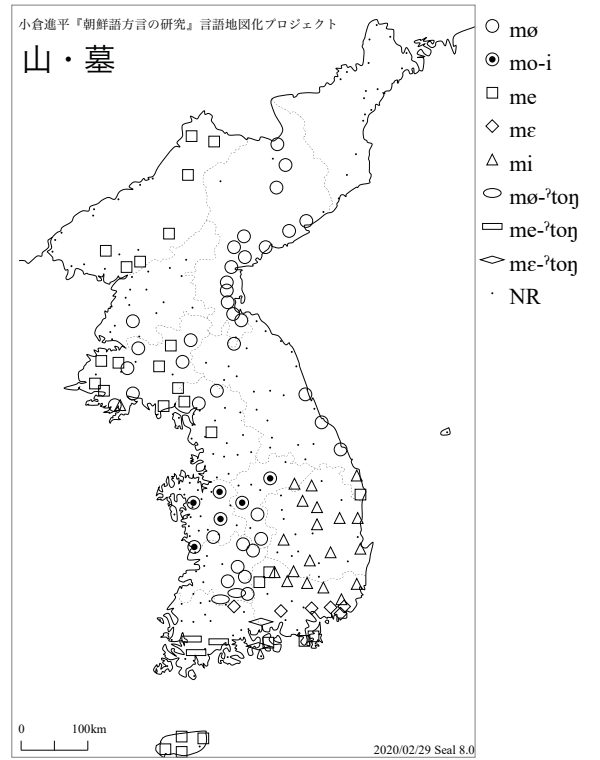
地図 2.23. 誦んずる



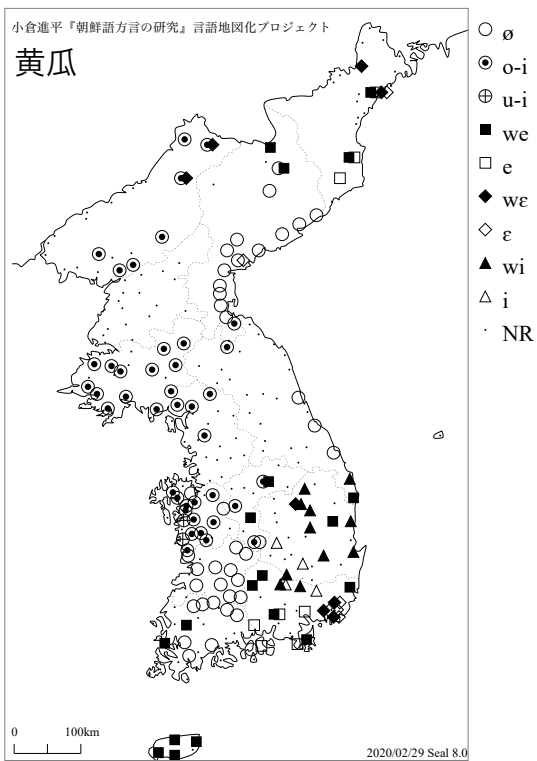
地図 2.24. 回答



地図 2.25. 麻布



地図 2.26. 山・墓



地図 2.27. 黄瓜

2.3.3.2. [wi]の発音の地域差

分析対象とした項目、語形の組み合わせ、その分布地域は、次のとおりである。

- (1) 角 mo-t^hwiŋ-i / mo-t^hiŋ-i / mo-t^huŋ-i / mo-t^heŋ-i / mo-t^hoŋ-i / mo-t^hoŋ-i / mo-t^heŋ-i
(済慶忠京江黄咸平)
- (2) 外 wi / i / we / e / ø / wε / ε (済全慶忠京江黄咸平)
- (3) 姉妹 nu-i / nwi / nu (済全慶忠京江黄咸平)
- (4) 痣 sa-ma-gwi / sa-ma-gu / sa-ma-gi, sam-ba-k^hwi / sam-ba-k^hi (全慶忠京江黄咸平)
- (5) 煙出し kwil-[?]tuk / kul-[?]tuk, kwi-[?]tuk / ki-[?]tuk / ke-[?]tuk (済全慶忠京江黄)
- (6) 釘 mo-da-gwi / mo-da-gu / mo-da-gi (黄咸平)
- (7) 耳輪 kwi-go-ri / ki-go-ri (全慶忠京江黄)
- (8) 木靴 swi-jɔ-dʒa / su-jɔ-dʒa (全江咸)
- (9) 肉魚 kwi-gi / ki-gi / kwe-gi / ke-gi / kø-gi / ko-gi / ko-i-gi / kwe-gi / ke-gi (済全慶忠京江黄咸平)
- (10) 饅頭 man-dwi / man-dii / man-du, man-t^hwi / man-t^hu (済全慶忠京江黄咸平)
- (11) 炒麵 mi-swi / mi-su / mi-si (全慶京黄咸)
- (12) 焼酎 a-raŋ-dʒwi / a-raŋ-dʒu (済全慶咸平)
- (13) 蓑 nwi-jɔk / nu-jɔk (江黄咸平)
- (14) 棗の実 tɛ-tʃ^hwi / tɛ-tʃ^hu / tɛ-tʃ^hi / tɛ-tʃ^ho (済全慶忠京江黄咸平)
- (15) 山葡萄 mɔ-rwi / mɔ-ru / mɔ-ri / mɔ-re / mɔ-rɛ, mɔl-gwi / mɔl-gu / mɔl-gi (済全慶忠京江黄咸平)
- (16) 杏子の実 sal-gwi / sal-gu / sal-gi (済全慶忠京江黄咸平)
- (17) 唐辛 taŋ-tʃ^hwi / taŋ-tʃ^hu (京黄咸平)
- (18) 黄瓜(1) u-i / wi / i / we / e / ø / o-i / wε / ε (済全慶忠京江黄咸平)
- (19) 黄瓜(2) mu-rwi / mu-ri / mu-rwe / mu-re / mu-rø / mu-rɛ (済慶忠)
- (20) 蜀黍(1) swi / su, swi-su / su-su, swi-si / su-si (全慶忠京江黄咸平)
- (21) 蜀黍(2) swi-swi / swi-su / swi-si (全京黄)
- (22) 粟 tʃwi-bi / tʃi-bi (慶)
- (23) 岩 pa-wi / pa-u, paŋ-k^hwi / paŋ-k^hu (全慶忠京江黄)
- (24) 鉄・金 [?]swi / [?]si / [?]swe / [?]se / [?]swε / [?]sɛ (済慶)
- (25) 鋏 ka-wi / ka-u / ka-we / ka-wε (全慶忠京黄平)

- (26) 馬槽 kwi / kwe, kwi-sun / ku-sun / ki-sun, kwi-juŋ / ku-juŋ (忠京江黄咸)
- (27) 糊刷毛 kwi-bal / ki-bal, kwi-al / kwe-al / kɔ-al / kwɛ-al, pʰul ʔkwi-bal / pʰul ʔku-bal / pʰul ʔki-bal / pʰul ʔke-bal / pʰul ʔko-bal, pʰul kwi-al / pʰul ki-al (全慶忠京咸平)
- (28) 斧 swi-tʰɔŋ-i / su-tʰɔŋ-i (咸平)
- (29) 鵝鳥 kɔ-wi / kɔ-u (慶京江)
- (30) 嘴 tʃu-dwiŋ-i / tʃu-duŋ-i / tʃu-diŋ-i / tʃu-diŋ-i / tʃu-deŋ-i / tʃu-deŋ-i (慶忠京江黄咸平)
- (31) 猫 kwi / kɔ / kwɛ / ko-i, kwi-ɛŋ-i / kɛ-ɛŋ-i (全慶忠黄)
- (32) 狐 jo-wi / jo-u (忠京江黄咸平)
- (33) 蝙蝠 ʔpak-tʃwi / ʔpak-tʃu / ʔpak-tʃi, ʔpal-tʃwi / ʔpal-tʃu / ʔpal-tʃi, pok-tʃwi / pok-tʃu, ʔpok-tʃwi / ʔpok-tʃu / ʔpok-tʃi, ʔpol-tʃwi / ʔpol-tʃi (全慶江黄咸)
- (34) 鰈 se-wi / se-u / se-o (済全慶忠京江黄咸平)
- (35) 蚕 nu-i / nwi / nii / ni / nwe (全慶忠江黄)
- (36) 木 mu-tʰwi / mu-tʰu (咸平)
- (37) 瘦せる jo-wi-da / jo-ii-da (忠京江黄)
- (38) 誦んずる wi-an-da / e-an-da, win-da / wen-da / ɔn-da (全慶忠京黄咸)
- (39) 回答 hwi-dap / hi-dap / hwe-dap / he-dap / hɔ-dap / hwɛ-dap / hɛ-dap / hjo-dap (済全慶忠京江黄咸平)

以上のうち、「耳輪」、「蝙蝠」のほか、「蝙蝠」の後部要素の「鼠」についても小倉進平(1944)にデータがあるので、この項目も加えて語形の分布状況を図表に示す³⁰。

表 2.28. 耳輪 (小倉進平 1944 上: 136)³¹

| | 济州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| kwi-go-ri | △ | ○ | △ | △ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | △ | △ |
| ki-go-ri | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

³⁰ 「耳輪」の前部要素の「耳」についても小倉進平(1944)にデータがあるが、そこでは卑称形のみを記録しているので考察の対象には含めなかった。

³¹ kwi-ʔko-ri や kwi-ʔkol-li などが見られる地域を「△」で記した。

表 2.29. 蝙蝠 (小倉進平 1944 上: 302)³²

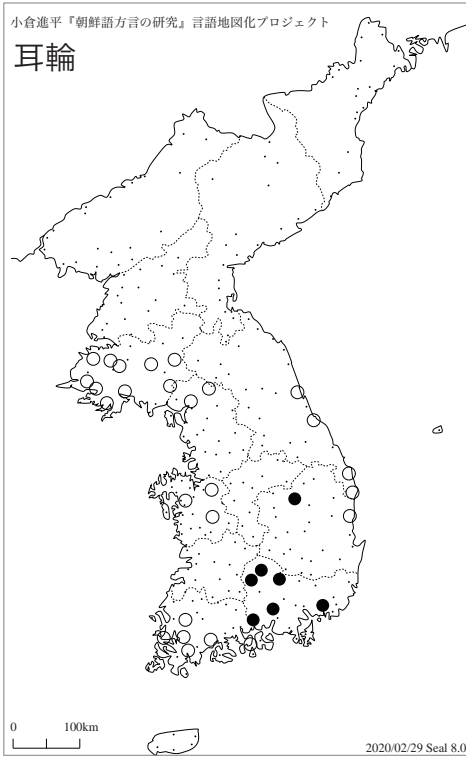
| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|--------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ʔpak-tʃwi 他 ([wi]の語形) | △ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | △ | △ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| ʔpak-tʃu 他 ([u]の語形) | | ○ | ○ | | | | | | ○ | | ○ | | | |
| ʔpak-tʃi 他 ([i]の語形) | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 2.30. 鼠 (小倉進平 1944 上: 301)³³

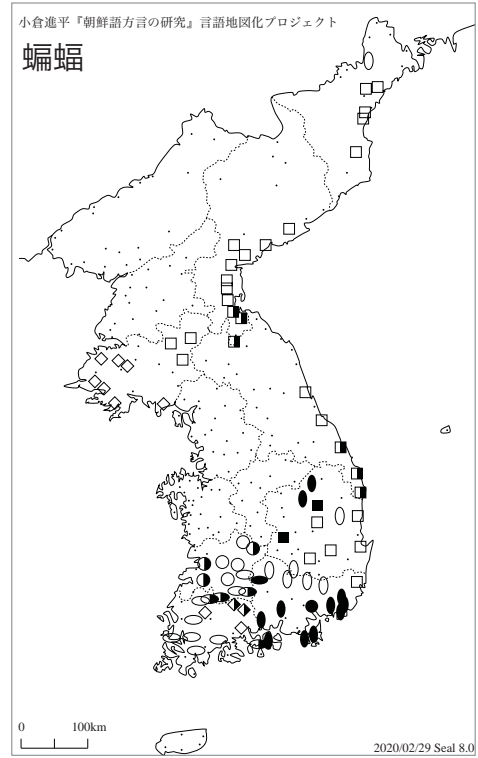
| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| tʃwi | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| tʃi | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

³² pak-tʃwi や tʃ-ram-tʃwi が見られる地域を「△」で記した。

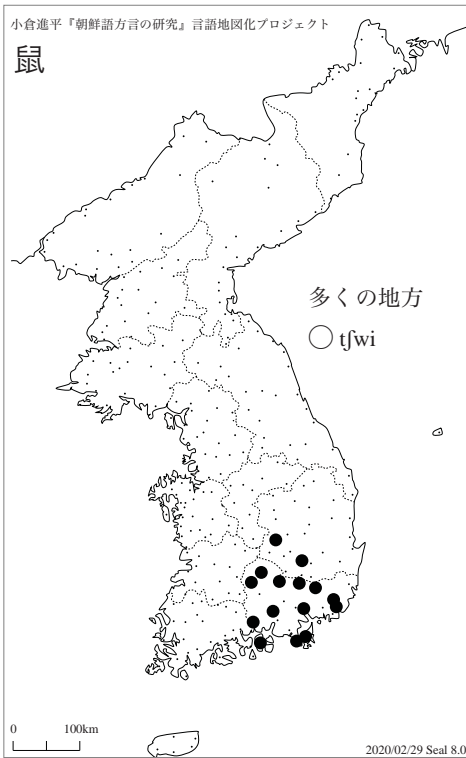
³³ tʃwi には「多くの地方」と記しているのですべての地域に「○」を記した。



地図 2.28. 耳輪



地図 2.29. 蝙蝠



地図 2.30. 鼠

2.3.4. [ɔ]と[ʉ]

分析対象とした項目，語形の組み合わせ，その分布地域は，次のとおりである。

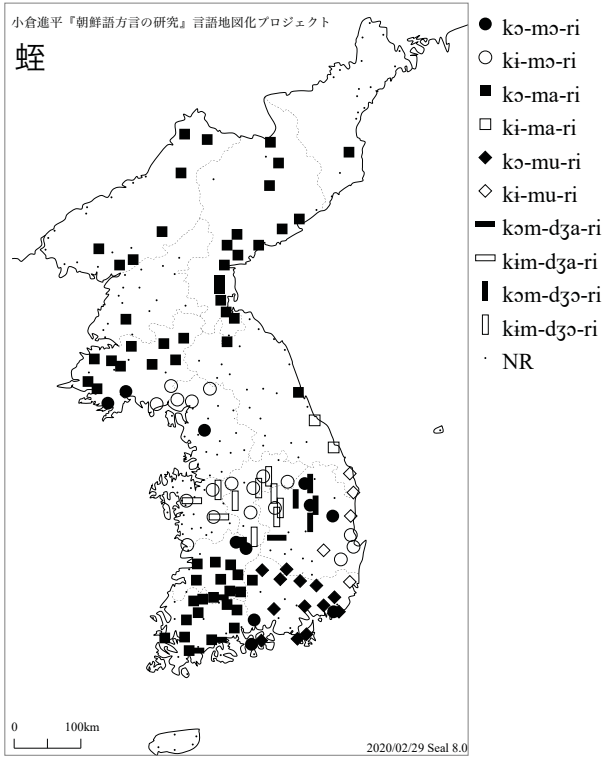
- (1) 垂氷 ko-dɔ-rim / ko-di-rim, ko-di-rɔm / ko-di-rim, ko-du-rɔm / ko-du-rim (全慶忠京江黄)
- (2) 夏 jɔ-rɔm / jɔ-rim (済全慶忠京江黄咸平)
- (3) 冬 kjo:l / kjo-il, tʃɔ-il / tʃɔl / tʃi:l, tʃɔl-gi / tʃu:l-gi (全慶忠京江)
- (4) 野原 tɔ:l / ti:l (全慶忠京江黄咸平)
- (5) 浅瀬 jɔ-ɔl / jɔ:l / jɔ-il (全慶忠京江黄)
- (6) 子の妻 mɛ-nɔ-ri / mɛ-ni-ri (全慶)
- (7) 男子・男児 mɔ-sɔ-ma / mɔ-si-ma (全慶忠江)
- (8) 巫女 si-sɔŋ / si-siŋ (黄咸平)
- (9) 牙 ɔ-gɔm-ni / ɔ-gim-ni (済慶忠京江黄咸平)
- (10) 麻製の鞋 me-tʰɔ-ri / me-tʰi-ri, mi-tʰɔ-ri / mi-tʰi-ri, mi-tʰɔl / mi-tʰil (慶)
- (11) 雑草を除く tʃi-sɔm mɛn-da / tʃi-sim mɛn-da (全慶忠咸)
- (12) 萇 pi-rɔm / pi-rim (全慶忠京江黄)
- (13) 粟 sɔ-suk / si-suk (全慶江)
- (14) 油 tʃi-rɔm / tʃi-rim (済全慶忠江)
- (15) 土 hɔl / hil, hɔk / hik / hɔk (済全慶忠京江黄咸平)
- (16) 鞆鞆 kɔ-nil / ki-nil, kɔn-ne / kin-ne (全忠京江黄平咸)
- (17) 氷滑り ɔ-rɔm tʰa-gi / ɔ-rim tʰa-gi (全慶忠江咸)
- (18) 蟹 kɔ-i / ki-i (忠京江黄咸平)
- (19) 蛭 kɔ-mɔ-ri / ki-mɔ-ri, kɔ-ma-ri / ki-ma-ri, kɔ-mu-ri / ki-mu-ri, kɔm-dʒa-ri / kim-dʒa-ri, kɔm-dʒɔ-ri / kim-dʒɔ-ri (全慶忠京江黄咸平)
- (20) 蝸牛 tʰɔl-pʰɛŋ-i / tʰil-pʰɛŋ-i (慶江)
- (21) 蚯蚓 kɔ-si-raŋ / ki-si-raŋ (全)
- (22) 軽い ke:-gɔp-ta / ke-gip-ta (全慶忠江)
- (23) 酸い si-gɔ-rɔp-ta / si-gi-rɔp-ta, si-gɔp-ta / si-gip-ta (慶忠江)
- (24) 塵 tʰi-lʰkɔl / tʰi-lʰkil (慶江)

以上のうち、「蛭」に関する語形の分布状況を図表に示すと、次のとおりである。

表 2.31. 蛭 (小倉進平 1944 上: 304-305)³⁴

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ko-mo-ri 他 ([ɔ])の語形 | △ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| ki-mo-ri 他 ([i])の語形 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |

³⁴ 濟州には ko-mo-ri の変種の ko-mol が見られるので「△」を記した。



地図 2.31. 蛭

2.3.5. [e]と[ɛ]の対立と[o]と[u]の対立

2.3.5.1. [e]と[ɛ]の対立

分析対象とした項目，語形の組み合わせ，その分布地域は，次のとおりである。

- (1) 暁 se-be / se-be (慶)
- (2) 垂氷 ko-du-re-mi / ko-du-re-mi (慶忠咸)
- (3) 崖路 pi-reŋ-i / pi-reŋ-i (咸)
- (4) 山・墓 me / mɛ, met / met, me-ʔtoŋ / mɛ-ʔtoŋ, me-ʔtoŋ / mɛ-ʔtoŋ (全慶京江黄平)
- (5) 渡船場 pɛt-sa-i / pɛt-sɛ / pɛt-sɛ (咸平)
- (6) 角 mo-tʰeŋ-i / mo-tʰeŋ-i (京江黄咸)
- (7) 外 e / ɛ, we / wɛ (済全慶忠京江黄咸平)
- (8) 子の妻 me-nɔ-ri / mɛ-nɔ-ri, me-ni-ri / mɛ-ni-ri (全慶咸)
- (9) 女 ke-dʒip / kɛ-dʒip, tʃe-dʒip / tʃɛ-dʒip (全慶忠京黄咸平)
- (10) 臉 nun-tʰeŋ-i / nun-tʰeŋ-i (忠江)
- (11) 兔唇の人 ʔtʃe-bo / ʔtʃɛ-bo, ɔt-tʰeŋ-i / ɔt-tʃɛŋ-i (全慶忠京江黄咸)
- (12) 舌 he / hɛ, se / sɛ, ʔse / ʔsɛ (済全慶忠京江黄咸平)
- (13) 頤 tʰe-a-ri / tʰɛ-a-ri (忠)
- (14) 肺臓 pʰe / pʰɛ, hɔ-pʰe / hɔ-pʰɛ (全慶忠京江黄咸)
- (15) 病 peŋ / pɛŋ (済全慶忠江咸平)
- (16) 台所 pek-ke / pek-kɛ, tʃɔŋ-dʒɛ / tʃɔŋ-dʒɛ (全咸平)
- (17) 下駄 ke-da / kɛ-da, ke-dʒa / kɛ-dʒa (済全慶忠京江黄咸)
- (18) ポケット ke-bi / kɛ-bi (慶)
- (19) 木綿 me-eŋ / mɛ-eŋ (慶)
- (20) 麻製の鞋 me-tʰɔ-ri / mɛ-tʰɔ-ri (慶)
- (21) 麻布 pe / pɛ (済全慶忠京江黄咸平)
- (22) 簪 pi-ne / pi-nɛ (済全慶忠江黄咸平)
- (23) 肉魚 ke-gi / kɛ-gi, kwe-gi / kwe-gi (済全慶忠黄咸)
- (24) 鍬 ʔkeŋ-i / ʔkɛŋ-i, ʔkweŋ-i / ʔkweŋ-i (全慶忠黄)
- (25) 蓑 to-reŋ-i / to-reŋ-i (全慶忠江)

- (26) 篩 t^he / t^hε (濟全慶忠京江黃咸平)
- (27) 箕 t^heŋ-i / t^hεŋ-i (全慶忠江)
- (28) 榛の実 ke-am / kε-am (慶黃)
- (29) 山葡萄 mɔ-re / mɔ-rε (慶黃)
- (30) 甘藷 kam-dʒe / kam-dʒε (濟全)
- (31) 蕎麥 me-mul / mε-mul, me-mil / mε-mil (全慶忠京江黃咸)
- (32) 黃瓜 e / ε, we / wε, mu-re / mu-rε (濟全慶忠江咸平)
- (33) 砂 mo-se / mo-sε (全慶忠咸平)
- (34) 鉄・金 se / sε, ?se / ?sε, swe / swe, ?swe / ?swε (濟全慶忠京江黃平)
- (35) 鋏 kaŋ-e / kaŋ-ε, ka-we / ka-wε (慶黃平)
- (36) 糊刷毛 kwe-al / kwε-al (全京)
- (37) 鏡 men-gɔŋ / mɛn-gɔŋ, sek-kaŋ / sɛk-kaŋ (慶)
- (38) 木枕 t^he-tʃ^hi-mi / t^hε-tʃ^hi-mi, mok-te-gi / mok-tɛ-gi (慶咸)
- (39) 硯 pe-ru / pε-ru, pe-ro / pε-ro, pe-ri / pε-ri (濟全慶忠京江黃咸平)
- (40) 綿線車 ?se-gi / ?sε-gi, ?swe / ?swε, swe-gi / swe-gi, ?swe-gi / ?swε-gi, ?si-e-gi / ?si-ε-gi (慶忠江黃)
- (41) 抽斗 ?pe-da-dʒi / ?pε-da-dʒi, ?pe-ram / ?pε-ram, ?pe-rap / ?pε-rap, ?pe-bi / ?pε-bi
(全慶忠京江黃咸平)
- (42) 箸 tʃe / tʃε, tʃe ʔka-rak / tʃε ʔka-rak, tʃe ka-tʃ^hi / tʃε ka-tʃ^hi, tʃe-bɔm / tʃε-bɔm, tʃe-bum / tʃε-bum
(濟全慶平)
- (43) 票 p^he / p^hε (濟全忠江咸平)
- (44) 火爐 hwa-re / hwa-rε (黃平)
- (45) 胡燕 k^hal tʃe-bi / k^hal tʃε-bi (慶江)
- (46) 嘴 tʃu-deŋ-i / tʃu-deŋ-i (忠江)
- (47) 籬 peŋ-a-ri / pεŋ-a-ri (慶忠江咸平)
- (48) 貓 kwe-neŋ-i / kwε-neŋ-i, kweŋ-i / kwεŋ-i, kwi-eŋ-i / kwi-εŋ-i, kɔ-de-gi / kɔ-de-gi
(全慶忠京江黃平)
- (49) 鬣 kal-ge / kal-gε, mo-re-gi / mo-rε-gi (慶咸)
- (50) 狐 je-su / jε-su (慶)
- (51) 蟹 ke / kε, kwe / kwε (全慶忠京江黃咸)

- (52) 鰕 swe-bi / swe-bi (慶)
- (53) 鰯 me-rɛ-tʃʰi / mɛ-rɛ-tʃʰi, me-rɔ-tʃʰi / mɛ-rɔ-tʃʰi, me-ri-tʃʰi / mɛ-ri-tʃʰi (慶忠江)
- (54) 鮎 in-e / in-ɛ (全慶)
- (55) 鱒 kum-beŋ-i / kum-beŋ-i (済全慶忠京江黄咸平)
- (56) 蚕 nu-e / nu-ɛ, nuŋ-e / nuŋ-ɛ, nu-we / nu-we (済全慶忠京江黄咸平)
- (57) 蚤 pe-rɔk / pɛ-rɔk, pe-re-gi / pɛ-re-gi, pe-rok / pɛ-rok, pe-ruk / pɛ-ruk (済全慶忠江咸)
- (58) 蚯蚓 tʃi-rɛŋ-i / tʃi-rɛŋ-i (済慶忠京江黄咸平)
- (59) 酸い se-gu-rɔp-ta / sɛ-gu-rɔp-ta (慶)
- (60) 痩せる e-bi-da / ɛ-bi-da, je-bi-da / je-bi-da, pʰe-ra-da / pʰɛ-ra-da (慶江平)
- (61) 誦んずる e-un-da / ɛ-un-da (済慶江)
- (62) 僅かに ke-u / kɛ-u, tʃɛ-go / tʃɛ-go, tʃɛ-gu / tʃɛ-gu, tʃɛ-wa / tʃɛ-wa, tʃɛ-u / tʃɛ-u (済全慶忠江咸)
- (63) 尖れるさま ʔpe-dʒok / ʔpɛ-dʒok, ʔpe-ʔtʃok / ʔpɛ-ʔtʃok, ʔpe-ʔtʃuk / ʔpɛ-ʔtʃuk (全慶忠江咸)
- (64) 別に pel-lo / pel-lo (済全慶忠江黄咸平)
- (65) 経営 keŋ-jɔŋ / keŋ-jɔŋ (全慶忠江咸平)
- (66) 回答 he-dap / hɛ-dap, hwe-dap / hwɛ-dap (済全慶忠京江黄咸平)

以上のうち、「下駄」、「鱒」、「蚕」、「篩」に関する語形の分布状況を図表に示すと、次のとおりである。

表 2.32. 下駄 (小倉進平 1944 上: 137-138)

| | 济州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ke-d(ʒ)a | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| kɛ-d(ʒ)a | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 2.33. 鱒 (小倉進平 1944 上: 322-323)³⁵

| | 济州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| kum-beŋ-i | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | | ○ |
| kum-beŋ-i | | | | | ○ | | | | | | | | | |

³⁵ 咸北には kum-beŋ-i の変種の kum-be, kum-be-dʒi が見られるので「△」を記した。平南には kum-buŋ-i が見られる。

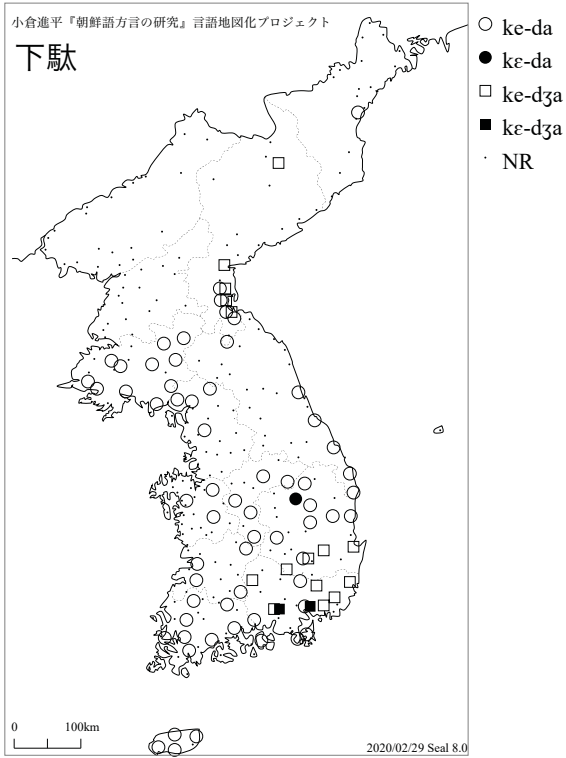
表 2.34. 蚕 (小倉進平 1944 上: 324-325)³⁶

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| nu(ŋ)-e nu-we | ○ | ○ | △ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ |
| nu(ŋ)-ε nu-weε | | | | | ○ | | ○ | | ○ | | | | | |

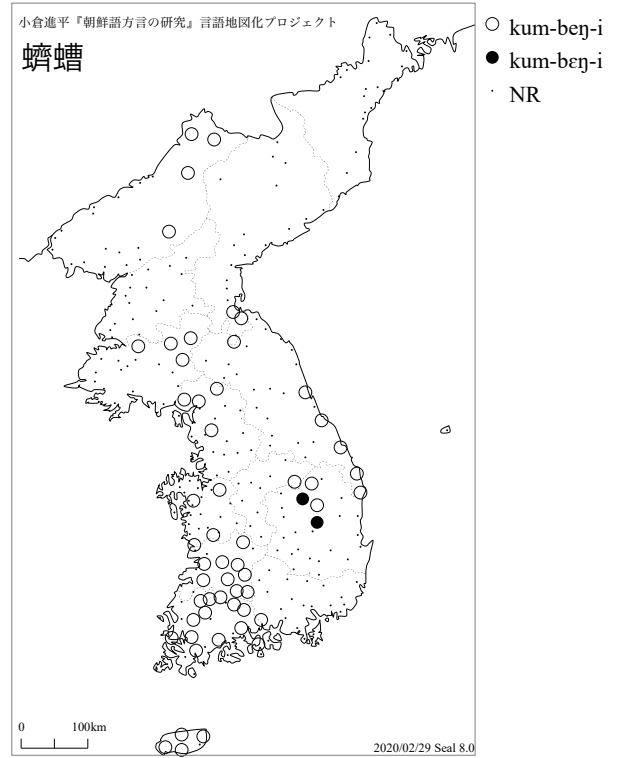
表 2.35. 篩 (小倉進平 1944 上: 179)

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| tʰe | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | |
| tʰε | | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |

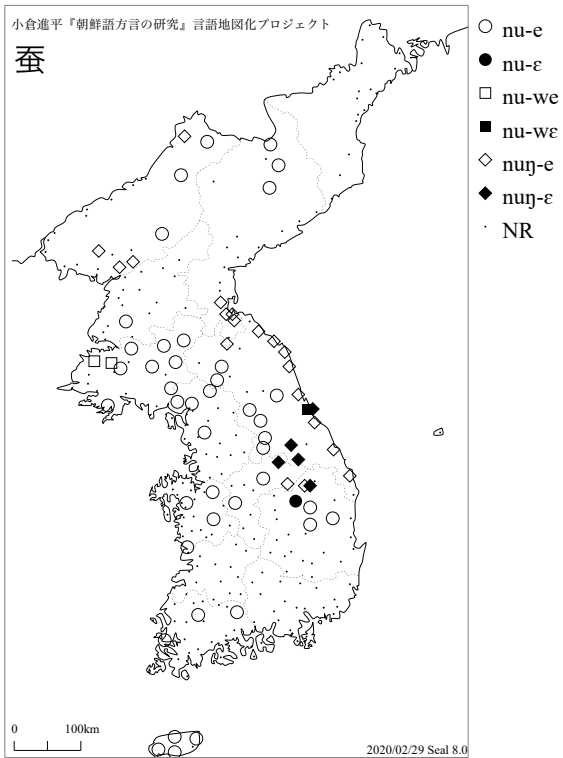
³⁶ 全北には nu-e の変種(前舌母音化)の nwi-e が見られるので「△」を記した。慶南には nŋi, ni:, ni-ii などが、咸北には nu-be が見られる。



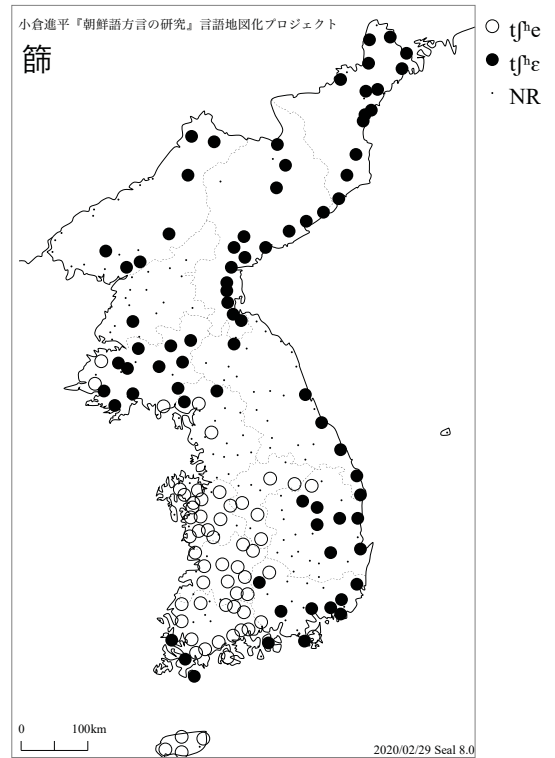
地図 2.32. 下駄



地図 2.33. 蟻螯



地図 2.34. 蚕



地図 2.35. 篩

2.3.5.2. [o]と[u]の対立

分析対象とした項目、語形の組み合わせ、その分布地域は、次のとおりである。

- (1) 夕焼 no:-ri / nu:-ri (江咸)
- (2) 垂水 ko-dzo-rɔ-mi / ko-dzu-rɔ-mi (咸)
- (3) 小川 kɛ-gol / kɛ-gul, kɛ-ol / kɛ-ul, kɛŋ-gol / kɛŋ-gul, kɛ-gol-tʰaŋ / kɛ-gul-tʰaŋ (全慶京江黄咸平)
- (4) 角 mo-tʰoŋ-i / mo-tʰuŋ-i (済黄平)
- (5) 頬 pol-to-ga-dzi / pol-tu-ga-dzi, pol-tʰo-ga-dzi / pol-tʰu-ga-dzi (咸)
- (6) 唇 ip-sol / ip-sul, ip-so-gu-ri / ip-su-gu-ri (全慶忠京江黄咸平)
- (7) 臍 pɛ-ʔkop / pɛ-ʔkup (全忠京江黄咸平)
- (8) 柱 ki-don / ki-duŋ, tʃi-don / tʃi-duŋ (済全慶忠京江黄咸平)
- (9) 煙出し kul-mok / kul-muk (咸平)
- (10) 笠子 kal-mo / kal-mu (全慶江咸)
- (11) 木履 na-mok-kɛ / na-muk-kɛ, na-mok sin / na-muk sin (全慶忠咸)
- (12) 靴下 po-son / po-sun (全)
- (13) 石鹼 pi-no / pi-nu (済全慶忠京江黄咸)
- (14) 蓑 to-rɛŋ-i / tu-rɛŋ-i (全慶忠)
- (15) 蕾 ʔkot po-dii / ʔkot pu-dii, ʔkot soŋ-o-ri / ʔkot suŋ-o-ri (全咸)
- (16) 棗の実 tɛ-tʰo / tɛ-tʰu (済全慶忠京江黄咸平)
- (17) 菱の実 mol-bam / mul-bam (全慶)
- (18) 桃 pok-so-a / pok-su-a, pok-soŋ / pok-suŋ, pok-soŋ-ge / pok-suŋ-ge (済全慶忠咸)
- (19) 李の実 tʃa-do / tʃa-du (全京)
- (20) 甘藷 ko-go-mɛ / ko-gu-mɛ (全慶江咸)
- (21) 稻 na-rok / na-ruk (済慶京江黄)
- (22) 露葵 a-ok / a-uk (全慶忠京江黄平)
- (23) 牛蒡 u-boŋ / u-buŋ (全慶江咸)
- (24) 玉蜀黍 ok-so-si / ok-su-si (全)
- (25) 馬槽 ku-soŋ / ku-suŋ (江咸)
- (26) 糊刷毛 pʰul ʔko-bal / pʰul ʔku-bal (咸)

- (27) 窠斂 ?to-a-ri / ?tu-a-ri (忠京黄)
- (28) 木枕 mok-to-gi / mok-tu-gi (咸平)
- (29) 硯 pe-ro / pe-ru, pɛ-ro / pɛ-ru, pi-ro / pi-ru (全慶忠京江黄咸平)
- (30) 抽斗 ?pɛ-do-ri / ?pɛ-du-ri (全)
- (31) 箸 tʃɔ-bum / tʃɔ-bom (全忠)
- (32) 火爐 hoa-ro / hoa-ru (慶忠京黄咸)
- (33) 鷺(1) tok-so-ri / tuk-su-ri, ?tok-su-ri / ?tuk-su-ri (済全慶忠京江黄咸平)
- (34) 鷺(2) tok-so-ri / tok-su-ri (済全慶忠京江黄咸平)
- (35) 雲雀 no-go-dʒo-ri / no-gu-dʒo-ri / no-gu-dʒu-ri, no-go-dʒi-ri / no-gu-dʒi-ri (全慶忠江)
- (36) 龜 kɔ-bok / kɔ-buk (済全慶忠京江黄咸)
- (37) 狐 jɔ-ho / jɔ-hu (慶忠)
- (38) 鰈 se-o / se-u, seŋ-o / seŋ-u (済全慶忠京江黄咸平)
- (39) 蚤 pjɔ-rok / pjɔ-ruk, pe-rok / pe-ruk, pɛ-rok / pɛ-ruk, pi-rok / pi-ruk (済全慶忠京江)
- (40) 軽い ke-gop-ta / ke-gup-ta (全慶忠江咸)
- (41) 僅かに tʃɛ-go / tʃɛ-gu, tʃɛ-go / tʃɛ-gu (慶咸)
- (42) 却って to-ro-hjɔ / to-ru-hjɔ, tɔ-ro / tɔ-ru (全慶忠江黄咸)
- (43) 尖れるさま ?pjo-dʒok / ?pjo-dʒuk, ?pɛ-dʒok / ?pɛ-dʒuk, ?pɛ-?tʃok / ?pɛ-?tʃuk, ?pɛ-?tʃok / ?pɛ-?tʃuk, ?po-dʒok / ?po-dʒuk, ?pɔ-dʒok / ?pɔ-dʒuk, ?pit-?tʃok / ?pit-?tʃuk (全慶忠京江黄咸平)
- (44) 別に pel-lo / pel-lu (済全慶忠江黄咸平)
- (45) 塵 mon-dʒi / mun-dʒi (済全慶忠京江黄咸)

以上のうち、「鷺(1)」、「尖れるさま」、「別に」、「唇」、「龜」に関する語形の分布状況を図表に示すと、次のとおりである。

表 2.36. 鷺(1)(小倉進平 1944 上: 273-274)

| | 济州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|--------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| (?)tok-su-ri | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| (?)tuk-su-ri | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 2.37. 尖れるさま (小倉進平 1944 上: 486-487)³⁷

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-------------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ʔpjo-dʒok 他 ([o]の語形) | △ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | ○ |
| ʔpjo-dʒuk 他 ([u]の語形) | | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |

表 2.38. 別に (小倉進平 1944 上: 489-490)³⁸

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| pel-lo | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | △ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | ○ |
| pel-lu | | | | | | | | | | | ○ | | | |

表 2.39. 唇 (小倉進平 1944 上: 89-90)³⁹

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----------------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ip-sol ip-so-gu-ri | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | | | | | | |
| ip-sul ip-su-gu-ri | | | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | ○ | ○ |

表 2.40. 亀 (小倉進平 1944 上: 285-286)⁴⁰

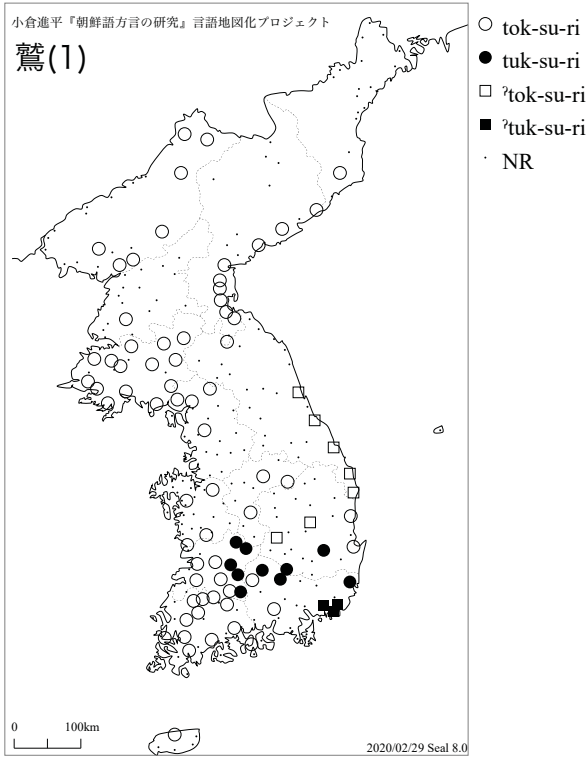
| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ko-bok | | ○ | | | | | | | | | | | | |
| ko-buk | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | △ | △ |

³⁷ 済州には非語頭音節の母音が[o]の po-ʔfok が見られるので「△」を記した。

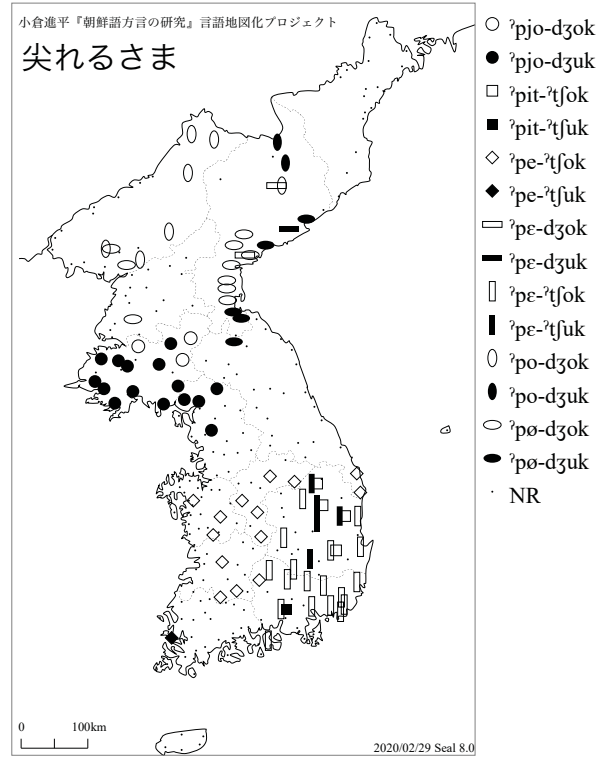
³⁸ 京畿・平南には pel-lo の変種の pjo-llo が見られるので「△」を記した。

³⁹ 咸北には ip-sul の変種(主格形ないし接辞添加形)の ip-sul-gi, ip-su-gu-ri の変種の ip-su-bu-ri が見られるので「△」を記した。済州には ip-pa-wi が、忠南には ip-sol が見られる。

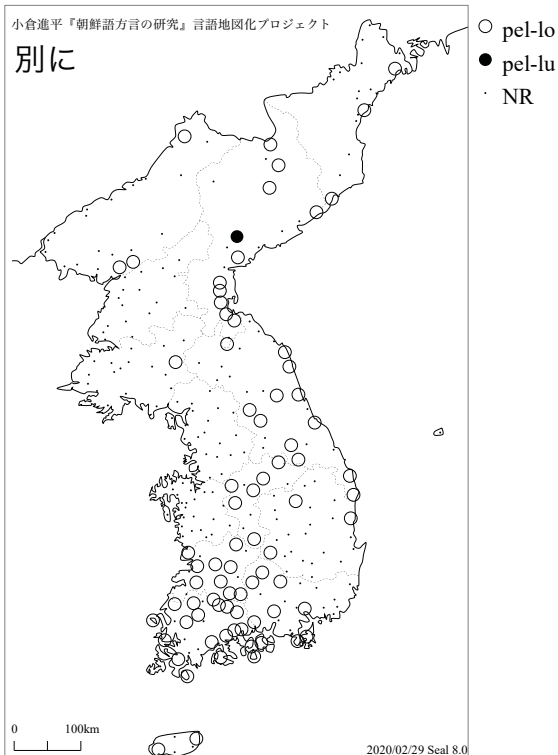
⁴⁰ 平南・平北には ko-buk の変種(主格形ないし接辞添加形)の ko-bu-gi が見られるので「△」を記した。



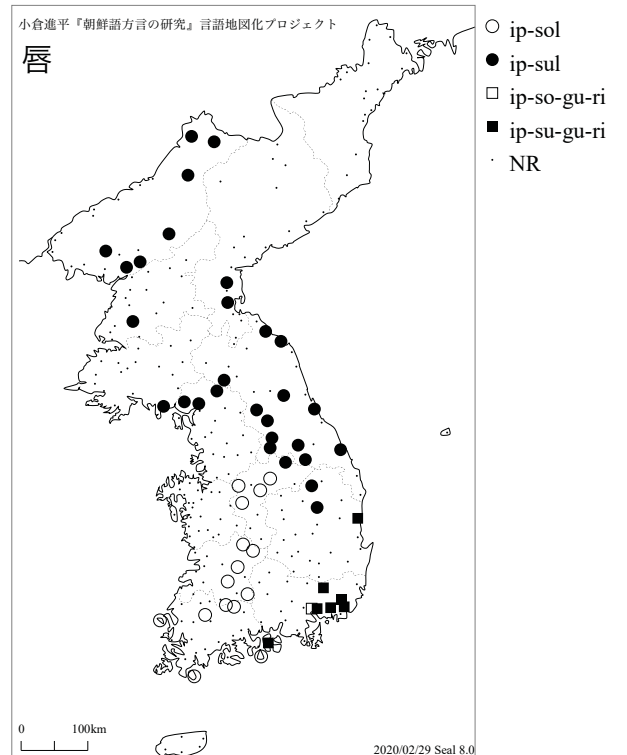
地図 2.36. 驚(1)



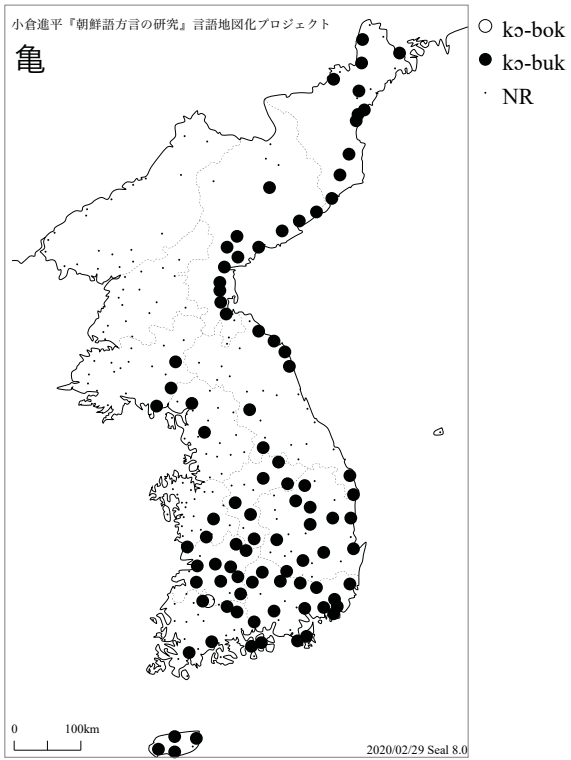
地図 2.37. 尖れるさま



地図 2.38. 別に



地図 2.39. 唇



地図 2.40. 龜

2.4. 考察

2.4.1. [ʌ]と[œ]

2.4.1.1. [ʌ]

2.3.1.1節で示した「村落」、「臂」、「小豆」、「馬」、「蠅」、「年長の」、「速やかに」、「腎臓」、「粉」、「鋏」に関する語形の分布状況から次のような母音の地域的特徴が分かる(表 2.1~2.10, 地図 2.1~2.10)。

- [ʌ] : 濟州
- [a] : 濟州を除く全道
- [o](頭子音が両唇音[p^h], [p], [m]のとき) : 全羅, 慶南, 咸鏡

以上の項目では, 該当する母音が語頭音節に位置し(ただし, 「腎臓」は複合語の後部要素の語頭音節), 濟州で[ʌ]が現れる。この母音は‘・’の発音と関わりがあるものであるが, 濟州では非語頭音節より語頭音節で顕著に‘・’に対応する母音を保存している(李崇寧 1954a: 279-290, 玄平孝 1963: 630-632, 鄭承喆 1995: 18-53)。よって, 濟州で語頭音節の‘・’に対応するような母音が[ʌ]として現れているという結果は先行研究の見解に一致している。

また, 15世紀から16世紀に非語頭音節で‘・’>‘一’, ‘・’>‘ㅓ’の変化が, 18世紀後半以降に語頭音節で‘・’>‘ㅓ’の変化が起きた(李基文 1972: 117-122)。よって, 濟州以外を除く全道で[a]が現れているという結果も先行研究の見解に一致している。

頭子音が両唇音のときに[o]が現れていることについては次のように解釈できる。[o]が現れている全南, 全北(南部), 慶南(南部), 咸南(北部), 咸北(北部)では両唇音後であってももともとは[o]ではなく[ʌ]で発音していたと仮定すると, これらの地域で両唇音後に[o]が現れることは両唇音後で[ʌ]>[o]の変化が生じたことを示唆する。白斗鉉(1992a)は‘・’>‘ㅓ’の変化とその分布について考察している。地域的な特徴については, たとえば, 全南南部では両唇音後の‘・’で[ʌ]>[o]に変化し, 全南北部では先行子音に関係なく[ʌ]>[ə]または[ʌ]>[a]に変化した(이기갑 1986: 56-60)。15世紀から16世紀の非語頭音節での‘・’>‘ㅓ’の変化, 17世紀初の‘ㅁ매’>‘소매’(袖)の変化などの例も見られる(李基文 1972: 117-122)。よって, 全羅, 慶南, 咸鏡で両唇音後では[o]が現れているという地域的特徴および両唇音後で[ʌ]>[o]のように変化したという考察は, 先行研究の見解に一致している。なお, 変化の時期については全南などの[ʌ]>[o]の変化が複数

の単語で見られること、語頭音節であること、両唇音後であることから 18 世紀後半以降の語頭音節での‘ㄷ’>‘ㄷ’([ʌ]>[a])の変化と同じ時期に起きたのではないかと考えられる。

これらの項目のほか、たとえば、「土」では[ʌ]が済州に、[ɨ]が済州以外の地域に現れている(小倉進平 1944 上: 223–224)。この発音も‘ㄷ’と関わりがあり、語頭音節での‘ㄷ’>‘ㄷ’の変化の例外として 16 世紀末の‘ᄃᆫ’>‘ᄃᆫ’(土)や 17 世紀初の‘ᄃᆫ’>‘ᄃᆫ’(袖)などが知られている(李基文 1972: 120)。よって、「土」の母音の分布は文献上の記録から説明できる。また、「頤」では[ʌ]が済州に、[ɛ], [ɔ]が済州以外の地域に現れている(小倉進平 1944 上: 94–95)。 $[ɛ]$ が全羅, 慶尚, 江原, 咸鏡に現れているが、文献上の記録から‘ᄃᆫ’>‘ᄃᆫ’(頤)が確認できるのでこの $[ɛ]$ は‘ㄷ’の名残であると考えられる。一方、 $[ɔ]$ が忠清, 京畿, 黄海に現れているが、この $[ɔ]$ については考慮の余地がある。

2.4.1.2. [œ]

次に、済州に見られる $[œ]$ について考察する。この $[œ]$ は小倉進平(1944)ではもともと $[ø]$ と転写されているものであるが、本論では福井玲(2016: 48)に従って $[œ]$ で転写している。福井玲(2016: 47–49)は小倉進平(1931a, 1931b)の記述などから小倉進平(1944)で‘ㄷ’に対応する済州の母音を IPA の $[œ]$ (より正確には $[œ̃]$)に近いと見ており、ここから円唇性を失って $[e]$ になった可能性を論じている。

小倉進平(1944)所載資料で $[œ]$ が見られる語形がある項目は、2.3.1.2 節で挙げたように、「肝」, 「笠子」, 「ポケット」, 「菱の実」, 「蝸牛」, 「煙」である。いずれの項目でも済州で $[œ]$ が現れていることが特徴である。

以上の項目のうち、「笠子」では済州で $[e]$ が確認される。済州では‘ㄷ’に由来する母音が $[e]$ で発音されている(玄平孝 1964: 20–25)。このことから考えると、済州において「笠子」の語形の中に $[e]$ が現れていることは先行研究の見解に一致している。ただし、「笠子」で $[e]$ が現れているところは主格形または接辞添加形の‘ㄷ’(‘ㄷ’+‘ㄷ’)のような環境下であり、こうした点が「笠子」以外の項目とは対照的である。この「笠子」の例は主格形または接辞添加形のような環境から先に済州で‘ㄷ’の発音が $[e]$ になったということを示しているのかもしれない。これには語頭音節ではないことや音節末位置であることも関与しているものと思われる。

また、済州以外の地域では済州で $[œ]$ が現れたところに $[e]$ が現れていることも分かる。済州以外では‘ㄷ’>‘ㄷ’の変化が一般的であるので(李基文 1972: 122–123), 済州以外の地域では $[e]$ が現

れているということは先行研究の見解に一致している。

2.4.2. [jo]と[e]

語頭音節での[jo]と[e]の現れ方には次のような特徴が観察される。

第一に、後期中世語の上声に由来するような「星」と「病」の項目では[jo]が全道的に現れているのが特徴である(表 2.11, 2.12, 地図 2.11, 2.12)。[e]は済州, 全羅, 慶尚, 忠北, 江原, 咸鏡, 平安に現れているが, いずれの地点でも[jo]と併用されている。[jo]と[e]を併用する地点や[jo]と[e]が混在する地域が見られるのは, 綴りを意識させるなどの調査の仕方に由来するか, [jo]と発音する者もいれば[e]と発音する者もいるという個人差に由来するかということによるものと思われる。また, [e]が慶尚に見られる。

第二に, (上声には由来しない)漢字語の項目, 「別に」と「経営」では[jo]が済州, 全南, 慶尚, 京畿, 江原, 黄海, 咸鏡, 平安に, [e]が全羅, 慶尚, 忠北, 江原, 黄海, 咸鏡, 平安に現れており, 全南, 慶尚, 江原, 黄海, 咸鏡, 平安で[jo]と[e]が混在している(表 2.13, 2.14, 地図 2.13, 2.14)。[jo]も[e]も全道的に現れるが, 後期中世語の上声に由来するような「星」と「病」の項目よりも[jo]の分布域が狭い。特に全羅や忠北において基本的に[e]が現れている点が「星」と「病」の項目とは対照的である。また, [e]が慶尚に見られる。この点については「星」や「病」の場合と同様である。

第三に, (上声には由来しない)固有語の項目である「子の妻」, 「硯」, 「雛」, 「蚤」では項目間で調査地点や分布にばらつきが見られるが, [jo]が全南, 慶南, 忠清, 京畿, 江原, 黄海, 咸鏡に現れているのに対し, [e]が全道的に分布する傾向がある(表 2.15~2.18, 地図 2.15~2.18)。全南, 慶南, 忠清, 京畿, 江原, 黄海, 咸鏡では[jo]と[e]が混在している。[jo]が黄海とそのほかの一部地点にのみ現れ, [e]が全道に現れている点がこれまでに考察した上声由来の「星」, 「病」や漢字語の「別に」, 「経営」とは対照的である。また, [e]が全南と慶尚に見られる。

このように語頭音節では声調や語種により[jo]と[e]の現れ方が異なっている。つまり, 上声由来の項目(星, 病)では[jo]が全道的に現れ, [e]が[jo]と併用されていたり混在していたりする。非上声由来の漢字語の項目(別に, 経営)では[jo]も[e]も全道的に現れるが, 上声由来の項目よりも[jo]の分布域が狭くなり, 特に全羅や忠清では上声由来の項目で[jo]または[jo]と[e]が現れるのに対し, 非上声由来の漢字語の項目では[e]が主に現れている。非上声由来の固有語の項目(子の妻, 硯, 蚤)では[e]が広く現れており, [jo]が黄海とそのほかの一部地点にのみ現れている。

次に、非語頭音節の場合を考察する。「鏡」では‘석경’(石鏡)や‘면경’(面鏡)のような漢字語の非語頭音節の母音に関し、調査されている地点においては[jɔ]が全道的に現れており、[e]が全羅、慶南、江原に見られる(表 2.19, 地図 2.19)。同じ漢字語の項目であっても、全羅などに[jɔ]が現れていることが語頭音節を対象とした「別に」や「経営」とは異なっており、むしろ上声由来の「星」や「病」と地理的特徴が似ている。「簪」は現代語の‘미녀’にあたる項目である。この項目では固有語の非語頭音節の母音に関し、[jɔ]が忠北に、[e]が全南、慶北、平北に現れているが、[e]が全道的に見られるのが特徴である(表 2.20, 地図 2.20)。これは単語史によるものと考えられる⁴¹。

このほかに気がついたことを若干述べると、「女」は綴りが‘겨집’>‘계집’のように変化した項目であるが、[je]が京畿、咸北、平安に現れているのが特徴である(小倉進平 1944 上: 65–67)。「蟹」は後期中世語の発音(上声)に由来する k(w)ɔ-i のような語形が京畿、江原、黄海、咸南、平北に現れている。「蚕」は固有語であるが、非語頭音節で[e]の変種に[jɔ]が全北や忠南に現れている(小倉進平 1944 上: 303–304)。

最後に、[jɔ]と[e](または[ɛ])との対立ではないが、その調査過程で気づいたことなどについて、2.3.2節で挙げたような二重母音や母音連続と[e](または[ɛ])との対立がある項目から述べてみる。まず、[ja]と[jɔ], [e], [ɛ]との対立や[je](または[jɛ])と[jɔ], [e], [ɛ]との対立がある項目が見られた。また、[ɔi(jɔ)]と[e]および[ai(aj)]と[e]の対立を示す項目も見られるが、その多くは語末に接辞‘-i’などが添加されたものであった。接辞‘-i’の添加によるものではないような場合については該当する項目が少なく、語形が分布する地点も多くないので、これ以上考察することは困難である。

2.4.3. [ø]の発音の地域差と[wi]の発音の地域差

小倉進平(1944)や韓国精神文化研究院編(1987–1995)にもとづく言語地図から[ø]や[wi]の発音の地域差を考察した論考には鄭仁浩(2013)や최성균(2013)がある⁴²。以下の議論はこうした先行

⁴¹ 「簪」の現代語‘미녀’に対し、後期中世語には‘민녀’という語形が確認されるが、‘민녀’の‘ㅁ’の発音が小倉進平(1944)の母音に反映されていないと考えられる。この点に関し、全恵子(2018)では語形に pi-na や pi-no が記録されていることや「簪」の古語に‘민녀’が見られることから「pi-ne は pi-na に接尾辞が付いて pi-ne へ変化したものか、あるいは、狭い母音の/aが広い母音の/aに交替して接尾辞が付いたものかは判別し難い」(全恵子 2018: 30–31)のように pi-ne は pi-na に由来すると解釈している。この指摘のとおり、pi-na に接辞‘-i’がついたり pi-na の非語頭音節で前舌母音化を起こしたりしたため[e]ではなく[ɛ]が広く現れているのであろう。

⁴² 鄭仁浩(2013)は‘쇠’(鉄・金)と‘마’(麻布)の言語地図から母音の地理的分布を示し、既存論考を参照して‘외야’

研究と部分的に重なるが、本論では朝鮮半島全道について検討することや声調が上声であった項目、前舌母音化が記録される項目などについても考察することなど、先行研究よりは視点を広げながら議論する⁴³。

2.4.3.1. [ø]の発音の地域差

まず、「外」,「鉄・金」,「誦んずる」,「回答」における[ø]の発音の地域差をまとめると次のとおりである(表 2.21~2.24, 地図 2.21~2.24)。なお、これらの項目において[ø]に対応する綴りは‘ㅅ’である。

- [ø] : 全羅, 慶北, 忠清, 京畿, 江原, 黄海, 咸鏡, 平安
- [we] : 济州, 全南, 慶尚, 忠清, 京畿, 江原, 咸鏡
- [e] : 济州, 全南, 慶尚, 忠清, 江原, 黄海, 咸北
- [wɛ] : 慶尚, 咸北, 平安
- [ɛ] : 全南, 慶尚, 咸鏡, 平安
- [wi] : 慶尚, 忠北
- [i] : 慶尚

以上を地域ごとの特徴に書き換えると次のとおりである。

- | | |
|---|-----------------------------|
| ● 济州 : [we], [e] | ● 忠南 : [ø], [we], [e] |
| ● 全南 : [ø], [we], [e], [ɛ] | ● 忠北 : [ø], [we], [e], [wi] |
| ● 全北 : [ø] | ● 京畿 : [ø], [we] |
| ● 慶南 : [we], [e], [wɛ], [ɛ], [wi], [i] | ● 江原 : [ø], [we], [e] |
| ● 慶北 : [ø], [we], [e], [wɛ], [ɛ], [wi], [i] | ● 黄海 : [ø], [e] |

連鎖の発音の地域差も言及し、方言分化の様相を等語線から示している。최성규(2013)は‘외’(外), ‘왼손’(左手), ‘쇠’(鉄・金), ‘고기’(肉魚), ‘귀’(耳), ‘박귀’(蝙蝠), ‘까마귀’(烏), ‘바위’(岩)の言語地図から音変化や地域差を考察している。

⁴³ 筆者自身も拙稿(2017a, 2019a, 2019b)で[ø]や[wi]の発音の地域差を分析している。本節の内容はそうした拙稿の内容にもとづきつつ、分析し直したり本論の内容に合うように書き改めたりしたものである。

- 咸南：[ø], [we], [ε]
- 咸北：[ø], [we], [e], [we], [ε]
- 平南：[ø], [we], [ε]
- 平北：[ø], [we], [ε]

以上より、[ø]が朝鮮半島の西南から東北に現れることが分かる。「誦んずる」を除き京畿の開城周辺では[we], [ε]が現れている。全南、忠清、江原、咸南では[ø]のほかに[we], [ε]も現れている。[ø]が現れにくい地域においては済州で[we], [ε]、慶尚で(多くの地域で[e]と[ε]の区別がないとみて)[we(we)], [e(ε)], [wi], [i]、咸鏡で(一部の地域で[e]と[ε]の区別がないとみて)[we(we)], [e(ε)], 平安で[we], [ε]が現れており、済州では決して[ø]が見られないことと平安ではほかの地域と異なり(非円唇前舌)半広母音が現れていることが特徴である。平安で半広母音が現れていることと関連して、福井玲(2017b)では「鉄・金」は中世語や現代のいくつかの方言で「錠／鍵」と同音異義語であることや平安に見られる swe が「鎖」の現代語の字音‘썰’(swe)と同じであることなど、興味深い指摘をしている。なお、平安において「外」には[we], [ε]が、「回答」の「回」の部分には[hwe], [he]が記録されているが、中世語におけるそれぞれの字音は上声の[oi(oj)], 去声の[hoi(hoj)]である(中世語の字音については伊藤智ゆき(2007)による)。また、「麻布」や「黄瓜」のような固有語においても中世語の[oi(oj)]に由来する部分が平安では半広母音となっている。ほかの地域とは異なり、平安でのみ半広母音が現れている理由を説明するのは難しいが、以上のようなことは関連があるものと思われる。なお、第4章では若年層ソウル方言話者(2015年時点で10代後半の話者6人)の単母音で聴取実験を行ない、韓国語諸方言話者(2016年時点で平均33歳の話者11人)は[e]も[ε]もどちらも概ね五分五分の割合で[e]と[ε]で聴取するが、延辺朝鮮語話者(2016年時点で平均31歳の話者9人)は[e]と[ε]を[ε]で聴取する傾向が強いことを示した。この結果も平安で[we]や[ε]が現れていることと関係があるかもしれない。

20世紀前半の‘ㅁ’の発音の方言差について、조아람(2014)はレコード歌手の出身地に着目し、全国的にみて二重母音[we]が優勢であるが、東北地域出身者では[we]に次いで単母音[ø]も優勢(全体の4分の1程度)で、変種として西北地域で[ø], [e], [i]が、東北地域で[e]が、西南地域で[ø], [e]が、東南地域で[wi], [e], [o], [y]が現れているとしている。本論の結果と조아람(2014)の結果を比べると、小倉進平(1944)所載資料では[ø]の分布地域が広いことや平安で[we], [ε]が現れていることなどといった本論の結果は조아람(2014)の結果と一致しないが、それ以外では両者の結果は概ね一致する。

地域差・方言差を検討したものではないが、中部方言の音声資料から‘ㅁ’の発音を調べた論

考によると、単母音[ø]と二重母音[we]が共存する、語頭では二重母音[we]が実現しやすく、語中では[e]が確認できる傾向がある(韓成愚 2005, 김봉국 2006, 차재은 2007)。こうしたことは本論の結果についても同様である。

次に、「麻布」、「山・墓」、「黄瓜」について考察する(表 2.25~2.27, 地図 2.25~2.27)。これらの項目は後期中世語の‘ㅁ’に由来する発音に[ø]などが現れているものである。「麻布」と「山・墓」は頭子音が両唇音で‘ㅁ’>‘ㅂ’の変化を経た項目であるが、ともに二重母音が現れないという特徴がある。「山・墓」と「黄瓜」は後期中世語の上声に由来するものであり、[oi(oj)]が現れている。

「麻布」では[e]が全道的に現れている。全羅や慶尚の多くの地域では[e]と[ɛ]の区別がないとみて[e]で記録していると考えられるが、平安では[e]のみが現れているのは先ほど考察した「外」、「鉄・金」、「回答」と同様である。

「山・墓」では[ø]が先ほど考察した項目(外, 鉄・金, 誦んずる, 回答)と同じ分布域から全南や京畿の一部を除いた地域に現れている。全南や京畿の一部を除いた地域では「麻布」のように[e]が現れている。平北では([ɛ]ではなく)[e]が現れている⁴⁴。

「黄瓜」では[oi(oj)]の分布域が「山・墓」より広い。忠南には[ui(uj)]が見られるが、これは非語頭音節での[o]>[u]の変化や mu-rwi から語頭の mul(水)が脱落したことなどによるものだろう。[oi(oj)]が見られる地域以外はこれまでに考察した項目における母音の分布と概ね一致する。

以上が 2.3.3.1 節で図表に示した項目に関する考察であり、[ø]の発音の地域差に関する主要な特徴である。以下ではこうしたこと以外に気づいたことについて考察する。「肉魚」、「角」は[o]の前舌母音化により[ø]が現れていると考えられる項目であり、両項目では[ø]が咸北などに現れている。それぞれの項目について見てみると、「肉魚」では[o]が全南, 慶尚, 忠北, 江原, 黄海, 咸北, 平安に, [ø], [we(wɛ)], [e(ɛ)], [i]が先に考察した「外」などと同じような分布域に, [oi(oj)]

⁴⁴ 유필재(2006)によると, (中部方言の変化(‘ㅁ’>‘ㅂ’)とは異なり)六鎮方言では[we]に変化したが, 両唇音後で「麻布」や‘밧도기’>‘매뚜기’のように[e]が観察されるので, 六鎮方言で‘ㅁ’を[e]と発音するのは[w]脱落によるものだという(유필재 2006: 207)。「山・墓」における平安の[e]は「外」、「鉄・金」、「誦んずる」、「回答」、「麻布」での母音[e]や유필재(2006: 207)の説明の例外であると言えるが, 一方では, ほかの地域で[e]が現れていることと同じである。「山・墓」は慶尚で me の前舌化によると思われる mi が広く現れている点が「外」、「鉄・金」、「誦んずる」、「回答」、「麻布」と対照的であり, 「山・墓」の発音の変化の時期や速さがこうした項目よりはやいとみることもできるかもしれない。また, 小倉進平(1944)の項目名では「山・墓」となっているが, 果たして調査された語が「山」を指すのか「墓」を指すのかということなども関与している可能性がある。

が「山・墓」や「黄瓜」で[oi(oj)]が見られた忠北に現れている(小倉進平 1944 上: 162–163)。「角」では[o]が済州に, [ø]が京畿, 江原, 咸北に現れているほか, 前舌母音化による‘모통이’>‘모퉁이’の変化を反映した母音や非語頭音節での‘우’>‘우’, 前舌母音化, ‘기’>‘기’による‘모통이’>‘모퉁이’>‘모퉁이’の変化を反映したと想定される母音が現れている(小倉進平 1944 上: 52–53)。

「票」, 「尖れるさま」は[jo]の変種として[ø]が現れている項目である。両項目で[jo]が京畿, 黄海に, [o]が咸南, 平北に現れているほか, 「票」では[jo]が全道的に, [ø]が「外」などの項目と同じ分布域に, [o]が慶尚, 江原, 咸鏡, 平北に現れている(小倉進平 1944 上: 260–261)。「尖れるさま」では[ø]が全羅, 咸南, 平南に, [jo]が京畿と黄海に, [o]が済州, 咸南, 平北に現れている(小倉進平 1944 上: 486–487)。こうしたことは[jo]の発音の地域的特徴を示しているが, [jo]の変種として[ø]が現れるようになった過程を解釈するのはむずかしい⁴⁵。

2.4.3.2. [wi]の発音の地域差

「耳輪」, 「蝙蝠」, 「鼠」の項目に見られる語形からは[wi]が全道的に現れていることと[i]が慶尚に現れていることが分かる(表 2.28~2.30, 地図 2.28~2.30)。これらの項目では後期中世語からの綴りが‘기’であるようなところに[wi]や[i]などが現れている。「耳輪」と「鼠」は語頭音節が, 「蝙蝠」は非語頭音節が対象である。「蝙蝠」では[u]が現れている地域もある。なお, 「耳輪」の前部要素(耳)の‘기’も「蝙蝠」の後部要素や「鼠」の‘기’も頭子音が歯茎音であり, ‘기’は非上声, ‘기’は去声または上声に由来する(한글학회 1992)。

20 世紀前半の‘기’の発音の方言差について조아람(2014)はレコード歌手の出身地に着目し, 全国的に見て二重母音[wi]が優勢であり, 変種として西北地域で[we], [y], [i], [u]が, 東北地域で[uj], [we], [y], [i]が, 西南地域で[we], [y]が, 東南地域で[we], [y], [i], [e]が現れているとしている。本論の結果と조아람(2014)の結果を比べると, 小倉進平(1944)所載資料では単母音[y]や東北地域での[uj]に相当するような[ui(uj)]が現れないという本論の結果は조아람(2014)の結果と一致しないが, それ以外については両者の結果は概ね一致している。

地域差・方言差を検討したものではないが, 中部方言の音声資料から‘기’の発音を調べた論

⁴⁵ このような変化は「学校」や「焼酎」などの項目でも確認される。[jo]>[ø]の変化について崔銓承(1986: 179–188)は j 添加による[jo]>[joj]>[øj]>[ø]のような解釈を示しているのに対し, 白斗鉉(1992b: 170–173)は倒置による[jo]>[oj]>[ø]のような解釈を示している。

考によると、単母音[y]と二重母音[wi]が共存する、語頭では二重母音[wi]が実現しやすく、語中では[i]が確認できる傾向があるという(韓成愚 2005, 김봉국 2006, 차재은 2007)。こうした指摘と小倉進平(1944)所載資料に[y]が記録されていないところとは一致しないが、[wi]と[i]が現れていることは先行研究と本論とで一致している。

以上のような先行研究からは小倉進平(1944)で単母音[y]が現れていないことに考慮の余地がある。つまり、二重母音[wi]で記録したものの中には単母音[y]であるものやそれに近いものもあった可能性や小倉進平(1944)では[wi]と[y]の違いを記述し分けていない可能性がある。前節では[ø]の発音の地域差を考察したが、そこでは単母音[ø]と二重母音[we]の両方が記録されていたことは、[y]が記録されずに[wi]が記録されていることとは対照的である⁴⁶。

以上、2.3.3.2節で図表に示した「耳輪」、「蝙蝠」、「鼠」という項目に見られる語形から[wi]の発音の地域差に関する主要な特徴を考察した。以下、こうしたこと以外に気づいたことを考察する。前節で[ø]の発音の地域差について考察した項目のうち、「外」、「回答」、「黄瓜」では慶尚に[wi]や[i]が現れている(表 2.21, 2.24, 2.27, 地図 2.21, 2.24, 2.27)。いずれも語頭音節で[we]>[wi]のような狭母音化が起きたものと思われる。

「饅頭」、「棗の実」、「杏子の実」、「鰈」は接辞'-i'により語末音節で[wi]が現れていると考えられる項目であり、これらの項目では済州と咸鏡で[wi]が現れている⁴⁷。ただし、済州においては「棗の実」で[o]が現れており、咸鏡においては[u](饅頭)や[i](棗の実)も現れている。なお、2.3.3.2節で挙げた項目や語形からは咸鏡で接辞(または語末の)-i'によって語末音節で[wi]が現れるような場合がほかの地域より顕著であり、済州や咸鏡以外の地域ではこうしたところに[u]が現れやすい。

前舌母音化や狭母音化のような音変化が関わって[wi]が現れている項目も見られる。「肉魚」では慶尚に[wi]が現れているが(小倉進平 1944 上: 162-163)、これは ko-gi の語頭音節で ko-gi>

⁴⁶ こうしたことは小倉進平(1931a)の記述からも分かる。すなわち、[ø]の発音の地域差については「此の文字も發音及び轉寫の困難なるものの一とせられて居る。(中略) 此の외(ø)音は地域によつては發音が困難で、외(we)・외(we)・애(e)・애(e)其の他に転訛することが稀でない。又此の외(ø)は済州島の외(ø(sic))と類似性を有して居るが、前者は後者に比し開口の度が狭い點に於て相違がある」(小倉進平 1931a: 147)のように記述しているのに対し、[wi]に関しては「もと u・i 両音の合した二重母音であるけれども、事実上の發音は w と i 母音との結合である場合が少くない。茲では wi と記す」(小倉進平 1931a: 147)とだけ記述している。

⁴⁷ 「饅頭」は小倉進平(1944 上: 165-166)を、「棗の実」は小倉進平(1944 上: 187-188)を、「杏子の実」は小倉進平(1944 上: 191-192)を、「鰈」は小倉進平(1944 上: 305-306)を参照している。

kø-gi または ko-gi>ko-i-gi のような変化が起きてから狭母音化が起きた(kø-gi>kwi-gi または ko-i-gi>kwi-gi)のものであろう。「角」では黄海や咸南に[wi]が現れているが(小倉進平 1944 上: 52-53), これは mo-^hoŋ-i>mo-^huŋ-i>mo-^hwiŋ-i または「肉魚」での分析と同様に考えて mo-^hoŋ-i から mo-^hoŋ-i または mo-^ho-iŋ-i を経て mo-^hwiŋ-i のようになったものと思われる。「蜀黍」では全南, 京畿, 黄海, 咸鏡, 平北に[wi]が現れているが(小倉進平 1944 上: 208-209), たとえば, [wi]が語頭音節に現れている場合については su-su>swi-su のように, [wi]が語末音節に現れている場合については su-su に接辞'-i'が添加した結果として su-swi のようになったものと思われる。

このほかにも単語史がかかわると思われる項目がいくつか見られる。「山葡萄」は音節末に [wi]や[i], [e], [ɛ]が現れているが(小倉進平 1944 上: 188-189), これはこの単語の後期中世語 'mol-uj'(mol-uj)の名残または mo-ru に接辞'-i'が添加したものであろう。「痣」も音節末に[wi]や[i]が現れているが(小倉進平 1944 上: 110-111), これは後期中世語 'sa-ma-goj'(sa-ma-goj)の第3音節で狭母音化が起きたものであろう。なお, 「痣」の語末音節母音で[u]が現れる地域を A, [wi]が現れる地域を B とすると, 朝鮮半島(済州島を除く)で ABA のような分布となっている。「妹」は [ui(uj)]や[wi]などが現れているが(小倉進平 1944 上: 62-63), これも後期中世語 'nu-ii'(nu-ii)との関わりで語末音節にこうした母音が現れているものと思われる。

2.4.4. [ɔ]と[ɨ]

本節では現代語ソウル方言の 'ㅏ' の発音について小倉進平(1944)所載資料から考察する。まず, 現代語ソウル方言の 'ㅏ' に関する先行研究を検討する。先行研究では現代語ソウル方言の 'ㅏ' の発音に関し, 短母音での [ɔ]>[ɔ], 長母音での [ɔ:]>[i:], 類推や文字からの干渉などによる長母音 [ɔ:] の出現, 長短の対立の消失による [ɔ:]>[ɔ], 非円唇化による [ɔ]>[ʌ]などを論じている(服部四郎他 1981, 服部四郎 1985, 梅田博之 1994, H. Umeda 1995, 福井玲 2013: 207-210)。小倉進平自身も 'ㅏ' の発音には2種類あることに気づいていた(小倉進平 1931a: 142-143, 福井玲 2016: 47)。しかし, 小倉進平自身は服部四郎他(1981)以後の先行研究が指摘する変化などを考慮していないので, 以下で考察してみる。

2.3.4 節で挙げたすべての項目を考慮しても, 現代語で 'ㅏ' に対応する母音に [ɨ] が現れている項目は「蛭」のみのものである(表 2.31, 地図 2.31)。この項目しかないことは分析の限界であるが, 考察を進める。「蛭」(標準語は '거머리')では語頭音節に 'ㅏ' が現れ, その語頭音節は後期中

世語で上声であった。よって、この部分で長母音が記録されることが期待されるが、小倉進平(1944)のデータにはこの部分で長母音が記録されていない⁴⁸。ともあれ、この上声由来の‘ㄷ’は忠清以外の全道では[o:]([o:])が現れるが、慶尚、忠清、京畿、江原、黄海では[i:]([i:])に対応している。特にソウル周辺で[i:]([i:])が現れていることは、先行研究の示す[a:]>[i:]を反映していると考えられる。

なお、2.3.4節で挙げた項目やその語形などの中には、「野原」、「土」、「夏」、「牙」のように標準語で表記したときに‘一’に対応する発音が[o]で現れているものが入っている。これらの項目の母音の地域的特徴は、[o]が済州、慶尚、忠北に、[i]が全道に現れていることである⁴⁹。これは各地域の母音体系の差異、母音の発音の差異、[o]と[i]の音響的な類似性などによるものと思われる⁵⁰。なお、‘一’の発音に[o]と[i]の両方が対応しているような項目は2.3.4節で挙げた複数の項目で確認できる。

2.4.5. [e]と[ɛ]の対立と[o]と[u]の対立

本節では第4章で検討する現代語ソウル方言に見られる現代語の‘ㄷ’[e]と‘ㄷ’[ɛ]の合流と‘ㄷ’[o]と‘ㄷ’[u]の接近の問題に関連して小倉進平(1944)所載資料から20世紀前半当時のこうした母音を考察してみる。

2.4.5.1. [e]と[ɛ]の対立

2.3.5.1節で挙げた項目一覧のうち、現代語の綴りが‘ㄷ’であり、その母音の地域的特徴が比較的全道的に把握できる項目は「下駄」、「鱗鱗」、「蚕」、「篩」である(表2.32~2.35, 地図2.32~2.35)。「下駄」、「鱗鱗」、「蚕」の項目では[e]が全道に、[ɛ]が慶尚、忠北、江原に現れている。このうち[e]が現れている地域では[e]と[ɛ]を併用したり混用したりしている。一方、「篩」の項目では[e]が済州、全羅、慶尚、忠清、京畿、江原、黄海に、[ɛ]が全南、慶尚、京畿、江原、黄海、咸鏡、平安に現れている。「下駄」、「鱗鱗」、「蚕」の場合とは異なり、「篩」のみ[ɛ]の分布

⁴⁸ 小倉進平(1944)所載資料では母音の長短を記していないが、林静(2017)は『韓国方言資料集』(1987-1995)で済州と慶南を除くほとんどの方言に[o:], [i:]のような長母音が現れると指摘しているので、本文では[o:]([o:])や[i:]([i:])のように長母音の表記も記述することにした。

⁴⁹ 「野原」は小倉進平(1944 上:28-29)を、「土」は小倉進平(1944 上:223-224)を、「夏」は小倉進平(1944 上:18)を、「牙」は小倉進平(1944 上:94)を参照している。

⁵⁰ 김경숙(2015)はこうした現象を‘一’>‘ㄷ’の変化の結果とみている(김경숙 2015: 171-175)。

域が広い理由については考慮の余地があるが、頭子音が有気音であることが関係しているかもしれない。なお、「篩」については後期中世語から綴りが‘ㅍ’である。

これに対し、2.3.5.1 節で挙げた項目一覧のうち現代語の綴りが‘ㅍ’であり、その母音の地域の特徴が比較的全道的に把握できる項目はない。よって、全道的な分布の特徴は把握できないが、ここでは現代語の綴りが‘ㅍ’である「暁」、「砂」、「鰈」の項目を考察する⁵¹。「暁」(標準語は‘새벽’)の語頭音節で[e]が全道に現れており、[ɛ]は現れていない(小倉進平 1944 上: 4-5)。「砂」(標準語は‘모래’)の第 2 音節の母音には[e]が全道に現れており、[ɛ]は全南 1 地点にのみ現れている(小倉進平 1944 上: 219-220)。「鰈」(標準語は‘새우’)の語頭音節では[e]が全道的に現れており、[ɛ]については[we]が慶南 1 地点にのみ現れている(小倉進平 1944 上: 305-306)。

以上より、綴り‘ㅍ’に対して慶尚、忠北、江原の一部では[e]と[ɛ]の両方が現れていることを除き、綴り‘ㅍ’に対しては[e]で、綴り‘ㅍ’に対しては[ɛ]で全道的に現れていることが確かめられる。これより、全道的には‘ㅍ’[e]と‘ㅍ’[ɛ]の発音がまだ合流していないこと、つまり、‘ㅍ’[e]と‘ㅍ’[ɛ]の発音を区別していることが示唆される。ただし、慶尚、忠北、江原の一部では[e]と[ɛ]の両方が現れていることも確認できた。これはこれらの地域では[e]と[ɛ]をもともと区別しなかったか、または、[e]と[ɛ]がどこかの段階で合流したなどのようなことが想定される。

ここまでは現代語の綴りが‘ㅍ’または‘ㅍ’であるような場合について考察してきた。以下では、現代語の綴りが‘ㅍ’や‘ㅍ’でないような場合について見てみる。2.4.3.1 節で[ø]の発音の地域差を考察したときに扱った項目であるが、「外」、「鉄・金」、「回答」および「麻布」(この現代語の綴りは‘ㅍ’であるが、もともとの綴りは‘ㅍ’であり、「外」、「鉄・金」、「回答」と母音の分布状況が似ているのでここで考察する)の母音の地域的特徴は、[e]が平安を除く全道に、[ɛ]が全羅、慶尚、黄海、咸鏡、平安に現れているということである⁵²。先ほど考察したような綴り‘ㅍ’に対して[e]が広く現れている項目(下駄、鱉、蚕)と比べると、これらの項目(外、鉄・金、回答、麻布)では[e]が咸鏡や平安に現れていることが特徴であるといえる。

現代語の綴り‘ㅍ’に対して[e]または[ɛ]が全道的にみられる項目に「舌」、「硯」、「別に」、「簪」があり、これらの一部は 2.4.2 節でも検討したものである⁵³。これらの項目では‘ㅍ’に対して、

⁵¹ 母音の分布に関する図表は省略するが、「砂」は李在鎬(2017)を、「鰈」は徐旻廷(2017)を参照されたい。

⁵² 「外」については表 2.21, 地図 2.21 を、「鉄・金」については表 2.22, 地図 2.22 を、「回答」については表 2.24, 地図 2.24 を、「麻布」については表 2.25, 地図 2.25 を参照されたい。

⁵³ 「舌」については小倉進平(1944 上: 92-93)を、「硯」については表 2.16, 地図 2.16 を、「別に」については表

次のような発音が対応している。まず、「舌」,「硯」,「別に」では[e]が全道的に,[ɛ]が全羅,慶尚に現れている。こうした発音の分布の状況は先に考察した‘ㅁ’に対して[e]が広く現れている項目(下駄, 蟻螯, 蚕)のそれと似ている。次に,「簪」では[e]が全南,慶北,平北に,[ɛ]が濟州,全羅,慶尚,忠北,江原,黄海,咸鏡,平北に現れている。[ɛ]が広範囲に分布しているのは,2.4.2節で指摘したように,pin-ha または pi-na のような語形に接辞‘-i’がついたり非語頭音節で前舌母音化が起きたりしたことによるものであろう。

このほか,2.3.5.1節で挙げた項目と語形からは「蚯蚓」(後期中世語は‘디렁이’,現代語は‘지렁이’)に第2音節での前舌母音化などによる発音の変種として[e]と[ɛ]の対立があることが分かる(小倉進平 1944 上: 328-330)。また,「抽斗」には綴りが不明の標準語形とは異なる語形が記録されているが,その語形で[e]と[ɛ]の対立がある(小倉進平 1944 上: 251-252)。

2.4.5.2. [o]と[u]の対立

2.3.5.2節で挙げた項目一覧のうち,後期中世語からの綴りが‘ㅓ’または‘ㅜ’であり,その発音が全道的に確認できる「鷺(1)」,「尖れるさま」,「別に」,「唇」,「龜」の項目では‘ㅓ’を[o]で,‘ㅜ’を[u]で発音するのが原則であった(表 2.36~2.40,地図 2.36~2.40)。特に,「別に」では第2音節母音で‘ㅓ’に[o]が,「龜」では第2音節母音で‘ㅜ’に[u]が全道的に現れている。「鷺(1)」,「尖れるさま」では‘ㅓ’に[o]が基本的に現れているが,一部の地域では[u]が現れている。「唇」では‘ㅜ’に[u]が基本的に現れているが,一部の地域では[o]が現れている。ただし,‘ㅓ’に[u]が現れたり‘ㅜ’に[o]が現れたりする地域に共通点は見当たらない。

また,2.3.5.2節で挙げた項目一覧のうち,後期中世語からの綴りが非語頭音節で‘ㅓ’>‘ㅜ’のように変化してその発音が全道的に確認できる「石鱈」,「柱」,「棗の実」,「硯」,「鷺(2)」,「鰈」の項目では当該音節の母音に[u]が現れるのが原則である⁵⁴。これは近代語における非語頭音節での‘ㅓ’>‘ㅜ’のような綴りの変化が反映されているものと思われる。[u]ではなく[o]が現れている地域をまとめると,「石鱈」は慶北,「柱」は濟州,全羅,慶尚,忠清,「棗の実」は濟州,江原,咸北,平北,「硯」は慶尚,「鷺(2)」は忠清,咸南,「鰈」は江原である。これらに共通点

2.13, 地図 2.13 を,「簪」については表 2.20, 地図 2.20 を参照されたい。

⁵⁴ 「石鱈」については小倉進平(1944 上: 151)を,「柱」については小倉進平(1944 上: 117-118)を,「棗の実」については小倉進平(1944 上: 273-274)を,「硯」については小倉進平(1944 上: 187-188)を,「鷺(2)」については小倉進平(1944 上: 243-244)を,「鰈」については小倉進平(1944 上: 305-306)を参照されたい。

は見いだせないが、慶北で現れやすく(石鹼, 柱, 硯), [o]と[u]を併用している地点がある項目もある(石鹼, 硯)というような特徴は見られる。これは母音体系の方言差, それぞれの項目の語史や語構成, [o]と[u]の音響的な類似性などによるものと思われる。なお, 「柱」ではほかの項目より[o]が広く現れているが, これは語構成(‘긴’(kit)+‘옹/웅’(on/ung))や語形の出現時期などによるものだろう⁵⁵。

2.5. 結論

本章では小倉進平(1944)所載資料から現代語の母音史とかかわる諸問題—(I) [ʌ]と[œ], (II) [jo]と[e], (III) [ø]の発音の地域差と[wi]の発音の地域差, (IV) [ɔ]と[i], (V) [e]と[ɛ]の対立と[o]と[u]の対立—について考察してきた。(I)~(V)のそれぞれの課題について考察した内容を要約すると次のようになる。

(I) 濟州で語頭音節に[ʌ]が現れているところに濟州以外では[a]が現れている。ただし, 全羅, 慶南, 咸鏡では頭子音が両唇音のときに[o]が現れている。こうしたことは先行研究の結果に一致している。また, 濟州で[œ]または[e]が現れているようなところに濟州以外では[e]が現れている。ただし, 濟州の[œ]と[e]については単独形で[œ]が, 接辞‘-i’が添加した環境では[e]が現れている。

(II) 全道的に[jo]または[e]が現れるとき, その現れ方が声調や語種により異なっている。つまり, 中世語で上声であったか否かということや単語の語種が発音の変化に影響していることが分かる。後期中世語の上声に由来する語形では[jo]が全道的に分布しているが, [jo]と[e]を併用している地点や[jo]と[e]が混在している地域も見られた。非上声由来の漢字語の語形では上声由来の語形より[jo]の分布域が狭くなり, とりわけ全羅や忠清では[e]が現れている。非上声由来の固有語の語形では[e]が全道的に現れており, [jo]が黄海などの地域にのみ現れている。

(III) [ø]の発音の地域差については[ø]が朝鮮半島の西南から東北に現れているのに対し, これら以外の地域では[ø]以外が現れている。具体的には[we]や[e]が濟州, 全南, 慶尚, 忠清, 京畿

⁵⁵ 岡村佳奈(2017: 34)によると, ‘긴’は15世紀の文献に見られるのに対し, 接辞‘-옹/웅’による派生語‘기동/기둥’は15~16世紀の文献から見られるようになるという。

の開城周辺、江原、咸南に、[wi]や[i]が慶尚に、[we]や[e]が平安に現れているほか、後期中世語の上声に由来すると考えられる[oi(oj)]が忠清などに現れている。また、[wi]の発音の地域差については[wɨ]が全道的に現れており、[i]が慶尚に現れている。

(IV)「蛭」という項目で後期中世語の上声に由来する語頭音節の母音が、忠清以外の全道では[o]([o:])で現れているが、慶尚、忠清、京畿、江原、黄海では[i]([i:])も現れている。これはソウル方言における[o:]>[i:]のような変化と関連があるものと思われる。また、全道的には[i]が現れているような場合に済州、慶尚、忠北では[o]が現れていることもある。

(V)[e]と[ɛ]については[e]と[ɛ]を併用している地点や[e]と[ɛ]が混在している地域が慶尚、忠北、江原に見られる。[o]と[u]については[o]と[u]を併用している地点や[o]と[u]が混在している地域は見られず、ある地域では[o]で発音するところを、別の地域では[u]で発音するような場合がいくつか見られる。

本章で考察してきたことは先行研究ですでに言及されてきたことの再確認に過ぎない部分も少なくない。しかし、2.1.1節で挙げたような小倉進平(1944)所載資料を利用した先行研究と比べると、本章では現代語の母音史というテーマを設けて小倉進平(1944)所載資料から言語地図を作成して考察を行なったというところに意義があるだろう。ただし、本章で扱った課題のほかにも現代語母音史に関する課題があるので、当然ながら本章の考察で十分というわけにはいかない。たとえば、母音の長短の消長やアクセントについては先行研究で議論になっているが、小倉進平(1944)所載資料から分析することがむずかしいので本章では分析していない。このほかにも K. Lee and S. R. Ramsey(2011: 265–266)で近代語における変化として取り上げられている‘ㄱ’>‘ㄴ’>‘ㄷ’の変化や両唇音後の‘ㄱ’>‘ㄷ’の変化、前舌母音化(ウムラウト)などの問題についても考察できなかった。これらは今後の課題となるだろう。

また、本章での考察から今後の研究につながるような話題を見出すことができる。たとえば、[ø]の発音の地域差において「外」や「鉄・金」、「回答」、「麻布」では全道的に[ø]や[we]が現れているのに対し、平安では[we]や[e]が現れていることを指摘したが、これが平安における(他方言とは異なる)音変化の特徴であるといえる。このことと関連して2.3.1.2節や2.4.1.2節からは済州において[œ]が現れているようなところで済州以外の方言(平安を含む)では[e]が現れてお

り、また、2.3.2 節や 2.4.2 節からは全道的に[jo]または[e]が現れているところに平安でも他方言と同じように[jo]や[e]が現れていた([e]は現れていなかった)ことにも注意しておきたい。[ø]の発音の地域差、つまり、‘斗’の発音については平安でほかの地域とは異なる音変化を経たようなのである。またほかの例としては‘斗’の発音が中世語の上声に由来するかどうかということや単語の語種によって異なるということを示したが、これは二重母音の単母音化における発音の変化—たとえば、第 4 章で議論するような‘斗’と‘斗’の発音の合流を議論する以前の段階における発音の変化など—を考えると示唆するところがあるものと思われる。

3. ‘ㅅ’と‘ㅈ’の発音の変化

—調査年代の異なる方言資料にもとづいて—

3.1. 序論

第2章では20世紀前半の方言資料である小倉進平(1944)から当時のいくつかの母音についてその発音の変化と地域差を考察した。それを承け、第3章と第4章では20世紀前半以降の現代語の母音の変化—第3章では‘ㅅ’と‘ㅈ’の発音の変化、第4章では‘ㅅ’と‘ㅈ’の発音の合流と‘ㅅ’と‘ㅈ’の発音の接近—を考察する。

本章では20世紀前半と後半の方言資料を比べることから現代語での‘ㅅ’と‘ㅈ’の発音の変化を考察する。その理由は、これらの母音の変化に関する先行研究は多いが、発音の変化の方向性について見解が一致していないからである。また、先行研究では調査時期の異なる方言資料にもとづいて現代語諸方言の‘ㅅ’と‘ㅈ’の発音の変化が考察されていないからでもある。本章での考察から現代語史に関する研究に方言資料や言語地図を活用する試論も提供できると考える。とりわけ、本章は20世紀前半の若年層を調査したものと20世紀後半の老年層を調査したものを比べるという方法からこれらの母音の発音の変化に考察したので、これらの資料の被験者を同一話者と仮定すると、話者が成長するとともに発音は変化するのかということ考察する一例になる¹。

本章の構成は次のとおりである。3.1節の後半で先行研究を示す。3.2節で方法を述べ、3.3節では結果を表と地図に示す。3.4節は考察、3.5節は結論である。

3.1.1. 先行研究

現代語の母音‘ㅅ’と‘ㅈ’の発音とその変化に関する先行研究では、(a)研究者や外国人宣教師による主観的記述、(b)中部方言を反映した音声資料、(c)方言語彙資料などにもとづき考

¹ このような同じ話者の発音が若年期と老年期などで変化するのかという視点については博論審査の場で生越直樹先生と河崎啓剛先生から示唆していただいたところである。このようなコメントをくださったことに感謝申し上げます。ただし、当然ながら論文での議論の責任は筆者にある。

察している。また、その変化については、(x)調査時期の異なる複数の資料を比較する、(y)ある時期の調査資料にもとづいて推定するという方法から考察している。

(a)「研究者や外国人宣教師による主観的記述」については김봉국(2006)が(x)「調査時期の異なる複数の資料を比較する」方法で考察し、‘ㅅ’は[oi(oj)]>[ø]>[we]のように、‘ㅈ’は[ui(uj)]>[wi](中子音では[ui(uj)]>[y]>[wi])のように変化したと推定している²。

(b)「中部方言を反映した音声資料」については韓成愚(2005)が(x)「調査時期の異なる複数の資料を比較する」方法で変化を考察し、1930年代の音声と1950年代以降の音声を分析したところ‘ㅅ’は[oi(oj)]>[ø]>[we]のように、‘ㅈ’は[ui(uj)]>[y]>[wi]のように変化したと推定している。また、単母音と二重母音の自由変異と混乱の可能性などについても言及している。

(c)「方言語彙資料」については、(a)「研究者や外国人宣教師による主観的記述」や(b)「中部方言を反映した音声資料」のように(x)「調査時期の異なる複数の資料を比較する」方法から考察した論考は見当たらず、(y)「ある時期の調査資料にもとづいて推定する」方法から変化を推定している³。以下ではこうした先行研究を中心に‘ㅅ’と‘ㅈ’のそれぞれの発音の変化に関する研究を整理する。

3.1.1.1. ‘ㅅ’の発音の変化

まず、母音‘ㅅ’の発音の変化には次の三つの見解がある。

- (1) [oi(oj)]>[ø]>[we]または[oi(oj)]>[we]
- (2) [oi(oj)]>[we]>[ø]
- (3) 方言分化ほか

方言資料と言語地図から変化(1)を推定している論考は최성균(2013)である。その論考では言語地図上では[ø]が全道的に現れ、[we]などは周辺的に現れることを根拠にしている。この

² 先行研究は[oi(oj)]を[oj], [oy], [oi]などで、[ø]を[ø]や[ö]などで、同様に[ui(uj)]を[uj], [uy], [ui]などで、[y]を[y]や[u]などで記す場合があるが、本章では第2章とのつながりを考慮して、それぞれ[oi(oj)], [ø], [ui(uj)], [y]で記す。

³ 調査時期の異なる複数の資料を比較することで発音の変化を考察した論考としては小倉進平(1944)と韓国精神文化研究院編(1987-1995)所載資料を対照した召경숙(2015)があるが、この論考では‘ㅅ’と‘ㅈ’の発音の変化については考察していない。

解釈は慶尚や平北の[we]や[we]などが[ø]を経たという根拠がないことが問題である。もし[ø]を経たのならば[ø]を含む語形がそうした地域に見られてよいはずであるが、小倉進平(1944) 所載資料では項目「回答」で慶尚に[ø]が現れるだけで、そのほかの項目では慶尚や平北に[ø]を含む語形がない。ただし、咸北に[ø]や[we]などの併用が確認できるので咸北では[ø]を経た根拠が言語地図から得られる。최성균(2013)以外で変化(1)を推定する論考には各方言の文献資料などを参照して考察している鄭仁浩(2004)、中部方言(特にソウルとその近隣地域)を対象に19世紀末以降の外国人宣教師や外国人・韓国人研究者の記録と1930年代の音声資料を根拠に考察している김봉국(2006)、慶北・月城方言の音韻論を考察している崔明玉(1982)などがある。また、地域によっては[ø]を経ずに[oi(oj)]>[we]のように変化したと考察しているものもある(곽충구 2003, 김한별 2017)。

次に、方言資料と言語地図から変化(2)を推定している論考は拙稿(2018)である。[ø]は朝鮮半島の西南から東北にかけて(=B)現れるのに対し、[we]やその変種は平北・咸北の一部や慶尚を中心に(=A)現れ、ABAのような分布をなす。こうした分布が圏論的分布である、つまり、AがBより古い語形の地域であるとみると[oi(oj)]>[we]>[ø]のように考察できる。この解釈の問題点は圏論的分布が一般的に語彙史一各々の語形の新古関係一の分析の根拠になることである⁴。また、小倉進平(1944)所載資料の項目「黄瓜」や「山・墓」では全羅に[oi(oj)]を含む語形が見られることも問題である。なぜならば、[oi(oj)]が現れる地域をC、[ø]が現れる地域をB、[we]やその変種が現れる地域をAとみると、ABCBAのような分布をなすからである。この分布が圏論的分布をなすとすると、Aが古くCが新しいという変化([we]>[ø]>[oi(oj)])が推定できるが、この推定は‘ㅁ’の中世語以来の発音が[oi(oj)]であり[oi(oj)]を含む語形が古語の発音を反映したとみることに矛盾する。よって、[oi(oj)]>[we]>[ø]のような変化を圏論的分布から説明するならば、[oi(oj)]は古語の発音を保存した地域に見られるからなどの説明が必要となる。または、逆圏論的分布から説明することになるだろう。拙稿(2018)以外で変化(2)を推定している論考は当時のソウル(京城)を対象に考察し

⁴ 柳田國男(1930)以来、ABAのような分布ではAの語形が古く、Bの語形が新しいとみなすことがある。しかし、次のような課題もある。韓国語でも柳田國男(1930)のような分布が推定できるか検証が必要である。方言圏論は音声や文法より語彙により適合すると言われる(棟垣実 1953)。ABA分布のA地域が古い形を残しているのか、他地域より新しい変化を起こした形を見せているのかは検証する必要がある(金田一春彦 1953)。また、近年では方言圏論に否定的な論考が見られる(大西拓一郎 2017a, 2017b, 2017c)。

たと思われる G. J. Ramstedt(1939), 19 世紀後半の全羅方言を方言資料から考察している崔銓承(1987)である。このうち G. J. Ramstedt(1939: 443)は[ø]が数世紀に渡り使われていなかったが, [i]の影響の結果として再び現れたとみている。

最後に, 方言資料と言語地図から変化(3)の方言分化を推定している論考は鄭仁浩(2013)である。鄭仁浩(2013)はいくつかの音環境ごとに‘ㅍ’の発音を考察し, その発音の地域的特徴をもとに言語地図に境界線を引いている。発音の変化を地域ごとに捉えることは先に示した先行研究のうち全道的な視点で考察している최성균(2013), 鄭仁浩(2004), 拙稿(2018)などとは異なる見方である。また, 変化(1), (2)および方言分化とは異なる変化を推定している論考として, 곽충구(2003)は諸方言資料を活用して全国的な音変化の方向性を論じ[oi(oj)]>[we]>[ø]>[e], [oi(oj)]>[we](地域的な特徴)のような変化を, 李秉根(1973)は江原の江陵・三陟・蔚珍などを対象にした現地調査から[we]>[ø]という単母音化(による二重母音の回避現象)を, 한영균(1995)は江原方言を対象に韓国精神文化研究院編(1987-1995)から[we]>[ø]と[oi(oj)]>…>[ø]の二つの変化を推定している。

以上より, 方言資料と言語地図から‘ㅍ’の発音の変化の方向性を論じると変化の仕方に少なくとも 3 通りの解釈があることや全道的に考えるか方言ごとに考えるかの視点の違いがあることが分かる。特に, 全道的な変化を考察している論考からは[oi(oj)]>[ø]>[we]と[oi(oj)]>[we]>[ø]の異なる結論が得られる。こうした議論は言語地図を根拠に‘ㅍ’の発音の変化を考察している先行研究の限界を示している。また, 최성균(2013)や鄭仁浩(2013)などは小倉進平(1944)と韓国精神文化研究院編(1987-1995)の調査年代の違いを考慮していない。たとえば, 韓国精神文化研究院編(1987-1995)に北朝鮮側のデータがないので小倉進平(1944)を参照する研究もある。このように調査年代の違いを考慮しない研究方法は問題である。

3.1.1.2. ‘ㅍ’の発音の変化

母音‘ㅍ’の発音の変化には次のような見解がある。

- (1) [ui(uj)]>[y]>[wi]または[ui(uj)]>[wi]
- (2) [ui(uj)]>[wi]>[y]
- (3) そのほか

方言資料と言語地図から‘ㅍ’の発音の変化を考察している최성균(2013)は単母音[y]を経た場合とそうでない場合があり得たとみて変化(1)のような見解を示している。言語地図上では(変化の最終形であるとみる)[wi]が慶尚や平安に現れることを根拠にしている。최성균(2013)以外で変化(1)を支持しているのは中部方言(特にソウルとその近隣地域)を対象に 19 世紀末以降の外国人宣教師や外国人・韓国人研究者の記録と 1930 年代の音声資料から考察している김봉국(2006), 慶北・月城方言の音韻論を考察する崔明玉(1982)である。최성균(2013)や김봉국(2006)は先行子音の種類によっては[y]を経ずに[ui(uj)]>[wi]のように変化したと推定している。崔明玉(1982)は先行子音が存在するとき([ui(uj)]>[y]>[wi]>[i])のように変化したと推定している。

方言資料と言語地図から変化(2), (3)を推定する論考は管見の限りないが, 諸方言資料を活用して全国的な変化の方向性を考察している斗勳子(2003), 当時のソウル(京城)を対象に考察したと思われる G. J. Ramstedt(1939), 19 世紀後半の全羅方言を方言資料から考察している崔銓承(1987)などは変化(2)を支持している。このうち G. J. Ramstedt(1939: 443)は[y]が数世紀に渡り使われていなかったが, [i]の影響の結果として再び現れたとみている。変化(3)については鄭仁浩(2004)が諸方言文献資料などから非語頭で[ui(uj)]>[u]または[ui(uj)]>[i], 語頭で[ui(uj)]>[y](または[ui(uj)]>[wi])のような変化を推定している。한영균(1995)は江原方言を対象に韓国精神文化研究院編(1987-1995)から[ui(uj)]>[wi]>[y]と[ui(uj)]>…>[y]の二つの変化を推定している。

3.2. 方法

現代語の‘ㅍ’と‘ㅑ’の発音の変化を考察するために 20 世紀前半の方言資料と 20 世紀後半の方言資料を比べた。20 世紀前半の方言資料は, 第 2 章の分析対象と同様, 小倉進平(1944)所載資料である。20 世紀後半の方言資料は韓国精神文化研究院編(1987-1995)・金英培(1977, 1984)所載資料である⁵。

各方言資料の被調査者や調査方法などについて注意しなければならないことの一つは,

⁵ 韓国精神文化研究院編(1987-1995)の調査地域は韓国, 金英培(1977)の調査地域は平安, 金英培(1984)の調査地域は黄海である。よって, 江原の一部と咸鏡の資料が 20 世紀後半の方言資料から欠落する。これらの地域については, 管見の限り, 本章での分析のために適当な資料がない。実際, これらの地域の方言資料は存在するが, 語形がハングル表記されているなどにより‘ㅍ’と‘ㅑ’の発音が明らかでない。

調査方法と被調査者の調査当時の所在地についてである。第2章で述べたとおり、小倉進平(1944)は1911年から約20年間に渡り各調査地点で普通学校の生徒を対象に対面で調査したものである。韓国精神文化研究院編(1987-1995)は一時調査を主に1980年代前半に、確認調査を主に1980年代後半から1990年代前半に、調査当時50代後半から80代の諸方言話者を対象に対面で調査したものである。金英培(1977)は1967年に調査当時ソウル在住(ただし被調査者36名中1名のみ京畿在住)の50代から70代の平安出身平安方言話者を対象に対面式または質問紙による通信式で調査したものであり、金英培(1984)は調査当時ソウルに在住している50代から80代の黄海出身黄海方言話者を対象に質問紙による通信式で調査したものである。つまり、小倉進平(1944)と韓国精神文化研究院編(1987-1995)は調査地点において被調査者に対面調査しているのに対し、20世紀後半の黄海と平安の方言資料として利用した金英培(1977, 1984)は調査当時ソウル在住の被調査者に対して対面または質問紙により調査しているというところに注意しなければならない。

また、以上の資料の被調査者の年齢についても考慮する必要がある。前の段落で説明したことから、小倉進平(1944)は調査当時普通学校の生徒が被調査者であるのに対し、韓国精神文化研究院編(1987-1995)、金英培(1977, 1984)は調査当時50代から80代の話者が被調査者であることが分かる。つまり、小倉進平(1944)の調査時に若年層であった話者が韓国精神文化研究院編(1987-1995)などの調査時には老年層になっている。よって、こうした方言資料を比べることはある話者が若年層から老年層へと成長する過程で発音が変化しているかを考察することであるといえる。

分析対象は第2章で‘ㅁ’と‘ㅂ’の発音を調べた項目である。‘ㅁ’については「外(外国)」、「鉄・金」、「誦んずる」、「回答(蛔虫)」、「麻布」、「山・墓」、「黄瓜」の7項目、‘ㅂ’については「鼠」、「鼠(蝙蝠)」、「耳(耳(卑称)・耳輪)」の3項目にもとづき考察した⁶。

分析方法は第2章と同様である。つまり、分析対象の‘ㅁ’と‘ㅂ’の発音とその地域差を表と言語地図に示した。なお、小倉進平(1944)所載資料は基本的に第2章の結果を利用したが、

⁶ 20世紀前後半の資料に共通する項目がないとき、それぞれ異なる項目を使って分析した項目がある。小倉進平(1944)の「外」に対して韓国精神文化研究院編(1987-1995)・金英培(1987)の「外国」、小倉進平(1944)の「回答」に対して韓国精神文化研究院編(1987-1995)の「回虫(蛔虫)」を対照した。また、「鼠(蝙蝠)」では複合語「蝙蝠」の後部要素「鼠」を分析対象にした。「耳」については小倉進平(1944)の「耳(卑称)」と「耳輪」に現れる前部要素「耳」に対して韓国精神文化研究院編(1987-1995)・金英培(1977, 1984)の「耳」を対照した。

小倉進平(1944)所載資料を韓国精神文化研究院編(1987-1995)などの語形と対照するのに適当な語形を考察の対象としたので、そうした語形に対応するように第2章の図表を適当に改めている。

転写方法も第2章に従った。ただし、各方言資料には転写方法に違いがある。特に韓国精神文化研究院編(1987-1995)は小倉進平(1944)より母音を精密に記録しており、具体的には方言ごとの発音の違いを反映しているが、転写方法は小倉進平(1944)に合わせて修正した。その理由は本章の議論が小倉進平(1944)所載資料を出発点に考察しているからであり、小倉進平(1944)と韓国精神文化研究院編(1987-1995)、金英培(1977, 1984)の調査年代の差から現代語における‘ㅁ’と‘ㅁ’の発音の変化を分析することを目的としているからである。転写方法の変更点は韓国精神文化研究院編(1987-1995)の E(慶尚など[e]と[ɛ]に音韻的対立がないもの)をɛに、以下同様に、öをøに、ojをo-iに、ujをu-iに、Λをɔにしたことである。

3.3. 結果

3.3.1. ‘ㅁ’の発音の変化

「外(外国)」, 「鉄・金」, 「誦んずる」, 「回答(蛔虫)」, 「麻布」, 「山・墓」, 「黄瓜」の7項目の各語形について表と言語地図にまとめる。表では語形が現れる地域を「○」で示して調査資料のない地域を灰色で塗りつぶし、言語地図には語形の分布状況を示す(表 3.1~3.14, 地図 3.1~3.14)。3.3 節末には 20 世紀後半の資料で長母音が現れる地域を示す言語地図を付す(地図 3.21~3.27)。

表 3.1. 外 (小倉進平 1944 上: 54-55)

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ø | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| wɛ | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | |
| e | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | |
| wɛ | | | | ○ | ○ | | | | | | | ○ | | ○ |
| ɛ | | | | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | |
| wi | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| i | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 3.2. 外国 (韓国精神文化研究院編 1987-1995: III. 03, 金英培 1984: 284)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ø | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| o-i | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| we | ○ | | | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | | | | |
| e | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| wε | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | |
| ε | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| wi | | | | | ○ | | | | | | | | | |
| i | | | | | ○ | | | | | | | | | |

表 3.3. 鉄・金 (小倉進平 1944 上: 221-222)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| sø | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | |
| (?)swe | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | | | |
| (?)se | | ○ | | ○ | | | | | | ○ | | | | |
| (?)swε | | | | | ○ | | | | | | | | | ○ |
| (?)se | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| ?swi | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| (?)si | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 3.4. 鉄・金 (韓国精神文化研究院編 1987-1995: I. 012, 金英培 1984: 284)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| (?)sø | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| (?)swe | ○ | | | ○ | | | | | | ○ | | | | |
| (?)se | | | | ○ | | ○ | | ○ | | | | | | |
| (?)swε | | | | | ○ | | | | ○ | | | | | |
| (?)se | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| (?)swi | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| (?)si | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 3.5. 誦んずる (小倉進平 1944 上: 377)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ø(-u)n-da | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| o-un-da | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| we(-u)n-da | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | |
| e-un-da | ○ | | | ○ | | | | | ○ | | | | | |
| ε-un-da | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| win-da | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| i-un-da | | | | | ○ | | | | | | | | | |

表 3.6. 誦んずる (金英培 1984: 298-299, 金英培 1977: 178-179)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ø-da | | | | | | | | | | ○ | | | | |
| o-i-da | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ |
| wε-da | | | | | | | | | | ○ | | | | |

表 3.7. 回答 (小倉進平 1944 上: 513-514)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|---------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| hø-dap | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | |
| hjo-dap | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | |
| hwe-dap | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | |
| he-dap | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | | |
| hwe-dap | | | | ○ | ○ | | | | | | | ○ | ○ | ○ |
| he-dap | | ○ | | ○ | ○ | | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ |
| hwi-dap | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| hi-dap | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 3.8. 回虫(蛔虫) (韓国精神文化研究院編 1987-1995: I. 432)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| hø(-tʰuŋ) | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | |
| ho-i | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| hwe(-tʰuŋ) | | | | | | | ○ | ○ | | | | | | |
| he-tʰuŋ | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| hwe(-tʰuŋ) | | ○ | | | ○ | | | ○ | | | | | | |
| he(-tʰuŋ) | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| hwi(-tʰuŋ) | | | | | ○ | | ○ | | | | | | | |
| hi(-tʰuŋ) | | | | | ○ | | | | | | | | | |

表 3.9. 麻布 (小倉進平 1944 上: 151-152)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| pø | | | | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | |
| pwe | | | | | | | | | | | | ○ | | |
| pe | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| pε | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| pi | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 3.10. 麻布 (韓国精神文化研究院編 1987-1995: I. 190, 金英培 1984: 280, 金英培 1977: 153)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| sam-bø | | | | | | | | | | ○ | | | | |
| pwe | | | | | | | | | | | | | | |
| pe / sam-be | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | |
| pε / sam-be | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | | | ○ | ○ |
| pi | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| pjɔ | | | | | | | | ○ | | | | | | |

表 3.11. 山・墓 (小倉進平 1944 上: 35-36)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| mø | | | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | |
| mo-i | | | | | | ○ | ○ | | | | | | | |
| me(t) | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | | | | ○ |
| mε(t) | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | |
| mi | | | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | | | |

表 3.12. 山・墓 (韓国精神文化研究院編 1987-1995: I. 535, 金英培 1984: 298, 金英培 1977: 140)

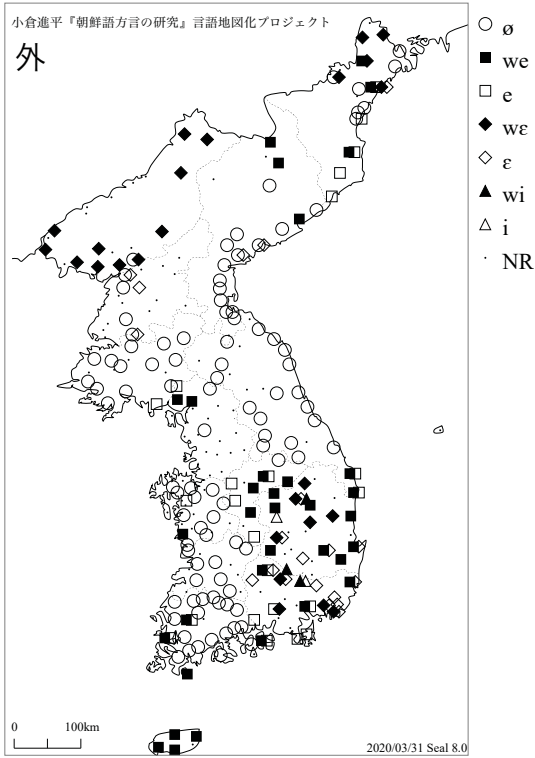
| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| mø(t) | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | |
| mo | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| mo-i | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| mu-i | | | | | | ○ | | | ○ | | | | | |
| mwe | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| me(t) | | ○ | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ |
| mwe | | | | | ○ | | | | | | | | ○ | ○ |
| me(t) | | ○ | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| mi(t) | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | | | |
| mwɔ-i | | | | | | | | ○ | ○ | | | | | |
| mɔ-i | | | | | | | | | | | | | | ○ |

表 3.13. 黃瓜 (小倉進平 1944 上: 203-204)

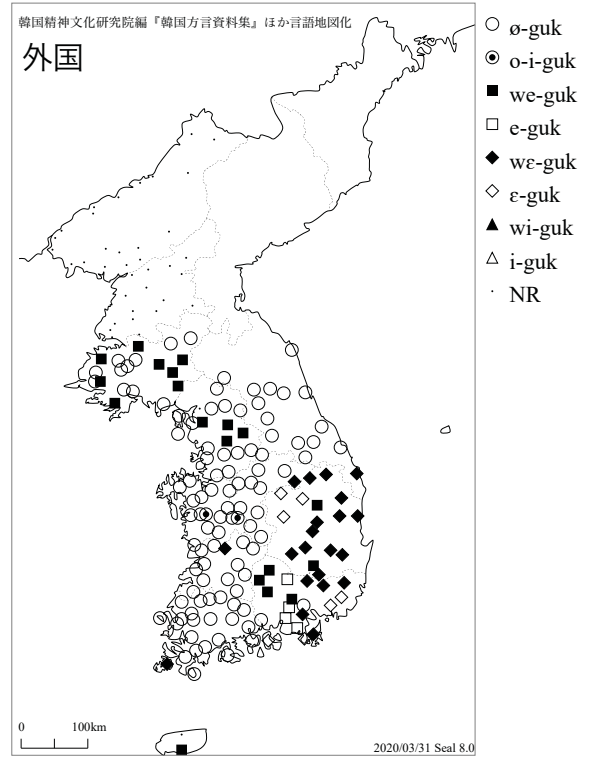
| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|-------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ø / mu-rø | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | |
| o-i | | | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | ○ |
| u-i | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| we / mu-rwe | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | |
| e / mu-re | | | | ○ | | | | | | | | ○ | | |
| wε | | | | ○ | ○ | | | | | | | ○ | | ○ |
| ε / mu-re | | | | ○ | | | | | | | ○ | ○ | | |
| wi / mu-rwi | | | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | |
| i / mu-ri | | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | |

表 3.14. 黃瓜 (韓国精神文化研究院編 1987-1995: I. 071, 金英培 1984: 298)

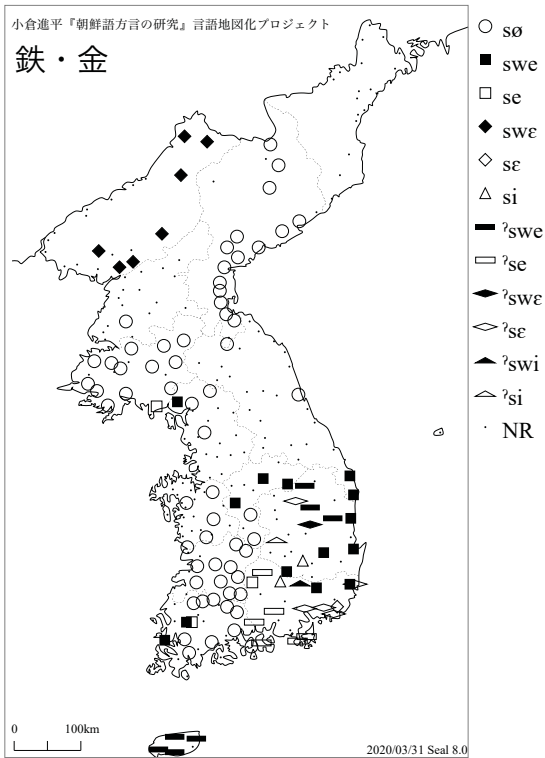
| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ø / mu-rø | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | |
| o-i / mu-ro-i | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| u-i | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| we / mu-rwe | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | |
| e / mu-re | | | | ○ | | | | | | | | | | |
| wε / mu(l)-rwe | ○ | | | | ○ | | | | | | | | | |
| ε / mu(l)-re | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| wi / mu-rwi | | | | | ○ | | | | | | | | | |
| i / mu-ri | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |



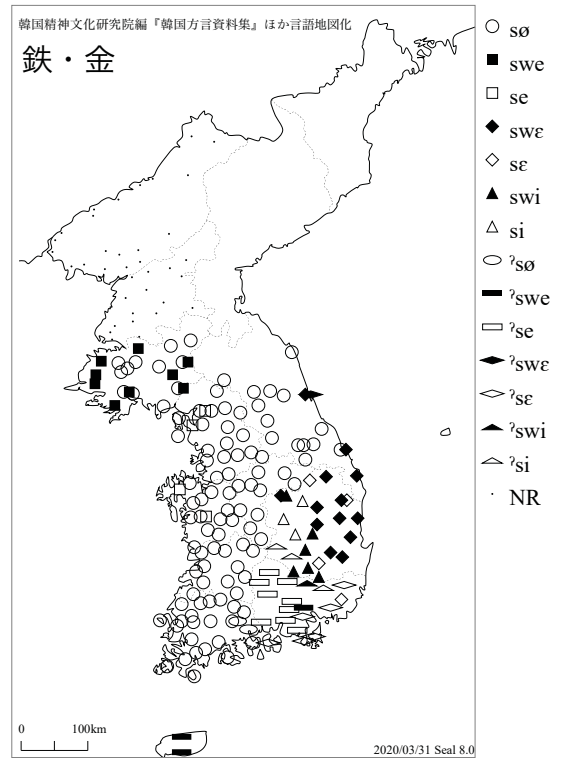
地図 3.1. 外



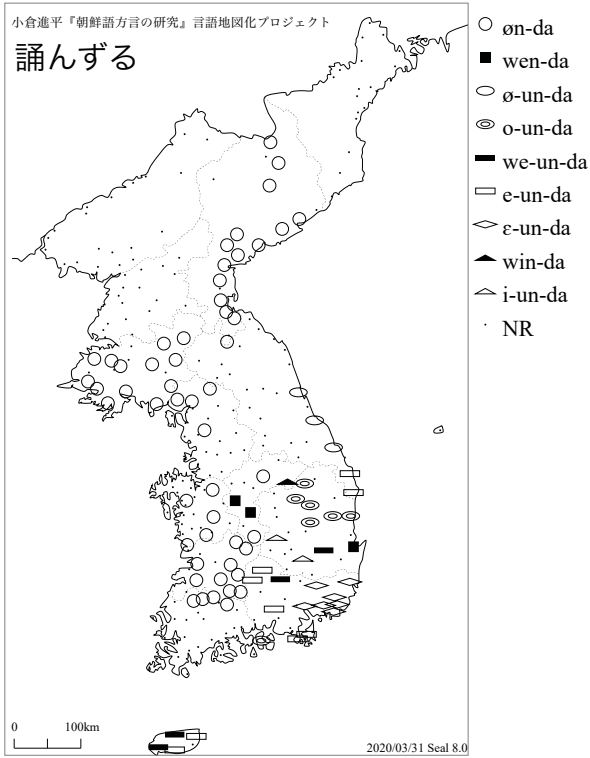
地図 3.2. 外国



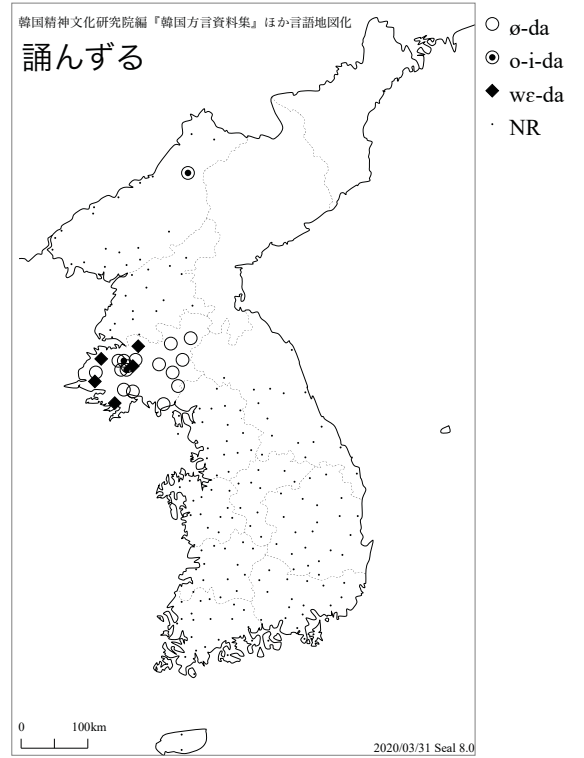
地図 3.3. 鉄・金



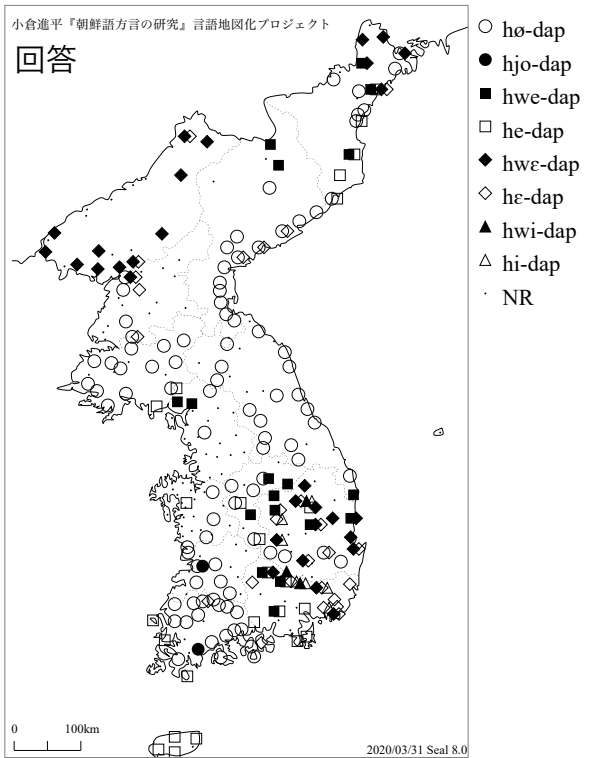
地図 3.4. 鉄・金



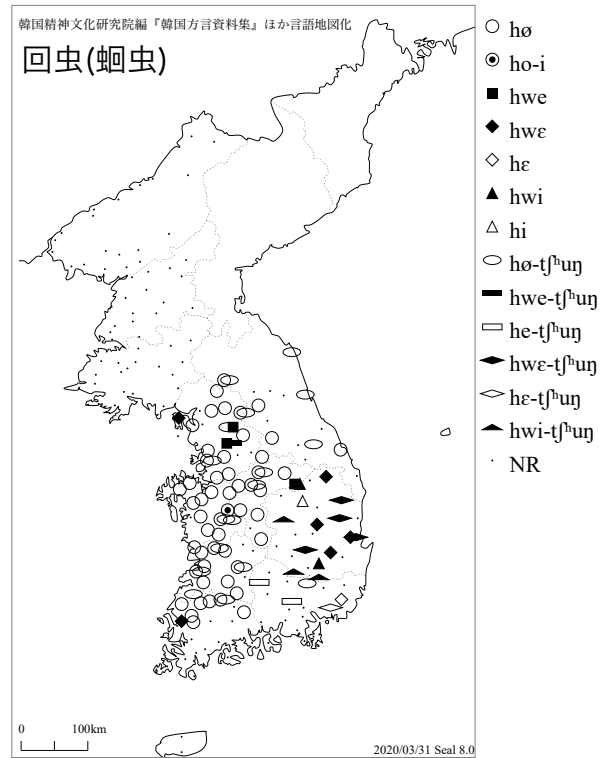
地図 3.5. 誦んずる



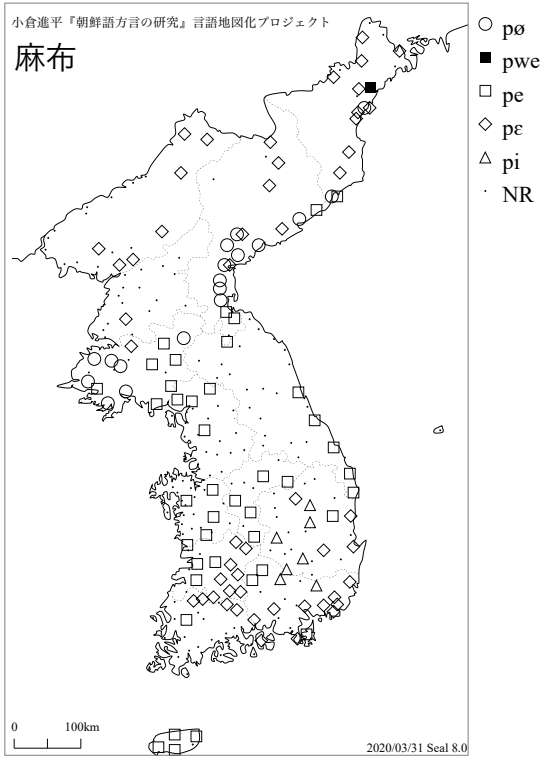
地図 3.6. 誦んずる



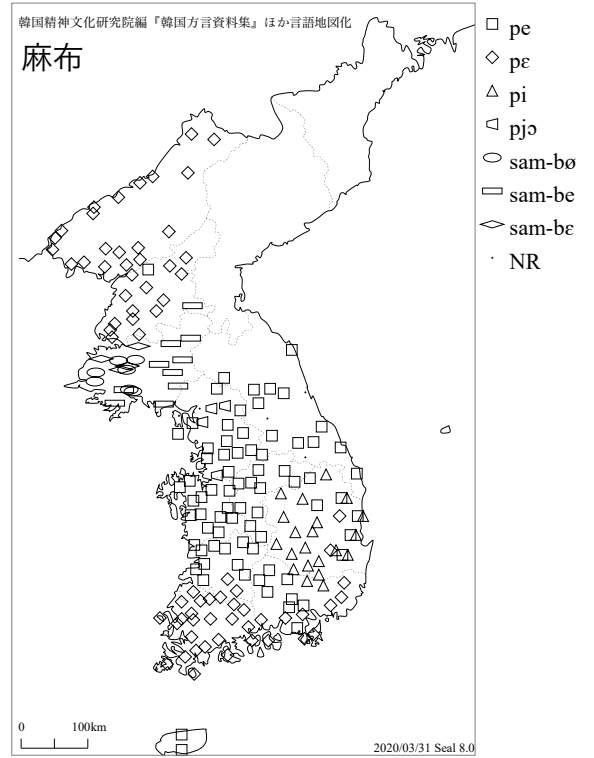
地図 3.7. 回答



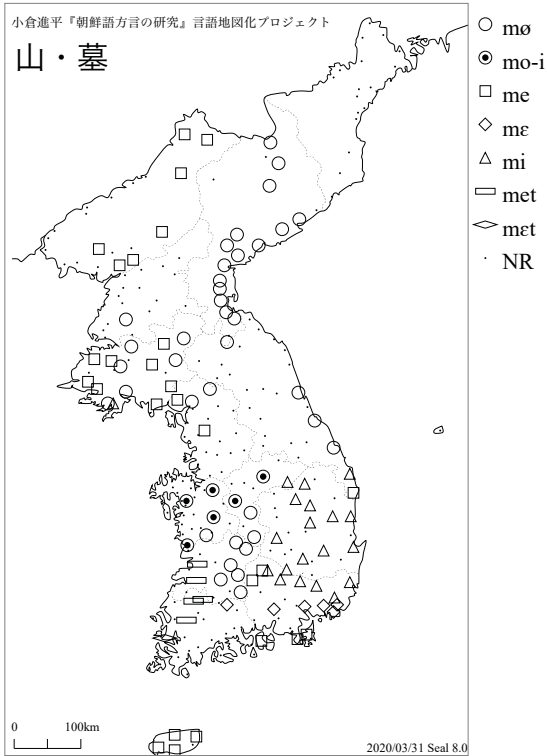
地図 3.8. 回虫(蛔虫)



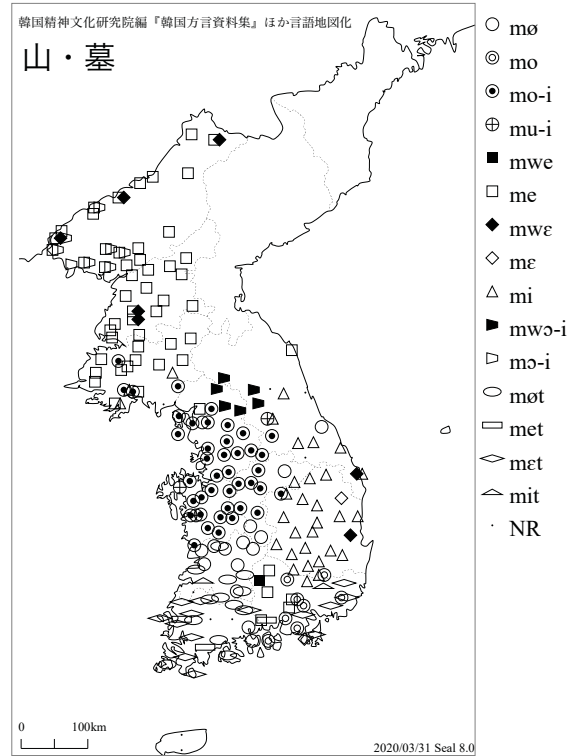
地図 3.9. 麻布



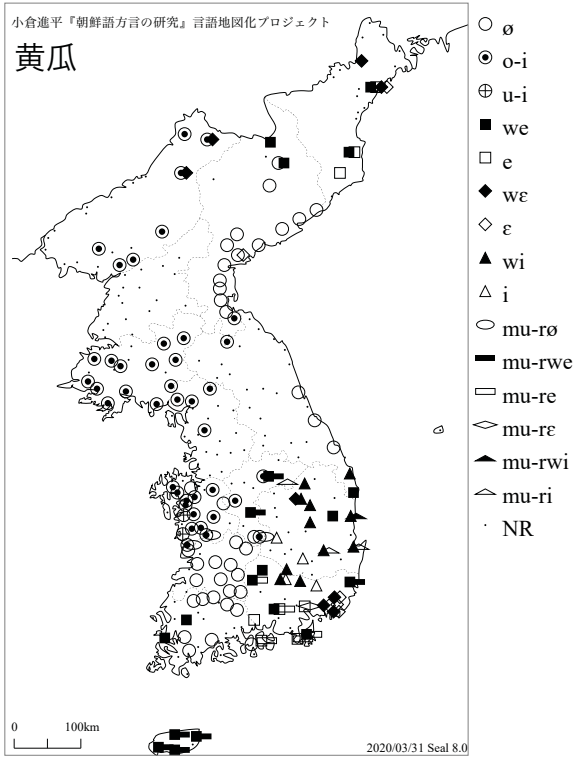
地図 3.10. 麻布



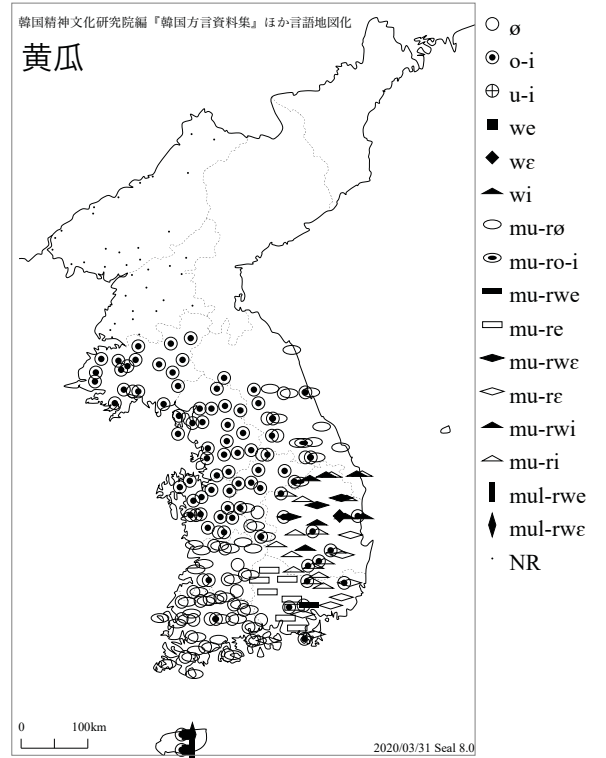
地図 3.11. 山・墓



地図 3.12. 山・墓



地図 3.13. 黄瓜



地図 3.14. 黄瓜

3.3.2. ‘ㅍ’の発音の変化

「鼠」, 「鼠(蝙蝠)」, 「耳(耳(卑称)・耳輪)」の3項目の語形について3.3.1節の‘ㅍ’の場合と同様にして表と言語地図にまとめる(表 3.15~3.20, 地図 3.15~3.20)。節末には20世紀後半の資料で長母音が現れる地域を示す言語地図を付す(地図 3.28~3.30)。

表 3.15. 鼠 (小倉進平 1944 上: 301)⁷

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| tʃwi | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| tʃi | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 3.16. 鼠 (韓国精神文化研究院編 1987-1995: I. 478, 金英培 1984: 282)

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| tʃy | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | |
| tʃwi | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | |
| tʃi | | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | |
| tʃɛ | | | | | ○ | | | | | | | | | |

表 3.17. 鼠(蝙蝠) (小倉進平 1944 上: 302)

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| tʃwi | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | |
| tʃu(-gi) | | ○ | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | |
| tʃi | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 3.18. 鼠(蝙蝠) (韓国精神文化研究院編 1987-1995: I. 479, 金英培 1977: 142)

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| tʃy | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | |
| tʃwi | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | ○ |
| tʃu | | | | | | | | | ○ | | | | | ○ |
| tʃi | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | |

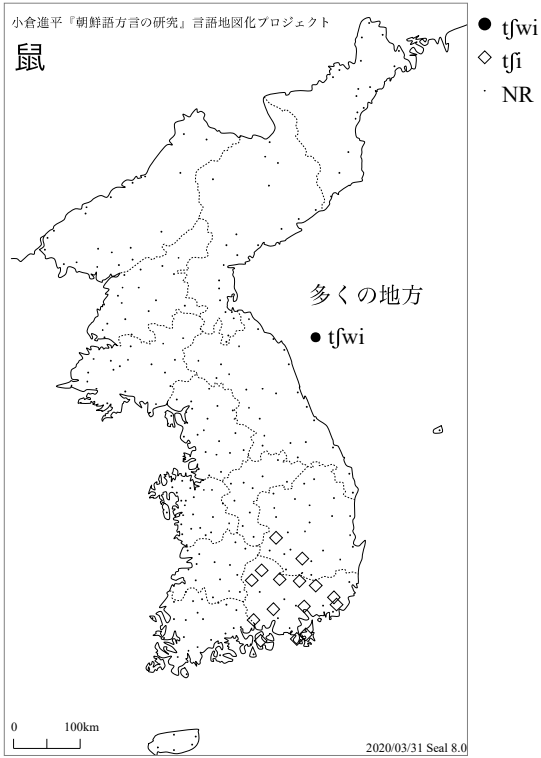
表 3.19. 耳(耳(卑称)・耳輪) (小倉進平 1944 上: 84-85, 136)

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|--------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| (?)kwi | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ |
| (?)ki | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

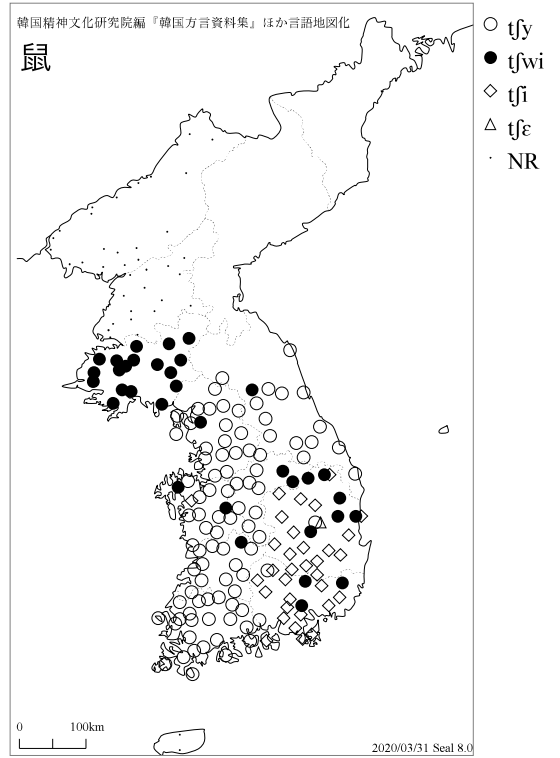
表 3.20. 耳 (韓国精神文化研究院編 1987-1995: I. 221, 金英培 1984: 281, 金英培 1977: 112)

| | 済州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ky | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | |
| kwi | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ |
| ku-i | | | | | | ○ | ○ | | | | | | | |
| ku | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ |
| ki | | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | |

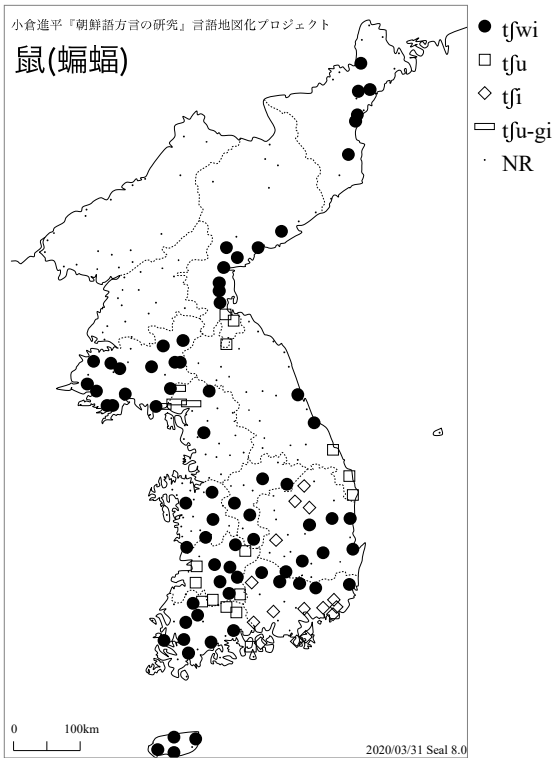
⁷ tʃwi には「多くの地方」と記しているのですべての地域に「○」を記した



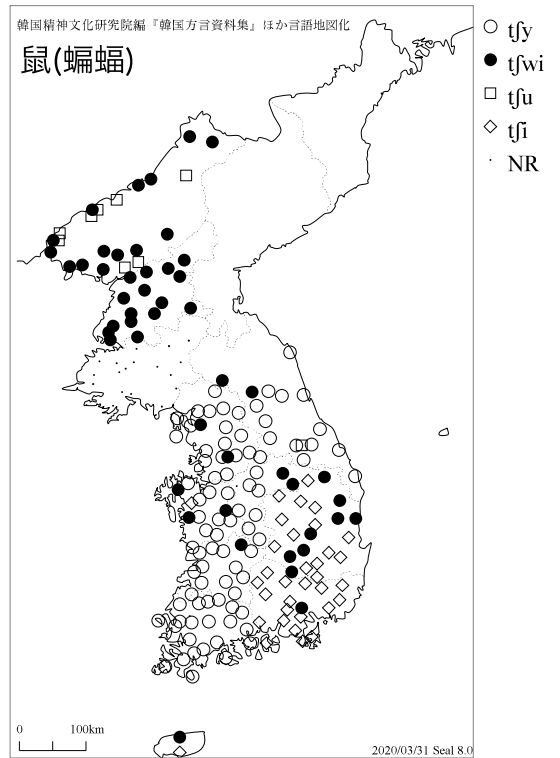
地図 3.15. 鼠



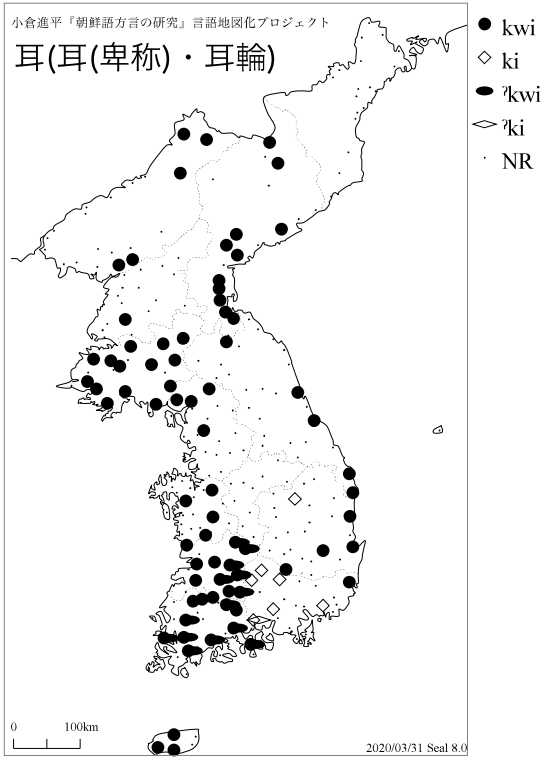
地図 3.16. 鼠



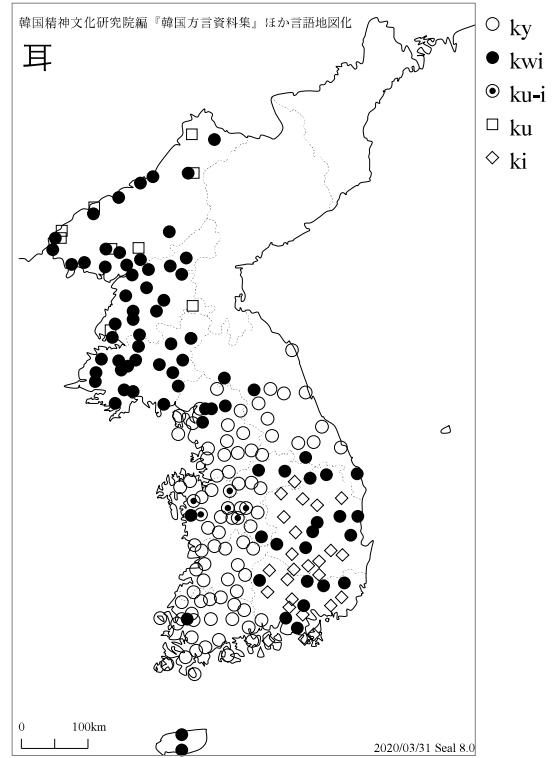
地図 3.17. 鼠(蝙蝠)



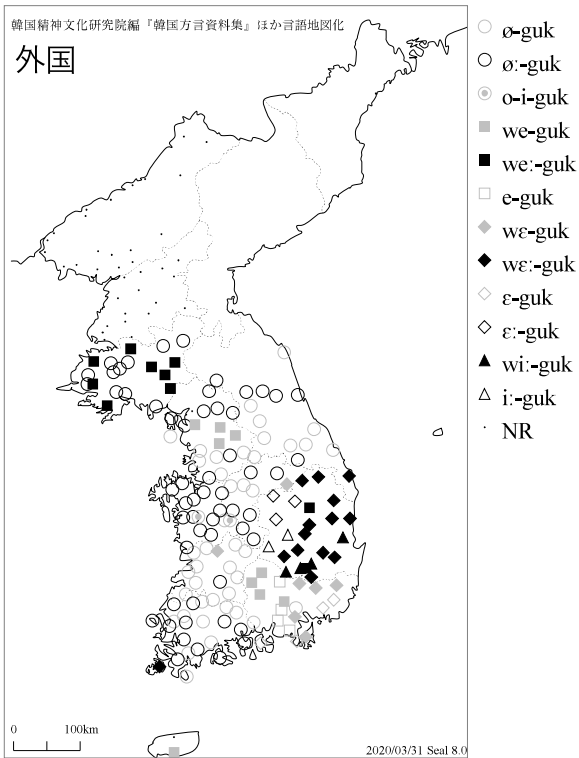
地図 3.18. 鼠(蝙蝠)



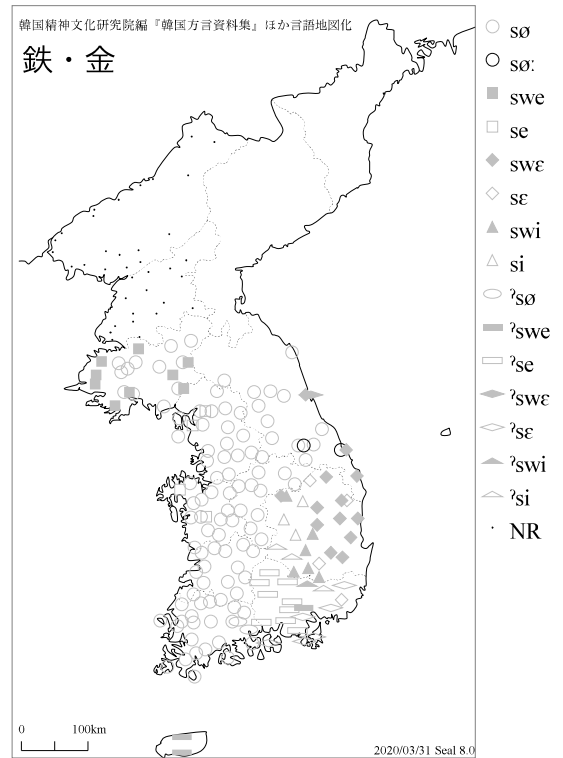
地図 3.19. 耳(耳(卑称)・耳輪)



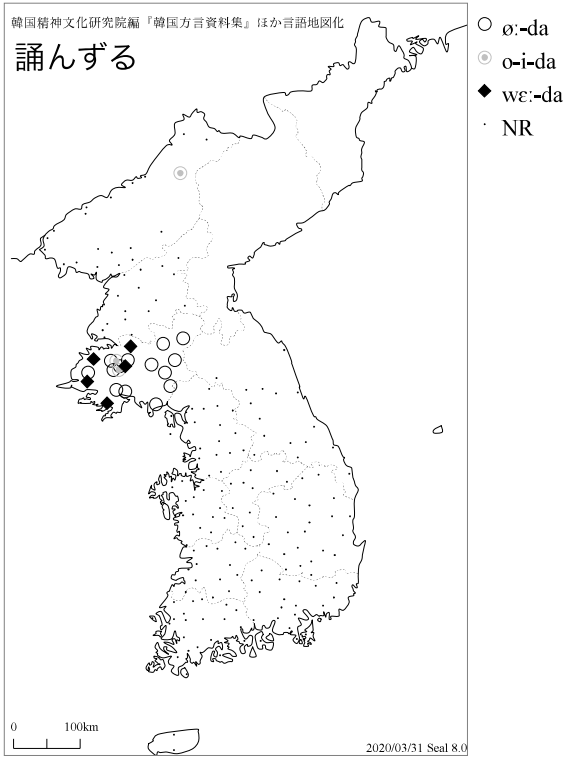
地図 3.20. 耳



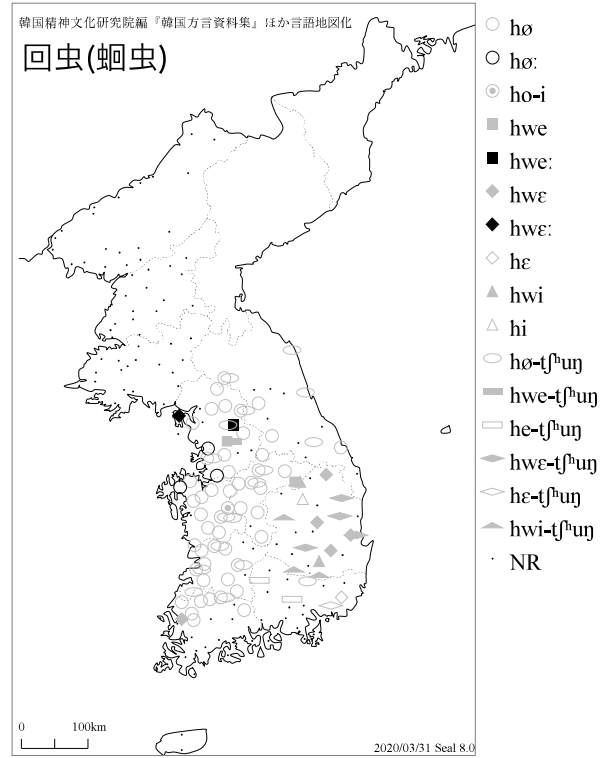
地図 3.21. 外



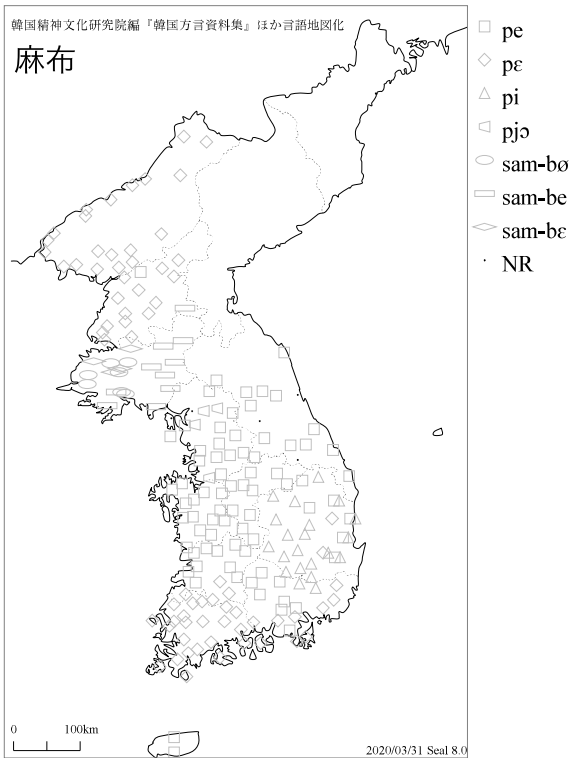
地図 3.22. 鉄・金



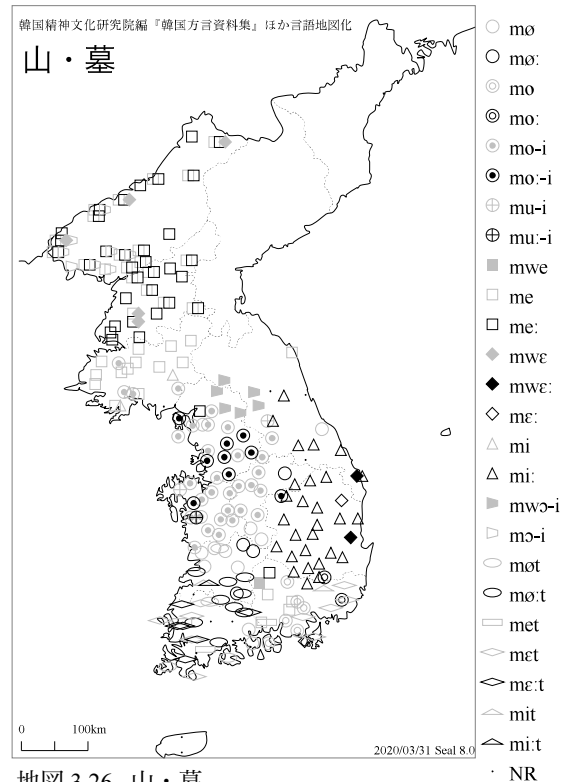
地図 3.23. 誦んずる



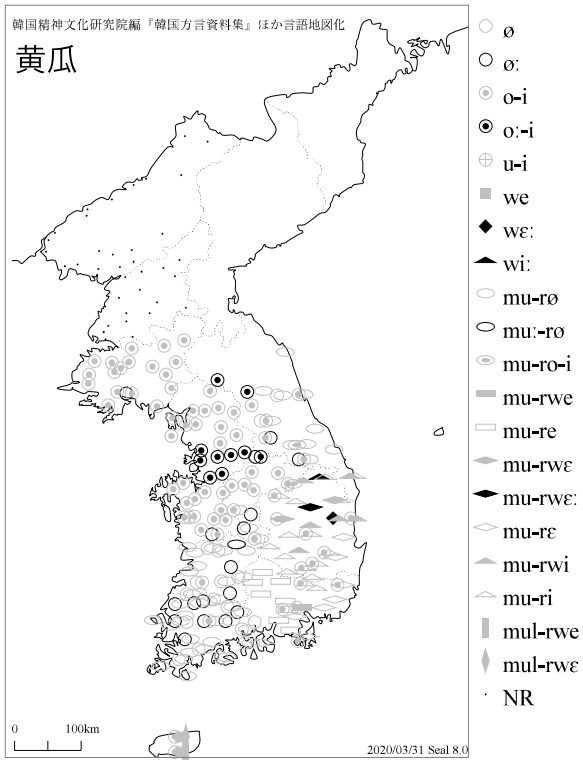
地図 3.24. 回虫(蛔虫)



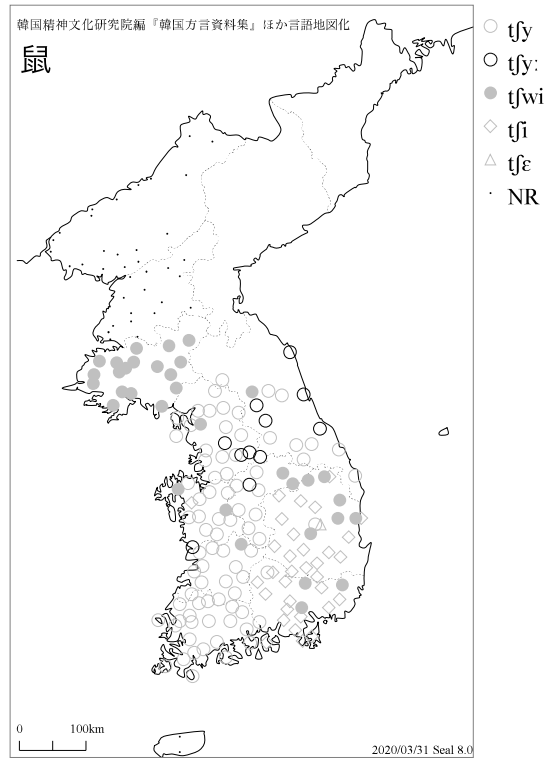
地図 3.25. 麻布



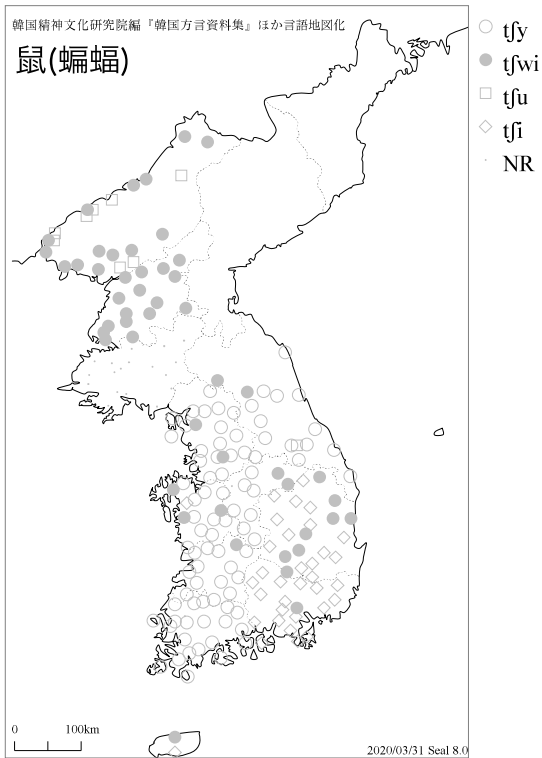
地図 3.26. 山・墓



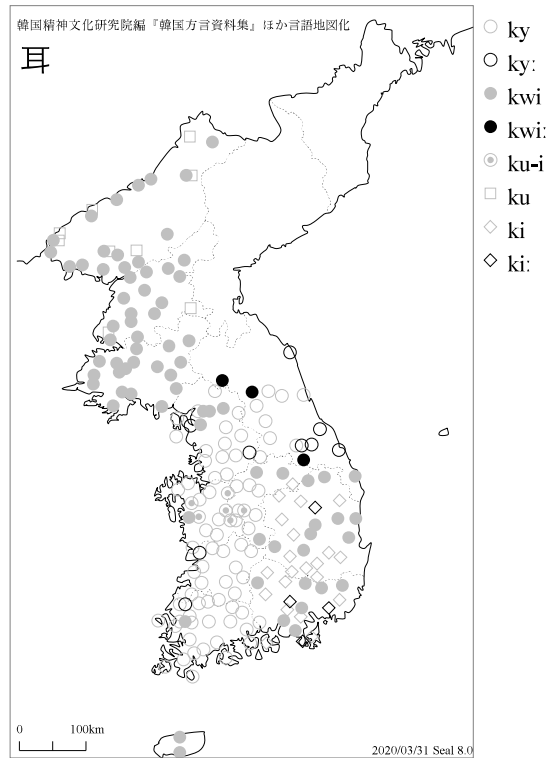
地図 3.27. 黄瓜



地図 3.28. 鼠



地図 3.29. 鼠(蝙蝠)



地図 3.30. 耳

3.4. 考察

まず、小倉進平(1944)所載資料の結果から 20 世紀前半の発音の地域差を記す。次に、韓国精神文化研究院編(1987-1995)・金英培(1977, 1984)所載資料の結果から 20 世紀後半の発音の地域差を記す。そして、以上の対照から 20 世紀前後半での発音の変化を考察する。

3.4.1. ‘ㅍ’の発音の変化

分析対象は「外(外国)」, 「鉄・金」, 「誦んずる」, 「回答(蛔虫)」, 「麻布」, 「山・墓」, 「黄瓜」の 7 項目である。「外(外国)」は小倉進平(1944)所載資料の「外」と韓国精神文化研究院編(1987-1995)・金英培(1984)所載資料の「外国」を対象に考察する。「回答(蛔虫)」は小倉進平(1944)所載資料の「回答」と韓国精神文化研究院編(1987-1995)所載資料の「蛔虫」を対象に考察する。以上 7 項目のうち「外(外国)」, 「鉄・金」, 「誦んずる」, 「回答(蛔虫)」の 4 項目は後期中世語から現代語まで綴りが‘ㅍ’であり、「麻布」, 「山・墓」, 「黄瓜」の 3 項目は後期中世語の綴りが‘ㅍ’である。このうち「麻布」は後期中世語から現代語にかけて綴りが‘ㅍ’>‘ㅂ’のように、「山・墓」は‘ㅍ’>‘ㅂ’のように、「黄瓜」は‘ㅍ’>‘오이’のように綴りが変化した項目である。また、「外(外国)」, 「山・墓」, 「黄瓜」は上声に由来する項目、「外(外国)」, 「回答(蛔虫)」は漢字語の項目、「麻布」, 「山・墓」は頭子音が両唇音の項目であるなど、各項目間の共通点も指摘できる。

まず、小倉進平(1944)所載資料から 20 世紀前半の‘ㅍ’の発音の地域差を記す。「外」, 「鉄・金」, 「誦んずる」, 「回答」の 4 項目における‘ㅍ’の発音の地域差の概略を示すと次のとおりである(表 3.1, 表 3.3, 表 3.5, 表 3.7, 地図 3.1, 地図 3.3, 地図 3.5, 地図 3.7)。

[ɸ] : 全羅, 忠清, 京畿, 江原, 黄海, 咸鏡, 平南

[we] : 济州, 全南, 慶尚, 忠北, 京畿(開城周辺), 江原, 咸鏡

[wɛ] : 慶尚, 咸鏡, 平安

[wi] : 慶尚

このほか, [e], [ɛ], [i]についてはそれぞれ[wɛ], [we], [wi]と同じ地域に現れる傾向がある。また, 「麻布」, 「山・墓」, 「黄瓜」の 3 項目には次のような特徴が確認できる。「麻布」では[ɸ]が黄海, 咸鏡に, [e]が济州, 全羅, 慶尚, 忠清, 京畿, 江原, 黄海に, [ɛ]が全羅, 慶尚, 黄

海, 咸鏡, 平安に, [i]が慶尚に現れる(表 3.9, 地図 3.9)。「山・墓」では[ø]が全北, 忠清, 京畿, 江原, 黄海, 咸南, 平南に, [e]が済州, 全羅, 慶南, 京畿, 江原, 黄海, 平北に, [ɛ]が全南, 慶南に, [i]が慶尚, 忠北, 江原, 黄海に現れるほか, [oi(oj)]が忠清に現れる(表 3.11, 地図 3.11)。「黄瓜」では[ø]が全羅, 忠清, 京畿に, [we]が済州, 全南, 慶尚, 忠北, 江原, 咸鏡に, [we]が慶尚, 咸鏡, 平北に, [wi]が慶尚, 忠北に現れるほか, [oi(oj)]が忠清, 京畿, 黄海, 咸南, 平北に現れる(表 3.13, 地図 3.13)。「麻布」, 「山・墓」, 「黄瓜」の 3 項目を, 「外」, 「鉄・金」, 「誦んずる」, 「回答」の 4 項目と比べると「麻布」と「山・墓」では w 系列の母音が現れないことや「山・墓」と「黄瓜」では中世語の上声に由来する[oi(oj)]が見られることが特異であるが, こうした特異な特徴を除けば母音の地域的特徴は一致するとみて差し支えない。

次に, 韓国精神文化研究院編(1987-1995)・金英培(1977, 1984)所載資料から 20 世紀後半の‘ㅅ’の発音の地域差を記す。「外国」, 「鉄・金」, 「回虫(蛔虫)」の 3 項目における‘ㅅ’の発音の地域差の概略を示すと次のとおりである(表 3.2, 表 3.4, 表 3.8, 地図 3.2, 地図 3.4, 地図 3.8)。

[ø] : 全羅, 慶南, 忠清, 京畿, 江原, 黄海

[we] : 済州, 慶尚, 京畿, 黄海

[we] : 全南, 慶尚

[wi] : 慶北

このほか, [e], [ɛ], [i]についてはそれぞれ[we], [we], [wi]と同じ地域に現れる傾向がある。また, 「誦んずる」では[oi(oj)]が黄海, 平北に, [we]が黄海に現れる(表 3.6, 地図 3.6)。「麻布」, 「山・墓」, 「黄瓜」の 3 項目については韓国精神文化研究院編(1987-1995)・金英培(1977, 1984)所載資料から次のことが分かる。「麻布」では[ø]が黄海に, [e]が済州, 全北, 慶尚, 忠清, 京畿, 江原, 黄海, 平南に, [ɛ]が全羅, 慶尚, 黄海, 平安に, [i]が慶尚に現れる(表 3.10, 地図 3.10)。「山・墓」では[ø]が全羅, 忠清, 京畿に, [e]が全南, 慶南, 京畿, 江原, 黄海, 平安に, [ɛ]が全南, 慶尚, 平安に, [i]が全北, 慶尚, 忠北, 江原, 黄海に現れるほか, [oi(oj)]が慶北, 忠清, 京畿, 江原, 黄海に, [oi(oj)]が京畿, 江原, 平北に現れる(表 3.12, 地図 3.12)。「黄瓜」では[ø]が全羅, 慶南, 忠清, 江原, 黄海に, [we]が済州, 慶南に, [we]が済州, 慶尚

に, [wi]が慶尚に現れるほか, [oi(oj)]が全道(データの無い咸鏡と平安を除く)に現れる(表 3.14, 地図 3.14)。「麻布」, 「山・墓」, 「黄瓜」の3項目を「外国」, 「鉄・金」, 「誦んずる」, 「回虫(蛔虫)」の4項目と比べると「麻布」と「山・墓」ではw系列の母音が現れにくいことや「山・墓」と「黄瓜」では上声由来の[oi(oj)]が見られることなどが特異である。そのほか, 長母音が記録される地点がある(地図 3.21~3.27)。長母音が広範囲に見られる「外」, 「山・墓」, 「黄瓜」の3項目は後期中世語の上声に由来するものである。このほかの項目で長母音が現れている場合も中世語以来の発音[oi(oj)]に由来しているものと思われる。

以上の母音の地域差から20世紀の前後半における‘i’の発音の変化を考察する。小倉進平(1944)所載資料にのみ現れるものを「前」, 韓国精神文化研究院編(1987-1995)・金英培(1977, 1984)所載資料にのみ現れるものを「後」, 対照する2つの資料に現れるものを「○」で示すと次のとおりである(表 3.21~3.27)。なお, 灰色の部分是一方の資料または両方の資料がない地域である。江原の一部と咸鏡については20世紀後半の分析資料がないため, 咸鏡は全ての項目で灰色に塗られている。また, 平安には分析対象に該当する語形が少ないので灰色に塗られている項目が多い。

表 3.21. 外(表 3.1)と外国(表 3.2)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| [ø] | | ○ | ○ | 後 | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 前 | 前 | 前 | 前 |
| [oi(oj)] | | | | | | | 後 | | | | | | | |
| [we] | ○ | 前 | | 後 | ○ | 前 | 前 | ○ | 前 | 後 | 前 | 前 | | |
| [e] | | 前 | | ○ | | 前 | 前 | | 前 | 前 | | 前 | | |
| [we] | | 後 | 後 | ○ | ○ | | 後 | | | | | 前 | | 前 |
| [e] | | | | ○ | ○ | | | | | | 前 | 前 | 前 | |
| [wi] | | | | 前 | ○ | | | | | | | | | |
| [i] | | | | 前 | ○ | | | | | | | | | |

表 3.22. 鉄・金(表 3.3)と鉄・金(表 3.4)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| [ø] | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 前 | | 前 | |
| [we] | ○ | 前 | | ○ | 前 | | 前 | 前 | 前 | 後 | | | | |
| [e] | | 前 | | ○ | | 後 | | 後 | | 前 | | | | |
| [we] | | | | | ○ | | | | 後 | | | | | 前 |
| [e] | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| [wi] | | | | ○ | 後 | | | | | | | | | |
| [i] | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |

表 3.23. 誦んずる(表 3.5)と誦んずる(表 3.6)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| [ø] | | 前 | 前 | | | 前 | 前 | 前 | 前 | ○ | 前 | | | |
| [o] | | | | 前 | 前 | | | | | | | | | |
| [oi(oj)] | | | | | | | | | | 後 | | | | 後 |
| [we] | 前 | | | 前 | 前 | | 前 | | | | | | | |
| [e] | 前 | | | 前 | | | | | 前 | | | | | |
| [we] | | | | | | | | | | 後 | | | | |
| [ε] | | | | 前 | | | | | | | | | | |
| [wi] | | | | | | | 前 | | | | | | | |
| [i] | | | | | 前 | | | | | | | | | |

表 3.24. 回答(表 3.7)と回虫(蛔虫)(表 3.8)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| [ø] | | ○ | ○ | 後 | 前 | ○ | ○ | ○ | ○ | 前 | 前 | 前 | 前 | |
| [oi(oj)] | | | | | | 後 | | | | | | | | |
| [jo] | | 前 | 前 | | | | | | | | | | | |
| [we] | | | | 前 | 前 | | ○ | ○ | 前 | | 前 | 前 | | |
| [e] | 前 | 前 | | ○ | 前 | 前 | 前 | | | 前 | | 前 | | |
| [we] | | 後 | | 前 | ○ | | | 後 | | | | 前 | 前 | 前 |
| [ε] | | 前 | | ○ | 前 | | | | | | 前 | 前 | 前 | 前 |
| [wi] | | | | 前 | ○ | | 後 | | | | | | | |
| [i] | | | | 前 | ○ | | | | | | | | | |

表 3.25. 麻布(表 3.9)と麻布(表 3.10)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| [ø] | | | | | | | | | | ○ | 前 | 前 | | |
| [we] | | | | | | | | | | | | 前 | | |
| [e] | ○ | 前 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 前 | 前 | 後 | |
| [ε] | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ | 前 | 前 | ○ | ○ |
| [i] | | | | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| [jo] | | | | | | | | 後 | | | | | | |

表 3.26. 山・墓(表 3.11)と山・墓(表 3.12)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| [ø] | | 後 | ○ | | | ○ | ○ | ○ | 前 | 前 | 前 | | 前 | |
| [o] | | | | 後 | 後 | | | | | | | | | |
| [oi(oj)] | | | | | 後 | ○ | ○ | 後 | 後 | 後 | | | | |
| [ui(uj)] | | | | | | 後 | | | 後 | | | | | |
| [we] | | | | 後 | | | | | | | | | | |
| [e] | 前 | ○ | 前 | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | | | 後 | ○ |
| [we] | | | | | 後 | | | | | | | | 後 | 後 |
| [ε] | | ○ | | ○ | 後 | | | | | | | | | |
| [i] | | | 後 | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | | | | |
| [wɔi(wɔj)] | | | | | | | | 後 | 後 | | | | | |
| [ɔi(ɔj)] | | | | | | | | | | | | | | 後 |

表 3.27. 黄瓜(表 3.13)と黄瓜(表 3.14)

| | 济州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| [ø] | | ○ | ○ | 後 | | ○ | ○ | | ○ | 後 | 前 | | | |
| [oi(oj)] | 後 | 後 | 後 | 後 | 後 | ○ | ○ | ○ | 後 | ○ | 前 | | | 前 |
| [ui(uj)] | | | | | | ○ | | | | | | | | |
| [we] | ○ | 前 | | ○ | 前 | | 前 | | 前 | | 前 | 前 | | |
| [e] | | | | ○ | | | | | | | | 前 | | |
| [wɛ] | 後 | | | 前 | ○ | | | | | | | 前 | | 前 |
| [ɛ] | | | | ○ | 後 | | | | | | 前 | 前 | | |
| [wi] | | | | 前 | ○ | | | | 前 | | | | | |
| [i] | | | | ○ | ○ | | 前 | | | | | | | |

20 世紀前後半の両資料で共通する特徴は次のとおりである。[ø]が全羅，忠清，京畿，江原，黄海に，[we]が济州，慶尚，京畿に，[wɛ]が全南，慶尚に，[wi]が慶北に現れる。このほか，[e]，[ɛ]，[i]についてはそれぞれ[we]，[wɛ]，[wi]と同じ地域に現れる傾向がある。ただし，全羅や慶尚の[(w)ɛ]は，韓国精神文化研究院編(1987-1995)所載資料では E と記録しているように[e]と[ɛ]の区別がない地域の発音とみるのが妥当である。また，平安については「麻布」では 20 世紀前後半を通して[e]が現れ，「山・墓」では 20 世紀前後半を通して[e]が優勢だが，20 世紀後半の資料で[ɛ]なども現れる。

20 世紀前後半の両資料からは以下の三つの相違点が指摘できる。第一に，全南の一部と忠北では 20 世紀前半は[we]が主に現れ，20 世紀後半は[ø]が主に現れる。これを発音の変化とみると，これらの地域で[we]>[ø]が推定できる。[we]>[ø]のような変化を先行研究と比べると，[oi(oj)]>[we]>[ø]の過程の一部や[oi(oj)]>[ø]>[we]>[ø]の過程の一部と解釈できる。ただし，20 世紀後半の資料(韓国精神文化研究院編(1987-1995))では「外国(외국)」を「倭国(외국)」との対比で調査しているので「ㅌ」と「ㅍ」を区別しようと発音すると「ㅌ」が単母音で現れやすい可能性や「外」と「外国」という調査項目の違いが影響した可能性—「外」は「～の外」のように接辞的に用いやすいなどの出現環境の違いが影響する可能性—を考慮する必要がある。

第二に，黄海では 20 世紀前半は[ø]が主に現れ，20 世紀後半は[we](「誦んずる」では[we])または[ø]と[we]の併用が主に現れる。これを発音の変化とみると，黄海では[ø]>[we]が推定できる。[ø]>[we]のような変化を先行研究と比べると，[oi(oj)]>[ø]>[we]または[oi(oj)]>[ø]>[we]>[ø]の過程の一部と解釈できる。なお，20 世紀前半の資料(小倉進平 1944)では「麻布」や「山・墓」といった頭子音が両唇音の項目で[e]が主に現れているので，こうした音環

境では早くに[ø]>[we]([e])のような変化が起きていたと解釈できる。20世紀後半の黄海の資料(金英培 1984)はソウル在住の移住者を対象にした質問紙調査の結果であるので移住先での発音の影響を受けた結果、こうした変化が起きた可能性もあるかもしれない⁸。また、質問紙調査の結果であるということからは被調査者が発音どおりの綴りを答えたのか規範だと考える綴りを選んだのかなどということについて考慮する必要がある。

第三に、20世紀後半の資料では20世紀前半の資料には見られない長母音を記録し、[oi(oj)]が20世紀前半の資料より広範囲に現れることが指摘できる。こうした相違点は20世紀後半に起きた変化を反映しているのではなく、記述の精密さによるものと考えられる。長母音は「外国」、「山・墓」、「黄瓜」といった中世語の上声に由来する項目で広範囲に確認できる。これは‘ㅁ’の発音が短母音から長母音に変化したと解釈できず、20世紀前半の資料(小倉進平 1944)では‘ㅁ’の長短を精密に記述していないのに対し、20世紀後半の諸資料では母音の長短を記述し分けたとみるべきである。むしろ、長母音が観察される地域では20世紀前半も長母音であったと解釈すべきかもしれない。[oi(oj)]は言語地図を見ると20世紀後半にその分布域が広がったようにも見えるが、実際は20世紀前半の資料で未調査だった地点で[oi(oj)]が確認できる。ただし、「黄瓜」では[oi(oj)]が済州、全羅、慶尚などへ分布域が拡大しているようにも見え、標準語形が広がる過程を示しているともみることができるとも思えない。

第一から第三に示した相違点のほかに確認できる違いは項目ごとに議論するのが妥当なものである。たとえば、20世紀前半の資料において「回答」では hjo-dap が、20世紀後半の資料において「蛔虫」では ho-i が現れるが、これらは漢字音の変異音、「外」などの‘ㅁ’の発音の影響、‘ㅁ’を文字どおりに[oi(oj)]と読み上げた可能性などが影響しているものと思われる。20世紀後半の資料において「麻布」では pjo が現れるが、これは pe>pjo(地域的な変化)、po-i>po-i>pjo(非円唇化と母音連続の二重母音化)、mu-mjoŋ(木綿)の語形からの影響などによるものと推察する。また、20世紀後半の資料において「山・墓」では m(w)o-i が現れるが、これは m(w)o-i>m(w)o-i(非円唇化)のような変化が想定される。

以上から、20世紀における‘ㅁ’の発音について[ø]が全羅、忠清、京畿、江原、黄海に、[we]

⁸ 이옥희(2014a, 2014b)はソウル方言などの‘ㅁ’と‘ㅁ’の発音の変化について社会言語学的に分析しており、話者の移動(人口の移動)や話者層の変化(若年層と老年層での発音の違いや若年層と老年層の人口比率の変化)といった言語外的要因がこうした発音の変化の一因であると述べている。

が濟州, 慶尙, 京畿に, [we]が全南, 慶尙に, [wi]が慶北に現れるということが分かる。全南の一部と忠北では[we]>[ø]が, 黄海では[ø]>[we]も推定できる。つまり, 20世紀前後半で発音に変化しない地域もあれば, 変化の方向性が地域により異なる場合もある。これは全道的な視点から発音の変化を捉えることの限界—全道的に共通の発音の変化をするのではないこと—を示すといえるだろう。また, 分析対象とした資料の被調査者が20世紀前半の資料は若年層であり, 20世紀後半の資料は老年層であるが, こうした違いに注目すると, 年を取るとともにこの母音の発音に変化する者もいればそうでない者もあり, このことに地域差があるということも示唆される。ただし, 20世紀前後半の資料では調査者が異なり, 被調査者もおそらく異なることや, 20世紀後半の黄海の資料はソウル移住者を対象にした質問紙調査であることなど, 考慮すべきこともある。

3.4.2. ‘ㅍ’の発音の変化

分析対象は「鼠」, 「鼠(蝙蝠)」, 「耳(耳(卑称)・耳輪)」の3項目である。これら3項目はいずれも後期中世語から現代語まで綴りに‘ㅍ’を含む項目である。このうち, 「鼠(蝙蝠)」は複合語の後部要素に現れる「鼠」を考察の対象にした。この項目では複合語の後部要素, つまり, 非語頭音節, 音節末母音を対象にしていることに注意しておく必要がある。「耳(耳(卑称)・耳輪)」は小倉進平(1944)所載資料では「耳輪」と「耳(卑称)」の項目の語頭音節に現れる「耳」を考察の対象にし, これ以外の資料では「耳」を考察の対象にした。

まず, 小倉進平(1944)所載資料の結果から20世紀前半の‘ㅍ’の発音の地域差の概略を示すと次のとおりである(表3.15, 表3.17, 表3.19, 地図3.15, 地図3.17, 地図3.19)。

[wi] : 全道

[i] : 慶尙

「鼠(蝙蝠)」では[u]が全羅, 京畿, 江原, 黄海, 咸南に現れる。

次に, 韓国精神文化研究院編(1987-1995)所載資料の結果から20世紀後半の‘ㅍ’の発音の地域差の概略を示すと, 次のとおりである(表3.16, 表3.18, 表3.20, 地図3.16, 地図3.18, 地図3.20)。

- [y] : 全羅, 慶尚, 忠清, 京畿, 江原
 [wi] : 濟州, 慶尚, 忠清, 京畿, 江原, 黃海
 [i] : 慶尚, 忠清

このほか、「鼠」は[ɛ]が慶北に、「鼠(蝙蝠)」は[u]が江原に、「耳」は[ui(uj)]が忠清に現れる。また、金英培(1977, 1984)所載資料の結果からは[wɪ]が黄海, 平安に, [u]が平安に現れることが分かる(表 3.16, 表 3.18, 表 3.20, 地図 3.16, 地図 3.18, 地図 3.20)。「鼠」では忠清, 京畿, 江原に, 「耳」ではそれよりも広範囲に長母音が現れる(地図 3.28, 3.30)。なお, 「鼠(蝙蝠)」では長母音が現れないが, これは非語頭音節の母音を対象としているからである(地図 3.29)。

以上の母音の地域差から 20 世紀の前後半における「ㄱ」の発音の変化を考察する。3.4.1 節と同じく, 小倉進平(1944)所載資料にのみ現れるものを「前」, 韓国精神文化研究院編(1987-1995)・金英培(1977, 1984)所載資料にのみ現れるものを「後」, 対照する 2 つの資料に現れるものを「○」で示すと次のとおりである(表 3.28~3.30)。なお, 灰色の部分是一方の資料または両方の資料がない地域である。考察に先立ち, 20 世紀後半の資料では江原の一部と咸鏡に資料がなく, 平安には分析対象に該当する語形が少ないことが考察の限界であることを改めて断っておく。

表 3.28. 鼠(表 3.15)と鼠(表 3.16)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| [y] | | 後 | 後 | 後 | 後 | 後 | 後 | 後 | 後 | | | | | |
| [wi] | 前 | 前 | 前 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 前 | 前 | 前 | 前 |
| [i] | | | | ○ | ○ | 後 | | | | | | | | |
| [ɛ] | | | | | 後 | | | | | | | | | |

表 3.29. 鼠(蝙蝠)(表 3.17)と鼠(蝙蝠)(表 3.18)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黃海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| [y] | | 後 | 後 | | 後 | 後 | 後 | 後 | 後 | | | | | |
| [wi] | ○ | 前 | 前 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 前 | 前 | 前 | 後 | 後 |
| [u] | | ○ | ○ | | | | | 前 | ○ | 前 | 前 | | | 後 |
| [i] | 後 | | | ○ | ○ | 後 | | | | | | | | |

表 3.30. 耳(耳(卑称)・耳輪)(表 3.19)と耳(表 3.20)

| | 濟州 | 全南 | 全北 | 慶南 | 慶北 | 忠南 | 忠北 | 京畿 | 江原 | 黄海 | 咸南 | 咸北 | 平南 | 平北 |
|----------|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| [y] | | 後 | 後 | 後 | | 後 | 後 | 後 | 後 | | | | | |
| [wi] | ○ | ○ | 前 | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | ○ | ○ |
| [ui(uj)] | | | | | | 後 | 後 | | | | | | | |
| [u] | | | | | | | | | | | | | 後 | 後 |
| [i] | | | | ○ | ○ | | 後 | | | | | | | |

20 世紀後半の資料(韓国精神文化研究院編 1987-1995)では 20 世紀前半の資料(小倉進平 1944)には見られない[y]が現れることが両資料の顕著な違いである(表 3.28~3.30)。ただし、[y]が現れる慶尚, 忠清, 京畿, 江原では両資料ともに[wi]が現れる。[y]が現れる慶尚では 20 世紀前半の資料でのみ[wi]が現れる傾向がある。以上から次の二つの解釈が可能である。一つは 20 世紀前半には‘ㅍ’を[wi]で発音していたが, 20 世紀後半には全羅や慶尚・忠清・京畿・江原の一部で[y]で発音するように変化した, つまり, [wi]>[y]の変化が起きたという解釈である。このように解釈すると先行研究の([ui(uj)]>)[wi]>[y]の変化を支持する。もう一つの解釈は小倉進平(1944)では[y]と[wi]の発音の違いを記述し分けず[wi]で記した可能性である。このように解釈すると発音の変化を推定することはできないが, [y]が 20 世紀前半から現れていたということになる。ただし, 小倉進平自身は‘ㅍ’の発音について「もと u・i 両音の合した二重母音であるけれども, 事実上の発音は w と i 母音との結合である場合が少くない」(小倉進平 1931a)と述べたことがある。この「少くない」というのは[wi]以外の発音もあると読めるが, その発音は[ui(uj)]ということか単母音[y]がありえたのか判然としない。これには考慮の余地があるが, ここではこうした考察の限界を指摘するに留める。

[y]と[wi]の発音の違いを除き, 20 世紀前半と後半の資料には顕著な違いがない。これは 20 世紀前後半の間に発音の変化がないこと, つまり, 発音が維持されていることを示唆する。ただし, 20 世紀後半の資料には 20 世紀前半の資料には見られなかった発音が現れることがある。「鼠」の[ɛ]や「耳」の[ui(uj)], [u]がそれにあたるが, これらは 20 世紀の前後半の間に起きた発音の変化ではないであろう。なぜならば, 「鼠」の[ɛ]は 1 地点のみ確認されるからであり, 忠清に現れる「耳」の[ui(uj)]は小倉進平(1944)所載資料に記録していないだけで中世語の発音に由来すると解釈でき, 平安に現れる「耳」の[u]は ku-²te-gi の語頭音節母音を反映していると考えられるからである。なお, ku-²te-gi は kwi-²te-gi の語頭音節の変種である。

3.5. 結論

第2章での議論を承け、本章では20世紀前半の方言資料である小倉進平(1944)所載資料と20世紀後半の方言資料である韓国精神文化研究院編(1987-1995)・金英培(1977, 1984)所載資料を比べることから‘ㄷ’と‘ㄸ’の発音の変化を考察した。‘ㄷ’については「外(外国)」、「鉄・金」、「誦んずる」、「回答(蛔虫)」、「麻布」、「山・墓」、「黄瓜」の7項目を、‘ㄸ’については「鼠」、「鼠(蝙蝠)」、「耳(耳(卑称)・耳輪)」の3項目を考察の対象とした。‘ㄷ’と‘ㄸ’を扱ったのは、一つはこれらの母音が20世紀前半以降に発音が変化しているからであり、また一つは発音の変化の方向性に関して先行研究の見解が必ずしも一致していないからである。また、20世紀前後半の資料を対照することで‘ㄷ’と‘ㄸ’の発音の変化を考察した論考がなかったことにもよる。その結果、次のようなことが分かった。

20世紀前後半の資料における‘ㄷ’の発音の共通点は[ɔ]が全羅, 忠清, 京畿, 江原, 黄海に, [we]が済州, 慶尚, 京畿に, [we]が全南, 慶尚に, [wi]が慶北に現れることである。主な相違点は全南の一部と忠北では20世紀前半は[we]が主に現れ, 20世紀後半は[ɔ]が主に現れること, 一方, 黄海では20世紀前半は[ɔ]が主に現れ, 20世紀後半は[we]あるいは[ɔ]と[we]の併用が主に現れることである。共通点についてはそうした地域では20世紀の間に発音が変化していないことを示唆する。相違点が示唆する発音の変化は全南の一部と忠北での[we] > [ɔ]と黄海での[ɔ] > [we]である。20世紀後半の黄海の資料はソウルに移住した話者を対象に調査されているので, こうしたことが黄海での変化に影響した可能性がある。

20世紀前後半の資料における‘ㄸ’の発音の共通点は[wi]が済州, 全羅, 慶尚, 忠清, 京畿, 江原, 黄海に, [i]が慶尚に現れることである。相違点は20世紀後半の資料では20世紀前半の資料には見られない[y]が全羅, 慶尚, 忠清, 京畿, 江原で現れることであり, 特に全羅では20世紀前半の資料でのみ[wi]が現れる傾向がある。共通点についてはそうした地域では20世紀の間に発音が変化していないことを示唆する。相違点については解釈がむずかしい。つまり, こうした違いを発音の変化とみなして[wi] > [y]の変化が起きたと解釈することもできるが, 20世紀前半の資料(小倉進平 1944)では[y]と[wi]の発音の違いを記述し分けずに[wi]で記しているとみなすと発音の変化を推定することは困難である。

本章の議論は次の三つの点で先行研究に対して新たな知見を与える。第一に, 20世紀の諸方言資料を調査年代の違いを考慮せずに全道的な視点から発音の変化を考察するのは必ずしも適当ではないということである。20世紀前後半の資料でそれぞれ分布が異なる場合

があることを本章の結果は示している。第二に、調査年代の異なる諸資料から発音の変化の方向性を全道的な視点から考察することで各方言を個別に考察していても捉えられない発音の変化が把握できるということである。20 世紀前後半における発音の変化が地域ごとに違うことを本章は示している。第三に、分析対象とした資料の被調査者が 20 世紀前半の資料は若年層であり、20 世紀後半の資料は老年層であるので、これらの資料の被験者を同一話者ととらえると、話者が成長するとともに母音の発音が変化する者もいればそうでない者もあり、このことに地域差があるということが分かる。

今後の研究の方向性は、(1)対象地域(全道か任意の方言か)、(2)研究方法(資料の特徴や調査年代・被調査者属性の異同の反映状況)、(3)変化を推定する根拠などから先行研究を精査し、先行研究とは異なる資料や研究方法からアプローチすることである。あるいは、‘ㅁ’や‘ㄴ’の発音以外の任意のテーマについて本章の研究方法から 20 世紀の間に起きた言語変化について考察することである。

4. ‘ㅁ’と‘ㅂ’の合流と‘ㅓ’と‘ㅕ’の接近の方向性

—ソウル方言での音声実験にもとづいて—

4.1. 序論

若年層ソウル方言単母音ではフォルマント周波数を根拠に‘ㅁ’と‘ㅂ’の合流と‘ㅓ’と‘ㅕ’の接近が示されているが、発音はどのような方向に変化し合流・接近しているのか。フォルマント周波数は合流・接近していても聴取上の区別は保たれているのか。こうした‘ㅁ’と‘ㅂ’および‘ㅓ’と‘ㅕ’の変化の方向性と聴取判断の様相に関する音響分析以外の観点からの議論は不十分である。先行研究とは違う視点からの分析は変化の方向性に関し新たな知見を与え得る。フォルマント周波数に有意差がないことが必ずしも聴取上の区別がないことを意味するのではないため、音響分析と聴取判断を並行して実施し、変化の方向性を観察する必要がある¹。以上の背景を考慮し、第4章では20世紀以降のソウル方言における‘ㅁ’と‘ㅂ’および‘ㅓ’と‘ㅕ’の変化の方向性と聴取判断の様相について次のような検証を行なう。

- (1) 若年層ソウル方言話者の単母音を録音し、音響分析する。
- (2) 一世代以上前の話者の単母音を音響分析した結果を(1)と比較する。
- (3) 韓国語話者と延辺朝鮮語話者に(1)の音声を用いて聴取実験をする。

このうち(2)は先行研究では必ずしも参照されていない報告を引用した点が特色である。(3)は‘ㅁ’と‘ㅂ’の区別を維持する延辺朝鮮語話者を実験協力者として変化の方向性を考察した点が先行研究には見られない本論の特色である²。

¹ 服部四郎(1984: 1-14)は音響分析のみに依拠した研究方法の問題点を詳しく解説している。坂井素思(2016)は鐘の音を例示し「けれども、問題なのは、同じ物理特性があったとしても、同じ感覚を持つかどうかはわからないという点である。その「鐘の音」が柔らかい音なのか硬い音なのか、温かい音なのか冷たい音なのかなどなど、個人によって異なり、集団として同じに感じるとは必ずしもいえない場合もある」(坂井素思 2016: 212)と指摘している。

² 김현기(2009)では延辺朝鮮語話者の単母音を音響音声学的に分析し、韓国語話者の‘ㅁ’と‘ㅂ’のF1の差よりも延辺朝鮮語話者の‘ㅁ’と‘ㅂ’のF1の差の方が大きいと報告している。

以下、本論に入る前に韓国語単母音の‘ㅏ’と‘ㅑ’の合流と‘ㅓ’と‘ㅕ’の接近に関する先行研究を整理する。そして、4.2節で研究の方法を、4.3節で結果を示し、4.4節で‘ㅏ’と‘ㅑ’および‘ㅓ’と‘ㅕ’の変化の方向性と聴取判断の様相を考察する。4.5節は結論、4.6節は特論である。

4.1.1. ‘ㅏ’と‘ㅑ’の合流とその方向性

音響分析された研究に限ってみておくと、先行研究では若年層ソウル・京畿方言話者の単母音のフォルマント周波数を根拠に‘ㅏ’と‘ㅑ’の合流を示している(이재강 1988, S. Ahn 2001, 조성문 2003, 성철재 2004, 황혜정・문승재 2005)。また、H. Lee and M. Zhi(1983)では強勢のない‘ㅏ’と長母音で強勢のある‘ㅑ’で接近していること、B. Yang(1996)では女性の音声で‘ㅏ’と‘ㅑ’が接近していることを報告している。若年層では‘ㅏ’と‘ㅑ’は合流しているが、老年層では‘ㅏ’と‘ㅑ’は合流していないという世代差も示されている(H. Umeda 1995, 최상홍 2006, 박지윤 2011)。地域方言の報告として、성철재(2005)では若年層忠南方言話者で‘ㅏ’と‘ㅑ’が合流していること、김원보(2006)と신우봉・신지영(2012)では済州方言の若年層話者で‘ㅏ’と‘ㅑ’が合流しているが、老年層話者で‘ㅏ’と‘ㅑ’は合流していないという世代差があること、T. Yoon et al.(2015)では老年層話者で‘ㅏ’と‘ㅑ’の区別と合流の様相に方言差があることを報告している。

音響分析と聴取実験の両面から若年層ソウル・京畿方言話者の‘ㅏ’と‘ㅑ’の合流を示している研究もある(H. Chung et al. 1988a, H. Chung et al. 1988b, 문승재 2007)。

‘ㅏ’と‘ㅑ’の合流の方向性について Y. Kang(2016: 12)では男性の音声の‘ㅑ’の F1 が 1940～1980 年前後にかけて小さくなっている(/e/ raising)ことを報告している。

4.1.2. ‘ㅓ’と‘ㅕ’の接近とその方向性

音響分析されたものに限ってみておくと、先行研究では若年層ソウル・京畿方言話者の単母音のフォルマント周波数を根拠に‘ㅓ’と‘ㅕ’の接近を示しており(이재강 1988)、この接近が女性の音声で観察されることを示している(성철재 2004, J. Han and H. Kang 2013, H. Kang and J. Han 2013)。また、H. Lee and M. Zhi(1983)では強勢のない‘ㅓ’と長母音で強勢のある‘ㅕ’で接近していること、조성문(2003: 437)では女性の音声で‘ㅓ’と‘ㅕ’の F1 の違いがないことを報告している。地域方言の報告として、성철재(2005)では若年層忠南方言話者で‘ㅓ’と‘ㅕ’の F1 に有意差がないこと、장혜진・신지영(2006)では若年層大邱方言での‘ㅓ’と‘ㅕ’の接近を報告している。T.

Yoon et al.(2015)では老年層話者で‘ㄷ’と‘ㅌ’の区別と接近の様相に方言差があり、老年層忠清方言話者の女性の音声では‘ㄷ’と‘ㅌ’の F1 で違いがないことを報告している。このほか、H1-H2 に関する研究も見られる(변희경 2018)³。

音響分析と聴取実験の両面から若年層ソウル・京畿方言話者の‘ㄷ’と‘ㅌ’の接近を示している研究もある(문승재 2007, T. Igeta et al. 2014)。윤지현・성철재(2013)では

$$(F1, F2) = (405 \sim 321\text{Hz}, 666 \sim 743\text{Hz})$$

の範囲で 10 個の単母音を作成して聴取実験を行ない

$$(F1, F2) = (342\text{Hz}, 691\text{Hz}) \text{ と } (F1, F2) = (336\text{Hz}, 700\text{Hz})$$

を境に、若年層大田・忠南方言話者は‘ㄷ’と‘ㅌ’の発音を区別していると報告している。

‘ㄷ’と‘ㅌ’の接近の方向性について先行研究では女性の音声で‘ㄷ’が移動し‘ㅌ’に接近していると考察している(H. Kang and J. Han 2013, T. Igeta et al. 2014)。Y. Kang(2016: 12)では男性の音声・女性の音声ともに‘ㄷ’の F1 が 1940～1980 年前後にかけて小さくなり(/o/ raising), ‘ㅌ’の F2 が大きくなる(/u/ fronting)ことを報告している。장혜진・신지영(2006: 27)では若年層大邱方言話者で‘ㄷ’が移動し‘ㅌ’に接近していると考察している。

4.2. 方法

4.2.1. 録音

録音協力者はソウル特別市出身のソウル方言話者 6 人(男性 3 人, 女性 3 人)である。生年は男性が 1997 年, 1998 年, 1999 年各 1 人(平均 1998 年), 女性が 1996 年 1 人, 1997 年 2 人(平均 1997 年)である。

録音は 2015 年 4 月, 6 月, 10 月にソウル特別市内の静かな教室内で実施した。Praat(version 5.4.06)とコンデンサ型外付けマイクで録音した⁴。設定は 1 channel(モノラル), 16 bit(量子化), 22,050 Hz(標本化)である。USB 端子接続型オーディオインターフェイスにマイクを接続し, パソコンに音声を取り込んだ。

³ H1-H2 については 4.2.2.3 節を参照されたい。なお, 先行研究では H1-H2 について統計的に検定されていないが, ‘ㄷ’と‘ㅌ’の H1-H2 の男女別・年代別の平均値と標準偏差を図示したグラフ(변희경 2018: 20)からは, ‘ㄷ’と‘ㅌ’の H1-H2 には男女・年代を問わず有意差はないようであることが分かる。

⁴ Praat は Paul Boersma 氏と David Weenink 氏が開発した音声分析プログラムである。プログラムは次のウェブページからダウンロードした(<http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>)。

録音素材は ‘이’, ‘위’, ‘에’, ‘외’, ‘애’, ‘으’, ‘우’, ‘어’, ‘오’, ‘아’, ‘디리’, ‘뒤리’, ‘테리’, ‘되리’, ‘대리’, ‘드리’, ‘두리’, ‘더리’, ‘도리’, ‘다리’(録音協力者へ提示した順)の 20 語を“나는 ‘___’라고 했다.”(私は‘___’と言った)の‘___’に挿入した 20 文である。これら 20 文を印字した 1 枚の紙を録音協力者に提示し、上から順に 5 回反復して発音してもらった。1 人当たり 100 文、録音協力者 6 人から 600 文を録音した。ふだん話すように発音するようにとだけ言い、録音手順や音量調節以外は録音前に指示していない。録音時に問題があった場合は該当箇所を言い直してもらった。録音後、録音の所感と発音の方法や区別についてヒアリングし、謝礼として日本の菓子を渡した。

4.2.2. 音響分析

Praat(version 5.4.06)を用い、各母音中央付近のフォルマントが安定した箇所の第 1, 第 2, 第 3 フォルマント周波数(F1, F2, F3[Hz]), 各母音中央約 25ms の基本周波数(F0[Hz]), CPP[dB], 各母音の持続時間(duration[ms]), H1-H2[dB]を測定した⁵。測定値から平均値と標準偏差を求めた。F1 と F2 は PlotFormant(version 4.0)で母音図を描いた⁶。‘ㅏ’と‘ㅓ’および‘ㅜ’と‘ㅜ’の測定値は統計学的に検定した⁷。

⁵ CPP については 4.2.2.2 節で、H1-H2 については 4.2.2.3 節で用語の説明をする。

⁶ PlotFormant(version 4.0)は Peter Ladefoged 氏が開発した PlotFormant(version 1.0)をもとに開発された母音図作成プログラムである。値の間隔は Bark スケールである。P. Ladefoged(2003: 130)によると楕円は中心が F1 と F2 の平均値、長軸と短軸を F1 と F2 の標準偏差から求めた 95%信頼楕円である。プログラムは次のウェブページからダウンロードした(<http://www.linguistics.ucla.edu/faciliti/facilities/acoustic/acoustic.html>)。

⁷ ‘ㅏ’と‘ㅓ’および‘ㅜ’と‘ㅜ’の 2 つの測定値の平均値の差を検定した。検定方法は岡田泰栄(1981: 109–111)と武藤真介(1995: 180–181)を参考にした。すなわち、実験結果からそれぞれの標本数を n_1 , n_2 (標本数は十分に多いとする)、測定値の平均値を \bar{x}_1 , \bar{x}_2 , 標準偏差を σ_1 , σ_2 とし、仮説 $H_0: \mu_1 = \mu_2$ (2 つの平均値は等しい)を設定し、

$$z = \frac{\bar{x}_1 - \bar{x}_2}{\sqrt{\sigma_1^2/n_1 + \sigma_2^2/n_2}}$$

で $|z| \geq z_{\alpha/2}$ ならば H_0 を棄却し、 $|z| < z_{\alpha/2}$ ならば H_0 を棄却しない。ここで、 z_{α} は確率 α に対応する標準正規分布の臨界値である。本研究では有意水準 5% ($\alpha = 0.05$) で検定したので、 $z_{\alpha/2} = z_{0.025} = 1.96$ である。なお、鷲尾泰俊(1978)が指摘するように「仮説検定において、「仮説を棄却しない」というのは、仮説を棄却する根拠がないというだけであって、積極的に仮説が正しいということを主張するものではない」(鷲尾泰俊 1978: 43)ことに注意する必要があるだろう。本章の考察では「仮説を棄却しない」を「有意差がない」、「仮説を棄却する」を「有意差がある」と述べる。

4.2.2.1. 先行研究の結果との比較

録音協力者より一世代以上前の単母音のフォルマント周波数を報告する M. S. Han(1963)と梅田博之(1965)の測定値からその平均値と標準偏差を求めた⁸。F1 と F2 をもとに PlotFormant (version 4.0)で母音図を描いた。‘ㄱ’と‘ㄴ’および‘ㄷ’と‘ㄹ’の測定値は統計学的に検定した。

‘ㄱ’と‘ㄴ’の合流と‘ㄷ’と‘ㄹ’の接近の方向性を考察するために M. S. Han(1963), 梅田博之(1965), 録音協力者の F1 と F2 の平均値とその常用対数値から‘ㄷ’と‘ㄹ’, ‘ㄱ’, ‘ㄴ’, ‘ㄷ’, ‘ㄹ’, ‘ㄷ’, ‘ㄹ’の距離を求めた⁹。

4.2.2.2. CPP

CPP(cepstral peak prominence)とは、全体の振幅で標準化されたケプストラム・ピークの振幅の値(a measure of cepstral peak amplitude normalized for overall amplitude(J. Hillenbrand et al. 1994: 772))である。CPP は氣息を測定するために用いられる指標であり、CPP の値が小さいほど氣息が大きく、CPP の値が大きいほど氣息が小さいといわれている(E. R. Thomas 2011: 237–239)。なお、ケプストラム(cepstrum)とはスペクトラム(spectrum)からの造語であり、ケプストラム分析はフーリエ変換により抽出された信号のパワースペクトラムから対数パワースペクトラムを求め、再びフーリエ変換することで作られる対数函数のスペクトラムを通して行なわれる(E. R.

⁸ 一世代以上前の話者の単母音を音響音声学的に研究した論考にはこれらのほか、小幡重一・豊島武彦(1932), B. Kim and H. Fujisaki (1973), H. Lee and M. Zhi (1983), 金基達・梁源植(1985), 이재강(1988)などがある。M. S. Han(1963)と梅田博之(1965)を比較対象としたのは単母音をすべて調査し、話者 1 人に対する音声データが十分あり、フォルマント周波数の測定値を一つずつ報告しており、PlotFormant(version 4.0)で母音図を描くことができるからである。なお、拙稿(2017)では梅田博之(1983)を参照していたが、該当箇所の初出論文は梅田博之(1965)であるのでこのように改めている。

⁹ 単母音間の距離を求めるために‘ㄷ’の F1 と F2 を基準にしたのはそれ以外の単母音と異なり‘ㄷ’の F1 と F2 に世代間で変化がないからである(表 4.1, 図 4.2~4.6, 表 4.3, 表 4.4)。また、F1 と F2 の平均値だけでなく平均値の常用対数を取った値からも距離を求めたのは人間の聴取上の特徴を反映させるためである。なお、本章では 2 点を直線で結んだときの線分の長さを距離として考察する。すなわち、2 点 (x_{f1}, x_{f2}) , (y_{f1}, y_{f2}) の距離 d は

$$d = \sqrt{(x_{f1} - y_{f1})^2 + (x_{f2} - y_{f2})^2}$$

であり、2 点の値の常用対数を取ってから求めた距離 d' は

$$d' = \sqrt{(\log_{10} x_{f1} - \log_{10} y_{f1})^2 + (\log_{10} x_{f2} - \log_{10} y_{f2})^2}$$

である。このほかの距離の取り方については高橋渉(2001: 35–40)などを参照されたい。

Thomas 2011: 237)。

4.2.2.3. H1-H2

H1-H2 とは、第 1 倍音と第 2 倍音の振幅の差(the difference in amplitude between the first and the second harmonics(T. Cho et al. 2002: 198))である。H1(第 1 倍音)の振幅から H2(第 2 倍音)の振幅を引いた値なので正の値または 0 または負の値になる。H1-H2 は発声を観察する指標として用いられており、息漏れ声(breathy voice)では H1 の振幅が H2 の振幅よりも大きくなり、きしみ声(creaky voice)では H1 の振幅よりも H2 の振幅の方が大きくなるといわれている(C. Gobl and A. Ní Chasaide 2010: 394, E. R. Thomas 2011: 234)。つまり、H1-H2 の値が大きいほど息漏れ声であり、値が小さいほどきしみ声であるといえる。なお、韓国語音声研究では平音、濃音、激音と呼ばれる子音の 3 項対立の音響音声学的研究などでこの値が調べられてきた¹⁰。

4.2.3. 聴取実験

聴取実験協力者は韓国語話者 11 人(男性 3 人, 女性 8 人)と延辺朝鮮語話者 10 人(男性 1 人, 女性 9 人)である¹¹。韓国語話者 11 人の出身地は釜山 3 人, 大邱 2 人, ソウル 1 人, 仁川 1 人, 天安 1 人, 大田 1 人, 光州 1 人, 蔚山 1 人で、生年は 1970 年代 1 人, 1980 年代 10 人(平均 1983 年)である。延辺朝鮮語話者 9 人の出身地は延吉 4 人, 龍井 3 人, 琿春 2 人, 吉林 1 人で、生年は 1970 年代 2 人, 1980 年代 4 人, 1990 年代 3 人(平均 1985 年)である。

実験素材は録音協力者 6 人が 5 回ずつ録音したうちの 1, 3, 5 回目の 3 回分の音声から‘이’, ‘에’, ‘애’, ‘으’, ‘우’, ‘어’, ‘오’, ‘아’の 8 単母音を発音した文である。このほか録音協力者 6 人の音声から無作為に 1 文ずつ抽出し、母音の部分を取り取ってブザー音を入れた文を全部で 6 文用意した。単母音を発音した 144 文とブザー音を挿入した 6 文の全 150 文を無作為に並び替え、実験素材とした。

実験は 2016 年 4 月, 5 月, 7 月に東京都 23 区内およびさいたま市内の静かな室内で実施した。パソコンから音声を流した。実験協力者に 1 文を 2 回ずつ聞かせ, “나는 ‘___’라고 했다.” の‘___’に入る語を 9 個の選択肢(‘이’, ‘에’, ‘애’, ‘으’, ‘우’, ‘어’, ‘오’, ‘아’, beep(ブザー音))から 1

¹⁰ Cho et al.(2002)や C. Ito(2017)などを参照されたい。

¹¹ 中国内モンゴル出身の女性 1 人にも聴取実験を行なった。しかし、ほかの実験協力者が韓国語話者か延辺朝鮮語話者であり、1 人だけ出身が異なるので分析対象から除外した。

つ選択してもらった。2回聞いても分からない場合、選択肢と一緒に印字した“다시”(もう一度)を選択するよう実験協力者に指示し、150文をすべて回答してもらった後、該当文を再度聞かせて回答してもらった。実験開始前にブザー音を聞かせて確認し、はじめの10文については音量調節を兼ねて音量が不適切であった場合はこの10文を再度聞かせて実験を続けた。実験後、実験の所感と聴音の方法や区別についてヒアリングし、謝礼として1,000円を渡した。

実験結果は実験協力者を韓国語話者と延辺朝鮮語話者に分け、回答数と回答率を表にまとめた。

4.2.3.1. 音響分析の結果との比較

音響分析で測定された単母音のフォルマント周波数および基本周波数, CPP, 持続時間, H1-H2 を聴取実験で回答された単母音と対応させることで聴取実験の結果の音響音声学的特徴を検討した。測定値から平均値と標準偏差を求めた。F1 と F2 をもとに PlotFormants(version 4.0) で母音図を描いた。‘ㅏ’と‘ㅓ’および‘ㅜ’と‘ㅜ’の測定値は統計学的に検定した。

4.3. 結果

4.3.1. 録音

録音協力者が録音中に飛ばし読みおよび誤読した文が3文あり、‘ㅏ’; ‘ㅓ’; ‘ㅏ’; ‘ㅓ’; ‘ㅓ’; ‘ㅓ’; ‘ㅓ’; ‘ㅓ’の各60文(男性30文, 女性30文)と‘ㅏ’; ‘ㅓ’; ‘ㅓ’の各59文(男性29文, 女性30文)を分析対象とした。このうち‘ㅓ’と‘ㅓ’は録音協力者全員が二重母音で発音し、残りは単母音で発音していたので、‘ㅏ’; ‘ㅏ’; ‘ㅓ’; ‘ㅓ’; ‘ㅓ’; ‘ㅓ’; ‘ㅓ’; ‘ㅓ’を分析対象とした(図4.1)。

録音時, 録音協力者は‘ㅓ’と‘ㅓ’を単母音と二重母音のどちらで発音するか迷うことなく二重母音で発音していた。同様に, ‘ㅏ’と‘ㅓ’および‘ㅜ’と‘ㅜ’の発音に迷ったり躊躇したりすることなく発音に臨んでいた。特に‘ㅏ’と‘ㅓ’は普段区別なく発音しているのでそのように発音したという録音協力者がほとんどであり, 区別して発音してみたがきちんと区別できているかは分からないという者もいた。

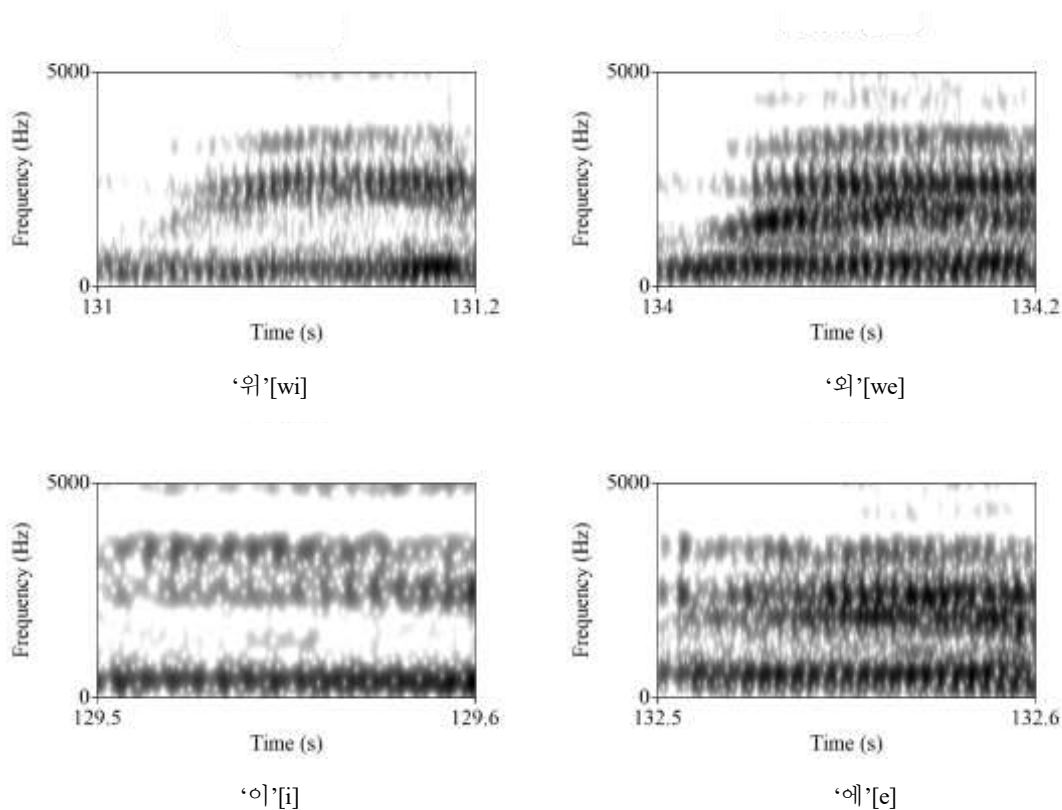


図 4.1. 男性(A 氏)の母音のサウンドスペクトログラム¹²

4.3.2. 音響分析

表 4.1 に F1, F2, F3 の男女別の平均値と標準偏差を, 表 4.1.1 に ‘ㅟ’ と ‘ㅠ’ および ‘ㅢ’ と ‘ㅣ’ の F1, F2, F3 の平均値の差を統計学的に検定した結果を示す。

図 4.2 と図 4.3 は録音協力者の F1 と F2 の測定値をプロットした母音図である。図 4.2 には男性 3 人の測定値を, 図 4.3 には女性 3 人の測定値を, 図 4.2.1~4.2.3 には男性 1 人ずつの測定値を, 図 4.3.1~4.3.3 には女性 1 人ずつの測定値をプロットした。i=‘ㅣ’, e=‘ㅟ’, E=‘ㅠ’, a =‘ㅢ’, O=‘ㅣ’, o=‘ㅤ’, u=‘ㅦ’, U=‘ㅧ’である。

¹² 二重母音と単母音のスペクトログラムを比較するために, 上の 2 枚に ‘ㅟ’ と ‘ㅠ’ のスペクトログラムを, 下の 2 枚に単母音 ‘ㅣ’ と ‘ㅟ’ のスペクトログラムを示す。

表 4.1. 録音協力者の F1, F2, F3 の平均値と標準偏差

| | | 男性 | | | 女性 | | |
|-----|------|--------------|---------------|---------------|--------------|---------------|---------------|
| | | F1 [Hz] | F2 [Hz] | F3 [Hz] | F1 [Hz] | F2 [Hz] | F3 [Hz] |
| ‘ㄱ’ | 平均値 | 321.7 | 2087.6 | 2785.4 | 382.4 | 2924.1 | 3576.5 |
| | 標準偏差 | 53.8 | 228.7 | 246.5 | 54.5 | 269.9 | 312.5 |
| ‘ㅋ’ | 平均値 | 477.4 | 1850.1 | 2487.8 | 550.4 | 2494.5 | 3269.9 |
| | 標準偏差 | 50.6 | 118.8 | 115.3 | 80.7 | 151.4 | 306.8 |
| ‘ㆁ’ | 平均値 | 480.0 | 1875.6 | 2496.9 | 556.4 | 2530.3 | 3277.8 |
| | 標準偏差 | 49.8 | 134.7 | 105.9 | 90.6 | 163.6 | 330.7 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 782.8 | 1287.5 | 2488.8 | 979.6 | 1604.8 | 2910.2 |
| | 標準偏差 | 73.6 | 139.6 | 301.7 | 86.0 | 193.2 | 445.1 |
| ‘ㄸ’ | 平均値 | 551.7 | 967.8 | 2574.4 | 650.0 | 1078.3 | 3092.0 |
| | 標準偏差 | 44.8 | 76.7 | 175.0 | 117.5 | 100.2 | 360.1 |
| ‘ㄴ’ | 平均値 | 400.5 | 819.3 | 1986.2 | 380.2 | 882.0 | 2083.1 |
| | 標準偏差 | 30.4 | 175.3 | 429.3 | 63.8 | 168.6 | 458.9 |
| ‘ㄹ’ | 平均値 | 362.1 | 900.7 | 2223.4 | 375.2 | 1007.8 | 2350.9 |
| | 標準偏差 | 32.0 | 154.3 | 299.8 | 56.9 | 280.6 | 686.0 |
| ‘ㅇ’ | 平均値 | 376.0 | 1425.0 | 2388.0 | 409.9 | 1987.3 | 3039.6 |
| | 標準偏差 | 32.9 | 298.9 | 102.3 | 30.5 | 391.8 | 293.8 |

表 4.1.1. F1, F2, F3 の平均値の差の検定

| 仮説 | 結果(有意水準 0.05) |
|--------------------------|-----------------------------|
| 男性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.20 < 1.96) |
| 男性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.77 < 1.96) |
| 男性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.31 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.27 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.88 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.10 < 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 4.73 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.89 < 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 2.47 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.32 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 2.11 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.78 < 1.96) |

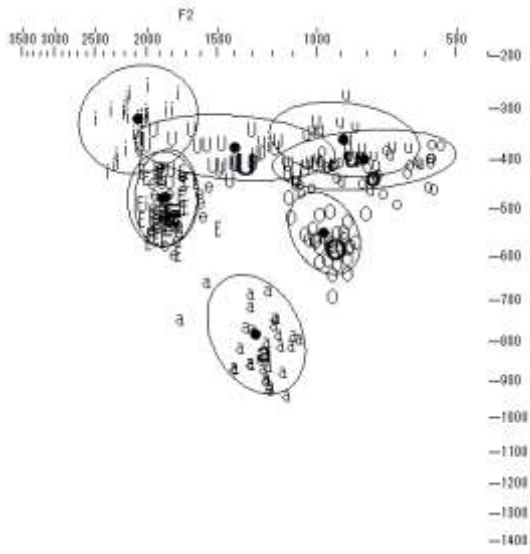


図 4.2. 男性の音声の母音図

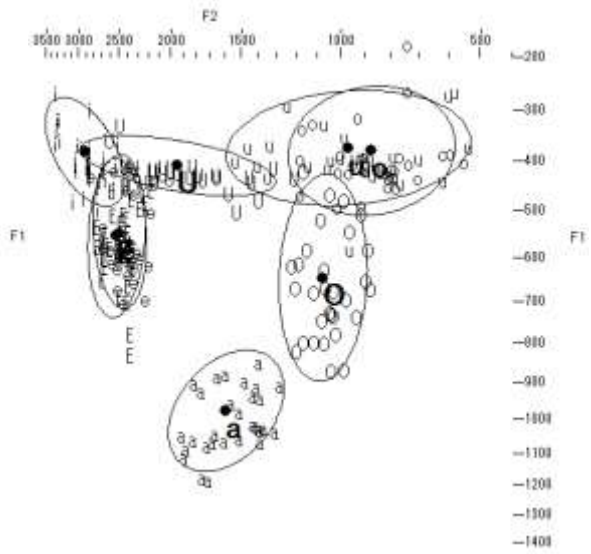


図 4.3. 女性の音声の母音図



図 4.2.1. 男性(A氏)の音声の母音図

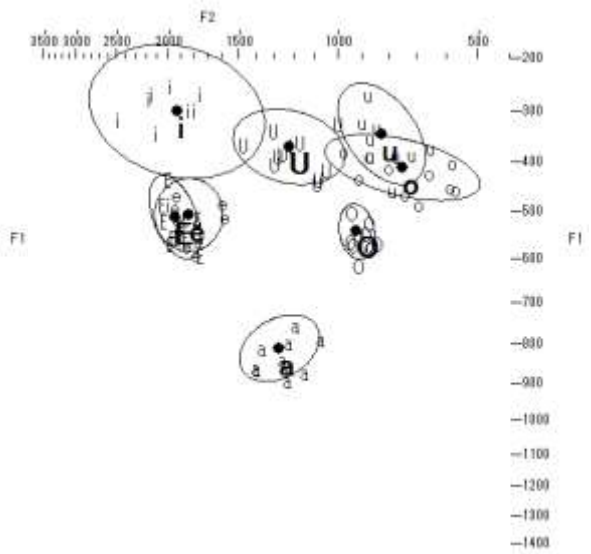


図 4.2.2. 男性(B氏)の音声の母音図

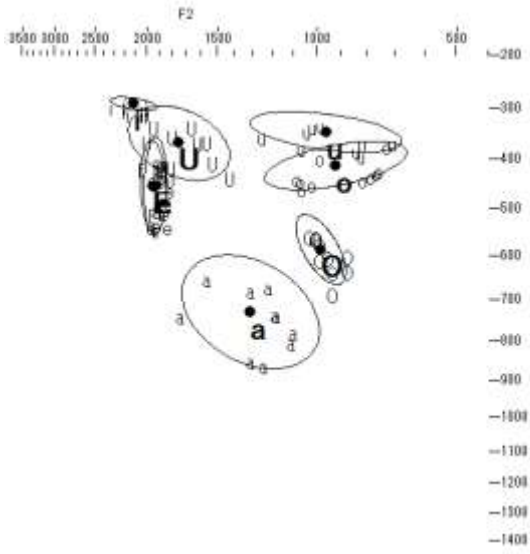


図 4.2.3. 男性(C氏)の音声の母音図

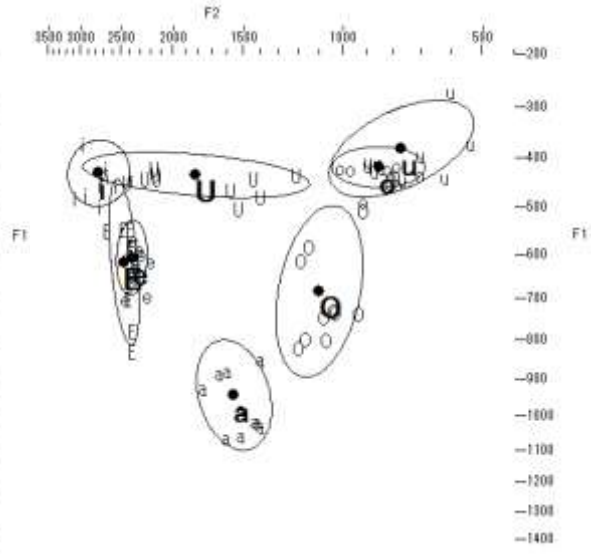


図 4.3.1. 女性(X氏)の音声の母音図

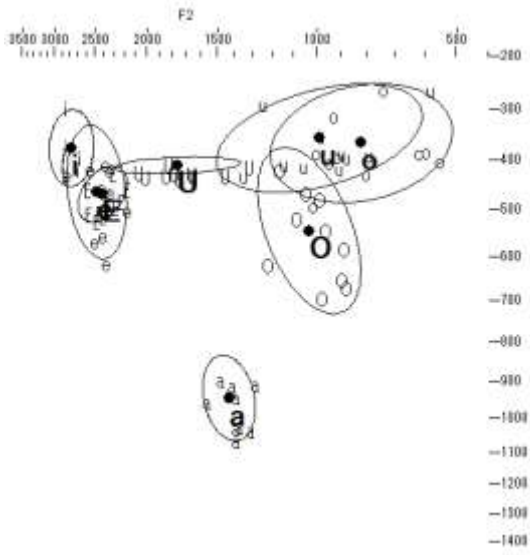


図 4.3.2. 女性(Y氏)の音声の母音図

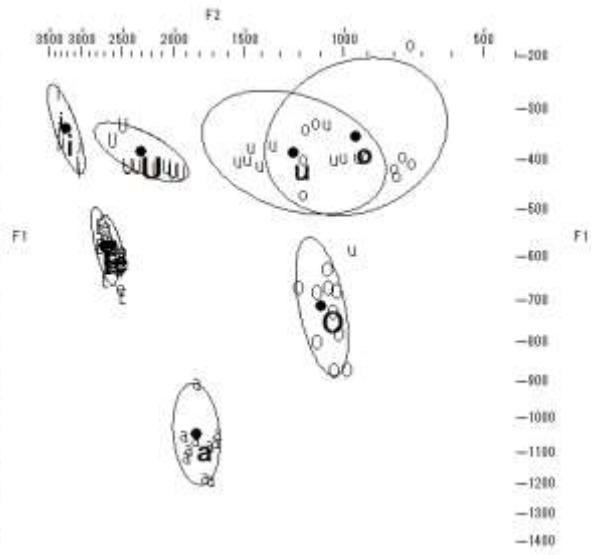


図 4.3.3. 女性(Z氏)の音声の母音図

表 4.2. 録音協力者の F0, CPP, 持続時間, H1-H2 の平均値と標準偏差

| | | F0[Hz] | | CPP[dB] | | 持続時間[ms] | | H1-H2[dB] | |
|-----|------|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|--------------|-------------|-------------|
| | | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 |
| ‘㇀’ | 平均値 | 117.2 | 177.6 | 15.3 | 15.4 | 115.7 | 132.3 | 1.2 | 4.5 |
| | 標準偏差 | 23.8 | 50.3 | 2.4 | 3.7 | 46.4 | 43.4 | 13.6 | 5.3 |
| ‘㇁’ | 平均値 | 121.8 | 162.6 | 16.2 | 15.9 | 149.9 | 164.1 | -3.2 | -0.2 |
| | 標準偏差 | 34.6 | 50.2 | 3.5 | 3.8 | 46.5 | 54.8 | 10.3 | 4.4 |
| ‘㇂’ | 平均値 | 120.3 | 163.9 | 16.9 | 14.8 | 158.1 | 162.4 | -3.3 | -1.0 |
| | 標準偏差 | 28.5 | 50.2 | 4.1 | 3.8 | 47.5 | 46.5 | 7.4 | 8.0 |
| ‘㇃’ | 平均値 | 123.2 | 164.0 | 16.5 | 15.2 | 151.3 | 178.1 | -1.2 | 5.1 |
| | 標準偏差 | 41.0 | 39.5 | 3.6 | 3.4 | 61.3 | 54.6 | 5.6 | 8.0 |
| ‘㇄’ | 平均値 | 114.7 | 179.7 | 16.0 | 16.0 | 155.6 | 175.2 | -1.1 | -3.1 |
| | 標準偏差 | 21.0 | 29.0 | 4.0 | 3.1 | 65.2 | 57.0 | 4.8 | 9.6 |
| ‘㇅’ | 平均値 | 126.7 | 168.6 | 15.2 | 14.6 | 140.1 | 147.6 | -2.1 | -0.3 |
| | 標準偏差 | 28.0 | 50.0 | 3.7 | 3.6 | 56.4 | 57.9 | 5.6 | 7.9 |
| ‘㇆’ | 平均値 | 129.2 | 176.5 | 13.8 | 14.0 | 137.3 | 143.0 | -2.5 | -0.5 |
| | 標準偏差 | 43.7 | 47.0 | 2.7 | 4.1 | 69.9 | 66.1 | 7.0 | 9.6 |
| ‘㇇’ | 平均値 | 122.8 | 174.6 | 15.1 | 15.8 | 133.9 | 143.4 | -3.4 | -1.4 |
| | 標準偏差 | 30.9 | 47.8 | 3.8 | 4.6 | 59.9 | 62.8 | 6.5 | 8.6 |

表 4.2.1. F0, CPP, 持続時間, H1-H2 の平均値の差の検定

| 仮説 | 結果(有意水準 0.05) |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 男性の音声の‘㇁’と‘㇂’の F0 は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.19 < 1.96) |
| 男性の音声の‘㇁’と‘㇂’の CPP は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.71 < 1.96) |
| 男性の音声の‘㇁’と‘㇂’の持続時間は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.67 < 1.96) |
| 男性の音声の‘㇁’と‘㇂’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.06 < 1.96) |
| 女性の音声の‘㇁’と‘㇂’の F0 は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.10 < 1.96) |
| 女性の音声の‘㇁’と‘㇂’の CPP は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.09 < 1.96) |
| 女性の音声の‘㇁’と‘㇂’の持続時間は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.13 < 1.96) |
| 女性の音声の‘㇁’と‘㇂’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.49 < 1.96) |
| 男性の音声の‘㇅’と‘㇆’の F0 は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.27 < 1.96) |
| 男性の音声の‘㇅’と‘㇆’の CPP は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.67 < 1.96) |
| 男性の音声の‘㇅’と‘㇆’の持続時間は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.17 < 1.96) |
| 男性の音声の‘㇅’と‘㇆’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.26 < 1.96) |
| 女性の音声の‘㇅’と‘㇆’の F0 は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.63 < 1.96) |
| 女性の音声の‘㇅’と‘㇆’の CPP は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.60 < 1.96) |
| 女性の音声の‘㇅’と‘㇆’の持続時間は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.28 < 1.96) |
| 女性の音声の‘㇅’と‘㇆’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.08 < 1.96) |

表 4.2 に F0, CPP, 持続時間, H1-H2 の男女別の平均値と標準偏差を, 表 4.2.1 に‘㇁’と‘㇂’および‘㇅’と‘㇆’の F0, CPP, 持続時間, H1-H2 の平均値の差を統計学的に検定した結果を示す。

表 4.3. M. S. Han(1963)の F1, F2 の平均値と標準偏差

| | | 男性 | | 女性 | |
|------|------|--------------|---------------|--------------|---------------|
| | | F1 [Hz] | F2 [Hz] | F1 [Hz] | F2 [Hz] |
| ‘ㄱ’ | 平均値 | 328.7 | 2031.4 | 321.7 | 2843.1 |
| | 標準偏差 | 59.4 | 101.2 | 89.4 | 160.5 |
| ‘ㄴ’ | 平均値 | 340.1 | 2009.0 | 319.9 | 2797.8 |
| | 標準偏差 | 58.2 | 87.2 | 57.0 | 207.0 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 517.5 | 1856.1 | 500.9 | 2590.9 |
| | 標準偏差 | 74.2 | 91.4 | 48.8 | 131.9 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 555.4 | 1730.3 | 506.8 | 2458.0 |
| | 標準偏差 | 81.2 | 151.0 | 55.1 | 195.0 |
| ‘ㅁ’ | 平均値 | 636.9 | 1809.5 | 695.5 | 2410.3 |
| | 標準偏差 | 75.8 | 73.5 | 93.2 | 193.7 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 808.5 | 1307.5 | 950.0 | 1672.2 |
| | 標準偏差 | 40.6 | 45.5 | 81.7 | 147.3 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 527.3 | 1052.8 | 842.2 | 1424.4 |
| | 標準偏差 | 72.5 | 129.0 | 97.1 | 199.0 |
| ‘ㄷ:’ | 平均値 | 556.8 | 1150.4 | 779.3 | 1472.8 |
| | 標準偏差 | 66.3 | 115.5 | 125.6 | 196.8 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 516.6 | 903.1 | 578.9 | 1122.7 |
| | 標準偏差 | 72.1 | 116.8 | 68.1 | 141.0 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 355.6 | 926.4 | 561.9 | 1075.0 |
| | 標準偏差 | 64.2 | 145.1 | 56.9 | 149.0 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 405.0 | 1185.0 | 562.5 | 1615.5 |
| | 標準偏差 | 80.8 | 206.6 | 89.5 | 450.0 |

表 4.3.1. F1 と F2 の平均値の差の検定

| 仮説 | 結果(有意水準 0.05) |
|--------------------------|-----------------------------|
| 男性の音声の‘ㄷ’と‘ㅁ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 10.8 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄷ’と‘ㅁ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 3.90 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄷ’と‘ㅁ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 11.9 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄷ’と‘ㅁ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 5.05 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 17.0 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.32 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.15 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.42 < 1.96) |

4.3.2.1. 先行研究の結果との比較

表 4.3 に M. S. Han(1963)による F1 と F2 の男女別の平均値と標準偏差を, 表 4.3.1 に‘ㄷ’と‘ㅁ’および‘ㄷ’と‘ㄷ’の F1 と F2 の平均値の差を統計学的に検定した結果を示す¹³。

¹³ M. S. Han(1963)の録音協力者は 4 人(男声 3 人, 女性 1 人)で, 出身地はソウルとその近郊である。当時の年齢は男性が 26~32 歳, 女性が 23 歳である。本章で引用したデータは M. S. Han(1963: 35-55)による。韓国語の単語 116 語を引用形で 2~3 回ずつと母音に対立がある 36 組の単語の組を 2~3 回ずつ録音している。

表 4.4. 梅田博之(1965)の F1, F2, F3 の平均値と標準偏差

| | | 男性 | | | | | 男性 | | |
|-----|------|--------------|---------------|---------------|-----|------|--------------|---------------|---------------|
| | | F1 [Hz] | F2 [Hz] | F3 [Hz] | | | F1 [Hz] | F2 [Hz] | F3 [Hz] |
| ‘i’ | 平均値 | 262.0 | 2196.5 | 3186.2 | ‘ɪ’ | 平均値 | 442.6 | 1357.4 | 2559.6 |
| | 標準偏差 | 27.3 | 153.8 | 153.8 | | 標準偏差 | 69.9 | 237.2 | 140.7 |
| ‘e’ | 平均値 | 356.0 | 2059.0 | 2777.3 | ‘ɛ’ | 平均値 | 436.8 | 877.7 | 2733.6 |
| | 標準偏差 | 48.1 | 87.0 | 121.0 | | 標準偏差 | 71.2 | 213.0 | 137.1 |
| ‘ɛ’ | 平均値 | 526.9 | 1928.0 | 2723.6 | ‘ɔ’ | 平均値 | 310.8 | 897.1 | 2502.1 |
| | 標準偏差 | 86.4 | 119.3 | 124.4 | | 標準偏差 | 25.7 | 279.5 | 211.4 |
| ‘ɔ’ | 平均値 | 805.3 | 1317.9 | 2672.5 | ‘a’ | 平均値 | 343.0 | 1415.1 | 2507.7 |
| | 標準偏差 | 131.6 | 130.0 | 161.8 | | 標準偏差 | 35.0 | 182.5 | 126.2 |
| ‘a’ | 平均値 | 579.5 | 1154.7 | 2674.2 | | | | | |
| | 標準偏差 | 161.2 | 189.2 | 129.7 | | | | | |

表 4.4.1. F1, F2, F3 の平均値の差の検定

| 仮説 | 結果(有意水準 0.05) |
|--------------------------|-----------------------------|
| 男性の音声の‘i’と‘ɪ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 15.9 > 1.96) |
| 男性の音声の‘e’と‘ɛ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 8.03 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ɛ’と‘ɔ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 2.74 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ɔ’と‘a’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 16.2 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ɔ’と‘a’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.53 < 1.96) |
| 男性の音声の‘ɔ’と‘a’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 8.73 > 1.96) |

表 4.4 に梅田博之(1965)による F1, F2, F3 の男性の平均値と標準偏差を, 表 4.4.1 に‘i’と‘ɪ’および‘e’と‘ɛ’の F1, F2, F3 の平均値の差を統計学的に検定した結果を示す¹⁴。

図 4.4 と図 4.5 は M. S. Han(1963)の F1 と F2 の測定値をプロットした母音図である¹⁵。図 4.4 には男性 3 人の測定値を, 図 4.5 には女性 1 人の測定値を, 図 4.4.1~4.4.3 には男性 1 人ずつの測定値をプロットした。i=‘i’, e=‘e’, E=‘ɛ’, a =‘a’, O=‘ɔ’(ɔ), O:=‘ɔ’(ɔ), o=‘ɔ’, u=‘u’, U=‘u’である。

図 4.6 は梅田博之(1965)の F1 と F2 の測定値をプロットした母音図である。図 4.6 には男性 2 人の測定値を, 図 4.6.1 と図 4.6.2 には男性 1 人ずつの測定値をプロットした。i=‘i’, e=‘e’, E=‘ɛ’, a =‘a’, O=‘ɔ’(ɔ), O:=‘ɔ’(ɔ), o=‘ɔ’, u=‘u’, U=‘u’である。

¹⁴ 梅田博之(1965)の録音協力者はソウル出身の成人男性 2 人である。本章で引用したデータは梅田博之(1983: 79-95)による。韓国語で可能な CV(子音+母音)を単語単独でそれぞれ 1~3 回ずつ録音している。

¹⁵ M. S. Han(1963)では‘ɪ’と‘ɛ’のフォルマント周波数も測定しており, この 2 母音の値も図に示すことは有意義だと考えるが, これらを一緒にプロットすると図が見にくくなり, これらを図示しなくても以降の議論に影響がないので図中では省略した。

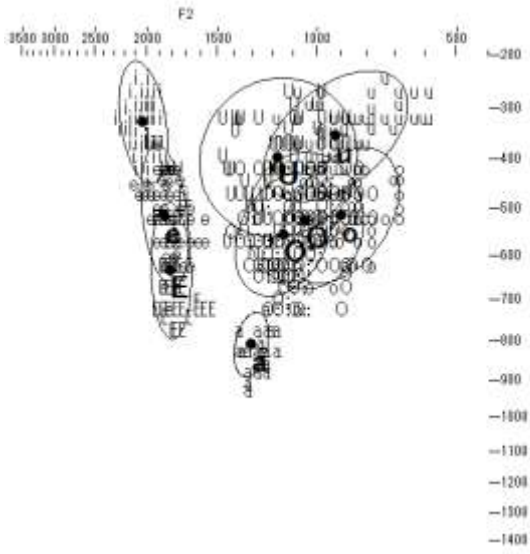


図 4.4. M. S. Han(1963)の男性の音声の母音図

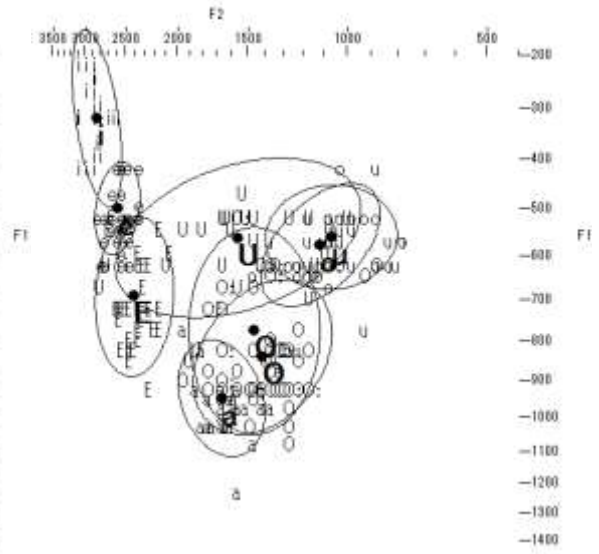


図 4.5. M. S. Han(1963)の女性(O. Minn)の音声の母音図



図 4.6. 梅田博之(1965)の男性の音声の母音図

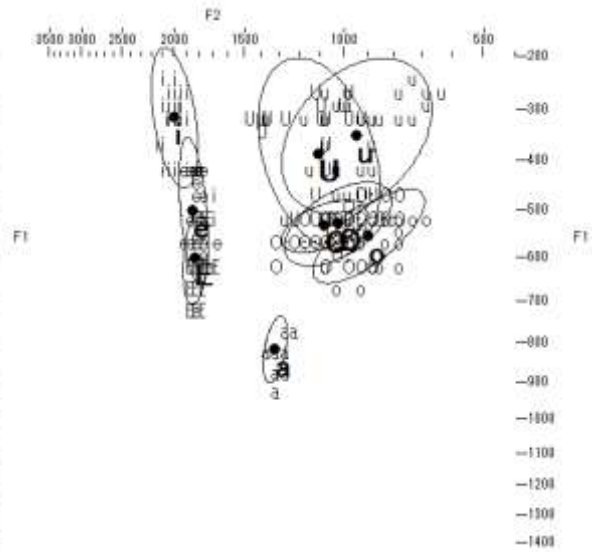


図 4.4.1. M. S. Han(1963)の男性(D. Hahn)の音声の母音図

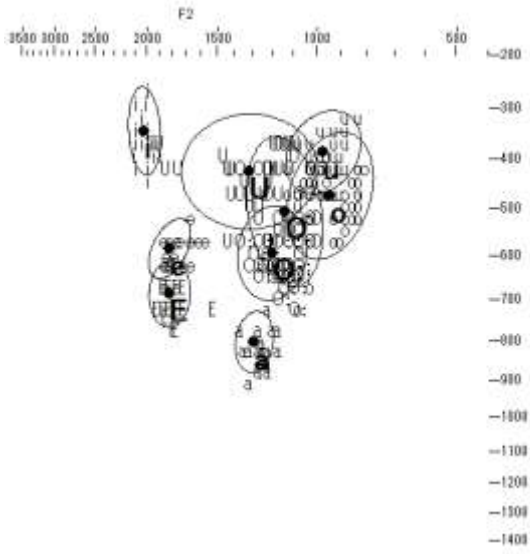


図 4.4.2. M. S. Han(1963)の男性(H. Kim)の音声の母音図

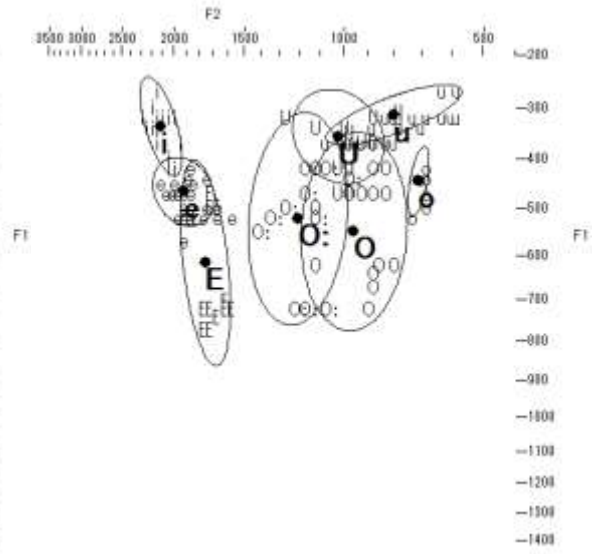


図 4.4.3. M. S. Han(1963)の男性(N. Hou)の音声の母音図¹⁶

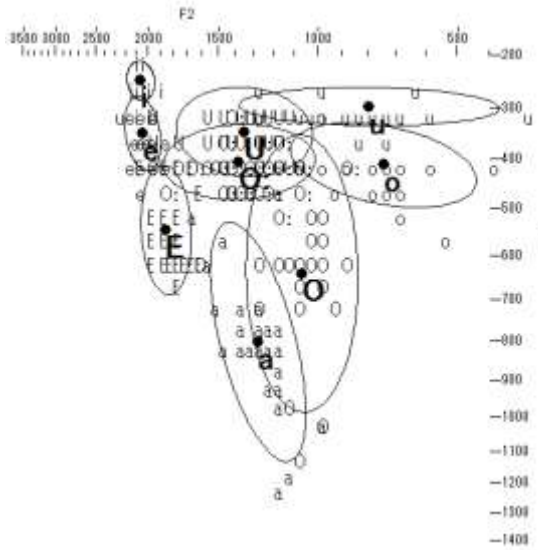


図 4.6.1. 梅田博之(1965)の男性(金氏)の音声の母音図

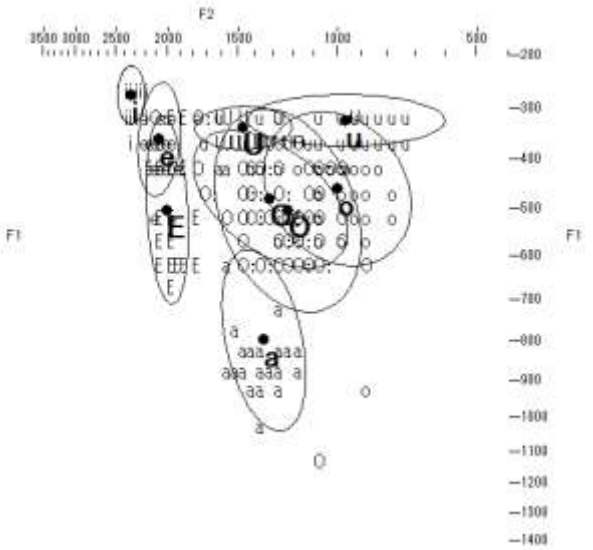


図 4.6.2. 梅田博之(1965)の男性(朴氏)の音声の母音図

¹⁶ M. S. Han(1963)ではこの話者のみ「ト」を調査対象としていないので「a」のデータが存在しない。

表 4.5. 単母音間の距離の比較

| | | 男性 | | | 女性 | |
|---------|-----------|--------------|---------------|--------------|---------------|---------------|
| | | M. S. Han | 梅田博之 | 本研究 | M. S. Han | 本研究 |
| ‘ㄷ’-‘ㄷ’ | Euclid 距離 | 868.4 | 1033.0 | 923.4 | 1328.8 | 1448.2 |
| | 対数値間 | 0.435 | 0.536 | 0.440 | 0.524 | 0.485 |
| ‘ㅈ’-‘ㄷ’ | Euclid 距離 | 621.0 | 866.6 | 640.1 | 1022.6 | 987.8 |
| | 対数値間 | 0.246 | 0.404 | 0.266 | 0.337 | 0.315 |
| ‘ㅊ’-‘ㄷ’ | Euclid 距離 | 530.5 | 670.6 | 661.4 | 780.7 | 1017.7 |
| | 対数値間 | 0.175 | 0.247 | 0.268 | 0.209 | 0.315 |
| ‘ㅌ’-‘ㄷ’ | Euclid 距離 | 379.4 | 278.6 | 394.5 | 270.2 | 621.2 |
| | 対数値間 | 0.208 | 0.154 | 0.196 | 0.087 | 0.248 |
| ‘ㄱ’-‘ㄷ’ | Euclid 距離 | 498.7 | 574.0 | 604.4 | 663.1 | 939.1 |
| | 対数値間 | 0.252 | 0.319 | 0.351 | 0.276 | 0.486 |
| ‘ㄷ’-‘ㄷ’ | Euclid 距離 | 591.9 | 649.3 | 571.5 | 712.2 | 849.6 |
| | 対数値間 | 0.387 | 0.446 | 0.369 | 0.298 | 0.463 |
| ‘ㅇ’-‘ㄷ’ | Euclid 距離 | 421.6 | 472.4 | 429.3 | 391.6 | 686.2 |
| | 対数値間 | 0.303 | 0.372 | 0.321 | 0.228 | 0.390 |

表 4.5 に M. S. Han(1963), 梅田博之(1965), 本研究の単母音の F1 と F2 の平均値とその常用対数値に対する‘ㄷ’と‘ㄷ’, ‘ㅈ’, ‘ㅊ’, ‘ㅌ’, ‘ㄱ’, ‘ㄷ’, ‘ㅇ’の距離を示す。

4.3.3. 聴取実験

表 4.6~4.9 に話者別・音声の男女別の回答数と回答率を示す。表 4.6 には男性の音声, 表 4.7 には女性の音声に対する韓国語話者の結果を, 表 4.8 には男性の音声, 表 4.9 には女性の音声に対する延辺朝鮮語話者の結果を示す。

実験協力者の回答の様子とヒアリングの結果を整理する。‘ㅈ’と‘ㅊ’では韓国語話者の中にすべて‘ㅈ’と回答した者が 1 人(仁川出身), すべて‘ㅊ’と回答した者が 1 人(釜山出身)いた。残りの実験協力者の中には‘ㅈ’と‘ㅊ’の一方だけを回答する者はいなかった。韓国語話者・延辺朝鮮語話者ともに‘ㅈ’と‘ㅊ’を音の強さや音色(柔らかさ)などを手掛かりに区別したと話す実験協力者が複数いた。

‘ㄱ’と‘ㄷ’では両者の一方だけを回答する実験協力者はいなかった。しかし, 韓国語話者・延辺朝鮮語話者ともに紛らわしい音声, 中間的な音色の音声があったと話す者が複数いた。1 回目を聞いただけでは‘ㄱ’なのか‘ㄷ’なのか確信が持てなかったが, 2 回目を聞けば回答できたと話す者も複数いた。‘ㄱ’と‘ㄷ’の二者だけでなく, これらと‘ㅌ’や‘ㅇ’の中に紛らわしい音声があったと話す者も複数いた。

表 4.6. 男性の音声に対する韓国語話者の聴取実験の結果

| | | | 実験協力者が回答した音声 | | | | | | | | |
|--------------|-----|------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-------------------|--------------------|
| | | | ‘ㄱ’ | ‘ㅋ’ | ‘ㆁ’ | ‘ㅌ’ | ‘ㄷ’ | ‘ㄴ’ | ‘ㄹ’ | ブザー | |
| 録音協力者が発音した音声 | ‘ㄱ’ | 回答数 回答率 | 92 0.929 | | | | | 1 0.010 | 1 0.010 | 5 0.051 | |
| | ‘ㅋ’ | 回答数 回答率 | | 47 0.475 | 52 0.525 | | | | | | |
| | ‘ㆁ’ | 回答数 回答率 | | 47 0.475 | 52 0.525 | | | | | | |
| | ‘ㅌ’ | 回答数 回答率 | | | | 99 1.000 | | | | | |
| | ‘ㄷ’ | 回答数 回答率 | | | | 1 0.010 | 98 0.990 | | | | |
| | ‘ㄴ’ | 回答数 回答率 | 1 0.010 | | | | 3 0.030 | 93 0.939 | 2 0.020 | | |
| | ‘ㄹ’ | 回答数 回答率 | | | | | 38 0.384 | 57 0.576 | 4 0.040 | | |
| | ‘ㄹ’ | 回答数 回答率 | | | | | 2 0.020 | 3 0.030 | 94 0.949 | | |
| | ブザー | 回答数 回答率 | | | | | | 1 0.030 | | | 32 0.970 |

表 4.7. 女性の音声に対する韓国語話者の聴取実験の結果

| | | | 実験協力者が回答した音声 | | | | | | | | |
|--------------|-----|------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-----|--------------------|
| | | | ‘ㄱ’ | ‘ㅋ’ | ‘ㆁ’ | ‘ㅌ’ | ‘ㄷ’ | ‘ㄴ’ | ‘ㄹ’ | ブザー | |
| 録音協力者が発音した音声 | ‘ㄱ’ | 回答数 回答率 | 99 1.000 | | | | | | | | |
| | ‘ㅋ’ | 回答数 回答率 | 1 0.010 | 49 0.495 | 49 0.495 | | | | | | |
| | ‘ㆁ’ | 回答数 回答率 | | 45 0.455 | 53 0.535 | | | | 1 0.010 | | |
| | ‘ㅌ’ | 回答数 回答率 | | | | 99 1.000 | | | | | |
| | ‘ㄷ’ | 回答数 回答率 | | | | 1 0.010 | 98 0.990 | | | | |
| | ‘ㄴ’ | 回答数 回答率 | | | | | 95 0.960 | 4 0.040 | | | |
| | ‘ㄹ’ | 回答数 回答率 | 1 0.010 | | | | 21 0.212 | 75 0.758 | 2 0.020 | | |
| | ‘ㄹ’ | 回答数 回答率 | 3 0.030 | | 1 0.010 | | 3 0.030 | | 92 0.929 | | |
| | ブザー | 回答数 回答率 | | | | | | | | | 33 1.000 |

表 4.8. 男性の音声に対する延辺朝鮮語話者の聴取実験の結果

| | | | 実験協力者が回答した音声 | | | | | | | ブザー | |
|--------------|-----|------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
| | | | ‘ㄱ’ | ‘ㅋ’ | ‘ㆁ’ | ‘ㅌ’ | ‘ㄷ’ | ‘ㄹ’ | ‘ㄴ’ | | |
| 録音協力者が発音した音声 | ‘ㄱ’ | 回答数 回答率 | 88 0.978 | | | | | | | 2 0.022 | |
| | ‘ㅋ’ | 回答数 回答率 | | 21 0.233 | 69 0.767 | | | | | | |
| | ‘ㆁ’ | 回答数 回答率 | | 17 0.189 | 73 0.811 | | | | | | |
| | ‘ㅌ’ | 回答数 回答率 | | | | 90 1.000 | | | | | |
| | ‘ㄷ’ | 回答数 回答率 | | | | 6 0.067 | 84 0.933 | | | | |
| | ‘ㄹ’ | 回答数 回答率 | | | | | 1 0.011 | 89 0.989 | | | |
| | ‘ㄴ’ | 回答数 回答率 | | | | | 1 0.011 | 40 0.444 | 45 0.500 | 4 0.044 | |
| | ‘ㄴ’ | 回答数 回答率 | | | | | 3 0.033 | 2 0.022 | 3 0.033 | 81 0.900 | 1 0.011 |
| | ブザー | 回答数 回答率 | | | | | | | | | 30 1.000 |

表 4.9. 女性の音声に対する延辺朝鮮語話者の聴取実験の結果

| | | | 実験協力者が回答した音声 | | | | | | | ブザー | |
|--------------|-----|------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|-----|--------------------|
| | | | ‘ㄱ’ | ‘ㅋ’ | ‘ㆁ’ | ‘ㅌ’ | ‘ㄷ’ | ‘ㄹ’ | ‘ㄴ’ | | |
| 録音協力者が発音した音声 | ‘ㄱ’ | 回答数 回答率 | 90 1.000 | | | | | | | | |
| | ‘ㅋ’ | 回答数 回答率 | | 40 0.444 | 50 0.556 | | | | | | |
| | ‘ㆁ’ | 回答数 回答率 | | 29 0.322 | 61 0.678 | | | | | | |
| | ‘ㅌ’ | 回答数 回答率 | | | | 90 1.000 | | | | | |
| | ‘ㄷ’ | 回答数 回答率 | | | | 1 0.011 | 80 0.889 | 9 0.100 | | | |
| | ‘ㄹ’ | 回答数 回答率 | | | | | 82 0.911 | 8 0.089 | | | |
| | ‘ㄴ’ | 回答数 回答率 | 2 0.022 | | | | 20 0.222 | 62 0.689 | 6 0.067 | | |
| | ‘ㄴ’ | 回答数 回答率 | 1 0.011 | 2 0.022 | | | | 2 0.022 | 85 0.944 | | |
| | ブザー | 回答数 回答率 | | | | 1 0.033 | | | | | 29 0.967 |

表 4.10. 韓国語話者の聴取実験の結果：F1, F2, F3 の平均値と標準偏差

| | | 男性 | | | 女性 | | |
|-----|------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| | | F1 [Hz] | F2 [Hz] | F3 [Hz] | F1 [Hz] | F2 [Hz] | F3 [Hz] |
| ‘ㄱ’ | 平均値 | 347.8 | 2145.4 | 2880.1 | 373.9 | 2940.5 | 3642.7 |
| | 標準偏差 | 61.5 | 353.5 | 291.2 | 75.8 | 362.2 | 244.5 |
| ‘ㅋ’ | 平均値 | 506.6 | 1877.2 | 2533.2 | 570.3 | 2499.4 | 3249.9 |
| | 標準偏差 | 25.3 | 101.2 | 88.5 | 81.9 | 137.6 | 360.0 |
| ‘ㆁ’ | 平均値 | 513.6 | 1872.8 | 2517.1 | 591.4 | 2495.5 | 3257.5 |
| | 標準偏差 | 23.4 | 120.2 | 89.3 | 81.0 | 187.9 | 347.1 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 801.0 | 1211.3 | 2625.9 | 1015.4 | 1531.6 | 2871.4 |
| | 標準偏差 | 60.7 | 51.6 | 163.9 | 67.4 | 170.8 | 635.7 |
| ‘ㄸ’ | 平均値 | 559.5 | 896.7 | 2629.4 | 701.3 | 1018.1 | 3198.4 |
| | 標準偏差 | 48.5 | 42.1 | 180.9 | 67.5 | 90.1 | 273.6 |
| ‘ㄴ’ | 平均値 | 396.6 | 717.9 | 1999.9 | 405.7 | 840.3 | 2286.5 |
| | 標準偏差 | 34.2 | 175.7 | 347.0 | 44.5 | 138.2 | 404.4 |
| ‘ㄹ’ | 平均値 | 362.5 | 839.8 | 2377.7 | 373.1 | 914.6 | 2436.3 |
| | 標準偏差 | 27.4 | 221.4 | 318.7 | 45.5 | 219.5 | 634.2 |
| ‘ㅇ’ | 平均値 | 380.1 | 1336.3 | 2452.8 | 417.5 | 1659.4 | 3025.7 |
| | 標準偏差 | 31.1 | 301.2 | 158.3 | 23.0 | 313.9 | 352.8 |

表 4.10.1. F1, F2, F3 の平均値の差の検定

| 仮説 | 結果(有意水準 0.05) |
|--------------------------|-----------------------------|
| 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 2.02 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.28 < 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.28 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.82 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.16 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.15 < 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 7.50 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 3.84 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 7.54 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 5.00 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 2.69 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.87 < 1.96) |

4.3.3.1. 音響分析の結果との比較

表 4.10 と表 4.11 に音響分析で測定した F1, F2, F3 を聴取実験で回答した(ブザー音を除く)音声に対応させた F1, F2, F3 の男女別の平均値と標準偏差を, 表 4.10.1 と表 4.11.1 に F1, F2, F3 の平均値の差を統計学的に検定した結果を, 話者別に示す。

図 4.7~4.10 は実験協力者の回答した(ブザー音を除く)音声の F1 と F2 の値をプロットした母音図である。図 4.7 には男性の音声, 図 4.8 には女性の音声に対する韓国語話者の回答, 図 4.9 には男性の音声, 図 4.10 には女性の音声に対する延辺朝鮮語話者の回答をプロットした。i=

表 4.11. 延辺朝鮮語話者の聴取実験の結果：F1, F2, F3 の平均値と標準偏差

| | | 男性 | | | 女性 | | |
|-----|------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| | | F1 [Hz] | F2 [Hz] | F3 [Hz] | F1 [Hz] | F2 [Hz] | F3 [Hz] |
| ‘ㄱ’ | 平均値 | 346.6 | 2157.4 | 2890.2 | 371.4 | 2936.1 | 3643.9 |
| | 標準偏差 | 60.1 | 326.6 | 266.1 | 73.9 | 408.0 | 240.1 |
| ‘ㅋ’ | 平均値 | 507.5 | 1878.5 | 2537.7 | 545.9 | 2442.4 | 3147.8 |
| | 標準偏差 | 24.4 | 91.3 | 79.6 | 87.3 | 203.8 | 301.7 |
| ‘ㆁ’ | 平均値 | 511.0 | 1873.9 | 2521.3 | 601.9 | 2523.5 | 3321.5 |
| | 標準偏差 | 24.6 | 116.4 | 91.4 | 71.7 | 152.5 | 365.7 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 788.9 | 1194.7 | 2622.6 | 1015.0 | 1531.0 | 2871.5 |
| | 標準偏差 | 79.1 | 86.9 | 162.4 | 68.3 | 171.9 | 635.4 |
| ‘ㄸ’ | 平均値 | 553.7 | 900.7 | 2628.3 | 706.1 | 1024.4 | 3197.6 |
| | 標準偏差 | 57.0 | 41.5 | 183.5 | 64.2 | 89.4 | 277.6 |
| ‘ㄴ’ | 平均値 | 393.4 | 712.0 | 2014.9 | 428.2 | 841.8 | 2332.6 |
| | 標準偏差 | 37.4 | 103.0 | 343.9 | 82.4 | 111.3 | 471.0 |
| ‘ㄹ’ | 平均値 | 367.4 | 817.6 | 2389.6 | 370.1 | 894.6 | 2399.4 |
| | 標準偏差 | 24.9 | 114.5 | 335.7 | 45.9 | 173.5 | 591.9 |
| ‘ㅇ’ | 平均値 | 381.1 | 1335.4 | 2438.0 | 415.5 | 1634.6 | 3037.1 |
| | 標準偏差 | 28.8 | 279.1 | 128.4 | 23.9 | 342.3 | 358.5 |

表 4.11.1. F1, F2, F3 の平均値の差の検定

| 仮説 | 結果(有意水準 0.05) |
|--------------------------|-----------------------------|
| 男性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.79 < 1.96) |
| 男性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.26 < 1.96) |
| 男性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.09 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 4.52 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 2.88 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㅋ’と‘ㆁ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 3.48 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 5.35 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 5.61 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 6.57 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F1 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 6.11 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F2 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 2.29 > 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄴ’と‘ㄹ’の F3 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.81 < 1.96) |

‘ㄱ’, e=‘ㅋ’, E=‘ㆁ’, a=‘ㄷ’, O=‘ㄸ’, o=‘ㄴ’, u=‘ㄹ’, U=‘ㅇ’である。

表 4.12 と表 4.13 に音響分析で測定した F0, CPP, 持続時間, H1-H2 を聴取実験で回答した(ブザー音を除く)音声に対応させた F0, CPP, 持続時間, H1-H2 の男女別の平均値と標準偏差を, 表 4.12.1 と表 4.13.1 に F0, CPP, 持続時間, H1-H2 の平均値の差を統計学的に検定した結果を, 話者別に示す。

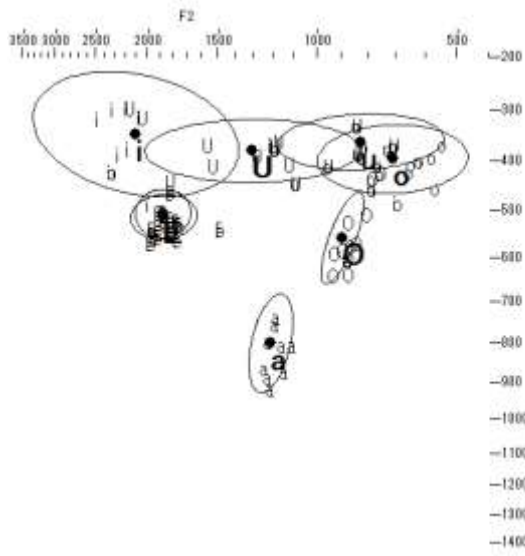


図 4.7. 男性の音声に対する韓国語話者の回答

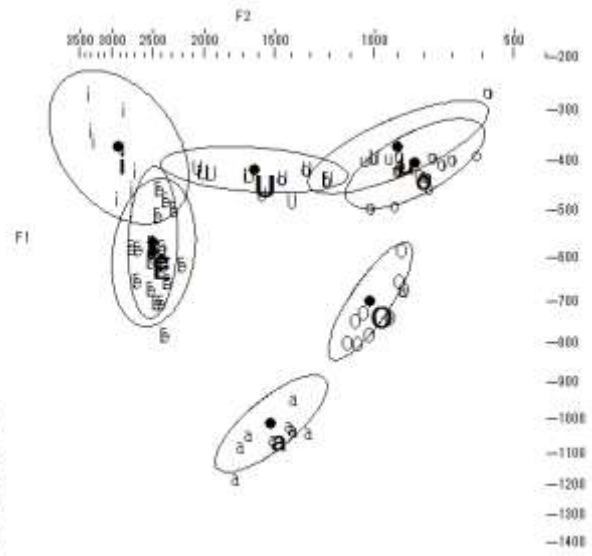


図 4.8. 女性の音声に対する韓国語話者の回答

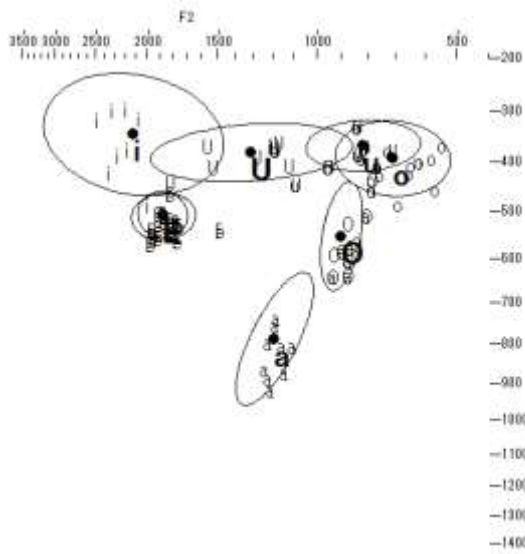


図 4.9. 男性の音声に対する延辺朝鮮語話者の回答

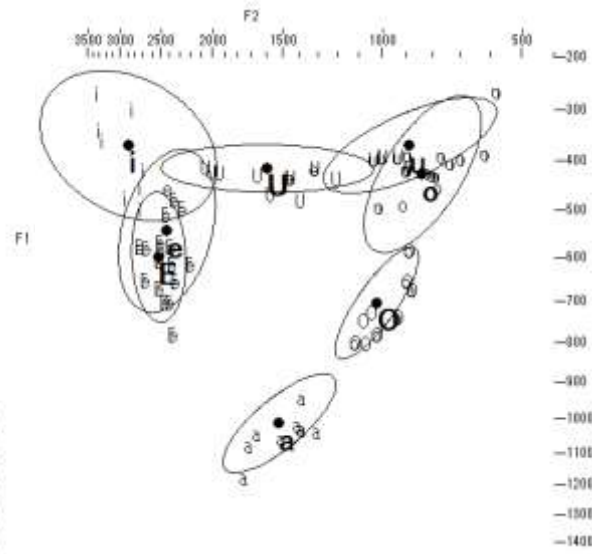


図 4.10. 女性の音声に対する延辺朝鮮語話者の回答

表 4.12. 韓国語話者の聴取実験の結果：F0, CPP, 持続時間, H1-H2 の平均値と標準偏差

| | | F0[Hz] | | CPP[dB] | | 持続時間[ms] | | H1-H2[dB] | |
|-----|------|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|--------------|-------------|-------------|
| | | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 |
| ‘ㄱ’ | 平均値 | 124.7 | 210.6 | 16.4 | 14.6 | 143.6 | 153.1 | -1.0 | 6.3 |
| | 標準偏差 | 24.8 | 18.3 | 3.4 | 3.8 | 45.1 | 54.7 | 6.5 | 5.5 |
| ‘ㅋ’ | 平均値 | 126.5 | 169.0 | 16.8 | 14.6 | 195.7 | 203.4 | -2.8 | -3.5 |
| | 標準偏差 | 36.3 | 45.9 | 4.1 | 3.9 | 26.6 | 48.7 | 12.5 | 8.5 |
| ‘ㆁ’ | 平均値 | 131.1 | 168.3 | 16.2 | 14.0 | 198.8 | 196.4 | -3.9 | -3.8 |
| | 標準偏差 | 38.0 | 49.6 | 3.9 | 4.2 | 28.6 | 46.5 | 11.6 | 8.4 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 120.5 | 185.5 | 16.9 | 15.8 | 201.6 | 207.6 | -1.3 | 5.7 |
| | 標準偏差 | 36.8 | 7.4 | 4.5 | 3.6 | 33.9 | 54.0 | 5.9 | 4.1 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 108.7 | 187.2 | 15.8 | 14.9 | 209.5 | 210.2 | -2.0 | -3.8 |
| | 標準偏差 | 12.9 | 26.4 | 4.7 | 2.9 | 49.9 | 65.1 | 3.5 | 9.9 |
| ‘ㄱ’ | 平均値 | 121.4 | 159.3 | 14.9 | 14.3 | 183.7 | 184.1 | -3.3 | -1.8 |
| | 標準偏差 | 24.7 | 54.8 | 3.3 | 3.0 | 33.2 | 63.1 | 5.3 | 7.1 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 152.6 | 154.6 | 13.3 | 13.0 | 217.3 | 205.3 | -4.0 | -5.5 |
| | 標準偏差 | 49.2 | 64.8 | 3.3 | 3.0 | 41.7 | 60.2 | 6.3 | 15.6 |
| ‘ㄱ’ | 平均値 | 126.1 | 195.1 | 15.4 | 15.3 | 186.1 | 192.4 | -4.6 | -1.0 |
| | 標準偏差 | 39.2 | 30.1 | 4.8 | 4.1 | 44.6 | 58.5 | 6.8 | 7.8 |

表 4.12.1. F0, CPP, 持続時間, H1-H2 の平均値の差の検定

| 仮説 | 結果(有意水準 0.05) |
|--|--|
| 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の F0 は等しい 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の CPP は等しい 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の持続時間は等しい 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.86 < 1.96) 仮説を棄却しない(z = 1.09 < 1.96) 仮説を棄却しない(z = 0.81 < 1.96) 仮説を棄却しない(z = 0.68 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の F0 は等しい 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の CPP は等しい 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の持続時間は等しい 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.12 < 1.96) 仮説を棄却しない(z = 0.93 < 1.96) 仮説を棄却しない(z = 1.03 < 1.96) 仮説を棄却しない(z = 0.24 < 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㄷ’の F0 は等しい 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㄷ’の CPP は等しい 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㄷ’の持続時間は等しい 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㄷ’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 4.75 > 1.96) 仮説を棄却する(z = 3.05 > 1.96) 仮説を棄却する(z = 5.63 > 1.96) 仮説を棄却しない(z = 0.74 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㄷ’の F0 は等しい 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㄷ’の CPP は等しい 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㄷ’の持続時間は等しい 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㄷ’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.53 < 1.96) 仮説を棄却する(z = 2.97 > 1.96) 仮説を棄却する(z = 2.39 > 1.96) 仮説を棄却しない(z = 1.94 < 1.96) |

表 4.13. 延辺朝鮮語話者の聴取実験の結果：F0, CPP, 持続時間, H1-H2 の平均値と標準偏差

| | | F0[Hz] | | CPP[dB] | | 持続時間[ms] | | H1-H2[dB] | |
|-----|------|--------------|--------------|-------------|-------------|--------------|--------------|-------------|-------------|
| | | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 | 男性 | 女性 |
| ‘ㄱ’ | 平均値 | 125.6 | 211.6 | 16.4 | 14.4 | 144.2 | 152.5 | -0.8 | 6.6 |
| | 標準偏差 | 25.0 | 17.1 | 3.4 | 3.8 | 44.7 | 54.3 | 6.6 | 4.9 |
| ‘ㅋ’ | 平均値 | 121.5 | 161.7 | 16.7 | 14.3 | 196.1 | 197.7 | -5.3 | -1.7 |
| | 標準偏差 | 30.2 | 48.0 | 4.3 | 3.3 | 28.8 | 42.2 | 13.6 | 6.1 |
| ‘ㆁ’ | 平均値 | 130.9 | 173.3 | 16.4 | 14.3 | 197.7 | 202.2 | -2.9 | -5.0 |
| | 標準偏差 | 38.7 | 46.9 | 3.9 | 4.5 | 27.4 | 50.2 | 11.6 | 9.4 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 119.7 | 185.5 | 16.8 | 15.8 | 201.7 | 207.5 | -1.2 | 5.7 |
| | 標準偏差 | 36.0 | 7.4 | 4.4 | 3.6 | 34.6 | 54.0 | 5.8 | 4.1 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 111.1 | 187.0 | 15.6 | 15.0 | 209.7 | 208.5 | -1.9 | -4.0 |
| | 標準偏差 | 17.5 | 25.0 | 4.8 | 2.9 | 49.7 | 66.5 | 3.6 | 10.4 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 122.4 | 154.8 | 14.7 | 14.3 | 186.3 | 185.1 | -3.9 | -2.1 |
| | 標準偏差 | 24.7 | 56.2 | 3.5 | 3.0 | 34.8 | 62.0 | 5.9 | 6.5 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 157.8 | 162.5 | 13.5 | 12.9 | 213.3 | 205.4 | -2.5 | -3.0 |
| | 標準偏差 | 54.1 | 63.8 | 3.2 | 3.1 | 41.9 | 61.1 | 4.4 | 14.6 |
| ‘ㄷ’ | 平均値 | 121.4 | 194.3 | 15.7 | 15.4 | 189.0 | 193.1 | -5.1 | -1.3 |
| | 標準偏差 | 35.9 | 29.3 | 4.8 | 4.0 | 46.2 | 60.1 | 6.5 | 8.2 |

表 4.13.1. F0, CPP, 持続時間, H1-H2 の平均値の差の検定

| 仮説 | 結果(有意水準 0.05) |
|--|--|
| 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の F0 は等しい 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の CPP は等しい 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の持続時間は等しい 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.61 < 1.96) 仮説を棄却しない(z = 0.38 < 1.96) 仮説を棄却しない(z = 0.31 < 1.96) 仮説を棄却しない(z = 1.01 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の F0 は等しい 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の CPP は等しい 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の持続時間は等しい 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㆁ’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 1.61 < 1.96) 仮説を棄却しない(z = 0.06 < 1.96) 仮説を棄却しない(z = 0.65 < 1.96) 仮説を棄却する(z = 2.90 > 1.96) |
| 男性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の F0 は等しい 男性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の CPP は等しい 男性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の持続時間は等しい 男性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却する(z = 4.37 > 1.96) 仮説を棄却する(z = 2.15 > 1.96) 仮説を棄却する(z = 3.99 > 1.96) 仮説を棄却しない(z = 1.63 < 1.96) |
| 女性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の F0 は等しい 女性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の CPP は等しい 女性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の持続時間は等しい 女性の音声の‘ㄷ’と‘ㄷ’の H1-H2 の値は等しい | 仮説を棄却しない(z = 0.83 < 1.96) 仮説を棄却する(z = 2.98 > 1.96) 仮説を棄却する(z = 2.19 > 1.96) 仮説を棄却しない(z = 0.54 < 1.96) |

4.4. 考察

4.4.1. ‘ㄱ’と‘ㄴ’の合流とその方向性

本研究の録音協力者の音声について次のことが分かる。‘ㄱ’と‘ㄴ’の F1, F2, F3 には有意差がない(表 4.1, 表 4.1.1)。個人差はあるが, ‘ㄱ’と‘ㄴ’の楕円がほとんど重なる(図 4.2, 図 4.3)。以上は先行研究の見解に一致する。また, ‘ㄱ’と‘ㄴ’の F0, CPP, 持続時間, H1-H2 には有意差がない(表 4.2, 表 4.2.1)。

本研究の録音協力者よりも一世代以上前の音声について次のことが分かる。‘ㄱ’と‘ㄴ’の F1, F2, F3 に有意差がある(表 4.3, 表 4.3.1, 表 4.4, 表 4.4.1)。個別の結果を見ると, 図 4.4.1, 図 4.4.2 では‘ㄱ’と‘ㄴ’の F1 に有意差はあるが, F2 に有意差はない。図 4.4.3, 図 4.5, 図 4.6.1, 図 4.6.2 では‘ㄱ’と‘ㄴ’の F1 と F2 には有意差があり, ‘ㄴ’の楕円が‘ㄱ’の楕円より縦長で, ‘ㄴ’が‘ㄱ’付近に分布する場合と F1 が‘ㄱ’より大きい場所に分布する場合がある¹⁷。

本研究の録音協力者とそれよりも一世代以上前の結果を比べると次のことが分かる。‘ㄷ’はほかの単母音より F1 と F2 が世代間で変化がない(表 4.1, 図 4.2~4.6, 表 4.3, 表 4.4)。よって, ‘ㄷ’とそれ以外の母音間の距離を比べる。M. S. Han(1963)と本研究とを比べると‘ㄴ’が‘ㄱ’に向かって合流していることを示唆する(表 4.5)。これは先行研究の見解に一致する。一方, 梅田博之(1965)と本研究とを比べると‘ㄱ’が‘ㄴ’に向かって合流していることを示唆する(表 4.5)。梅田博之(1965)の結果は‘ㄷ’の F1 が M. S. Han(1963)や本研究より小さい点も特徴である(表 4.1, 図 4.2~4.6, 表 4.3, 表 4.4)。

聴取実験の結果から次のことが分かる。韓国語話者は‘ㄱ’と‘ㄴ’をおよそ五分五分で聴取するのに対し, 延辺朝鮮語話者は‘ㄱ’と‘ㄴ’をおよそ‘ㄴ’に偏って聴取する(表 4.6~4.9)。この結果は韓国語話者と延辺朝鮮語話者で聴取の傾向が異なり, 延辺朝鮮語話者は‘ㄴ’を選好することを示唆する。これは先行研究には見られない観察結果である。

音響分析の結果を加味して聴取実験の結果を考察すると次のことが分かる。韓国語話者では男性の音声の‘ㄱ’と‘ㄴ’の F1 に有意差はあるが, 男性の音声の F2, F3 と女性の音声の

¹⁷ M. S. Han(1963: 84-87)では‘ㄱ’と‘ㄴ’のフォルマントを考察し, ‘ㄱ’と‘ㄴ’が語頭と語中では区別されるが語末ではほとんど合流する, 単独または語末の‘ㄱ’の F1 が上昇する, 語末の‘ㄱ’と‘ㄴ’はほとんどの場合‘ㄱ’(男性 D.Hahn の場合のみ‘ㄴ’)の領域で合流するという環境の違いと合流の方向性を指摘する。こうした指摘は語末では‘ㄴ’が‘ㄱ’に向かって合流している可能性が高いことを示唆するが, 本研究で対象としたような語頭の場合については検討の余地があるといえる。

F1, F2, F3 には有意差がない(表 4.10, 表 4.10.1), ‘ㄱ’と‘ㄴ’の楕円がほとんど重なる(図 4.7, 図 4.8), 男性の音声・女性の音声ともに‘ㄱ’と‘ㄴ’の F0, CPP, 持続時間, H1-H2 に有意差がない(表 4.12, 表 4.12.1)ということが分かる。それに対し, 延辺朝鮮語話者では男性の音声の‘ㄱ’と‘ㄴ’の F1, F2, F3 に有意差はないが, 女性の音声の F1, F2, F3 には有意差がある(表 4.11, 表 4.11.1), 男性の音声の‘ㄱ’と‘ㄴ’の楕円は重なるが, 女性の音声の楕円に若干の違いが確認できる(図 4.9, 図 4.10), 女性の音声の‘ㄱ’と‘ㄴ’の H1-H2 に有意差はあるが, 男性の音声の H1-H2 および男性の音声・女性の音声の F0, CPP, 持続時間には有意差がない(表 4.13, 表 4.13.1)ということが分かる。したがって, 韓国語話者は‘ㄱ’と‘ㄴ’の発音の違いを聞き分けないと考えられるのに対し, 延辺朝鮮語話者は女性の音声の‘ㄱ’と‘ㄴ’の発音を聞き分ける可能性がある。この理由には録音協力者の男性の音声より女性の音声の方が F1 と F2 の標準偏差が大きいこと(表 4.1), 聴取実験協力者 10 人中 9 人が女性であること, 延辺朝鮮語の‘ㄱ’と‘ㄴ’の発音が違うことが考えられる。さらに, 延辺朝鮮語の‘ㄱ’と‘ㄴ’の発音がソウル方言で区別されていた‘ㄱ’と‘ㄴ’の発音と等しいと仮定すると, 延辺朝鮮語話者が聴取上‘ㄴ’を選好し, 女性の音声で‘ㄱ’と‘ㄴ’の発音を聞き分ける可能性があることは, ‘ㄱ’が‘ㄴ’に向かって合流しているという根拠の一つになり得る。‘ㄱ’が‘ㄴ’に向かって合流するという見解は‘ㄴ’が‘ㄱ’に向かって合流するという先行研究の見解と異なる。これには Y. Kang(2016: 12)では男性の音声の‘ㄴ’の F1 の値が小さくなってきているという音響上の特徴を指摘しているが, 聴覚上の判断を考慮に入れて‘ㄱ’と‘ㄴ’の合流の方向性を考察してはいないという方法上の違いが関与する可能性がある。この点, 本研究の延辺朝鮮語話者の聴取実験の結果は延辺朝鮮語の‘ㄱ’と‘ㄴ’の発音がソウル方言で区別されていた‘ㄱ’と‘ㄴ’の発音と等しいと仮定すると, 聴取判断から‘ㄱ’と‘ㄴ’の合流の方向性に対して新たな知見を与え得ると考える¹⁸。

4.4.2. ‘ㄷ’と‘ㄸ’の接近とその方向性

本研究の録音協力者の音声について次のことが分かる。‘ㄷ’と‘ㄸ’の男性の音声の F2 と女性の音声の F1, F3 に有意差がない(表 4.1, 表 4.1.1)。男性の音声より女性の音声で‘ㄷ’と‘ㄸ’

¹⁸ 聴取印象をもとに‘ㄱ’と‘ㄴ’の合流の方向性に言及する指摘として李崇寧(1954b: 152)では「요사이 점점 이 ‘애’자를 [e]음으로 발음하기 시작한 듯이 귀에 거슬리는 발음을 흔히 들을 때가 있다(最近だんだんとこの‘애’の字を[e]の音で発音し始めたかのように気に障る発音をよく聞くことがある)」と述べる。

の楕円が重なる割合が大きい(図 4.2, 図 4.3)。以上は先行研究の見解に一致する。また, ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ の F0, CPP, 持続時間, H1-H2 には有意差がない(表 4.2, 表 4.2.1)。

本研究の録音協力者よりも一世代以上前の音声について次のことが分かる。男性の音声では ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ の F1, F3 に有意差があり F2 に有意差がない(表 4.3, 表 4.3.1, 表 4.4, 表 4.4.1)。女性の音声では ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ の F1 と F2 に有意差がない(表 4.3, 表 4.3.1)。したがって, 性別による ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ の F1 と F2 の分布の様子の違いと, 女性の音声での ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ の接近の様子が確認できる。個別の結果を見ると, 男性の音声では ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ の楕円が重なる場合もあるが, ‘ㄷ’ の F1 と ‘ㅌ’ の F1 がおよそ同じ値を, ‘ㄱ’ の F1 と ‘ㅋ’ または ‘ㆁ’ の F1 がおよそ同じ値を取って区別される(図 4.4.1~4.4.3, 図 4.6.1, 図 4.6.2)。他方, 女性の音声では ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ の楕円が重なり, ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ の F1 と ‘ㅋ’ または ‘ㆁ’ の F1 がおよそ同じ値を取る(図 4.5)。これは ‘ㄷ’ が ‘ㄱ’ に向かって接近していることを示唆し得る。‘ㄷ’ が ‘ㄱ’ に向かって接近しているという考察は ‘ㄱ’ が ‘ㄷ’ に向かって接近しているという先行研究の見解とは一致しない。この理由には H. Kang and J. Han(2013)や T. Igeta et al.(2014)の研究が対象とする話者と M. S. Han(1963)の研究が対象とする話者の間の世代差が関与する可能性がある。M. S. Han(1963)の結果が話者の個人的特徴に過ぎないという可能性, 当時のフォルマント周波数測定では倍音の低い部分が測りにくかった可能性も否定しない。

本研究の録音協力者とそれよりも一世代以上前の結果を比べると次のことが分かる。‘ㅋ’ と ‘ㆁ’ の考察と同様に ‘ㅌ’ とそれ以外の母音間の距離を比べる。M. S. Han(1963)と本研究とを比べると男性の音声では ‘ㄱ’ の F1 が小さく変化して ‘ㄷ’ に接近することを示唆する(表 4.1, 図 4.2, 表 4.3, 図 4.4, 表 4.5)。これは先行研究の見解に一致する。一方, 梅田博之(1965)と本研究とを比べると ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ がともに移動し接近することを示唆する(表 4.5)。女性の音声では M. S. Han(1963)で既に ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ が接近しているが, M. S. Han(1963)と本研究からは ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ の F1 が小さく変化していることが分かる(表 4.1, 図 4.3, 表 4.3, 図 4.5, 表 4.5)。M. S. Han(1963)と本研究の男性の音声と女性の音声を総合して捉えるならば, ‘ㄱ’ の F1 が小さくなって ‘ㄱ’ と ‘ㄷ’ が接近しているとも解釈でき, これは先行研究の見解に一致する。

聴取実験の結果から次のことが分かる。韓国語話者・延辺朝鮮語話者ともに ‘ㄱ’ は合致率が 9 割以上である(表 4.6~4.9)。同じく, 韓国語話者・延辺朝鮮語話者ともに男性の音声に対する ‘ㄷ’ の合致率は約 5~6 割であり, 約 4 割が ‘ㄷ’ を ‘ㄱ’ と回答している(表 4.6, 表 4.8)。女性の音声に対する ‘ㄷ’ の合致率は約 7~8 割であり, 約 2 割が ‘ㄷ’ を ‘ㄱ’ と回答している(表

4.7, 表 4.9)。したがって、韓国語話者と延辺朝鮮語話者で聴取の傾向は似ており、男性の音声か女性の音声かで聴取の傾向が異なっている。

音響分析の結果を加味して聴取実験の結果を考察すると次のことが分かる。韓国語話者・延辺朝鮮語話者ともに‘ㄷ’と‘ㅌ’の男性の音声の F1, F2, F3 と女性の音声の F1, F2 に有意差があり、女性の音声の F3 に有意差がない(表 4.10, 表 4.10.1, 表 4.11, 表 4.11.1)。音響分析では‘ㄷ’と‘ㅌ’の男性の音声の F2 と女性の音声の F1, F3 に有意差がなかったが、聴取実験では‘ㄷ’と‘ㅌ’の男性の音声の F1, F2, F3 と女性の音声の F1, F2 に有意差がある。また、音響分析では‘ㄷ’と‘ㅌ’の F0, CPP, 持続時間, H1-H2 に有意差はなかったが、聴取実験では韓国語話者・延辺朝鮮語話者ともに男性の音声の F0 と男性の音声・女性の音声の CPP と持続時間に有意差があり、女性の音声の F0 と男性の音声・女性の音声の H1-H2 には有意差がない(表 4.12, 表 4.12.1, 表 4.13, 表 4.13.1)。したがって、韓国語話者・延辺朝鮮語話者ともに‘ㄷ’と‘ㅌ’の発音の違いを聞き分けていると考えられる。これには윤지현・성철재(2013)が指摘するようにフォルマント周波数に聴取上の境界が存在する可能性のほか、本研究で示した F0, CPP, 持続時間, H1-H2 などが関わっている可能性もあるかもしれない。ただし、本研究の聴取実験に用いた音声は実際に若年層ソウル方言話者が発音した音声をそのまま用いており、フォルマント周波数などの値を調節していないので、精緻な研究は今後の課題である。‘ㄷ’をほかの母音と聴取することはほとんどないのに対し、‘ㅌ’は‘ㄷ’と混同して聴取する傾向があるということからは、聴取上の特性を有する可能性や‘ㅌ’の中でも‘ㄷ’の音響特徴に近い音声は‘ㄷ’と聴取され、‘ㅌ’が‘ㄷ’に向かって接近している可能性が考えられる。これは‘ㄷ’が‘ㅌ’に向かって接近すると解釈する先行研究の見解とは異なるが、この理由には先行研究では音響分析に基づいて接近の方向性を考察しているのに対し、本研究では聴取判断の様相をもとに考察するという方法上の違いが関与する可能性がある。母音の聴取における方言差や地域差の可能性も考えられる。実際、‘ㄷ’や‘ㅌ’の発音と周辺の母音の発音との聴取上の混同や方言音声の聴取上の特性を報告する先行研究もある¹⁹。なお、ソウル方言

¹⁹ H. Umeda and D. Kim(1970)では声道模型から合成音声を作って聴取実験をし、‘ㄷ’の合致率は 100%、‘ㄷ’と‘ㅌ’の合成音声と‘ㄷ’と‘ㅌ’の合成音声のうち‘ㄷ’に最も近い音声の‘ㄷ’の合致率は約 90%であるのに対し、‘ㅌ’の合致率は 60%、‘ㅌ’と‘ㄷ’の合成音声のうち‘ㅌ’に最も近い音声の‘ㅌ’の合致率は 40%、この合成音声を‘ㄷ’と聴取した割合が 37%であったことを報告している。この結果は‘ㄷ’をほかの母音と聴取することはほとんどないのに対し、‘ㅌ’はほかの母音と混同して聴取する傾向があるという聴取上の特徴を有する可能性を示唆する。また、H. Chung et al.(1988b)ではソウル方言話者と慶尚方言話者の音声を用いた聴

では語尾‘-고’を‘-구’のように発音表記することがあるように第 2 音節以降での‘ㄷ’と‘ㅌ’の交替が観察されるが、本研究で対象としたのは第 1 音節単母音である。こうした環境の違いに関する検証も課題となる。

4.5. 結論

本章では過去の研究結果を活用し、韓国語話者と延辺朝鮮語話者に対して聴取実験を実施することから‘ㅁ’と‘ㅂ’および‘ㄷ’と‘ㅌ’の変化の方向性と聴取判断の様相を考察した。その結果、次のような新たな知見を得た。まず、過去の音響分析の研究結果の中には現在から一世代以上前の女性の音声で‘ㅌ’が‘ㄷ’に向かって接近していると解釈するのが妥当なデータがあることが明らかとなった。次に、本研究の聴取実験と音響分析の結果から延辺朝鮮語話者は若年層ソウル方言話者の女性の音声の‘ㅁ’と‘ㅂ’を‘ㅁ’と認識しやすいこと、韓国語話者も延辺朝鮮語話者も若年層ソウル方言話者の‘ㅌ’を‘ㄷ’と認識しやすいことが明らかとなった。こうした聴取実験の結果は延辺朝鮮語や韓国語諸方言の単母音の発音がソウル方言で‘ㅁ’と‘ㅂ’の合流や‘ㄷ’と‘ㅌ’の接近を示す以前のものと同しかったと仮定するならば、‘ㅁ’が‘ㅂ’に向かって合流していることと‘ㅌ’が‘ㄷ’に向かって接近していることを示唆し得る。最後に、音響分析の結果は‘ㅁ’と‘ㅂ’の合流と‘ㄷ’と‘ㅌ’の接近を示しているのに対し、聴取実験の結果は延辺朝鮮語話者が‘ㅁ’と‘ㅂ’の発音を聞き分けると考えられること、韓国語話者も延辺朝鮮語話者も‘ㄷ’と‘ㅌ’の発音を聞き分けると考えられることを示している。

以上の考察が示唆することの一つは過去の研究結果を活用する意義である。また、韓国語話者と延辺朝鮮語話者で‘ㅁ’と‘ㅂ’の聴取判断の様相が違ふというような聴取の方言差は今後の研究課題に値すると考える。‘ㄷ’と‘ㅌ’の変化の方向性と聴取判断の様相に関する本研究の結果が示唆することは、ソウル方言話者の‘ㄷ’の F1 と F2 が‘ㅌ’の F1 と F2 に接近するという事実が‘ㄷ’の発音が‘ㅌ’に向かって接近するという先行研究の見解の必要条件であるが十分条件ではないということである。今後‘ㅁ’と‘ㅂ’の合流と‘ㄷ’と‘ㅌ’の接近の方向性を

取実験をし、ソウル方言話者の音声では‘ㄷ’と‘ㅌ’の合致率は 9 割以上であるが、慶尚方言話者の音声では‘ㄷ’を‘ㅌ’と回答した割合が 31.8%(回答者はソウル方言話者)および 10.0%(回答者は慶尚方言話者)、『ㅌ’を‘ㄷ’と回答した割合が 31.3%(回答者はソウル方言話者)および 18.7%(回答者は慶尚方言話者)と報告している。この結果は‘ㅌ’と‘ㄷ’は周辺の母音と混同しやすいという聴取上の特徴を有する可能性を示唆するだけでなく、方言や地域差は聴取判断で考慮されるべき要因であることをも示唆する。

議論するには世代差や聴取判断での方言差の要因について考察を深め、本研究や先行研究を批判的に検証し、既存の研究にはない視点からの分析が必要である。単母音が語や文のどこに現れるか、語が有意味語か無意味語か、発話スタイルはどうかというような出現環境の違いについても検討する必要がある。

4.6. 特論

4.6.1. ソウル方言の母音体系の変遷について

ここまでは‘ㅏ’と‘ㅑ’の合流と‘ㅓ’と‘ㅕ’の接近の方向性に着目して考察してきたが、本節ではこうした問題のみに着目するのではなく、音響分析の結果にもとづき 20 世紀前半から 21 世紀前半までのソウル方言の母音体系の変化を観察してみる。20 世紀前半の母音については脚注 8 で挙げた小幡重一・豊島武彦(1932)を、20 世紀前半と 21 世紀前半の間の母音体系は本章で言及してきた M. S. Han(1963)と梅田博之(1965)を、21 世紀前半の母音体系は本研究の結果を参照する。ここで、小幡重一・豊島武彦(1932)は男女各 2 名を対象に調査しているが、‘ㅏ’と‘ㅑ’は調査していないことに注意する必要がある²⁰。また、梅田博之(1965)は男性のみを対象にしており、そのほかの研究は男女ともに調査している。

結果は以下のとおりである。表 4.14 に小幡重一・豊島武彦(1932)による F1 と F2 の男女別の平均値と標準偏差を示す。M. S. Han(1963)については 4.3 節の表 4.3 を、梅田博之(1965)については 4.3 節の表 4.4 を、本研究の録音協力者については 4.3 節の表 4.1 を参照されたい。図 4.11.1 と図 4.11.2 は小幡重一・豊島武彦(1932)の F1 と F2 をプロットした母音図である。図 4.12.1 と図 4.12.2 は M. S. Han(1963)の F1 と F2 をプロットした母音図(図 4.4 と図 4.5 の再掲)である。図 4.12.3 は梅田博之(1965)の F1 と F2 をプロットした母音図(図 4.6 の再掲)である。図 4.13.1 と図 4.13.2 は本研究の録音協力者の F1 と F2 をプロットした母音図(図 4.2 と図 4.3 の再掲)である。なお、i=‘ㅣ’, e=‘ㅓ’, E=‘ㅑ’, a=‘ㅗ’, O=‘ㅛ’(o), O:=‘ㅜ:(o)’, o=‘ㅜ’, u=‘ㅜ’, U=‘ㅡ’である。

図 4.11.1, 図 4.12.1, 図 4.12.3, 図 4.13.1 からは男性の音声の母音図について次のようなことが分かる。まず、‘ㅗ’, ‘ㅣ’, ‘ㅜ’, ‘ㅛ’の F1 と F2 には大きな変化はない。つまり、‘ㅗ’, ‘ㅣ’,

²⁰ 小幡重一・豊島武彦(1932)の録音協力者の年齢は不明である。ただし、氏名と所属は記されている。所属は東大理学部物理教室、理化学研究所木下研究室、東京女子高等師範学校生徒(2名)とあるので、調査当時 10~20 代の話者であったと思われる。

表 4.14. 小幡重一・豊島武彦(1932)の F1, F2, F3 の平均値と標準偏差

| | | 男性 | | | 女性 | | |
|-----|------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| | | F1 [Hz] | F2 [Hz] | F3 [Hz] | F1 [Hz] | F2 [Hz] | F3 [Hz] |
| ‘i’ | 平均値 | 367.5 | 2450.0 | --- | 306.7 | 2931.7 | --- |
| | 標準偏差 | 23.6 | 495.0 | --- | 16.3 | 482.1 | --- |
| ‘ɪ’ | 平均値 | 786.7 | 1150.0 | 2550.0 | 1120.0 | 1550.0 | 2750.0 |
| | 標準偏差 | 80.8 | 100.0 | 212.1 | 28.3 | 70.7 | 353.6 |
| ‘ɨ’ | 平均値 | 576.7 | 1101.7 | 2700.0 | 646.0 | 1342.0 | 2797.5 |
| | 標準偏差 | 78.1 | 160.8 | 0 | 147.7 | 31.9 | 228.1 |
| ‘ɯ’ | 平均値 | 576.0 | 1056.0 | 3075.0 | 614.0 | 1220.0 | 2700.0 |
| | 標準偏差 | 43.9 | 347.6 | 318.2 | 60.7 | 285.3 | 291.5 |
| ‘ʉ’ | 平均値 | 347.5 | 805.0 | 2650.0 | 400.0 | 930.0 | 1650.0 |
| | 標準偏差 | 70.9 | 65.6 | 919.2 | 0 | 42.4 | 0 |
| ‘ɤ’ | 平均値 | 366.7 | 916.7 | 1387.5 | 384.0 | 1000.0 | 1810.0 |
| | 標準偏差 | 60.2 | 104.1 | 62.9 | 81.7 | 150.0 | 169.2 |

‘ʉ’, ‘ɨ’はこの間に変化していないことを示唆する。それに対し, ‘ɰ’, ‘ɤ’, ‘ɯ’, ‘ɤ’の F1 や F2 には変化が見られる。つまり, ‘ɰ’, ‘ɤ’, ‘ɯ’, ‘ɤ’はこの間に変化していることを示唆する。まず, ‘ɰ’と‘ɤ’については, 小幡重一・豊島武彦(1932)はこれらの母音を調査していないが, M. S. Han(1963)と本研究とを比べると‘ɰ’が‘ɤ’に合流していることが分かる。これは本論で示したとおりである。次に, ‘ɯ’は F1 と F2 が次第に小さくなる。その結果, 小幡重一・豊島武彦(1932)では‘ɯ’が‘ɨ’と重なっているが, 本研究では‘ɯ’が‘ʉ’に接近している。それから, ‘ɤ’は F2 が次第に大きくなる。その結果, 小幡重一・豊島武彦(1932)では‘ɤ’が‘ʉ’に接近していたが, 梅田博之(1965)や本研究では‘ɤ’が‘ɨ’と‘ʉ’の間にある。最後に, 長母音の‘ɨ:’について, M. S. Han(1963)では長母音の‘ɨ:’も短母音の‘ɨ’も F1 や F2 に大きな違いはないが, 梅田博之(1965)では長母音の方が短母音より F1 も F2 も大きく, 長母音の‘ɨ:’が‘ɤ’に近づいているようにも見える。こうした長母音の‘ɨ:’の変化については服部四郎他(1981)などの先行研究で指摘されていることを反映しているものと思われる。

図 4.11.2, 図 4.12.2, 図 4.13.2 からは女性の音声の母音図について次のようなことが分かる。‘ɨ’, ‘ɨ’の F1 と F2 に大きな変化はない。つまり, ‘ɨ’と‘ɨ’はこの間に変化していないことを示唆する。それに対し, ‘ʉ’, ‘ɨ’, ‘ɰ’, ‘ɤ’, ‘ɯ’, ‘ɤ’の F1 や F2 には変化が見られる。つまり, ‘ʉ’, ‘ɨ’, ‘ɰ’, ‘ɤ’, ‘ɯ’, ‘ɤ’はこの間に変化していることを示唆する。‘ʉ’と‘ɨ’に変化が見られることは男性の場合と異なる。このうち, ‘ʉ’は小幡重一・豊島武彦(1932)から M. S. Han(1963)にかけて F1 が大きくなり, 前者では‘ʉ’と‘ɤ’が接近しているのに対し, 後者では‘ʉ’と‘ɯ’が接近している。そして, M. S. Han(1963)から本研究にかけて

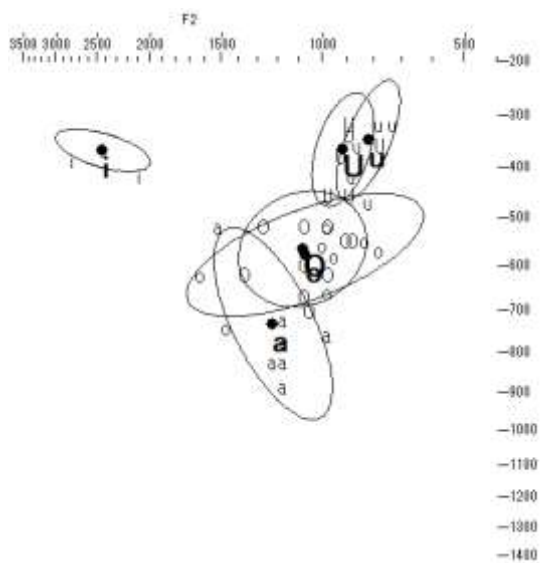


図 4.11.1. 小幡重一・豊島武彦(1932)の男性の音声の母音図

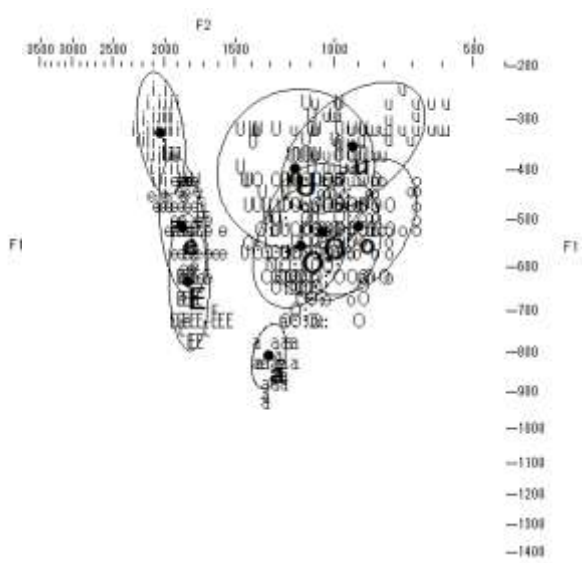


図 4.12.1. M. S. Han(1963)の男性の音声の母音図
【図 4.4 の再掲】

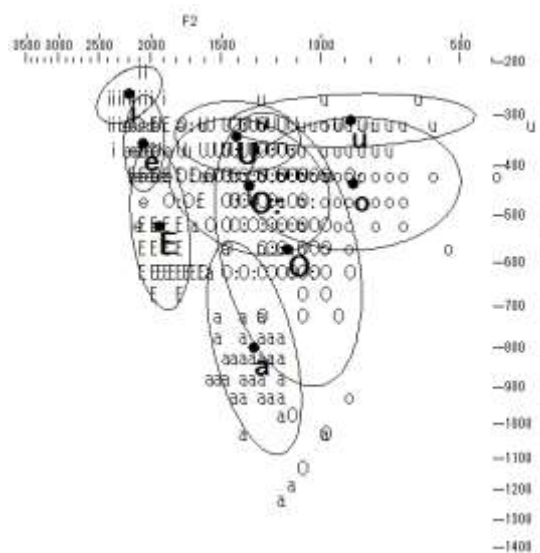


図 4.12.3. 梅田博之(1965)の男性の音声の母音図
【図 4.6 の再掲】

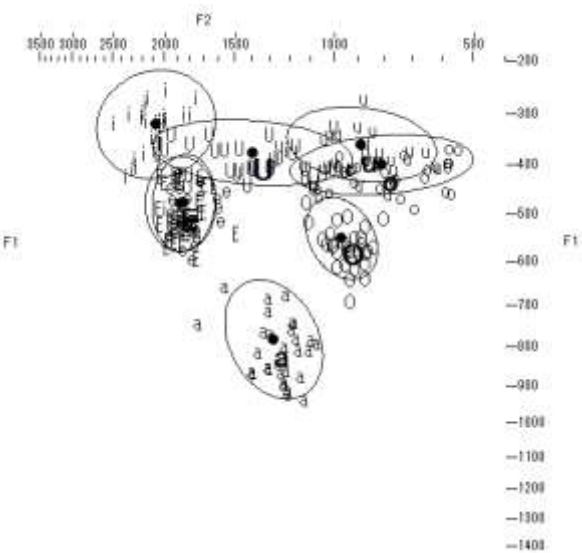


図 4.13.1. 本研究の男性録音協力者の音声の母音図
【図 4.2 の再掲】

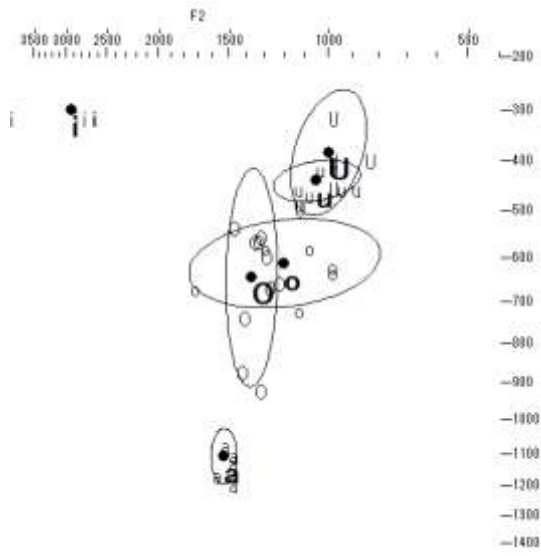


図 4.11.2. 小幡重一・豊島武彦(1932)の女性の音声の母音図

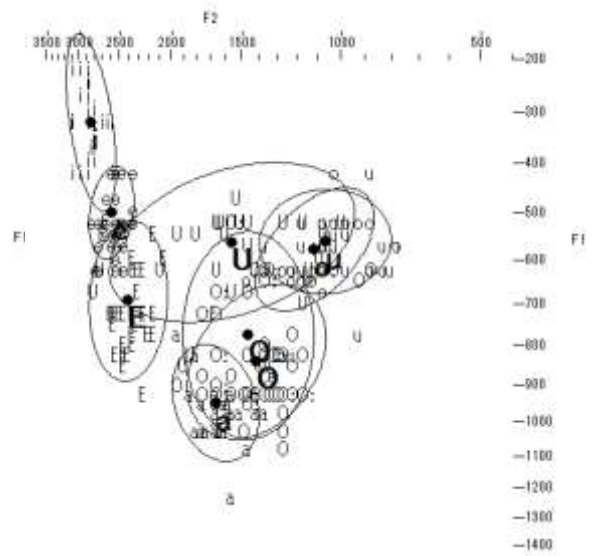


図 4.12.2. M. S. Han(1963)の女性の音声の母音図
【図 4.5 の再掲】

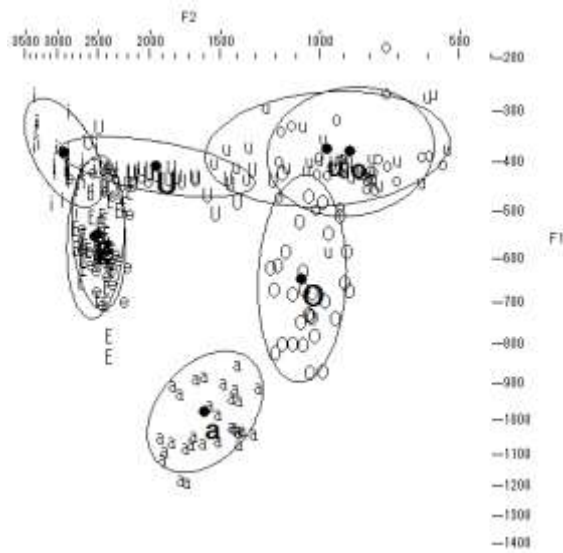


図 4.13.2. 本研究の助成録音協力者の音声の母音図【図 4.3 の再掲】

F1 が小さくなる。‘ㄊ’の F1 と F2 は小幡重一・豊島武彦(1932)と本研究で近く、‘ㄊ’と‘ㄱ’が接近していることは M. S. Han(1963)と本研究で一致する。また、‘ㄱ’は小幡重一・豊島武彦(1932)から M. S. Han(1963)にかけて F1 が大きくなり、前者では‘ㄱ’と‘ㄱ’が接近しているのに対し、後者では‘ㄱ’が‘ㄱ’と区別される。そして、M. S. Han(1963)から本研究にかけて F1 と F2 が小さくなり、ほかの母音と区別されるようになる。‘ㄱ’と‘ㄱ’の変化については、小幡重一・豊島武彦(1932)はそれらの母音を調査していないが、M. S. Han(1963)と本研究とを比べると‘ㄱ’が‘ㄱ’に合流している。これは本論で示したとおりである。‘ㄱ’については、小幡重一・豊島武彦(1932)と M. S. Han(1963)で変化しないが、本研究にかけて F1 と F2 が小さくなる。また、小幡重一・豊島武彦(1932)では‘ㄱ’と‘ㄱ’が接近しているが、M. S. Han(1963)と本研究では‘ㄱ’と‘ㄊ’が接近している。‘ㄱ’については、F2 が次第に大きくなり、F1 が小幡重一・豊島武彦(1932)から M. S. Han(1963)にかけて大きくなり、本研究にかけて小さくなり、小幡重一・豊島武彦(1932)と本研究では値が近い。また、小幡重一・豊島武彦(1932)では‘ㄱ’と‘ㄊ’が接近しているが、本研究では‘ㄱ’が‘ㄱ’と‘ㄊ’の間にある。最後に、長母音の‘ㄱ’について M. S. Han(1963)では長母音の‘ㄱ’も短母音の‘ㄱ’も値に大きな違いはない。

以上より、ソウル方言の母音体系が 20 世紀前半から 21 世紀前半にかけて変化していることが分かる。‘ㄱ’の F1 と F2 が小さくなり、‘ㄱ’の F2 が大きくなる。こうした変化により、20 世紀前半には‘ㄱ’と‘ㄱ’および‘ㄊ’と‘ㄱ’が接近していたが、21 世紀前半には‘ㄱ’と‘ㄊ’が接近している。また、‘ㄱ’と‘ㄱ’も接近している。さらに、女性の音声については小幡重一・豊島武彦(1932)から M. S. Han(1963)にかけて‘ㄱ’、‘ㄊ’、‘ㄱ’の F1 と‘ㄱ’の F2 が大きくなり、M. S. Han(1963)から本研究にかけて‘ㄱ’、‘ㄊ’、‘ㄱ’の F1 と‘ㄱ’の F2 が大きくなり、‘ㄱ’、‘ㄊ’の F2 が小さくなる。女性の音声に関するこのような違いはフォルマント測定環境に起因する可能性もあるかもしれない。なお、‘ㄱ’、‘ㄱ’および男性の‘ㄊ’、‘ㄱ’の F1 と F2 には変化がないことも確認できる。言い換えると、これらの母音の発音はここ 100 年の間で安定しているといえる。

5. 終章

5.1. まとめ

現代韓国語の母音体系はここ 100 年で大きく変化してきていることが知られているが、複数の見解が対立しているなどの理由から先行研究で十分に明らかにされていない問題も少なくない。そこで、本論文では‘ㅅ’および‘ㅈ’の発音の変化、‘ㅍ’と‘ㅂ’の発音の合流とその方向性、‘ㅓ’と‘ㅗ’の発音の接近とその方向性に関する問題を中心に、現代語における母音体系の変化について先行研究では検証されてこなかった研究方法から考察してきた。本章ではその概要を章ごとに示し、本論文では十分に考察できなかった課題についてまとめる。

まず、第 2 章では 20 世紀前半に調査された方言資料である小倉進平(1944)を活用し、当時の母音体系に関して問題となる母音の発音—(I) [ʌ] と [œ], (II) [jo] と [e], (III) [ø] と [wi] の発音の地域差, (IV) [ɔ] と [i], (V) [e] と [e] および [o] と [u] の対立—について考察した。20 世紀前半の母音の発音を考察したのは第 3 章や第 4 章に向けた準備作業のためだけではない。この方言資料が後学の研究者によって十分に利用されていないと評価されることがあるため、第 3 章や第 4 章で考察する母音ではないが、音韻史とのかかわりなどから先行研究で議論になっている母音についても考察した。その結果、次のようなことが分かった。まず、先の (I) については済州で語頭音節に [ʌ] が現れ、済州以外ではそこに [a] が現れている。ただし、全羅、慶南、咸鏡では頭子音が両唇音のときに [o] が現れている。また、済州で [œ] または [e] が現れるような項目では済州で [œ] や [e] が現れた位置に済州以外で [e] が現れている。ただし、済州の [œ] と [e] は単独形で [œ] が、主格形や接辞添加形の環境では [e] が現れている。つまり、音環境によって [œ] の発音の変化の仕方が違った可能性がある。(II) については全道的に [jo] または [e] が現れるとき、その現れ方が声調や語種により異なっている。つまり、そうした条件によって発音の変化の仕方が異なっている。上声由来の項目では [jo] が全道的に分布するが、[jo] と [e] を併用する地点や [jo] と [e] が混在する地域もある。非上声由来の漢字語の項目では上声由来の項目よりも [jo] の分布域が狭くなり、特に全羅や忠清では [e] が現れている。非

上声由来の固有語の項目では[jɔ]が黄海などの地域にのみ現れ、[e]が全道的に現れている。(III)の[ɔ]の発音の地域差については[ɔ]が朝鮮半島の西南から東北に現れているのに対し、これ以外の地域では[ɔ]以外の発音が現れている。具体的には[we]や[e]が済州，全南，慶尚，忠清，京畿の開城周辺，江原，咸南に，[wi]や[i]が慶尚に，[we]や[e]が平安に現れているほか，後期中世語の上声に由来すると考えられる[oi(oj)]が忠清などに現れている。特に平安では[we]や[e]が現れ，多くの地域とは異なる変化を経たと考えられる点の特徴である。また，[wi]の発音の地域差については[wi]が全道的に現れ，[w]が脱落したと考えられる[i]が慶尚に現れている。(IV)については「蛭」という項目で後期中世語の上声に由来する語頭音節の母音が，忠清以外の全道では[ɔ]([ɔ:])であるが，慶尚，忠清，京畿，江原，黄海では[i]([i:])も現れている。これはソウル方言において知られている[ɔ:]>[i:]のような変化が関与していると考えられる。このことと関連して全道的には[i]が現れるような場合に済州，慶尚，忠北では[ɔ]が現れていることもある。(V)の[e]と[ɛ]については[e]と[ɛ]を併用する地点や[e]と[ɛ]が混在する地域が慶尚，忠北，江原に見られる。[o]と[u]については[o]と[u]を併用する地点や[o]と[u]が混在する地域は見られず，ある地域では[o]で発音するところを別の地域では[u]で発音するような項目がいくつか見られる。以上で指摘したことは先行研究で言及されてきたことの再確認に過ぎない部分も少なくないが，語種や音環境，中世語の声調などによって発音の変化の仕方が異なっていることや[ɔ]の発音の地域差において平安で[we]や[ɛ]が現れているように変化に地域差が見られることなど，今後の研究につながるような注目すべき結果も得ることができた。

次に，第3章では‘ㅍ’と‘ㅑ’の発音の変化について考察した。これらの発音とその変化については研究者や外国人宣教師による主観的記述，中部方言を反映した音声資料，各種の方言語彙資料などからこれまでも検証されてきたが，先行研究には複数の解釈が併存しており，調査時期の異なる方言資料からこれらの母音の変化が考察されていないからである。本章では20世紀前半に調査された小倉進平(1944)と20世紀後半に調査された韓国精神文化研究院編(1987-1995)・金英培(1977, 1984)を比べることから‘ㅍ’と‘ㅑ’の発音の変化を考察した。その結果，20世紀前後半の資料の‘ㅍ’については[ɔ]が全羅，忠清，京畿，江原，黄海に，[we]が済州，慶尚，京畿に，[we]が全南，慶尚に，[wi]が慶北に現れていた。つまり，こうした地域では発音が変化していない。それに対し，全南の一部と忠北では20世紀前半は[we]が，20世紀後半は[ɔ]が主に現れ，黄海では20世紀前半は[ɔ]が，20世紀後半は[we]または[ɔ]と

[we]の併用が主に現れていた。つまり、全南の一部と忠北では[we]>[ø]が、黄海では[ø]>[we]が推定できる。ただし、20世紀後半の黄海の資料は黄海からの移住者(ソウル在住)を対象に調査したもので、黄海での発音の変化は移住先であるソウルの発音の影響を受けた可能性があるかもしれない。また、20世紀前後半の資料の‘ㅈ’については[wi]が済州、全羅、慶尚、忠清、京畿、江原、黄海に、[i]が慶尚に現れていた。つまり、こうした地域では発音が変化していない。それに対し、20世紀後半の資料では20世紀前半の資料にはない[y]が全羅、慶尚、忠清、京畿、江原に現れていた。ただし、この[wi]と[y]については解釈がむづかしい。この違いを発音の変化とみなして全羅、慶尚、忠清、京畿、江原では[wi]>[y]の変化が起きたと解釈することもできるが、20世紀前半の資料では[wi]と[y]の発音の違いを記述し分けずに[wi]で記したとみなすと発音の変化を推定することはできない。以上から、20世紀前半と後半の資料で発音が異なる場合があるので方言資料の調査年代の違いを考慮せずに全道的な視点から発音の変化を考察するのは必ずしも適当ではないことが分かる。また、20世紀前半から後半にかけての発音の変化が地域ごとに異なる場合があることも分かる。さらに、20世紀前半の資料の被調査者は学生(調査当時)、20世紀後半の資料の被調査者は主に50代から80代(調査当時)であるので、以上の結果は若年層から老年層にかけて話者の発音が変化しているか否かという視点から解釈することも可能である。このように解釈すると、若年層から老年層にかけて母音の発音が変化していると考えられる地域もあればそうでない地域もあるということが分かる。

そして、第4章ではソウル方言における‘ㅈ’と‘ㅊ’の合流とその方向性、‘ㅅ’と‘ㅆ’の接近とその方向性、母音体系の変遷について実験音声学的に考察した。ソウル方言の単母音に関する近年の研究では音響分析の結果から‘ㅈ’と‘ㅊ’の合流、‘ㅅ’と‘ㅆ’の接近、これらの変化の方向性を分析しているが、‘ㅈ’と‘ㅊ’および‘ㅅ’と‘ㅆ’がどのような経路をたどり合流・接近しているのか、これらの母音は(音響上だけではなく)聴取上も区別されていないのかということは明らかにされていないのでこうした研究を行なった。本章では若年層ソウル方言話者の音声を音響分析し、それよりも1世代以上前の音響分析の結果と比較した。そして、若年層ソウル方言話者の音声をを用いて韓国語話者と延辺朝鮮語話者を被調査者とした聴取実験を行なった。その結果、若年層ソウル方言話者の音声の音響分析からは‘ㅈ’と‘ㅊ’のF1, F2, F3およびF0, CPP, 持続時間, H1-H2には有意差がないことと‘ㅅ’と‘ㅆ’の男性の音声のF2と女性の音声のF1, F3および男女の音声のF0, CPP, 持続時間, H1-H2に有意差がないこ

とが分かった。この結果をそれよりも 1 世代以上前のソウル方言話者の音響分析の結果と比べると、先行研究では‘ㅜ’が‘ㅓ’に向かって接近しているとされているのに対し、本研究からは過去の女性の音声のデータに‘ㅓ’が‘ㅜ’に向かって接近していると解釈するのが妥当なデータがあることが明らかとなった。また、聴取実験の結果からは延辺朝鮮語話者が若年層ソウル方言話者の女性の音声の‘ㅓ’と‘ㅜ’を‘ㅓ’と認識しやすいことや韓国語話者も延辺朝鮮語話者も若年層ソウル方言話者の‘ㅜ’と‘ㅓ’を‘ㅜ’と認識しやすいことが明らかとなった。聴取実験から得られた結果は‘ㅓ’が‘ㅓ’に向かって合流していることや‘ㅓ’が‘ㅜ’に向かって接近していることを示唆すると考えられる。以上から、過去の音響分析データを活用することや方言間の聴取判断の違いに注目することの意義を示した。また、音響分析の結果は‘ㅓ’と‘ㅓ’の合流と‘ㅜ’と‘ㅓ’の接近を示しているのに対し、聴取実験の結果は延辺朝鮮語話者が‘ㅓ’と‘ㅓ’を聞き分けると考えられることや韓国語話者も延辺朝鮮語話者も‘ㅜ’と‘ㅓ’を聞き分けると考えられることを示している。つまり、音響分析の結果は母音の合流・接近を示すための必要条件であるが十分条件ではないことが分かる。最後に、フォルマント周波数による母音図をもとに 20 世紀前半から現在までのソウル方言の母音体系の変遷を検討した結果、‘ㅜ’の F1, F2 が小さくなり、‘ㅓ’の F2 が大きくなることで、‘ㅓ’と‘ㅜ’および‘ㅓ’と‘ㅓ’が接近していたものが‘ㅜ’と‘ㅓ’が接近するように変化していることも分かった。

このように、本論文では現代韓国語の母音体系に関する問題の一端をいくつか考察してきた。最後に、本論文での議論と関連した残された課題についてまとめる。全体的な課題としては本論文の各章の議論はそれぞれ適当な資料から得られた結果にもとづいて考察しており、得られた結論が成り立つ範囲は限定されている。つまり、どこまで普遍的に成り立つかということが示されていないということは本書の限界である。第 2 章や第 3 章と関連した課題の一つは第 2 章で得られた結論を個々の単語史や各方言の母音体系などと照合することである。第 2 章で設定しなかった問題としては近代語における‘ㅓ’>‘ㅓ’>‘ㅓ’、両唇音後の‘ㅓ’>‘ㅓ’、前舌母音化(ウムラウト)などの母音の変化に関する問題が挙げられる¹。地域ごとに発音の特徴が違うということや‘ㅓ’、‘ㅓ’、‘ㅓ’などの発音が語種、音環境、中世語の声調によって違っていたことに注目し、近代語から現代語にかけての母音の変化を考察することも課題となる。こうした違いが 20 世紀後半の方言資料ではどのように現れているの

¹ ここで例示した変化は近代語の minor changes である(K. Lee and S. R. Ramsey 2011: 265–266)。

かということも確認する必要があったと思われるが、これは第 3 章の方法論から考察できる課題である。第 4 章では聴取判断に方言差が見られるということや音響分析では大きな違いが見られない母音のペアであっても聴取判断では何かしらの情報を手がかりにして聞き分けている可能性があるということを示した。しかし、第 4 章で行なった聴取実験は若年層ソウル方言話者が発音した音声をそのまま用い、さまざまな母方言話者を被検者としたため、どの音響特徴に反応して聞き分けているのかということや聞き分けに作用する音響特徴の境界値およびその方言差などについて考察することが全くできていない。母音の聞き分けに作用する音声の特徴は何かということについては精緻な実験研究が求められる。このように、本論文から分かったことも少なくないが、その結果として明らかとなった課題も少なくないのである。

参考文献

- 伊藤智ゆき(2007)『朝鮮漢字音研究』資料篇. 東京：汲古書院.
- 岩井亮雄(2017a) 韓国語の母音 σ の音色の地域差について—小倉進平著『朝鮮語方言の研究』
所載資料を活用して—. 『東京大学言語学論集』 38: 87–99. 東京大学言語学研究室.
- 岩井亮雄(2017b) 韓国語ソウル方言単母音の変化の方向性と聴取判断の様相—/ɨ/と/ɨ/の
合流と/ɨ/と/ɨ/の接近を中心に—. 『朝鮮学報』 242: 47–77. 朝鮮学会.
- 岩井亮雄(2018) 外. 『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』
2: 9–12. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 岩井亮雄(2019a) 言語地図に依る現代韓国語/ɨ/音小考—小倉進平『朝鮮語方言の研究』所
載資料を中心に—. 『韓国朝鮮文化研究』 18: 91–111. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 岩井亮雄(2019b) 方言資料を通して見た母音ɨとɨの発音の変化. 『朝鮮語研究』 8: 7–35. 朝
鮮語研究会. 東京：ひつじ書房.
- 榎垣実(1953) 方言孤立変遷論をめぐって. 『言語生活』 24: 44–48. 東京：筑摩書房.
- 梅田博之(1965) 朝鮮語のソナグラム. 『名古屋大学文学部研究論集』 37: 41–89. 名古屋大学
文学部. (韓国語訳再録：梅田博之 1983: 76–115)
- 梅田博之(1994) 韓国語の母音. 『言語研究』 106: 1–21. 日本言語学会.
- 大西拓一郎(2017a) 言語変化と方言分布—方言分布形成の理論と経年比較に基づく検証—.
大西拓一郎編『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』 1–
20. 東京：朝倉書店.
- 大西拓一郎(2017b) 蛇の目と波紋—野草や小動物の方言を例に—. 大西拓一郎編『空間と時
間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』 252–259. 東京：朝倉書店.
- 大西拓一郎(2017c) 言語変化と中心性—経年比較に基づく中心性の検証—. 大西拓一郎編
『空間と時間の中の方言—ことばの変化は方言地図にどう現れるか—』 323–341. 東京：
朝倉書店.
- 岡田泰栄(1981)『平均値の統計』東京：共立出版.

- 岡村佳奈(2017) 柱. 福井玲編『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』1: 33–36. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 小倉進平(1931a) 朝鮮語母音の表記法に就いて. 『音声の研究』4: 139–148. 日本音声学会.
- 小倉進平(1931b) 済州島方言. 『青丘学叢』5: 26–70. 青丘学会.
- 小倉進平(1944) 『朝鮮語方言の研究』上下2巻. 東京: 岩波書店.
- 小幡重一・豊島武彦(1932) 朝鮮語母音及び子音の性質. 『日本数学物理学会誌』6(4): 379–403. 日本物理学会・日本数学会.
- 金田一春彦(1953) 辺境地方の言葉は果たして古いか. 『言語生活』17: 27–35. 東京: 筑摩書房.
- 河野六郎(1955) 朝鮮語. 市河三喜・服部四郎編『世界言語概説』下: 359–439. 東京: 研究社.
- 河野六郎(1969) 『河野六郎著作集』第1巻(全3巻). 東京: 平凡社.
- 坂井素思(2016) 第13章 社会の音. 大橋理枝・佐藤仁美編『音を追及する』208–225. 東京: 放送大学教育振興会.
- 朱林彬(2016) 『韓国語語彙史研究—小倉進平の方言調査に基づいて』東京大学大学院人文社会系研究科修士論文. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 全恵子(2018) 簪. 福井玲編『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』2: 29–32. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 徐旼廷(2017) 鰐. 福井玲編『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』1: 113–116. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 高橋涉(2010) 『距離空間と位相空間』数理解析入門シリーズ1. 横浜: 横浜図書.
- 鄭承喆(2010) 小倉進平の生涯と学問. 東京大学韓国朝鮮文化研究室編『2009年度東京大学コリア・コロキウム講演記録』17–32. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 中井精一(2007) 『朝鮮半島言語地図』平成18年度科学研究費(基盤研究(B)(1))日本海沿岸社会の地域特性と言語に関する類型論的研究. 富山大学日本語学研究室.
- 服部四郎(1984) 『音声学』カセットテープ, 同テキスト付. 東京: 岩波書店.
- 服部四郎(1985) 現代ソウル方言において起こりつつある母音の通時の変化—続編『月刊言語』8月号: 96–106. 東京: 大修館書店.
- 服部四郎・金東俊・梅田博之・渡辺吉鎔(1981) 現代ソウル方言において起こりつつある母音の通時の変化. 『言語の科学』8: 11–56. 東京言語研究所.

- 福井玲(2013)『韓国語音韻史の探求』東京：三省堂.
- 福井玲(2016) 小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために.『東京大学言語学論集』37: 41–70. 東京大学言語学研究室.
- 福井玲(2017a) 類. 福井玲編『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』1: 25–28. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 福井玲(2017b) 鉄・金(かね). 福井玲編『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』1: 89–92. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 福井玲編(2017, 第2版 2018)『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』第1集. 東京大学韓国朝鮮文化研究室. (再録：韓国語研究会編 2018: 205–349)
- 福井玲編(2018)『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』第2集. 東京大学韓国朝鮮文化研究室. (再録：韓国語研究会編 2020: 345–479)
- 福井玲編(forthcoming)『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』第3集. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 武藤眞介(1995)『統計解析ハンドブック』東京：朝倉書店.
- 柳田國男(1930)『蝸牛考』東京：刀江書院.
- 李基文(村山七郎監修・藤本幸夫訳)(1975)『韓国語の歴史』東京：大修館書店.
- 李在鎬(2017) 砂. 福井玲編『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』1: 85–88. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 林静(2017) 蛭. 福井玲編『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』1: 109–112. 東京大学韓国朝鮮文化研究室.
- 鷲尾泰俊(1978)『推定と検定』東京：共立出版.
- 곽충구(2003) 현대국어의 모음체계와 그 변화의 방향.『国語学』41: 59–91. 国語学会.
- 김경숙(2015)『한국 방언의 지리적 분포와 변화』서울：역락.
- 金基達・梁源植(1985) Sound spectrograph 를 이용한 開咬患者의 韓国語 子・母音의 發聲에 關한 研究—周波数 分析을 中心으로—.『대한치과교정학회지』15(1): 56–66. 대한치과교정학회.
- 金敏洙・河東鎬・高永根編(1979)『歴代韓国文法大系』2(5). 서울：塔出版社.
- 김봉국(2006) 개화기 이후 국어의 ‘위, 외’ 음가와 그 변화. 編輯委員會編『李秉根先生退

- 任紀念國語學論叢』155-191. 과주: 태학사. (再録: 정승철·정인호共編 2010: 329-363)
- 金英培(1977) 『平安方言의 音韻體系研究』 韓國學研究叢書第 11 輯. 서울: 東國大學校韓國學研究所.
- 金英培(1984) 『平安方言研究 <附> 黃海道地域方言研究』 서울: 東國大學校出版部.
- 김원보(2006) 제주방언화자의 세대별(20 대, 50 대, 70 대) 단모음의 음향분석과 모음체계. 『언어과학연구』 39: 125-136. 언어과학회.
- 김한별(2017) 안동 지역 반촌어의 음운 변화—후기근대 문헌자료와 현대 음성자료 간의 실제시간 연구—. 『國語學』 84: 185-232. 國語學會.
- 김현기(2009) 연변 조선족 방언 음성의 실험적 연구. 『말소리와 음성과학』 1(1): 47-52. 한국음성학회.
- 南豊鉉(2009) 『古代韓國語研究』 서울: 시간의물레.
- 문승재(2007) 한국어 단모음의 음성학적 기반연구. 『말소리』 62: 1-17. 대한음성학회.
- 박지윤(2011) 서울 지역 세대 간 /ㄱ/와 /ㄷ/ 모음의 포먼트 측정. 『새국어교육』 88: 295-313. 한국국어교육학회.
- 白斗鉉(1992a) 원순모음화 ‘· > ㅜ’型的 분포와 通時性. 『國語學』 22: 341-370. 國語學會.
- 白斗鉉(1992b) 『嶺南 文獻語의 音韻史 研究』 서울: 太學社.
- 변희경(2018) 서울말 /ㄱ/와 /ㄷ/를 구별하는 음향변수. 『말소리와 음성과학』 10(2): 15-24. 대한음성학회.
- 성철재(2004) 한국어 단모음 8 개에 대한 음향분석—F1/F2 모음공간에서의 음향변수를 중심으로—. 『한국음향학회지』 23(6): 454-461. 한국음향학회.
- 성철재(2005) 충남지역 대학생들의 한국어 단모음 포먼트 분석. 『언어학』 43: 189-213. 사단법인 한국언어학회.
- 송철의(2014) 한국어학 개론. 서울대학교 한국어문학연구소·국어교육학연구소·언어교육원 공편 『한국어 교육의 이론과 실제 개정판』 1: 13-56. 서울: 아카넷.
- 신우봉·신지영(2012) 제주 방언 단모음에 대한 음향 음성학적 연구. 『한국어학』 56: 63-90. 한국어학회.
- 신지영(2014) 『개정판 말소리의 이해』 2 판. 서울: 한국문화사.
- 小倉進平(1931b) 濟州島方言. 『靑丘學叢』 5: 26-70. 靑丘學會.
- 梅田博之(1983) 『韓國語의 音聲學的 研究—日本語와의 對照를 中心으로—』 서울: 螢雪出

版社.

- 윤지현·성철재(2013) F1/F2 의 변화가 한국어 /오/, /우/ 모음의 지각판별에 미치는 영향. 『말소리와 음성과학』 5(3): 39-46. 대한음성학회.
- 이기갑(1986) 『전라남도의 언어지리』 國語學叢書 11. 서울: 탑출판사.
- 李基文(1972, 再版 1977) 『國語音韻史研究』 國語學叢書 3. 서울: 탑出版社.
- 李基文(1998, 改訂版 2002) 『新訂版 國語史概說』 서울: 태학사. (旧版 『改訂 國語史概說』 (改訂三版 1974) 訳: 李基文(村山七郎監修·藤本幸夫訳)1975)
- 李秉根(1973) 東海岸方言의 二重母音에 대하여. 『震檀學報』 36: 133-147. 震檀學會.
- 李秉根(2005) 1910~20년대 일본인에 의한 한국어 연구의 과제와 방향—小倉進平의 方言研究를 중심으로—. 『方言學』 2: 23-61. 韓國方言學會.
- 李崇寧(1954a) 『‘、’音攷』 朝鮮語音韻論研究第一集增補版. 서울: 乙酉文化社.
- 李崇寧(1954b) 『國語學概說』 서울: 進文社.
- 李崇寧(1976) 『革新國語學史』 博英文庫 101. 서울: 博英社.
- 이옥희(2014a) 19세기 후기 서울 지역의 ‘니’, ‘기’에 대한 공시적 변이와 사회적 변인 연구(1). 『우리말연구』 36: 59-89. 우리말학회.
- 이옥희(2014b) 국어 모음 변화의 사회적 변인 연구. 『한국어학』 64: 88-116. 한국어학회.
- 이재강(1988) 한국어 모음에 대한 한국인과 일본인의 대조 연구. 『언어학』 22: 347-369. 사단법인 한국언어학회.
- 이호영(1996) 『국어음성학』 과주: 태학사.
- 장혜진·신지영(2006) 대구 방언 단모음의 세대 간 차이에 대한 음향 음성학적 연구. 『말소리』 57: 15-30. 대한음성학회.
- 鄭承喆(1995) 『濟州島 方言의 通時音韻論』 國語學叢書 25. 國語學會. 서울: 태학사.
- 鄭承喆(2010) 小倉進平의 생애와 학문. 『방언학』 11: 155-184. 한국방언학회.
- 정승철·정인호共編(2010) 『이중모음』 과주: 태학사.
- 鄭仁浩(2004) 下降 二重母音과 浮動 二重母音의 音變化. 『語文研究』 32(2): 119-143. 韓國語文教育硏究會. (再録: 정승철·정인호共編 2010: 305-327)
- 鄭仁浩(2013) 하강이중모음 ‘외’의 變化와 方言 分化. 『방언학』 18: 147-170. 한국방언학회.
- 조성문(2003) 현대 국어의 모음 체계에 대한 음향음성학적인 연구. 『한국언어문화』 24: 427-441. 한국언어문화학회.

- 조아람(2014) 20 세기 초 유성기 음반으로 본 모음 ‘니, 기’의 발음에 대하여. 『泮橋語文研究』 38: 194–225. 泮橋語文學會.
- 崔明玉(1982) 『月城地域語의 音韻論』 慶北：嶺南大學校出版部.
- 차재은(2007) 20 세기 초의 한국어 모음 체계—1930 년대의 음성 자료를 중심으로—. 『한국어학』 37: 361–396. 한국어학회.
- 최상홍(2006) 국어 단모음 /에/와 /애/의 세대와 성별 차이에 대한 음성학적 연구. 『나랏말씀』 21: 43–59. 대구대학교 국어교육과.
- 최성규(2013) 남북한 방언에 나타난 ‘니, 기’의 변화. 『방언학』 18: 171–194. 한국방언학회.
- 崔銓承(1986) 『19 세기 후기 全羅方言의 음운현상과 그 역사성』 서울：翰信文化社.
- 崔銓承(1987) 二重母音 ‘외’, ‘위’의 단모음화 과정과 母音体系의 변화. 『語學』 14: 19–48. 全北大學校語學研究所. (再錄：최전승 1995: 359–395)
- 최전승(1995) 『한국어 方言史 연구』 과주：태학사.
- 韓國語研究會編(2018) 『韓國語研究 13』 서울：역락.
- 韓國語研究會編(2020) 『韓國語研究 14』 서울：역락.
- 韓國精神文化研究院編(1987–1995) 『韓國方言資料集』 全 9 卷. 城南：韓國精神文化研究院.
- 한글학회(1992) 『우리말 낱사전』 서울：어문각.
- 韓成愚(2005) 『普通學校 朝鮮語讀本』 音聲資料에 대한 음운론적 연구. 『語文研究』 33(3): 29–58. 韓國語文教育研究會.
- 玄平孝(1963) 濟州島 方言 ‘ㄴ’音 小考. 編集委員會編 『無涯梁柱東博士華誕紀念論文集』 627–646. 東國大學校. 서울：探究堂. (再錄：玄平孝 1985: 311–325)
- 玄平孝(1964) 濟州島 方言 “ㄴ”音에 對하여. 『國文學報』 2: 3–34. 濟州大學國語國文學會. (再錄：玄平孝 1985: 326–354)
- 玄平孝(1985) 『濟州島方言研究』 論攷編. 서울：二友出版社.
- 한영균(1995) ‘니, 기’의 단모음화와 방언분화—강원도 방언의 경우—. 『國語史와 借字表記』 817–846. 과주：太學社.
- 황혜정·문승재(2005) 한국인이 발음한 한국어 /에, 애/와 영어 /ε, æ/ 모음. 『말소리』 56: 29–47. 대한음성학회.
- Ahn, Soo-Woong (2001) An acoustic study of relative articulatory positions of English vowels and

- Korean vowels. *Korean Journal of Speech Sciences* 8(4): 171–184. 한국음성학회.
- Cho, Taehong, Sun-Ah Jun and Peter Ladefoged (2002) Acoustic and aerodynamic correlates of Korean stops and fricatives. *Journal of Phonetics* 30: 193–228. London : Seminar press.
- Chung, Hyun-Yeol, Shozo Makino and Ken'iti Kido (1988a) Analysis and recognition of Korean isolated vowels using formant frequency. *Journal of the Acoustic Society of Japan* (E) 9(5): 225–232. 日本音響学会.
- Chung, Hyun-Yeol, Shozo Makino and Ken'iti Kido (1988b) On the listening tests using natural speech of 8 Korean vowels. *Journal of the Acoustic Society of Japan* (E) 9(6): 305–307. 日本音響学会.
- Gobl, Christer and Ailbhe Ní Chasaide (2010) 11 Voice source variation and its communicative functions. William J. Hardcastle, John Laver, and Fiona E. Gibbon ed. *The handbook of phonetic sciences*. 2nd edition. 378–423. Chichester: Wiley-Blackwell.
- Han, Jeong-Im and Hyun-Sook Kang (2013) Cross-generational change of /o/ and /u/ in Seoul Korean I: Proximity in vowel space. *Phonetics and Speech Sciences* 5(2): 25–31. 대한음성학회.
- Han, Mieko S. (1963) *Acoustic phonetics of Korean*. Technical report No. 1. Los Angeles: University of California.
- Hillenbrand, James, Ronald A. Cleveland and Robert L. Erickson (1994) Acoustic correlates of breathy vocal quality. *Journal of Speech and Hearing Research* 37: 769–778. American Speech and Hearing Association.
- Igeta, Takako, Mee Sonu and Takahiro Arai (2014) Sound change of /o/ in modern Seoul Korean: Focused on relations with acoustic characteristics and perception. *Phonetics and Speech Sciences* 6(3): 109–119. 대한음성학회.
- Ito, Chiyuki (2017) A sociophonetic study of the ternary laryngeal contrast in Yanbian Korean. *Journal of the Phonetic Society of Japan* 21(2): 80–105. 日本音声学会.
- Kang, Hyun-Sook and Jeong-Im Han (2013) Cross-generational change of /o/ and /u/ in Seoul Korean II: Spectral interactions in normalized vowel space. *Phonetics and Speech Sciences* 5(2): 33–41. 대한음성학회.
- Kang, Kyoung-Ho and Susan G. Guion (2008) Clear speech production of Korean stops: Changing

- phonetic targets and enhancement strategies. *The Journal of the Acoustical Society of America* 124(6): 3909–3917. Acoustical Society of America.
- Kang, Yoon-Jung (2016) A corpus-based study of positional variation in Seoul Korean vowels. Michael Kenstowicz, Theodore Levin and Ryo Masuda (ed.) *Japanese/Korean Linguistics* 23: 3–22. Stanford: CSLI Publications.
- Kim, Bu-Il and Hiroya Fujisaki (1973) Analysis and recognition of Korean vowels. *Annual Report of the Engineering Research Institute Faculty of Engineering, University of Tokyo* 32: 227–232. 東京大学工学部.
- Ladefoged, Peter (2003) *Phonetic data analysis: An introduction to fieldwork and instrumental techniques*. Oxford: Blackwell.
- Lee, Hyun-Bok and Min-Je Zhi (1983) A spectrographical study of Korean vowels. *Malsori* 6: 4–12. 대한음성학회.
- Lee, Iksop and S. Robert Ramsey (2010) *The Korean Language*. Albany: State University of New York Press.
- Lee, Ki-Moon and S. R. Ramsey (2011) *A history of the Korean language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ramstedt, Gustaf John (1939) Remarks on the Korean language. *Mémoires de la Société Finno-ougrienne* LVIII: 441–453. Helsinki: Suomalais-Ugrilainen Seura. (再録：金敏洙他編 1979)
- Silva, David (2006) Acoustic evidence for the emergence of tonal contrast in contemporary Korean. *Phonology* 23: 287–308. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thomas, Erik R. (2011) *Sociophonetics: An introduction*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Umeda, Hiroyuki (1995) Age differentiation of the vowel system in the Seoul Korean—Acoustic measurements—. *Journal of Asian and African studies* 48–49: 443–453. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Umeda, Hiroyuki and Dong-Jun Kim (1970) Some experiments on Korean vowel sounds, using an acoustic model of vocal tract. *Journal of Asian and African studies* 3: 127–132. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. (韓国語訳再録：梅田博之 1983: 60–65)
- Yang, Byung-Gon (1996) A comparative study of American English and Korean vowels produced by male and female speakers. *Journal of Phonetics* 24: 245–261. London: Seminar press.

Yoon, Tae-Jin, Yoon-Jung Kang, Sung-Woo Han, Hye-Seon Maeng, Ji-Ae Lee and Kyoung-Hue
Kim (2015) A corpus-based approach to dialectal variation in Korean vowels. *Proceedings of
the 18th International Congress of Phonetic Sciences*. Paper Number 0875. International
Phonetic Association.